

2010 年度

メディアにおける移住女性の表象  
韓国・フィリピンを中心に

千葉大学大学院  
人文社会科学研究科  
博士後期課程  
安 貞美

# 目次

## 研究目的と研究対象

1. 研究目的-----	1
2. 研究対象-----	3
3. 研究方法-----	6
4. 論文の構成-----	8
5. 映像メディアを分析対象とする理由-----	9
6. グローバル化・表象・ジェンダー-----	14

## 先行研究

1. 「表象 (Representation)」の概念とメディアにおける「表象」-----	16
2. 「エイジェント(行為体)」としての移住女性-----	21
3. グローバリゼーション進行と「移民の女性化」-----	30
4. 国際結婚、移住女性-----	34

## 第1部 受入国、韓国における移住女性とその表象

### 第1章 韓国を中心に受入国の考察

第1節 韓国における移住者現状-----	38
第2節 韓国テレビ番組における移住女性の表象-----	42

### 第2章 ドラマ『黄金花嫁』から見る移住女性

第1節 ドラマ『黄金花嫁』について	
1. 制作背景-----	48
2. あらすじ-----	51
3. 登場人物及び葛藤の構造-----	52
4. ドラマ『黄金花嫁』から見る移住女性の表象-----	57
5. ドラマ『黄金花嫁』の意味生産—受容者(オーディエンス)認識から-----	64
第2節 韓国における国際結婚移住女性の表象	
1. 韓国社会と増加する国際結婚の移住女性-----	73
2. 国際結婚から見る階級・民族・ジェンダー-----	77

3.	国際結婚と移住女性の商品化	79
第3節	多文化・多文化家族と移住女性	
1.	国際結婚の論点、国際結婚移住女性と多文化家族	83
2.	韓国における家族構造の変動—農漁村の地域を中心に	85
3.	移住女性の「生」	86
第4節	小結	88

### 第3章 ドキュメンタリー映画『素敵な彼女たち She is』から見る移住女性

第1節	本章の意図	90
第2節	文化表象として移住女性とドキュメンタリー映画の女性主義	
1.	文化表象から見る移住女性	92
2.	韓国独立ドキュメンタリー映画と女性主義映画	93
第3節	ドキュメンタリー映画『素敵な彼女たち She is』について	
1.	制作背景—ソウル国際女性映画祭 (WFFIS)	96
2.	制作意図	98
3.	あらすじ	101
4.	ドキュメンタリー映画『素敵な彼女たち She is』から見る移住女性表象	104
5.	ドキュメンタリー映画『素敵な彼女たち She is』の意味生産—監督へのインタビューから	123
第4節	ジェンダー化された移住方式とセクシュアリティ	
1.	移住女性のジェンダー化された移住方式	126
2.	韓国に移住する移住者のジェンダー化された移住方式	127
3.	移住女性から見る国際結婚におけるセクシュアリティ	131
第5節	移住女性の新しいネットワーク	
1.	移住女性の新しいネットワークと文化的行為	137
2.	移住女性と地域住民の間のネットワーク	139
第6節	小結	143

<b>第2部 送出国、フィリピンにおける移住女性とその表象</b>	
<b>第1章 フィリピンを中心に送出国の考察</b>	
第1節 近年のフィリピン人の海外労働者（OFW）の状況	
1. フィリピンの出稼ぎ労働者状況 -----	145
2. 海外労働者の女性化 -----	146
3. 海外出稼ぎ労働—看護師・介護士を中心に-----	149
<b>第2章 映画『ケアギバー（介護士）』から見る移住女性</b>	
第1節 フィリピンの映画状況-----	152
第2節 映画『ケアギバー（介護士）』について	
1. 制作背景-----	155
2. あらすじ-----	156
第3節 映画『ケアギバー（介護士）』から見る出稼ぎ移住状況	
1. 「国際商品」としての介護士-----	157
2. 英語講師から介護士へ—矛盾した階級移動 -----	160
第4節 出稼ぎ移住女性と家族変容	
1. サラと息子の関係から見る越境家族形成（トランスナショナルな家族） -----	164
2. サラと祖母の関係から見るグローバルなケア連鎖 -----	166
第5節 映画『ケアギバー（介護士）』から見る移住女性表象	
1. 固定化されたフィリピン人女性表象-----	168
2. 映画『ケアギバー（介護士）』から見る移住女性表象-----	170
3. 映画『ケアギバー（介護士）』の意味生産—受容者（オーディエンス）認識から-----	188
第6節 小結 -----	192
<b>結論 -----</b>	<b>195</b>
<b>参考資料 1-----</b>	<b>205</b>
<b>参考資料 2-----</b>	<b>207</b>
<b>参考文献 -----</b>	<b>213</b>

## 研究目的と研究対象

### 1. 研究目的

本論文は、グローバル化のもとで国境を越えて移動していく移住女性たちの状況とそのメディアにおける「表象 (Representation)」(Hall, 1997)<sup>1</sup>を、「エイジェント」(Giddens, 1984)<sup>2</sup>、「コンタクト・ゾーン」(Pratt, 1992)<sup>3</sup>などの概念を用いて考察する。研究対象としては、近年、多くの国際結婚移住女性の受入国となっている韓国と、その送出国フィリピンをとりあげ、韓国においては連続テレビドラマ『黄金花嫁』(2007)と独立プロダクションによるドキュメンタリー映画『素敵な彼女たち She is』(2007)を、フィリピンにおいては物語映画『ケアギバー Caregiver』(2008)を分析する。本論文は、これら、同時期に制作された三つの映像作品における「表象」分析を通じて、国際移動に参加する移住女性が両国においてどのように表象されるのかを明らかにする。

本研究では、まず、グローバル化の中で国境を越えて移動していく移住女性を社会的な「エイジェント (行為体)」として考察する。それは、加速度的に進行するトランスナショナルな労働力の移動、とくに「移民の女性化」「再生産労働の国際分業」(Parreñas, 2001)<sup>4</sup>「グローバルなケアの連鎖」(Hochschild, 2000)<sup>5</sup>の状況の中で、彼女たちの意識と行動は、経済的・文化的・社会的に幾重にも条件づけられているということ、しかしそれと同時に、彼女たちが単に押し流されていく「客体」ではなく、その都度の状況の中で希望や勇気や覚悟をもって決断し、行動する「主体」であること、トランスナショナルなアイデンティティが形成されつつあること、そしてそのような彼女たちのあり方が他者や事態を「変える力 (transformative capacity)」をもっていることに注目しようとするからである。また、彼女たちがミクロなレベルで行う「選択」または「行動」によって、遠く離れた送出国・受入国それぞれの社会での家族形態、文化、ジェンダー秩序が変化しつつある状況を考察するためにも、彼女たちの「エイジェンシー (行為作用)」に注目する視点が重要である。その上で、本論文は、今日、各国社会のジェンダー秩序は、単独では存在しえないことを明

---

<sup>1</sup> Stuart Hall, (ed.), 1997, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage/ Open University Press.

<sup>2</sup> Anthony Giddens, 1984, *The Constitution of Society*, Berkeley: University of California Press.

<sup>3</sup> Mary Louise Pratt, 1992, *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*, N.Y: Routledge.

<sup>4</sup> R.S.Parreñas, 2001, *Servant of Globalization: Women, Migration, and Domestic Work*, Stanford University Press.

<sup>5</sup> A.R. Hochschild, 2000, "Global Care Chains and Emotional Surplus Value," Will Hutton, Anthony Giddens, (eds.), *On the edge: living with global capitalism*, London: Vintage.

らかにする。

移住女性と受入国（の人びと）との関係については、一方向的な「受け入れ」や「同化」「統合」の視点からではなく、異なる文化をもった主体と主体が出会う「コンタクト・ゾーン（接触領域）」の視点から考察していく。「接触」という視点は、そもそも「主体」というものが相互関係のなかで構築されていくものであること、そして、その関係を、「共存や相互行為、理解と実践の連結、といった用語において取り扱う」ことを可能にする概念だからである。ただ、それは、多くの場合、「根底的に非対称の権力関係のなかで」行われることに常に留意すべきであるが<sup>6</sup>。

本論文は、以上のように「エイジェント」としての移住女性の状況を考察した上で、その「表象」を分析することを主たる目的とする。それは、「移住女性」の意味を形成するのは、事実そのものであるよりは、言語や表象が大きな機能を果たしているからである。

「表象の作業」と題したテキストにおいて、スチュアート・ホールは次のように述べる。

事物が意味するのではない。我々が、意味を構築するのである。概念や記号という表象システムを用いて。〔傍点 原文〕<sup>7</sup>

だからこそ、本論文は、移住女性の「意味」がどのように「構築」されているかを、移住

---

<sup>6</sup> 「コンタクト・ゾーン (Contact Zone)」 という概念を、メアリー・ルイズ・プラットは、その著書で、次のように記述している。

「それは、異質の文化が出会い、衝突しあい、お互いにつかみあう社会的空間であり、しばしば、支配と服従の極度に非対称な関係——例えば植民地主義と奴隷制のような、あるいは、その余波として今日地球横断的に実行されている状況のような関係のなかで行われる。」

「植民地的遭遇の空間のことであり、地理的にも歴史的にも分割されていた民族が相互に接触し、継続的關係を確立する空間である。そしてそれは、通常、暴力的な政治や根源的な不平等、解決不能な闘争といった条件を含んでいる。」

「私の議論における『コンタクト・ゾーン』という語は、しばしば『植民地フロンティア』という語と同義的である。しかし、後者がヨーロッパ拡張主義者のパースペクティブの中に基礎づけられるのに対して、『コンタクト・ゾーン』という概念は、重心と視点をシフトさせる。」

「それは、地理的・歴史的な分離によってこれまでは分けられていたが、いまやその軌跡が交差している主体の空間的・時間的な共存を呼び起こそうとする試みである。「接触」という言葉を使うことによって、私は植民地的遭遇の相互行為的・即興的次元を前景化させることを目論んでいる。それは、伝播論者の征服と支配の説明ではあまりにも簡単に無視されたり抑圧されたりしてきたのだ。「接触」という視点は、いかに主体が相互の関係のなかで、そしてそれによって構築されているのかという点を強調している。それは、植民者と被植民者、旅行者と旅行の対象とされる者との間の関係を、分断や隔離という用語ではなく、共存や相互行為、理解と実践の連結、といった用語において取り扱うのだ。ただ、それは、多くの場合、根底的に非対称の権力関係のなかでなされているのだが。」

Mary Louise Pratt, 1992, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, N.Y: Routledge, pp.6-7.

<sup>7</sup> Stuart Hall, 1997, "The Work of Representation" Stuart Hall, (ed.), *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage/ Open University Press, p.25.

女性「表象」の「エンコーディング」「デコーディング」<sup>8</sup>分析によって、明らかにしようとするものである。

移住女性「表象」は、現実の移住女性と接触する機会のない人びとに対しても大きな「意味作用の実践」を行う。マリー・ルイズ・プラットは、帝国主義時代の旅行記を対象に「コンタクト・ゾーン」を考察したが、本論文は、移住女性を描いた映像作品を対象に、考察する。映像作品は、移住女性の表象（representation＝代理）を通して、オーディエンスとの「コンタクト・ゾーン」となるのである。本論文では、オーディエンスの感想や受容状況をも考察の対象として、どのようにデコーディングがなされ、どのような「意味作用の実践（signifying practice）」が行われているかを考察する。

従来の移住女性に対するメディア表象の研究は、メディアの中で移住女性がどのように表象されているかを分析・考察するというにとどまっている。ここで、筆者が目標としているのは、メディアが移住女性を表現することで生産可能な「意味」の広がりや、移住女性「表象」を通して考察することである。更に、本論文では、そういった受け入れ社会、送り出し社会双方のジェンダー秩序に関わりながら行われる移住女性の移住のプロセスの中で、どのように彼女たちがトランスナショナルな主体となりうるのか、という問いを根底において、関連する映像作品を中心に「表象」分析を行うことになる。つまり、エージェントとしての移住女性がどのようにメディアに「表象」されているか、という問題がここで設定され、考察されることになる。

## 2. 研究対象

本研究の分析対象は、受入国の韓国で、2007年に国際結婚移住女性をテーマとして制作されたテレビドラマ『黄金花嫁』と、同時期に韓国ソウル国際女性映画祭(WFFIS)で上映された주현숙(ジュ・ヒョンスク)監督の独立ドキュメンタリー映画『素敵な彼女たち She is』(以下『She is』と記す。)である。また、送出国であるフィリピンで出稼ぎ移住女性をテーマとして制作され、2008年にフィリピン国内で最も話題になり、日本では2009年11月に開催された第1回目の移民映画祭で上映された Chito S.Rono 監督の映画『ケアギバー(介護士)』(以下、『ケアギバー』と記す。)が分析対象となる。

本論文は、第1部「受入国韓国における移住女性とその表象」と第2部「送出国フィリ

<sup>8</sup> Stuart Hall, 1992(first published 1980), "Encoding/Decoding", Stuart Hall et.al, (eds.), *Culture, Media, Language*, N.Y: Routledge, pp.128-138.

ピンにおける移住女性とその表象」の二部に分けられるが、ここで、受入国として韓国を、また送出国としてフィリピンを研究対象国として設定した理由について述べておく。

受入国としての韓国は、かつては移住女性の送出国であった。1960年代には、ドイツを中心に看護師として女性たちが送り出され、1970年代には、アメリカや日本を中心に結婚移住する女性の数が増加した。しかし、その20年後の1990年代から、韓国は移住女性の受入国として浮上した。今日まで、受入国として20年間程しか経ていないという浅い歴史から、移住者とホスト国韓国社会との間には多くの問題が存在している。韓国社会は現時点では、移民受け入れの歴史の過渡期に置かれているとも言える。特に、近年では結婚を目的とした移住を選択する国際結婚移住女性が年々増加しているが、この移住女性の受け入れる過程で女性の身体・セクシュアリティに関わる問題が新たに浮上している。このような理由から、受入国として韓国を分析対象国とした。

送出国としてのフィリピンは、韓国とは逆に、アジアの諸国の中でも出稼ぎ移民の歴史が最も長い。さらに、移民政策が国策として積極的に行われ、特に出稼ぎ移住労働者における女性の比率が高いことから、送出国としてはフィリピンを分析対象国とした。この両国で制作された移住女性をテーマとする映像作品を通じて、今日「移民の女性化」とも言われるほど国際移動の主役となる女性の移動が両国（受入国、送出国）の社会のジェンダー秩序にどのように影響し合うのかという、相互的な作用について考察する。

具体的な研究対象となる映像作品は、第1部での一つ目は、連続テレビドラマ『黄金花嫁』（2007年）である。一般的な韓国社会からの移住女性や彼女たちの結婚による「多文化家族」<sup>9</sup>への眼差しとは、「貧しい国からお金で買われた花嫁」と、「無能な韓国人男性」

---

<sup>9</sup> 韓国における「多文化家族」はあくまでも韓国国民男性、および婚姻関係にある移住女性とその子供からなる家族である。外国籍者同士の結合による家族は多文化家族の範疇には入らず、あくまでも韓国国民との身分関係によって決定され、韓国において法的な婚姻関係にない父母もしくは外国籍の子供に対しては差別的であると金ヒョンミは指摘する。「多文化家族」という言葉が、初めて政府の文書で使われるようになったのは、NGO団体の提案からである。

김현미 「이주자와다문화주의」 『현대사회와문화』 연세대학사회발전 연구소, 2008년 (=金ヒョンミ「移住者と多文化主義」『現代社会と文化』26号、YONSE大学社会発展研究所、2008年。)

多文化家族支援法第2条によると、韓国における多文化家族とは、韓国男性と外国人妻、韓国人女性と外国人夫に構成された家族である。

多文化家族に対する韓国政府の支援は、主に韓国の男性と婚姻関係を結んだ移住女性を対象とし、韓国語や韓国文化の習得を支援することを目的としたもので、移住女性の出身地域の言語文化を尊重する視点はない。そのために、移住女性支援政策である多文化政策の目的が、多文化主義についての一般的な解釈、つまり異なる文化を相互に尊重し対等な関係を築くためではなく、むしろむき出しの同化主義である、と批判されている。また、このような政府からの多文化政策は、韓国人国民と結婚した外国人女性と男性に限って行われるため、労働移住者やそのほかの移住者は対象とされず、差別化されているとも指摘される。

との間に形成された家族、あるいは「農村の家族形態」というものである。このようにネガティブで社会的にも周辺化される国際結婚移住女性の問題を改善しようとする意図から制作されたのが、このテレビドラマ『黄金花嫁』である。このドラマは、ベトナムから国際結婚を通じて韓国にきた移住女性を主人公におき、彼女を通じて韓国社会のなかで生きる移住女性の姿および多文化家族を描き出している。国境を越え、ソウルに嫁いだベトナム人女性の波乱万丈なラブストーリーを通じて、同時代の夫婦、家族間に和解と絆が成立する感動的なドラマとして描かれてい。また、移住女性たちが国際結婚を通じて韓国社会に入る過程を「リアル」に表現し、部分的ではあるものの移住女性たちに共通する問題を捉えている。このテキストからは、国際結婚移住女性を素材とする韓国のメディアにおける言説が、どのような主題を通じて議論され、どのように移住女性を表象するのか考察を行い、さらにメディア表象を受け止めた移住女性たちが新しいアイデンティティを形成していく様子を検討する。

二つ目の作品は、2007年4月「韓国ソウル国際女性映画祭(WFFIS)」で公開された韓国の주현숙(ジュ・ヒョンスク)監督のドキュメンタリー映画『She is』である。この映画は、国際結婚で韓国に入ってきた移民女性たちに密着したドキュメンタリー映画である。その内容は、国際結婚に関与する国際結婚仲介業社の横暴な行為や、移住先における移民女性への偏見を描きながら、移住女性たちにどのような新しいアイデンティティが生まれているのかを描いているものである。ここでは、韓国人男性との結婚を通じて韓国に入ってきた外国人女性の問題として、大衆メディアで取り上げられている移住女性たちの表象について考察し、その上で、韓国社会において「他者」ではなく「主体」として生きる、移住女性の姿に注目する。この二つのテキストを通じては、韓国社会の中で「単に表現された移住女性イメージ」に対する考察を行う一方で、新たに「意味を作り出す実践である『表象』としての移住女性イメージ」について分析を行う。

第2部で分析対象となる映像作品は、本来であれば韓国に移住したフィリピン人女性を対象とした作品を選択すべきだが、筆者が検索した映画のデータにおいて韓国に移住したフィリピン人女性に関するものが含まれていなかったため、イギリスへ出稼ぎのために移住したフィリピン人女性をテーマに制作され、2008年にフィリピン国内で最も話題となった映画『ケアギバー』を分析対象とする。ここでは、開発途上国の工業化が個人の「生」に与える影響、ジェンダー化された義務、責任、社会的な期待をめぐる課題について考察することになる。そのなかでも特に、女性の出稼ぎ移民研究の今日までの成果について、映画を通して検討することにも留意し、この視覚文化の領域で、再生産労働力の源である

移住女性がどのように表象されているのかを考察する。つまり映画のなかで、移住女性が一人の女性として経験し、エンパワーメントし、どのように新しいアイデンティティが生みだされているのかということの検討が行われる。

この三つの研究対象は、同時代的に進展するグローバリゼーションに付随する国際移動のなかでも、特に「移住する女性」をテーマとした映像作品として、世界的に移住する女性が抱えている問題を扱い、移住女性表象を通じて「意味」を生産するという共通性を持ちながらも、それぞれ異なる視点で描かれている。筆者はそれらの映像メディアを研究対象として、移住女性「表象」の「エンコーディング」「デコーディング」分析を行い、その分析から移住女性の「意味」がどのように「構築」されているかを検討しながら、その表象がさらに移住女性のアイデンティティ形成にどのような影響を与えているのかについて、具体的に検討を行う。またメディアにおける表象方式が持つ社会的・文化的意味についての考察過程においては、国境を超えて移住する移住女性たちが国際結婚移住または、労働移住を選択する中で、ホスト国側から彼女たちが客体として規定され、「他者化」される姿を確認することができる。しかし、筆者の最も重要な狙いは、この三つの作品を通じて、移住女性が社会の中でどのように「意味生産」されるのかを、移住女性を受け入れる社会と、送り出す社会との構造的な部分での比較分析を通じて明らかにし、それが移住女性の「生」にどのように影響を与え得るのかを考察することにある。さらにはその「意味生産」の過程で、移住女性たちがどのようにして新たなアイデンティティを確立していくのかを分析することである。

### 3. 研究方法

本研究の方法としては、まず、移住女性の受入国と送出国での移住女性の移住実態状況や問題点などを把握するために、両国の各機関で行われた報告書や先行研究文献などを中心に検討する。さらに、マス・メディアにおける移住女性表象を考察するために、新聞記事やインターネット、またテレビの時事番組、娯楽番組、ドラマや映画などで、両国において移住女性がどのように表象されているのかを把握する。

それを踏まえた上で、三つの映像作品、韓国のドラマ『黄金花嫁』とドキュメンタリー映画『She is』、フィリピンの映画『ケアギバー』のテキスト分析を行うが、その際、この三つの作品の移住女性「表象 (representation=代理)」を通して、オーディエンスとの「コンタクト・ゾーン」として考察する。

本論文におけるホールの「表象」概念を用いる考察とは、「構成論的な接近」によるものだが、ここではその方法を三つの映像作品における「表象」される移住女性の分析に適用する。即ち、まず映像作品の制作段階で生成される意味構造と、映像の消費に着目することで、そこに含まれているコードや記号の解読を試み、新たに生成される意味を捉え分析していく。また、それに付随させてホールが提唱する概念である「意味作用の実践 (signifying practice)」を採用し、分析対象である三つの作品を通して表現される移住女性表象が、どのようなメッセージを生成し、どのような社会实践として「表象」という象徴的生産物を生産するのかを検討するために、受容者（オーディエンス）にも注目する。すなわち、表象がどのような影響を与えたのかを、受容者（オーディエンス）分析を通じて考察したい。方法としては、この映像を見た視聴者または観客から得たアンケート調査やインターネットの書き込みなどを基に考察する。これは、メディアがメッセージを生み出し、流通、分配、消費、再生産する機能に注目することにもなる<sup>10</sup>。生み出されたメッセージを受容者（オーディエンス）にとって、意味あるものとする社会的、政治的、歴史的な背景を、考察の枠組みの中で踏まえることである<sup>11</sup>。それはまた、本研究のもう一つの目的である、移住先で生活する彼女たちの「生」は、ホスト国に対しどのような影響を与え、逆に彼女たちがどのような影響を受けているのか、という相互作用を考察する上で、重要な方法であると考えられる。

しかし、独立ドキュメンタリー映画『She is』からは、テレビドラマ『黄金花嫁』と物語映画『ケアギバー』のように、作品を見た観客の感想を分析することが出来なかったために他の二作品と同様の形で「意味を作用の実践」分析は出来ないが、監督自身にインタビューを行い、そこから、観客の反応を考察する。従って、そこから映画を上映する場そのものがコンタクト・ゾーンとなって、表象が「意味作用の実践」を行う様相を検討する。

また、もう一つの考察の視点として、ギデنزの「エイジェント」及び「エイジェンシー」概念に依拠し、移住女性の「エイジェンシー」に注目する。つまり、本論文は、移住女性をエイジェント（行為体）として、また、エイジェントとしての移住女性の行為が社会と相互的に作用を及ぼしあうことをエイジェンシー（行為作用）として捉え、この語を用いて考察を行う。移住女性の行動と認識を時間と空間の変化につれて共に変化するエイジェント（行為体）であると認め、社会システムの中に構造的に組み込まれるだけではな

<sup>10</sup> ジェームス・プロクター著、小笠原博毅訳『スチュアート・ホール』（青土社、2006年）97-121頁。

<sup>11</sup> 同書、97-121頁。

く、構造のほうを変える可能性を持つことに注目するのである。

#### 4. 論文の構成

本論文は、第1部「受入国韓国における移住女性とその表象」と第2部「送出国フィリピンにおける移住女性とその表象」の二部構成の下で、下記のように議論が展開されることになる。

第1部、「受入国韓国における移住女性とその表象」では、移住女性の受入国として韓国を分析対象とし、移住女性の中でも、特に開発途上国から結婚を通じて韓国に移住した結婚移住女性を対象とする。その移住のプロセスで女性の身体・セクシュアリティに関する問題が浮上しているという理由から、国際結婚、移住女性の商品化（人身売買）、新しく形成される「多文化家族」という、アジアにおける国際移動の重要なパターンを取り上げて、それらを通じて韓国社会のジェンダー秩序について論じる。その際、テキスト分析の対象として、韓国で制作されたテレビドラマ『黄金花嫁』と独立ドキュメンタリー映画『She is』の二つの映像作品を分析対象にする。

第1章は、韓国社会へ移住する移住者の状況、特に国際結婚増加の背景について把握した上で、韓国社会のメディアにおける移住女性の表象について考察を行う。特に、国際結婚仲介業者の介入によって行われる国際結婚の「商品化」や女性の身体がいかにか家父長制的な要求によって作り出されているのかを論じる。

第2章は、テレビドラマ『黄金花嫁』を具体的なテキストとして取り上げ、韓国社会の中で国際結婚移住女性の存在によって成立する「多文化家族」の持つ意味について論じる。ここでは、近隣途上国の女性の身体を「輸入」することで維持される家族や韓国社会が、結婚移住女性に要求するものが明らかにされよう。

また、テレビドラマ『黄金花嫁』の中で作り出された移住女性「表象」が、受容者（オーディエンス）にどのような影響を与えたのかを受容者（オーディエンス）分析を通じて考察する。

第3章は、女性の国際移動への参加、特に韓国社会の中で、これまでの経済的目的で移住してきたという定型化（typification）された移住女性の表象から、エイジェントとしての移住女性の表象へと転換されたものとして、独立ドキュメンタリー映画『She is』を取り上げ、そこに登場する5人の移住女性の認識と行動、また移住女性と韓国人女性監督との

関係を考察する。特に、移住女性の身体が国際市場においては生殖を目的とした「国際商品」として「輸入」される中で、彼女たちのさらなる離婚の選択が、商品としての身体から自分の身体を取り戻す主体的な決断として行なわれたという意味をもつものとして論じる。さらに、移住女性の実際の生活において、移住女性たち同士のネットワーク形成が彼女たちの自立性を拡大した様子を明らかにする。

次に第2部「送出国フィリピンにおける移住女性とその表象」では、映画『ケアギバー』が背景に有している現実的な移住問題としての、送出国の状況を把握し、現代グローバル化における階級再編とジェンダー再配置について考察を行う。

第1章は、フィリピンの出稼ぎ労働者状況を踏まえた上で、再生産領域のグローバルな展開をフィリピンの「海外労働者の女性化」を手がかりにして考察を行なう。なお、フィリピン政府が出稼ぎ看護師と介護士を通じて労働の「国際商品」化を推進する政策的意図を考察する。

第2章は、具体的なテキストとして映画『ケアギバー』を取り上げ、開発途上国の工業化が個人の「生」に与える影響、ジェンダー化された、義務、責任、社会的な期待といった面から考察し、論じる。特にここでは、出稼ぎ移住において発生するトランスナショナルな家族形態のあり方に注目しながら、女性が出稼ぎで海外に出て行くことでどのように既存のジェンダー関係はいかに変容するのか、という問題について考察することに重点を置く。また、映画の中に含まれているコードや記号を解読することで、移住女性表象について新たに生成される意味を分析する。さらに、社会实践として「表象」という象徴的生産物を検討するために、受容者（オーディエンス）にどのような影響を与えたのかを受容者（オーディエンス）分析を通じて考察する。

## 5. 映像メディアを分析対象とする理由

本論文で考察の対象とするメディアはテレビドラマ、独立ドキュメンタリー映画、物語映画である。それぞれ異なるメディアの形式から移住女性表象について考察するが、なぜ、これらの異なるメディアを分析対象にしたのかについて述べておく。

ナッシュによると、メディアは世論を形成する重要な役割を果たしている。特にマス・メディアに映し出されたニュースや情報、そして、述べられた意見や文化的な表現は、私たちが生きている社会での文化や政治上の環境に関する価値や態度、判断を作成する決定

的な論議域 (universe) を構成している、と指摘する<sup>12</sup>。また、スチュアート・ホールは、メディアが表象する現実とは、ある事実に対する透明な反映ではなく、ディスコースによって特定の意味を持たせる意味作用の実践の産物である、と指摘する<sup>13</sup>。メディアは、特定の・制限的な意味を、普遍的・自然な「現実」的なものとして作り出す。従って、メディアは、表現体系を可視化し、効果的に伝達する際に使用する社会的道具であり、文化権力の装置と言える。さらに、この意味で、現代のイデオロギーを形成しているとも言えよう。メディアのなかで表現された移住女性に対する他者化は、日常生活の中ですでに作動している分類体系を意味生産しながら、同意 (又は、合意) を調達した結果物である。ここで言う分類体系とは、社会構成員らが暗黙に共有している「常識」的な知識を意味する。例えば、テレビドラマの中で表現される移住女性の定型化されたイメージは、ホスト国の人々にとって「当然な」ものとして受容されている。また、テレビドラマを中心とするメディアによる移住女性表現は、普遍的な意味規則に沿った形で、移住女性に対する現実を特定の方法で示し、その過程のなかで彼女に対する特殊な説明、または、眼差しに「普遍性」を付与するのである。これがメディア・ディスコースのイデオロギー的な側面である。例えば、韓国メディアのなかで、移住女性が被害者、性商品、良い嫁、時には英雄として、定型化 (typification) された他者 (other) として構成される。このようなメディア表象は、韓国社会の中で支配的な、移住女性たちに対する認識に依拠する形で存在するために、可能となっている。しかし、移住女性に関するジェンダーと少数派という、他者性を二元的に理解しようとする見解によって、移住女性の役割を限定するような、決定的な文化的メカニズムが構成されている<sup>14</sup>。文化権力の装置として、メディア、特にテレビや映画によって表象される移住女性たちは、経済的な理由から就労、国際結婚の形態を通じて、経済的に有利な国に移住した外国人女性として、つまり経済的に貧困な国からの移住女性として理解されている。この理解は、特に韓国の社会では、下位主体 (subaltern) <sup>15</sup>の典型とも言える。人種・ジェンダー・階級の交差点にいる移住女性のホスト社会での経験は、「他者化 (othering)」

<sup>12</sup> M.Nash, 2006, "Rethinking Media Representations of Immigrant Women" *IEMed*, No.16, 2006  
<http://www.iemed.org/publicacions/quaderns/7/aindex.php> (accessed July 23, 2010), p.58.

<sup>13</sup> スチュアート・ホール (Stuart Hall), 임영호번역 『스튜어트 홀의 문화이론』 한나래, 1996년, 247쪽.  
(=スチュアート・ホール著、イム・ヨンホ編訳 『スチュアート・ホールの文化理論』 한나래出版, 1996年, 247頁。)

<sup>14</sup> M.Nash, (2006), pp.57-60.

<sup>15</sup> Gayatri Chakravorty Spivak, 1988, "Can the Subaltern Speak?" in Cary Nelson & Lawrence Grossberg, (eds.), *Marxism and the Interpretation of Culture*, Urbana: University of Illinois Press, pp.271-373.  
Gayatri Chakravorty Spivak, 1999, *A critique of postcolonial reason: toward a history of the vanishing present*, Harvard University Press, pp.95-160.

という用語で要約される。すなわち、移住女性たちは、言語と文化の差から感じる困難、異邦人として見られるホスト社会からの眼差し、人権問題に関わる諸問題から彼女たちは他者化を経験している。一方、メディアが描写する移住女性の姿には「現実的」的なものを反映しながらも、大部分の移住女性のイメージに関しては、選択的に描写する傾向がある。従って、メディアの中で表現される移住女性のイメージは、現実の移住女性との間で「差異」が生じている。例えば、移住女性は、家族の再構成の枠組に当てはめられ、経済的に依存する女性として定義されることで、移住女性たち自らの移動に際する戦略的プロセスや計画が見逃され、総合的には、彼女たちに対して否定的に表象される。この意味で、しばしば彼女たちの移動を経験する個人、労働者としての主体的な存在というものが、無視されている。

スチュアート・ホールのいうメディアによる「意味作用の実践」<sup>16</sup>は、メディア・テキスト内での表象だけではなく、社会の現実的な移住女性たちの「生」との関係のなかでも起こる。従って、移住女性の主体位置、または主体性を分析するには、メディアのテキスト分析を行うと同時にそのメディアが存在する社会・文化的なコンテキストの関係を考察する必要がある。なぜなら、メディアの「意味作用の実践」として表現される移住女性の表象と現実的な移住女性の「生」との関連性のなかで、どのような移住女性の主体が形成されているのかを考察することは重要であるからだ。これは、テキストとコンテキストの多層的な分析を行うことこそ、表象される移住女性と、具体的な現実の中での移住女性が、その両関係のなかでようやく形成される移住女性「主体化」<sup>17</sup>の過程が現れるからである。

フィスクは、テレビは我々が現実そのものを感じ取る際のコードと、密接に関連するコードを用いているし、またそのような見方が世界を見る自然な見方のように思われているのである、と指摘する<sup>18</sup>。言い換えれば、テレビは、現実を生産する慣習化された形式である、特定の映像技法、ナラティブ (Narrative) を採択することで、テレビが現実を反映しているかのように、理解されている。ドラマの場合、イメージ、音、ナラティブなどを利用して解釈される<sup>19</sup>。ナラティブは、仮想の事件を一連の順序に配列することで社会的矛盾

---

<sup>16</sup> Stuart Hall, (ed.), 1997, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage/ Open University Press, pp.24-25.

<sup>17</sup> ここで言う「主体化」とは、文化権力装置を通じて考案され構築される人の形象に対する内面化を意味する。정용택 「국제결혼이주여성에 관한 미디어재현체계와 시민사회의 분류체계」 비평루트, 2009년. (= 鄭ヨンテク 「國際結婚移住女性に関するメディアの表象体系と市民社会の分類体系」、批評 ROOT, 2009年、27頁。)

<sup>18</sup> ジョン・フィスク、ジョン・ハートレー著、池村六郎訳『テレビをく読む』(未来社、1991年) 19頁。

<sup>19</sup> 김영미 「한국영화에 나타난 모성성 연구」 동국대학교 연극영화과 석사학위 논문, 1998년.

を表現し、または、その矛盾を解釈・解決する方法を提案することで、文化的解釈の根拠にもなる。テレビのなかで描写される移住女性に関連した映像、例えば彼女たちが生まれた故郷の風景や文化などの多様な映像は、多様な製造的な素材として使われ、特定のな方式で意味を生産するだけではなく、そうした映像をどのように解釈するのも観客に教えている。また、フィスクが指摘したように、連続的に提供されるイメージの流れとナラティブは、観客に親密感を与える<sup>20</sup>。この親密感とは何かを分析することこそ、ドラマに内在する世界観やその社会に流通するイデオロギーを把握する鍵になる。また、ドラマを通じて発信されるメッセージやイメージを分析することは、同時にドラマが作用する多様な記号体系が相互作用するメカニズム、そのものに対する分析であると言える。また、記号の意味化作用は、その記号が消費される社会の現実とその現実を統制し、支配する文化的価値、イデオロギーなどに再現または意味を生産することで、新たにドラマのテキスト中で構造化される。結局、移住女性に対するドラマテキスト分析は、テキストなかのイデオロギー問題だけではなく、移住女性の「意味生産作用の実践」を重視することにある。更に、メディア媒体の中でも、容易に接近できることと、不特性多数を包括する膨大な受容者を持っている点から、テレビは大衆メディアであり、中でもドラマは、虚構の枠内でストーリーの面白さと楽しみを提供する点で、もともと大衆性が強いジャンルである<sup>21</sup>。この点から、映画もまた大衆性と意味伝達の技能的な面を満足させる点と、大衆的な親近感を提供するという面から分析対象とする。

一方、ドキュメンタリー映画について、ポール・ローサは次のように述べる。

われわれは、日々われわれの周りには身近なものに対して、あまりにもなれなじんでいるため、その正しい評価を与えることができないでいる。そしてとりもなおさずこういう理由から、ドキュメンタリー映画は、身近な事物や人々に生命をふきこみ、それにより社会とよばれているもろもろの事物体系のなかで、それらの位置をありのまま評価させようという、重要な目的をもっているのである。

ドキュメンタリー映画世界は、<中略>全ての男女の世界であり、個人が住んでい

---

(=金ヨンミ「韓国映画で描かれた母性性の研究」東国大学大学院、1998年)

<sup>20</sup> ジョン・フィスク、ジョン・ハートレー著、前掲書（未来社、1991年）13-22頁。

<sup>21</sup> 하중원「텔레비전 일일 연속극에 나타난 권력관계에 관한 연구」『한국방송 학보』17권 2호, 2003년, 189-219쪽. (=ハ・ジョンウオン「テレビ日々連続ドラマに現れた権力関係に関する研究」『韓国放送学報』17冊2号、2003年、189-219頁。)

る世界へのそれぞれの責任と行為の世界である<sup>22</sup>。

ポール・ローサの指摘のように、ドキュメンタリー映画は、「社会とよばれているもろもろの事物体系のなかで、それらの位置をありのまま評価させようという」目的の下で、制作される、ドラマやフィクションに対応する映画ジャンルとして、事実記録を下に制作する「記録映画」、「記録映像」と言われている。一方で、森達也は、「全ての映像は主観の産物だ。カメラを捉えっぱなしの盗み取りでもしない限り（この場合でも、正確に言えば主観や作為から逃れないが）、被写体が動物だろうが物だろうが例外はない<sup>23</sup>」と述べる。これは、一般的に、ドキュメンタリーは、制作者の意図や主観を含まない事実の描写であると認識されていることに対して、本質的にその差はないことを森達也は指摘している<sup>24</sup>。このことは、ドキュメンタリー映画と物語映画の共通の目的 — ある問題意識を提示しようとする意図が含まれている — が存在し、それを表現したという制作者の共通の意図があることである。しかし、ドキュメンタリー映画は、ドラマやフィクションとは異なり、事実情報を基に内容を展開することを基本としているが、その際に問題になるのが、「真実性」である。森の指摘である、制作者が見せたいもののみみせるという主観的な行為によって、映像上に他の情報は排除される可能性が十分に存在する。

さらに、ドキュメンタリー映画に存在する「ナレーション機能」や「編集機能」は、いかに制作者の主観的な意図が含まれているのかを明らかにする映画の機能である。

このような理由から、物語映画とドキュメンタリー映画は、映画に登場する人物が、実物であるか、女優であるか、という大きい違いがあるにもかかわらず、本論文で分析対象であるドキュメンタリー映画の考察においては、テレビドラマや物語映画と同様に「表象」として考察を行う。しかし、「事実を基にした」というドキュメンタリーの特殊性も排除しない。なぜなら、監督は2年間にわたって彼女たちとの人間関係を作り、彼女たちに寄り添いながら作品を作っている。監督は彼女たちにインタビューをすることによって、彼女たちの声と姿を伝える。さらに、この作品は、移住女性の姿を映し出すだけでなく、撮る側と撮られる側、ホスト側と移住してきた側との間に相互的に形成されていくコンタクト・ゾーンそのものを、現在進行形で映しだしていくからだ。他方、映画『ケアギバー』

<sup>22</sup> ポール・ローサ著、厚木たか訳『ドキュメンタリー映画』（未来社、1995年）14頁。

<sup>23</sup> 森達也著『ドキュメンタリーは嘘をつく』（草思社、2005年）74頁。

<sup>24</sup> 森達也著「フィクションとノンフィクションの境界で」『ドキュメンタリーは嘘をつく』（草思社、2005年）85-95頁を参照せよ。

は、制作当初に監督は多くの出稼ぎ移住女性やその家族にインタビューを行い、映画にそのインタビュー内容を反映しながら事実を基にして制作した。その意味で、映画『ケアギバー』は、物語映画でありながら「事実を基にした」部分においてはドキュメンタリーの性格を持っているといえる。従って、本論の研究対象となるドキュメンタリー映画と物語映画における曖昧な境界から、本論文の核心ともいえる「表象」分析の際、その多面的、多義的意味を念頭に置きながら分析することを目指す。

## 6. グローバル化・表象・ジェンダー

文化的モノが商品になることと、その商品を売ることは、消費者の欲望を作ることと同義であり、消費者の欲望をうまく作り出すことができなければ、資本主義社会のもとの経済的な拡張は困難である。この意味で、広告、宣伝を通じて、消費者の欲求を産出するという点、これらは文化の問題に深く関わっている<sup>25</sup>。特に、テレビや映画のような視覚を中心としたメディア文化では、他者表象の働きはより強化される。例えば、映画やドラマ産業に関しては、すでに文化産業と消費者の関係について確認した。言い換えれば、いかに映画とドラマが消費者の欲求を産出したのか、を私たちは日本におけるいや、アジアにおける韓流ブームから確認してきた<sup>26</sup>。消費者の欲望、または消費者からの要望が産出される過程は、今日の資本主義経済を理解する上で重要であり、資本主義経済が人に与える影響について考察するためにも不可欠な要素でもある。例えば、多国籍企業が開発途上国諸国の女性労働者を求人したがることも、文化的な要素と経済的な要素が絡み合う問題である<sup>27</sup>。ヴェラ・マッキーは、多国籍企業による開発途上国の若い女性たちを巡る雇用問題について次のような疑問を投げかけている。「安価な労働力を求めるのは経済合理性の問題だが、なぜ若い女性であれば安い賃金で雇用できるのか、雇用してよいことになるのか。」このような問いかけに対する解答として、文化分析によってしか説明できないと語っている<sup>28</sup>。さらにマッキーは、当該社会における女性たちしさと男性らしさに関係していると同時に、多国籍企業の経営陣の「アジア女性」観も関係している、と指摘する。文化問題を消費者の欲望、または消費者という要望の産出プロセスに関連させ移住女性を考える際に

<sup>25</sup> ヴェラ・マッキー『グローバル化とジェンダー表象』（お茶の水書、2003年）3-35頁。

<sup>26</sup> 安貞美「日本における大衆文化受容—『冬のソナタ』を中心に」『千葉大学人文社会研究』第16号、2008年、196-210頁。

<sup>27</sup> ヴェラ・マッキー、前掲書、3-35頁。

<sup>28</sup> 同書、3-35頁。

は、移住を選択する主体として、または、文化消費者である彼女たちが持つ文化的要素は大きな意味を持つ。例えば、韓国における国際結婚において開発途上国からの女性たちが、韓国人男性との結婚を選択する際、そこには多様な要素が存在している。そのなかには韓国ドラマからも多少の影響が与えられている。彼女たちは、ドラマで描かれる「男性らしさ」を、韓国人男性像の典型としてとらえ、そこにドラマに登場する男性俳優のイメージを付与し、同一化を行う。またドラマの中で描かれる韓国人男性の経済力について、憧れを感じている<sup>29</sup>。一方、宮島喬は、滞日アジア人女性についての、いわゆる「文化」領域における権力分析が、なかなか深化しなかったことを指摘する。さらに、文化の政治学や文化研究の手法を政治経済的な構造分析と接合させる必要があると述べ、「文化」領域については、言語・意味・象徴・規範・価値・言説などの領域であり、これらの領域は政治経済構造や社会的制度や日常のリアリティ構成及びそこでの支配関係に深く関与しており、同時にその維持・再生産・変容の場でもあると強調する<sup>30</sup>。グローバリゼーションの進行のなかでの人の移動、特に本研究のテーマである開発途上国からの女性移動について理解を得るためには、マクロな政治経済学の分析も必要だが、ミクロな文化表象の分析も重要である。例えば、1980年代の新国際分業体制のもとでの労働力移動について考えてみよう。人による労働力移動は主に、開発途上国から先進工業国への移動が多く、開発途上国からの移住は先進工業国での肉体労働に関わっている。いわゆる3K(3D)労働である。その中でも、女性による労働は、家事労働やエンターティナー、セックスワーカー、サービス労働や代理母などの生殖に関わる労働に関わっている<sup>31</sup>。国際結婚の場合も、介護や育児、家事労働、農村での「嫁」としての役割と農家における肉体、身体労働が主である。ここで我々は、移動する「身体」について考察できる。そして、移住の受入国と送出国の間に生じる差異、つまり、肉体労働と知識労働の差異、移住女性とホスト国の女性の差異が生じる。ここでは、新たな「格差」や「ジェンダー化」や「人種化」が見られる。しかし、こうした身体や身体化された経験について考察する際、我々は言語や文化表象、文化作品を扱う必要がある。なぜならば、私たちは、他人の身体や他人の経験を自分がそれとして直截に経験することができないからである。また、この「文化」領域で、彼女たちがどのように表象されているのかを分析することは、そこで働く力学やポリティクスを分析することに

<sup>29</sup> 筆者が2009年4月から11月の間に行なったフィリピン女性への聞き取り調査により。

<sup>30</sup> 宮島喬・梶田孝道編『マイノリティと社会構造』(東京大学出版会、2002年)121-148頁。

<sup>31</sup> ヴェラ・マッキーは、「オーストラリアやアメリカといったいわゆる先進国では、国境を越えて養子をもろうケースがおおくあり、国際結婚にも生殖という要素があることは忘れてはいけない」と指摘。ヴェラ・マッキー、前掲書、46頁。

なる<sup>32</sup>。とりわけ最近の構造的問題を個人化する傾向において、どのように「移住女性」がねじれた形で日常化され、構造的問題が否定されていくのかを検討することは重要である。

## 先行研究

ここでは、本稿を書く上で重要な幾つかの概念と用語の説明を行う。まず、本論文はメディアにおける移住女性の「表象」分析を行う研究であるため、「表象」の概念について考察を行う。そして、移住女性をどうみるか、を考える際に、本論文ではエイジェンシー概念を中心に考察を行いたい。そして、全体的な構図を把握するために、グローバリゼーションの中で行われる国際移動について考察を行う。特に、「グローバリゼーション」、「移民の女性化」、「国際結婚」などのキーワードを中心に考察する。また、グローバリゼーションの進行の中で、女性による国際移動にはどのような意味が含まれており、どのように行っているのかを理解するために、先行研究を中心に述べたい。

### 1. 「表象 (Representation)」の概念とメディアにおける「表象」

「表象 (representation)」とは、記号を通じて物事(things)、事件、人物、そして現実が記述され、表現され、意味構成される過程として定義される<sup>33</sup>。本論文で使用する「表象」の概念は、スチュアート・ホール (Stuart Hall) の「構成論的接近」という表象の立場<sup>34</sup>を採用し考察する。

<sup>32</sup> 宮島喬・梶田孝道編、前掲書、121-148頁。

<sup>33</sup> Stuart Hall, (ed.), 1997, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage/ Open University Press, pp. 24-25.

<sup>34</sup> スチュアート・ホールによると、「表象」を説明するには大きく三つの立場に整理できる。一つ目として、反動的 (reflexive) 接近が挙げられる。これは意味というものが、現実世界の物事(things)、人、観念、事件にあると見なし、言語は鏡のようにこの世界にすでに存在する真実の意味を反映するという、考え方である。ここで「表象」として現れるリアリティは、その「内容」が生産される際に、どのようにして物事が定義されるのかということになる。二つ目は、意図的な接近である。表象の意味とは、言語を通じて世界に自身の固有な意味を付与する著者や作家が、意図したモノである、という考え方である。しかし、この場合問題となるのは、言語がコミュニケーション手段として可能になるためには、共有された言語的慣習とコードに属している必要がある、ということである。したがって著者らが使う意味とは、既存の言語体系に属する、その言語のイメージと意味との妥協の結果にならざるをえない。三つ目として、構成論的な接近を挙げる。ここでは言語の社会的・公共的性格を認める。また、物事 (things) と人々が存在する物質的世界と表現、意味、言語が作動する象徴的实践と過程を区別し、意味が伝えられるのは物質的世界でなく、言語体系や概念を表現する表現体系とみなすこと、となる。ここで意味を構成して、他の人とコミュニケーションを図るために概念的体系、言語、表現体系を使うのは、社会的行為者 (メディアの意味作用においての主体者) と見なす。本論文で使われる「表象」は、この三つ目に該当する。

ホールは、メディアにおけるメッセージの意味構成の過程において、交換、使用価値は、メッセージが内包する象徴的価値に依存していると述べる。従って、メディアとは、社会实践が「表象」という象徴的生産物を生産するように組織化された制度であると定義される。結果として、このようにメディアが行うメッセージ生産の過程は「意味作用の実践 (signifying practice)」として現れることになり、メディアは「意味作用のエージェント」になる<sup>35</sup>。メディアが表現する現実は、ある事実に対する透明な反映ではなく、ディスコースによって特定な意味を持たせる意味作用の実践の産物である<sup>36</sup>。従ってメッセージは、「メッセージ」の単なる言明 (statement) というより、メディア過程の背景に潜むイデオロギーを再発見し、その動きと他要素との関係を考察する必要があるだろう。

ホールは、映像のなかのブラックの表象について次のように述べる。

映像の中のブラックの表象とブリティッシュの表象の関係は、ただ単に映像だけの問題ではない。英国性、イングリッシュネス、ブリティッシュネス、のイデオロギーを、実践的に生産するエージェントとみなされるのでそこには現実の社会状況や歴史状況、また政治状況が反映しているのであり、反映の産物である映し出される集合体は、現実の状況とイデオロギーの地図のなかで、さらなる複雑な関係性を形成し、また一方で単純な対立的構築が持続される。また表象の問題はニュース報道だけの問題ではない<sup>37</sup>。

ここで示されているのは、表象の問題は、メディア制度だけの問題ではなく、もっと幅広い生活のなかでの現実の人びとのそれとのかかわりの問題であり、抑圧的なブラックの表象に抵抗する人びとの問題であることを意味している<sup>38</sup>。また、栗谷はこの「ブラック」表象に関して、「『ブラック』という『表象』によって黒人として表象される人々に対しては、露骨なステレオタイプに無垢で肯定的なイメージが与えられてきていた。歴史的に合衆国における黒人解放運動による権利要求の運動は、一定の成果があげられてきたのは

---

Stuart Hall, (1997), pp. 24-25.

<sup>35</sup> 栗谷庄司「表象と文化的アイデンティティ」『同志社会学研究』6号、2002年、27-41頁。

<sup>36</sup> スチュアート ホール(Stuart Hall), 임영호편역『스튜어트 홀의 문화이론』한나래,1996년,247쪽.  
(=スチュアート・ホール著、イム・ヨンホ編訳『スチュアート・ホールの文化理論』ハンナレ出版、1996年、247頁。)

<sup>37</sup> 伊藤明己「スチュアート・ホールのイデオロギーとアーティキュレーションの理論」中央大学大学院文学研究科社会情報学専攻修士論文、1996年、28-29頁。

<sup>38</sup> 同書、28-29頁。

もちろんのことではあるが、しかし、このように本来多様であるはずのものが『ブラック』というひとつの本質であるかのように構築されることにより逆説をも生み出しているのである。例えば、行政の問題としては、対立するゲットー化が進むことによって、メディアにおいて『犯罪の増加』と『黒人の移民』の数の増加を関連づけるというようなニュース報道のレトリックにもそれは現れる。つまり、『ブラック』という乱暴なカテゴリーを構築することは、却って『敵』として『取り締まり (policing)』の対象になり、あるいは管理することを容易にできてしまっているのである」と指摘する。

さらに、栗谷は、エドワード・サイードによる西洋（オクシデント）と「オリエント」という概念の関係性について述べ、西洋は自らを表すために、オリエントの表象を必要とし、実は西洋と東洋とは相互に補完する関係のなかにあつたにもかかわらず、支配／被支配の構造を作り上げると指摘しながらそこに働く、メカニズムを考察する必要があると主張する<sup>39</sup>。このメディアと人種問題への考察は、人種のステレオタイプ化、人種とエスニシティのネガティブなイメージ、イギリスの中心部分でもある黒人の経験をそれとして説明することの不在、黒人の歴史、生活、文化の単純化した表象などに注意を喚起したものである<sup>40</sup>。

### 1-1. メディアにおける表象

マクルーハンは、「メディアはメッセージである」と述べ、「人間の結合と行動の尺動と形態を形成し、統制するのはメディアにおわらない」と、主張する<sup>41</sup>。マクルーハンによると、メディアは人々の知覚バランスを変化させることで、社会全体が変容していく。さらにメディアは、その内容によらず影響力をもっているばかりか、かえってメディアの形態の方が、内容を規定していることを主張した。すなわちメディアの内容ではなく、メディア自体が社会を変容させるということである。一方、ナッシュは、メディアが世論を形成する重要な役割を果たしていることについて次のように指摘する。「特にマス・メディアに映し出されたニュースや情報、そして、述べられた意見や文化的な表現は、私たちが生きている社会での文化や政治上の環境に関する価値や態度、判断を作成する決定的な論議

<sup>39</sup> 栗谷庄司、前掲書（2002年）37頁。

<sup>40</sup> 伊藤明己、前掲書（1996年）21-28頁。

<sup>41</sup> マクルーハン著、栗原裕、河本仲聖訳『メディア論』（みずず書房、1987年）7-22頁。

域 (universe) を構成している<sup>42)</sup>」と。また、共有された文化信念の構造によって社会集団の分類されることを指摘し、移住女性の場合には、移住女性における文化的表象の重要性は、彼女たちの行動規範と基準を作り出していると述べる。さらに、メディアの中でスペイン人移住女性表象について考察を行い、メディアの報道により移住女性イメージが強調することで、家庭での位置や伝統的な「妻」としてのモデル、扶養される私的空間での受動的な存在として現れると指摘し、移住女性の多様な戦略を持って移住する主体としての認識が必要であることを強調する。その上、メディアによる移住女性の主体性の欠如は、移住女性を下位主体 (subaltern) として再び意味化する過程に対して批判した。

アメリカの社会学者クーリーは、マス・メディアの印刷媒体には、非常に多様な考え方や情報を広範囲に伝播できる表現の拡大、時間の制約を克服した記録の永久性、空間の制約を克服した迅速性、すべての階層の人々が接触できる伝播性、といった特徴があると主張した。このような特徴によって、人間の社会的な関係と経験を拡張させ、さらにこのような変化が政治、経済、社会、文化、教育に至るまでのすべての社会組織と、機能だけではなく社会心理にも、革命的な変化を引き起こす要因ともなる<sup>43)</sup>。従って、メディアで報道される移住女性の表象は、女性移住者のアイデンティティ形成にも一定部分に影響力を及ぼすだけではない。彼女たちに対する多数大衆の認識を形成するとともに、政策決定の土台としても作用すると考えられる。このように大衆の視線を形成し、拡散・強化させるのに重要な役割をすることが、メディアの特性であると考えられる。

松田は、ジェンダーの観点からメディア研究を再考し、ジェンダーとメディアの社会的構成に焦点を当てながら考察を行う。従来の研究では、ジェンダー・バイアスに関する研究が多かったこと指摘し、「我々が社会から切り離せられた形でメディアと関わるのではない」と述べたうえで、社会的文脈に位置付けながら社会構成過程としてジェンダーの観点からメディアを捉え直した。さらに、「ジェンダーを何らかの実態としてではなく、社会成員の日常的な実践課程として捉えるものであり、ジェンダーの実践を通じて我々の社会は構造化されている」と指摘し、メディアの社会的構成について考察し、「メディアの実践」を提示した<sup>44)</sup>。

<sup>42)</sup> M.Nash, 2006, "Rethinking Media Representations of Immigrant Women" *IEMed*, p.57.

<sup>43)</sup> 양정혜 「소수민족여성에 대한 뉴스보도 분석」 『한국여성커뮤니케이션 학회』 2007년, 53 쪽.  
(=ヤン・ジョンヘ「少数民族移住女性に対するニュース報道分析」『韓国女性コミュニケーション学会』第7号、2007年、47-77頁。)

<sup>44)</sup> 松田美佐「ジェンダーの観点からメディア研究を再考」『マス・コミュニケーション研究』48号、1996年、190-203頁。

従来の韓国における移住女性に関する研究は、社会学界、女性学界、人類学界を中心にとりわけ、国際結婚移住女性の実態及び、移住過程、移住先での定着過程のなかで発生する社会文化的な葛藤などについての量的な分析が主流である。近年において韓国社会での移住女性研究においても同様で、人文学の方法論を用いた分析の数は少ない。移住女性の表象分析は近年、マス・メディアで固定化された移住女性のイメージに関して、数は少ないものの、いくつかの研究が行われている<sup>45</sup>。しかしながら、少ない数の研究さえも、その大部分がメディアにおける移住女性のイメージ分析に留まっている。すなわちドラマとニュース報道、トークショー、娯楽および時事教養番組などで、移住女性のイメージがメディアにどのように反映されているのかに、分析の焦点を合わせている<sup>46</sup>。またこれらの研究は、テレビ番組に現れた移住女性のイメージ、あるいは家父長的なジェンダー役割が、受容者側でどのように意味化されているかを分析する研究では無い。しかし鄭（ジョン）は、従来の移住女性表象研究の限界を指摘し、「単に表現された女性イメージ (image of woman)」を分析することから、「意味を作り出す実践である『表象』としての女性イメージ (image as woman)」を分析の対象とする転換が必要であると主張し<sup>47</sup>、メディアの行うメッセージ生産の過程に注目する。鄭によると、「単に表現された女性イメージ」を分析する研究は、メディアの中に表現される女性イメージが持つ現実性と社会的な影響力に焦点を合わせ研究することを意味し、これは文化が作り出す女性のイメージとメッセージが、現実の中で実質的に生活をする女性たちの経験と一致しないこと、また、それが女性の経験を抑圧し、規制する力を発揮する、と批判を主に研究の対象とする。一方、「意味を作り出す実践である『表象』としての女性イメージ」を分析することは、女性「表象」をコード（記号）とし

<sup>45</sup> 김명혜 「황금신부를 통해서 본 민족적 정경」 『프로그램/텍스트』 제 17 호, 한국방송영상진흥원, 2008 년.

(=金ミョンヘ 『『黄金花嫁』における韓国の民族的情景』 『プログラム/テキスト』 第 7 号、韓国放送映像産業振興院、2008 年。)

이경진 국제결혼이주여성의 미디어 재현과 초국가적 정체성에 관한 연구 이화여자대학교 대학원 석사논문 2008 년 18 쪽.

(=李キョンジン 「国際結婚移住女性のメディア再現と超国家的アイデンティティに関する研究」 梨花女子大学大学院修士論文 2008 年 18 頁。)

김수정 「아시아 여성의 국제결혼에 대한 미디어 담론—한국 미디어의 재현방식을 통해」 『한국언론정보 학보』 2008 년, 통권 43 호, 386-426 쪽.

(=金スジョン 「アジア女性の国際結婚に対するメディア談論—韓国メディアの再現方式を通じて」 『韓国言論情報学報』 2008 年、通卷 43 号、386-426 頁。)

<sup>46</sup> ニュース報道、新聞記事、時事教養プログラム、娯楽番組、ドラマなど-を通じてされた移住女性表象関する本格的な研究は、이경숙 (李キョンスク 2006)、 양정혜 (ヤン・ジョンヘ 2007)、 양정혜・오창우 (ヤン・ジョンヘ、オチ・ヤンウ 2008)、 김명혜 (金ミョンヘ 2008)、 서울 YMCA 방송모니터회 (ソウル YMCA 放送モニター会 2008) がある。

<sup>47</sup> 鄭ヨンテク、前掲書、15 頁。

で見なすことである。例えば、テキスト中で表現される移住女性は、単に表現されるまま理解されるのではなく、テキストに表現されたイメージがコードとして、移住女性を「意味化」し、その過程の中で、ジェンダー、権力的優劣の関係網の中で「移住女性」の主体性を獲得すると、と言及する。

本論文においては、この鄭の指摘、「単に表現された女性イメージ (image of woman)」を分析することから「意味を作り出す実践である『表象』としての女性イメージ(image as woman)」を分析することへの転換を実践する。その際、スチュアート・ホールの概念、「意味作用の実践 (signifying practice)」によるメディアが行う移住女性の意味生産について考察を試みながら「単に表現された移住女性イメージ (image of immigration woman)」分析を含め「意味を作り出す実践である『表象』としての移住女性イメージ(image as immigration woman)」について分析を試みる。

次に、移住女性たちが個人的なレベルで行う移住の「選択」や「行為」によって形成される両社会（女性を受け入れている社会と送り出している社会）での新しい家族形態、文化、ジェンダー秩序の状況を考察するために注目する概念、「エイジェント (agent)」「エイジェンシー (agency)」について考察する。

## 2. 「エイジェント (行為体)」としての移住女性

「エイジェンシー (agency)」の語源は、ラテン語の *agere*(行う)である。このラテン語から「行う人」としての *agent*、そして「行う地位・力」としての *agency* という英語の単語が出てきた<sup>48</sup>。「代理人」「代理店」といった意味はむしろ派生的である。さらに、現在、エイジェンシー (agency) は、各学界によってその訳語が違うことが見られる。例えば、ジュディス・バトラーのエイジェンシー (agency) を竹村和子は、この語源的な意味を踏まえて「行為体」ないし「行為性」と訳している<sup>49</sup>。

Peter Brooker, *Cultural Theory: a Glossary* の翻訳『文化理論用語集』では、Agency は「行為媒体」と訳され、次のように説明されている。

<sup>48</sup> 波平恵美子編「健康・医療・身体・生殖に関する医療人類学の応用的研究」『国立民族学博物館調査報告』85、2009年、11-34頁。

<sup>49</sup> ジュディス・バトラー著、竹村和子訳『触発する言葉—言語・権力・行為体』(岩波書店、2004年) 131頁。

個人あるいは集団として、歴史の流れを方向づけたり、またそれに深く介入する時の人的行為者の役割を指す用語<sup>50</sup>。

ブルッカーは、この概念がギデنزやホールにとって重要であることを述べ、ホールは「権力によって<主体化される>と同時にこれらの権力に対抗する行動が可能な行為媒体」を提示しているのだ、というローレンス・グロスバーグの説明を紹介している。

この「エイジェント」「エイジェンシー」という概念を、グローバルな商業的性取引における「セックスワーカー」の女性のあり方に対して適用したのが青山薫である。青山は、その著書『「セックスワーカー」とは誰か』において、彼女たちの「選択」や「合意」と「構造的な強制力」との関係性を明らかにするために、ギデنز由来の「エイジェント」「エイジェンシー」という概念を用いて考察している。青山は、「エイジェント」を「社会的行為体」、「エイジェンシー」を「行為する力」と訳し、次のように説明している。少し長文になるが、本論文においても移住女性と社会との関係を考察していく上で重要な概念であるので、以下に引用する。

この本は、性サービスを「売る」女性の側のエイジェンシー（行為する力。Giddens 1984:9 および2章参照）にとくに注意を払いながら、ジェンダー格差と経済格差にもとづいたグローバルな商業的性取引についての理解を試みる。 [中略]

この本は、元セックスワーカーとして、あるいは現役のセックスワーカーとしての彼女たちの個人的な経験を、構造的な強制力との絶え間ないやり取りのなかで見極めようとする。それは、彼女たちが自分たちを拘束する可能性のある社会的条件をみずからつくりだしたり維持したりもする [傍点原文] 社会の成員（社会的行為体=エイジェント）であるということ、また彼女たちの行動と認識が、本来構造との相互行為のなかでのみ成立するのだということでもある。そこに働いているのがエイジェンシーである。そして、「エイジェンシー」という耳慣れない概念をわざわざ使うことのメリットはここにある。

私が使うギデنز由来の「エイジェンシー」、あるいは「行為する力」とは、当事者

<sup>50</sup> ピーター・ブルッカー著、有元健、本橋哲也訳『文化理論用語集 カルチュラル・スタディーズ+』（新曜社、2003年）72頁。

がそれを発揮するとき、その人の「主体性」のみをよりどころとし、自由に、みずからの意思にもとづいて行動するための力ではない。〔傍点原文〕つまり、この本での文脈では、女性たちがセックスワークを「選択」したとしても、人身取引による移住に「合意」したとしても、それがもつばら主体としての彼女たちの判断によって決まるものとは考えない。エイジェンシー概念は、もとより当事者の「選択」や「合意」を、「自分で選んだように思い込まされている」とか「合意するように仕向けられたのだ」などと客観的・事後的に判断し、いわゆる「虚偽意識」に回収して当事者の主体性を認めないものでもない。代わりにエイジェンシー概念は、ある人の判断が、彼女と社会構造との力関係によってしか成立しないという前提を強調するのである。したがって、例えばセックスワークを選択したから、みずから人身取引に「合意」したからと言って、彼女の身がその責任を負う主体であり、最悪の場合、「選択」や「合意」によって招いた悲劇も自業自得である、というところまで行き着くいわゆる自己責任論も、虚偽意識と同じように否定する。言い換えれば、この本は、エイジェンシーに注目することによって、彼女たちの行動と認識が、彼女たちのセックスワーカーとしての社会的地位と経歴、そして、彼女たちが具体的な人間関係とそのルールに向き合わざるを得ないその時その場で諸々の条件によって、否応なく構築されるものであることを認めるものである。しかし、ということは同時に、自分たちの行動と認識が時間と空間の変化につれて変化する社会的行為体（エイジェント）としての彼女たちは、構造に対してもつばら受身であるわけではなく、変化の過程に組み込まれていること自体によって、今度は構造の方を変えていく可能性を必然的に持っている、と認めることもある<sup>51</sup>。

青山はここで、グローバルな商業的性取引の中で「セックスワーカー」として働くタイ人女性たちを、「自分たちを拘束する可能性のある社会的条件をみずからつくりだしたり維持したりもする社会の成員（社会的行為体＝エイジェント）」であると同時に、「構造に対してもつばら受身であるわけではなく、変化の過程に組み込まれていること自体によって、今度は構造の方を変えていく可能性を必然的にもっている」「社会的行為体」として捉え、「エイジェンシー」を「行為する力」と訳して考察をすすめていく。

<sup>51</sup> 青山薫『セックスワーカーとは誰かー移住・性労働・人身取引の構造と経験』（大月書店、2007年）3頁。

そして、彼女たちが、出身国とホスト国の両方の文化や人間関係を資源として利用していく状態を、「バイ・カルチャー」、「文化資源の二重利用」という相互に交換可能な概念で捉え、次のように述べる。

グローバルな空間を移動する移住者は、急速で集中的な言語や権力関係や規範などの社会環境の変化におかれることによって、新しいスキルを必要とし、それを発達させる。・・・新しい環境に適応するためにこそ、出身地の文化と受入先の文化の両方から資源をくみ出すことになるわけだ。この能力は、彼女たちの強みであると同時に、どちらの文化からも疎外される感覚、あるいはどちらの文化にも属していない感覚を表しもする<sup>52</sup>。

その上で、彼女たちのエイジェントとしてのあり様を、次のように描写している。

人生の過酷な部分生き延び、必要とあれば社会の規則と期待に同調し適応し、しかも、その経験とそこで付与されたアイデンティティとつきあい、あるいは乗り越える独自の方法を想像したのである。彼女たちはその結果（そしてほとんどの場合それを意図することなく）、一人ひとりが一度にしたことはいかに小さくても、社会的行為体として社会に変化を生み出していたのである<sup>53</sup>。

ここで、この Agent, Agency という概念を、ギデنز自身はどう使っているのかを検証し、どのような訳語がふさわしいのか、検討する。

人間であることは、エイジェントであるということであり — 全てのエイジェントが人間であるとは限らないが — エイジェントであることはパワーを持つことである。このきわめて一般化された意味での「パワー」は、「(ものごとを変える) 変成力(transformative capacity)」、つまり、所与の一連の出来事に、何らかの形でそれを変えるために介入できる能力 (capability) を意味している<sup>54</sup>。

---

<sup>52</sup> 同書、92 頁。

<sup>53</sup> 同書、41 頁。

<sup>54</sup> Anthony Giddens, 1985, *The Nation-State and Violence*, Polity Press, p.7.

エイジェンシーは、人々が何かをする際の意図を指すのではなく、まず第一に、それらのことをする能力 (capability) を指し示している。(それが、エイジェンシーがパワーを含意する理由である。参照：オックスフォード英語辞典の「エイジェント」の定義「パワーを行使する、あるいは効果を生み出すもの」)。エイジェンシーは、個人は、所与の一連の行為のどの段階においても異なる行動ができたという意味で、個人を実行者とする出来事に関わるものである<sup>55</sup>。

ギデنزは、人間であることはエイジェントであることであり、「エイジェント」であることは「パワーをもつこと」である、と端的に述べ、それを「(ものごとを変える) 変成力 (transformative capacity)」、「出来事を変えるために介入する能力」と説明している。そこで、本論文では、「エイジェント」を、このような力をもった「行為体」と訳す。そしてこの「エイジェント (行為体)」は、「人間であることはエイジェントであることだが、すべてのエイジェントが人間であるというわけではない」、という但し書きがあるように、人間とは限らない。人間ではない形成物がエイジェントになることもあることが分かる。また、エイジェントのもつ「物事を変える力」「介入する能力」の出来事への関わりを表す「エイジェンシー」を、「行為作用」と訳す。

ギデنزにとってエイジェンシーの概念は、フーコーが行った主体の脱中心化に対して、歴史に主体を取り戻すための重要な概念でもある。

フーコーの歴史は、活動的な主体がまったく存在しないという傾向がある。エイジェンシーが切り離された歴史である。フーコーの分析に現れる個人は、自らの運命を決定する力をもたないように見える<sup>56</sup>。

本論文では、以上のように、歴史における主体的行為への注目を促す「エイジェンシー」概念の重要性を踏まえつつ、移住女性を「エイジェント (行為体)」として、そして彼女たちの力が出来事に及ぼす作用を「エイジェンシー (行為作用)」として論じていく。また、以下の論述では、両概念は、訳語を省略して、「エイジェント」「エイジェンシー」と記す。

---

<sup>55</sup> Anthony Giddens, 1984, *The Constitution of Society*, Berkeley: University of California Press, p.9.

<sup>56</sup> Anthony Giddens, 1987, *Social Theory and Modern Sociology*, Cambridge: Polity Press, p.98.

## 2-1. エイジェントとしての移住女性研究（先行研究を中心に）

一般的にこれまで経済的な側面から、女性移住の理由は説明されてきた。それは前述したように、新自由主義のグローバル化による現象として、国境を越える人の移住が現れたことに端を発する。なかでも送出国と受容国の間に行われる移住の労働を、国境を越える資本と労働力の移動と関連して、マクロな分析を行ったサッセンの研究は代表的なものとして挙げられる<sup>57</sup>。しかし近年において、女性による移住には多様な理由があり、男性と異なる移住の形態が見られていることが注目され、移住女性を経済的な活動人口、政治的な行為者と見なし、その移住経緯と活動において、国際結婚移住を含めて分析されている<sup>58</sup>。移民の研究において女性が注目を浴びるようになったのは、これらの研究が女性移住のエンパワーメントという実践的関心と結びついており、女性移住をマクロな構造に受動的に反応する存在ではなく、主体的に行為する行為体として分析し、研究することであると、上杉は指摘する<sup>59</sup>。さらに Tacoli は、移住においてジェンダーは大きな影響を与えていたにも関わらず、女性移住には近年、一般的な移住論議の枠組みで議論されていると、指摘しながら、フィリピン人の移住の動機が、経済的な理由を含めて、人生の新しい経験または、自分の人生の開拓の手段として、移住を決心しているとエイジェントとしての移住女性について述べる<sup>60</sup>。さらに Kofman は、女性による移住の研究においては、女性たちを家族、民族、階級などの複雑な関係のなかで考察することが重要であると、主張する<sup>61</sup>。これらは社会学界で行われてきた個人と構造の関係性において、女性移住が扱われていることを示している。例えば、家族と社会の繋がり、あるいは社会組織などを分析することで、移住の過程や定着過程を説明しようとする関係理論がある。このような家族を中心とする世帯の内部関係と、女性移住の関係理論は、移住が世界構造の中で決定される構造的な理論と、個人の決定によって移住するという行為者論の間を統合しようとする立場から、研究が開始されている<sup>62</sup>。

<sup>57</sup> S.Sassen, 1988, *The mobility of Labor and capital: A Study in International Investment and Labor*, N.Y: Cambridge University Press.

<sup>58</sup> Sassen(2002), Hochschild (1997),Piper and Roces(2003),Constable(2003)

<sup>59</sup> 上杉妙子「家事労働移民研究の現在—女性移民の主体性をめぐって」原ひろ子監修『ジェンダー研究が拓く地平』（文化書房博文社、2005年）243頁。

<sup>60</sup> Cecilia Tacoli, 1999, "International Migration and the Restructuring of Gender Asymmetries: Continuity and change Among Filipino Labor Migrant in Rome," in the international Migration Review. 33(3), pp. 658-682.

<sup>61</sup> E.Kofman, et. al., 2001, *Gender and International Migration in Europe: Employment, Welfare, and Politics*, London and N.Y: Routledge.

<sup>62</sup> 설동운 (ソル・ドンウン)、前掲書 (2000年) 28頁。

これらの研究は、女性移住が移住を実践する行為者であるにも関わらず、移住女性の受動的な戦略や彼女たちの欲望が無視されてきた。しかし小ヶ谷の研究には、世帯 (Household) 戦略が負担となって過酷な労働条件に耐える傾向が強いという通説から見えてこない、世帯戦略的への対応と個人的動機のあいだで、バランスを巧みにとる女性たちの姿が現れた<sup>63</sup>。例えば、夫の反対にも関わらず「海外へ行ってみたかった」と言う理由から、夫には経済的なサイドライン (副収入) を提案し説得し、クウェートに出稼ぎ労働に出た女性の事例があげられる。ここでは夫を経済的にサポートするというジェンダー規範を提示することで、夫を戦略的、主体的に利用し、海外移住といった自分自身のライフサイクルとバランスをとることができる女性の姿が描かれる。

近年の移住女性の研究の中にも、移住女性を「バイ・カルチャー」、「文化資源の二重利用者」のように、母国と移住国の間を往来する積極的な行為者として見る研究が現れ始めた。강현주(カン・ヒョンジュ)はこれらの研究によって、長年の間支配的だった「同化 (assimilation)」の概念が批判され、それに代わり「越境移住(transnational migration)」という概念が登場した、と指摘する。この概念によると、移住者は移住先と母国の間に切断されるわけではなく、両方の関係性を維持しながら、トランスローカルな方式を用いて、定住先で生活している。つまり「越境移住」概念は、一つ以上の民族や国家を越え、進行される過程を指す。さらに、グローバリゼーションの進行の中で、変貌しつつある文化論理を考察するうえでもっとも重要な意味を持っている。例えば、移住女性たちは移住先で生活しながら経験した様々なことを、母国の家族や友人などに手紙やメールを通じて連絡したり、家族に送金したり、物を送ったりすることを通じて、母国と移住先の間にはトランスナショナルな社会、経済、政治的な紐帯を形成し、それを維持する<sup>64</sup>。

「越境移住」の概念は、小ヶ谷の研究でも明らかになった。小ヶ谷の研究によると、女性による海外出稼ぎという行為を通じて、グローバルな場に参入することで、ローカルな文脈において比較的曖昧な形で浸透していたジェンダー規範や役割が立ち上がり、それが持続していくプロセスとして理解される。今日の女性の単身移動は、反復や中断、あるいは行き先の変更といった形を取り、送り出し側と関係性が切断することがないと指摘する。そしてこうした女性による国際移動には、必然的にローカルな文脈における様々な意味付

<sup>63</sup> 小ヶ谷千穂『『移住労働者の女性化』のもう一つの現実—フィリピン農村部送り出し世帯の事例から—』伊豫谷登士翁編者『経済のグローバリゼーションとジェンダー』(明石書店、2001年) 163-186頁。

<sup>64</sup> 강현주「국제결혼이주여성 모국문화 표출 유지욕구와정체성에 관한연구」2008년. (=カン・ヒョンジュ「国際結婚移住女性母国文化表出・維持欲求とアイデンティティに関する研究」、2008年)

け、評価が付与されている。これは、グローバルとローカルという区分がもはや明確な意味を持たなくなり、移住女性たちの生活様式や経済活動がすでに、ローカルであると同時にグローバルであるという、まさに今日のグローバリゼーションそのものの有様を示している、小ヶ谷は述べる<sup>65</sup>。また임안나 (イム・アンナ) は、統一教を通じて結婚したフィリピン人女性たちのネットワークには、私的、情緒的な連帯感が現れることに注目し、辻本の研究でも、移住者は移住先で定着しながら、母国との関係を継続的に維持するだけではなく、発展させていると主張する。さらに国際結婚を通じて、韓国社会で生きているフィリピン人女性たちは、韓国社会でフィリピン人女性同士によるネットワークを形成し、連帯的な自助グループを形成していると、指摘する<sup>66</sup>。

金ヒョンミなど女性学者は、移住女性を多様な背景と動機があり、自分の生の方向性を決定する「積極的な行為者」として解釈する研究が行われている<sup>67</sup>。例えば、정순희 (鄭スンヒ) は、異なる移動経緯を通じて韓国に移住した 6 人の移住女性のインタビュー調査を通じて、差別的で、不平等な政治経済的な背景と社会文化的な環境の中で、移住女性たち自身が自らホスト社会に影響を与え、条件を改善しようとする主体的な意思と力量とは何かについて、考察を行った。鄭 (ジョン) の研究によると、移住女性たちは自らエンパワーメントすることが明らかにされている。彼女たちは、言語と意志疎通を克服するために、独学で韓国語を学び、地域教育プログラムに参加することで、将来的に韓国社会で必要な存在として役割を果たすために必要なスキルを磨いている。これは地域住民との関係においても重要な部分である。彼女たちにとって新しい社会での不安は、コミュニケーションの欠如であることを自ら認識し、エンパワーメントしていた。また家庭内のケア労働を上手くこなす事で、夫の信頼を得ることができ、家庭内の発言や自己領域を拡大していることを明らかにした。さらに移住女性同士のネットワークの形成から、相互支持網を形成していることを明らかにし、国際結婚移住女性は、生の決定権を持つ行為の主体者として、自分の夢を持って積極的に自分の生を開拓するために結婚移住を選択した移住女性であることを強調する<sup>68</sup>。

이태옥 (李テオク) は、移住女性たちの社会的な支持網 (Social Support Network) を中心

<sup>65</sup> 小ヶ谷千穂、前掲書 (2001 年) 161-186 頁。

<sup>66</sup> 辻本登志子「ディアスポラの主体形成のための移住女性の抵抗と戦略：韓国に移住したフィリピン人女性の経験を中心に」韓国聖公會大学校一般大学院、2006 年。

<sup>67</sup> 金ヨンオク編『国境を越えるアジア女性たち』(梨花女子大学出版部、2009 年)

<sup>68</sup> 정순이 「국제결혼 이주여성의 삶에 관한 탐색적연구」 순천양대학교 행정정보대학원 2007 년 (=鄭スンヒ「国際結婚移住女性の生に対する探索的な研究」2007 年)

に、韓国の靈光（Yeonggwang）での国際結婚移住女性の主体性について研究を行った。李の総括によると、社会的な支持網（Social Support Network）とは、人は他人と社会的相互関係を通じて社会的な欲求を充足させ、基本的な欲求充足のための必要な資源を得る過程の中で、相互間かつ具体的に提供される関係を意味する。またこの相互関係が持続的にサポートを続けることで、日常的に「生」に対する対処能力を強化させる人々の構成集団を形成する。このような社会的支持は個人と社会的関係を通じて、身体的、物質的、情緒的欲求を解決するための行為を意味する。李の韓国の靈光（Yeonggwang）地域の国際結婚移住女性たちのインタビュー調査では、従来考えられてきたように、移住女性たちは経済的な理由や家族の生計を助けるために、勧誘されて移住を決心したわけではなく、むしろ移住の理由は、「生の質を高めるために」、であったことを明らかにした。実際移住女性たちは、韓国社会で国際結婚し、働きながら自分の存在感や社会的地位を高めようとする。また、移住女性たちは夫と婚家と関係において肯定的な関係が現れた。例えば、舅姑と密接な関係の中で親密感が存在する。舅姑は息子の人生と共にしてくれる有難い嫁として認め、移住女性たちは夫の不足した経済能力とコミュニケーションの問題解決などを舅姑に頼る。このように移住女性たちは家族間の支持網を形成していく。さらに靈光（Yeonggwang）地域で運営している靈光移住女性センターは、移住女性が積極的に参加し、地域住民と交流を通じてお互いに支持網を形成していることが分かった。このように、国際結婚移住の出身国の経済的、文化的背景、女性の地位、国際結婚の前段階と国際選択理由などから、出身国への理解と移住女性たち「生」について向き合う姿勢から行為の主体者として自己アイデンティティが確立されている、と説明する<sup>69</sup>。

ここまでエイジェントとしての移住女性に関する先行研究を中心に考察を行ってきた。結果として、現在の移住女性の動機は多様化され、社会的・文化的文脈のなかで、女性が移住することに付与される意味合いも異なる。また移住女性たちは、社会的支持網を形成し、その関係の中で行為する「エイジェント」、「バイ・カルチャー」、「文化資源の二重利用者」であることが注目されている。しかしこれらの研究の多くは、対象を移住労働者共同体、国際結婚女性たちの母国との繋がりの方、ネットワークによる「共同体」に限定した研究であった。

---

<sup>69</sup> 이태옥 「국제결혼 이주여성가족과 사회적 지지망 연구-영광지역을 중심으로」 광주대학교 사회복지전문대학원, 2006년 49-68 쪽 (=李テオク 「国際結婚移住女性と社会的支持網研究」 光州大学社会福祉専門大学院, 2006年, 49-68 頁。)

### 3. グローバリゼーション進行と「移民の女性化」

グローバリゼーションとは何か。伊豫谷によると、「グローバリゼーションとは、政治や経済あるいは文化的な諸活動が国境を越えて展開し、ナショナルな領域によって画されてきた制度や機構、習慣や規範、生活スタイルや娯楽などの諸様式を変化させ、近代において作り出された領域性の変型・解体してきている状況を捉える語として用いられる。したがって、グローバリゼーションは単に越境的な活動だけを指すのではない。むしろこうした活動が、近代国民国家の制度や機構からその中で生活する人々の習慣・規範や文化とよばれるものまでを変型させてきている状況を意味している。」と、述べる<sup>70</sup>。

またウルリッヒ・ベック (Ulrich Beck) は『지구화의 길 (グローバリゼーションとは何か Was ist Globalisierung?)』のなかで、グローバリゼーションと相互関連した三つ用語、グローバリズム (Globalismus)、グローバルな性格 (Globalität)、グローバリゼーション (Globalisierung) を分けて説明し、グローバリズムについては、世界市場支配のイデオロギーでないし、新自由主義イデオロギーである、とする。ベックによればこのグローバリズムは、単に因果的で経済主義的な接近法として世界化の多次元性を一つの経済的な次元で説明し、一面的に思考される経済次元で縮小させる。また生態的、文化的、政治的、市民社会的グローバルなその他のすべての次元が、世界市場体制下に従属していることを表現することであると指摘する。そのうえで、グローバリズムイデオロギー的核心は、政治と経済の区分という従来の近代の根本的な区分を清算するという点にあることを強調する。一方グローバルな性格については、技術、媒体、思考、旅行、市場そして、金融などによってネットワークを形成した世界の実際的で、取り返しできない「現状態(Ist-Zustand)」を意味する。これに対してグローバリゼーションとは、国民国家とその主権が、超国民的な行為者、その行為者らの権力機会、方向設定、アイデンティティ、ネットワークを通じて、互いに疎通し、繋がる過程を意味する。

一方ベックは、新自由主義的に推進される過程は、グローバリズムという経済主義的イデオロギーであると、批判する<sup>71</sup>。筆者は、本稿において、グローバリゼーションの進行と女性の国際移動を考察する際に、新自由主義的グローバル化は欠かせない概念であると考え

<sup>70</sup> 伊豫谷登士翁『経済グローバリゼーションとジェンダー』(明石書店、1999年)

<sup>71</sup> 울리히 벡 (Ulrich Beck) 저, 정만영역『지구화의 길 (Was ist Globalisierung?)』거름, 2007년 (=ウルリッヒ・ベック (Ulrich Beck) 著, 鄭マンヨン訳『グローバリゼーションとは何か (Was ist Globalisierung?)』2007年)

えている。特に開発途上国が採用した新自由主義は、女性の国際移動に直接的に関連している。ハーヴェイは新自由主義について、「強力な私的所有権、自由市場、自由貿易を特定とする制度的な枠組みの範囲内で個々人の儀行活動の自由とその能力が無制約的に発揮されることによって人類の富と福利が最も増大する、主張する政治経済的实践の論理である。」と記述し、「1970年以降、新自由主義は、政治及び経済の实践と思考の両方において新自由主義への発揮した転換がいたるところで生じはじめ、新自由主義化のプロセスは多くの『創造的な破壊』を引き起こした」と、指摘する<sup>72</sup>。

さらにハーヴェイは新自由主義を、経済グローバリゼーションの下で先進資本主義諸国が採用した新たな国家体制あるいは政治制度と捉えるのではなく、途上国・旧社会主義諸国を含めて展開される一個の世界体制、現代資本主義の一時代と捉えている。さらに途上国・旧社会主義諸国が採用した新自由主義を、独自の内的要因から理解しようとした。ハーヴェイは、資本グローバリゼーションによって出現した開発主義国家体系下で、資本蓄積の危機打開のために新たな資本蓄積の方法として新自由主義が採用されたと、捉えている<sup>73</sup>。

この開発途上国の新自由主義採用は、とりわけ女性に大きな影響力を行使している。つまり、新自由主義グローバル化は男性中心的経済秩序とイデオロギーを維持、あるいは拡張することで、従来の位階秩序に加えて、よりジェンダー権力関係が強化される。女性たちは国際化した分業体系を通じて仕事を稼ぐことができるものの、危機の瞬間には最初に労働市場から退出される。確かに女性たちの雇用は、新自由主義のグローバル化によって拡大した。しかしそれに伴い女性は、男性よりさらに劣悪な条件で、安い賃金で搾取されることになった。そして国際的な資本は、貧困を解決するために移住した女性たちもまた同様に、搾取の対象として取り扱っている。その端的な例が、性売買労働者としての搾取である。グローバル化によって、国際労働分業が活発になる一方で、女性たちが安い値段で海外に売られ、女性は人身売買、暴力、奴隷化の犠牲者になる。民営化、規制緩和といった新自由主義のグローバル化は、女性により一層大きな再生産労働の負担を負わせた。教育と医療など各種社会的再生産領域らが私有化されることで、再生産労働は家庭内に集中され、女性は再生産労働領域において「主役」になった。これは、マリア・ミースのい

---

<sup>72</sup> デヴィッド・ハーヴェイ著、渡辺治訳『新自由主義—その歴史的展開と現在』（作品社、2007年）9-11頁。

<sup>73</sup> デヴィッド・ハーヴェイ著、渡辺治訳、前掲書（作品社、2007年）

う労働力の「主婦化」である<sup>74</sup>。ミースは経済には、目に見える経済と目に見えない経済があって、目に見えない経済にはサブシステムがあり、いわゆるインフォーマルセクターのなかの主婦である女性、世界各地のサブシステム農民、生存ために働く南の人々などがあると、指摘する。さらに国際分業による世界経済の「開発」が第三世界の女性に与えた影響について、女性が最適労働力であるのは、女性たちが今日の普遍的な労働者ではなく、女性の労働は使用価値においても商品生産においても明確ではなく、「自由な賃労働」としては現れず、「所得創出活動」と定義され、従って男性労働者よりもはるかに低い価格で取引される「主婦」であると定義されているからであると、指摘する。さらにミースは、国際資本のコストを下げるために女性、とりわけ開発途上国の女性たちを再発見しなければならず、商品に対するコストを下げるために、資本主義の中心にいる女性を再発見し、新自由主義のグローバル化の中で「主婦」としての女性の仕事が将来急激に増える可能性を指摘する。さらに「事実上構造化された二組の女性たちの類似性をカモフラージュするためにいっそうあからさまになった人種差別主義的主張が使われている。西欧の消費者・主婦はもっと消費し、もっと多くの白人を生むように奨励されているのに、植民地の生産者、『主婦』はもっとも多く、もっとも安く生産している」<sup>75</sup>と述べ、国際資本が北の女性たちと南の女性たちを、支配と被支配関係の両端に位置付けている。言い換えれば、今日の国際分業によって女性は二極化されているのだ。つまり第三世界の女性たちが、第一世界の労働力を求めて移動する過程で現れる現象でもある。

実際に近年における韓国社会では、韓国人女性はこれまでとの比較のうえで、「主婦」ではなくなった。彼女たちは、犠牲の場と見なされている結婚という枠内で、もはや生きようとはしない。そのような韓国人女性の代理になっているのが、第三世界から来た国際結婚移住女性である。結局新自由主義のグローバル化は、女性労働力を「再生産の一時的な責任者」として、「新自由主義が要求する柔軟な労働力」と規定し、これは「貧困の女性化」に端的に現れている。雇用の不安定化は、女性労働力に対する性的搾取と労働力搾取を強化する。そして結果的にこのような女性に対する搾取の強化は、女性セクシュアリティに対する持続的な抑圧に繋がる。今日における貧困と不平等を量産する新自由主義グローバル化は、構造化された性差別イデオロギーと結合し、女性によりいっそう不利をもた

---

<sup>74</sup> マリア・ミース著、奥田暁子訳『国際分業と女性化—進行する主婦化』（日本経済評論社、1997年）  
Maria Mies, 1986(1998), "Hoesewifization International: Women and the New International Division of Labour," *Patriarchy and Accumulation on a World Scale*, London: Zed Books, pp.112-144.

<sup>75</sup> Maria Mies, 1986(1998), pp.112-144.

らしている。特に開発途上国における新自由主義グローバル化によって女性たちは、国内における多国籍企業の安価な労働力として、または、よりよい労働条件を求め国内女性たちを海外労働の場へ移住した。これが「移民の女性化 (feminization of migration)」である。「移民の女性化」は、アジア各国で多く見られるようになり、特にグローバリゼーションの進展の中で、国境を越えた人の移動はその重要な問題の核をなしている。なかでも近年の女性の国際移動の増加は、移民研究において関心を集めている。特に相対的に貧困状況にある開発途上国の労働者たちの第一世界への労働移民は、新しい国際大移動と呼ばれる現象となった。とりわけアジア地域にはその傾向が強く、特に 1990 年代から飛躍的な増加が見られた。そのアジア地域における特色として、男性移住労働者の家族としてではなく、女性が単独で国際移住していること、家事労働者と再生産業に集中していること、アジア地域の送出国と受入国ともに性別化された移民労働政策や計画を行ってきたことがあげられる。

前述のように、1970 年代以降のグローバリゼーションの進行と、開発途上国や旧社会主義を巻き込んだ世界的な労働市場の統合と共に発生した「移民の女性化」のなかで、再生産労働領域の市場化が進行し、女性の家事労働力の受容が高まった<sup>76</sup>。その結果、開発途上国の女性たちは、世界的に出稼ぎ労働者として移動し、再生産労働領域の担い手になった。一方グローバリゼーションの進行中で「移民の女性化」は、多様な女性による移住形態を作り出している。なかでも近年のアジア女性たちにもっと多く見られる移住形態は、単身で移動する移住形式の結婚移住である。この移住の多くは「国際結婚」の形式をとる。Piper によると、従来の国際的な結婚に関する多くの研究は、一般的に米国アメリカまたはヨーロッパの中流のカップルの経験から、日常生活の文化的な面を中心に研究が行われてきたが、近年では、アジア女性による国際結婚の実態を分析する研究が多く行われている<sup>77</sup>。

嘉本は「国際結婚」という概念が、日本産であり、「International Marriage」に相当する言葉は、西洋社会にないと指摘する<sup>78</sup>。国際結婚は「Cross-cultural marriage」と表記し、「国」よりも「文化」、「民族」の違いが重要である、という視点から分析を試みる。また「International marriages」より、異文化結婚として「Intercultural marriage」、異民族・人種間結婚と意味と

<sup>76</sup> 伊豫谷『グローバリゼーションは何か』（平凡社、2002年）

S.Sassen, 2002, "Global Cities and Survival Circuits" in Barbara Ehrenreich and Arlie Hochschild, (eds.), *Global Woman*, N.Y: Metropolitan Books, pp. 254-273.

<sup>77</sup> Nicola Piper, 2003, "Wife or Worker? Worker or Wife? Marriage and Cross-Border Migration," in *Contemporary Japan, International Journal of Population Geography* 9, pp.457-469.

<sup>78</sup> 嘉本伊都子『国際結婚の誕生<文明国日本>への道』（新曜社、2001年）

して「Interracial marriage」という表現の方が、妥当であるという主張もある。両者を含めて、異文化・異民族結婚「Intermarriages」と表現する場合もある<sup>79</sup>。筆者は、本稿において開発途上国からの移住女性たちが移住の手段の一つとして選択する「国」、「異文化」、「異民族」間の総合的な婚姻の意味として「国際結婚」という用語を採用する。

#### 4. 国際結婚、移住女性

国際結婚「移住女性」の「移住女性」という用語について小ヶ谷千穂は、女性による国際移動を、「移民女性」(immigrant women)、「移住女性」(migrant women)「移住労働者女性」(migrant women workers)と、区別して用いているが<sup>80</sup>、韓国では、外国人女性労働者、国際結婚、生産業従事の外国人女性の三種をまとめて「移住女性」と呼んでいる<sup>81</sup>。本稿では、主に韓国人男性と結婚したアジア人女性や、移住女性労働者を研究の対象にしているため、本来であれば「長期滞在」ないしは「定住・永住」の意味を含める「移民女性」を使用すべきである。しかし筆者は、国際結婚女性を移住労働者として解釈し、広い意味で捉える必要があると考えるため、あえて「移住女性」という語を使用する。

国際結婚は、例えば「写真花嫁」、「戦争花嫁」や駐留軍の兵士と結婚したケースが、古くから見られてきた。近年の国際結婚移住女性たちの研究は、親密性の領域を商品化することで利益を得る、グローバルな資本主義体制と国際結婚の増加に注目し始めている。国家間の経済的な差異を、私的次元の異性愛的結合という結婚制度にも適用することで、国際結婚は第三世界からの女性移住を促進させていると、指摘される<sup>82</sup>。新自由主義のグロー

<sup>79</sup> Desmond Cahill, 1990, *International Marriage in International Contexts: A Study of Filipina Women Married to Australian, Japanese and Swiss Men*. Quezon City: Scalabrini Migration Center.

<sup>80</sup> 小ヶ谷千穂「移住女性研究の展開と課題：アジアにおける移住女性研究のために」お茶の水社会学研究会『Sociology Today』11号(2000年)98-107頁。

<sup>81</sup> 足立真理子・木村涼子・熊安貴美江・伊田久美子編『フェミニスト・ポリティクスの新展開——労働・ケア・グローバリゼーション』(明石書店、2007年)400頁。

<sup>82</sup> Castles and Miller, 2003, *The age of Migration: International population movement in the modern world*. 3<sup>rd</sup> edition. NY: Palgrave Macmillan.

Nicola Piper and Mina Roces, 2004, "Rights of foreign Workers and the Politics of Migration in South East and East Asia," *International Migration*. 42(5), pp. 71-97.

Nicola Piper, 2003, "Wife or Worker? Worker or Wife? Marriage and Cross-Border Migration," in *Contemporary Japan*, *International Journal of Population Geography* 9, pp. 457-469.

R.S.Parreñas, 2001, *Servants of Globalization: Women migration and domestic work*. Stanford University.

B.Ehrenreich & A.R.Hochschild, (eds.), 2002, *Global Women: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*. NY: Henry Holt and Company.

HyunMee Kim, 2006, "Global Gender Politics of Cross-Border Marriage: With a Focus on Marriages between Korean Men and Vietnamese Women", *Economy and Society*, vol.70, Korean Association of Industrial Sociology, p.11.

バル化の規制緩和は、「結婚ビジネス」を登場させた。国際結婚仲介業者の存在は、「国際結婚の商品化」及び「女性の身体の商品化」を、社会問題として認識させた。これは女性に限った独特な移住形式である。国際結婚仲介業社は、インターネット上に国際結婚を希望する女性たちの顔付き写真や身体とプロフィールを公開することで、国際結婚の商品化を加速させる。いわゆる「メールオーダー・ブライド (mail order bride)」である。メールオーダー・ブライドの研究は 1980 年代後半に出現し、移住の女性化と共に行われた。Chun の研究では、アジア系女性に対する白人男性の「オリエンタリズム」的な幻想、リベラルでキャリア志向のアメリカ女性を嫌い、伝統的な古きよき価値観を身につけたアジア系女性を好むアメリカ男性の志向、家父長制維持を希望する男性の意図、国際結婚斡旋の仕方、女性の身体を巡るセクシュアリティ、結婚移住の主体性といったテーマが検討されてきた<sup>83</sup>。김현미 (金ヒョンミ) もまた同様のことを指摘しながら、西洋の女性とアジア女性を対比的に比較することで、アジア女性に対する偏頗的なイメージをけしかけることであると、述べる<sup>84</sup>。김수정 (金スジョン) による研究は、従来の移住女性実態及び移住過程と関連した量的な研究方法とは異なるメディア分析方法を用いて、移住女性の国際結婚について研究を行った数少ない事例である。金の研究では、国際結婚仲介業社が運営する韓国国内のインターネットサイト上で女性表現内容について、中国、ベトナム、フィリピン、モンゴル、ロシア、ウズベキスタンなどの国家別に分け、分析を行った。例えば中国女性(朝鮮族)は、「韓国人と皮膚の色が同じで、韓国語が話せて、韓国文化に同化しやすい、また、結婚することによって、中国語が話せる『秘書』を持つことになる」と、表現し、ベトナム人女性に対しては「従順」で、「純潔な」イメージを強調し、フィリピン人女性に対しては、「母性愛」が強く、「宗教的な理由で離婚しない」ことや、英語が話せることで子供の教育に役に立つことを強調した。さらに、ウズベキスタンの女性の「身体的美しさ」を、モンゴルの女性は年寄りの「介護が好きで上手」ということを強調するなど、国際結婚仲介業社による女性の商品化の深刻化を強調する<sup>85</sup>。

<sup>83</sup> C.Chun, 1996. *The Mail-Order Bride Industry: The Perpetuation of Transnational Economic Inequities and Stereotypes*, 17 U.P.A.J. International Economy. L, pp.1155-1187.

<sup>84</sup> 김현미 『글로벌시대의 문화번역』 도서출판, 2005 (=金ヒョンミ 『グローバル時代の文化翻訳』 図書出版, 2005 年, 80 頁)

<sup>85</sup> 김수정 「아시아여성의 국제결혼에 대한 미디어 담론-한국 미디어의 재현방식을 통해」 『한국언론정보 학보』 2008 年, 통권 43 号, 386-426 쪽.  
(=金スジョン 「アジア女性の国際結婚に対するメディア談論-韓国メディアの再現方式を通じて」 『韓国言論情報学報』 2008 年, 通巻 43 号, 386-426 頁。)

そのほか「国際結婚移住女性の商品化」を含む、移住女性の人権侵害領域の実態についての韓国での研究の多くは、韓国政府関連機関で行われている。例えば、韓国女性開発院の女性移住労働者人権報告書では、移住女性性売買の実態調査などをおこなっている。

Piper は女性の移住目的について、労働のためなのか、それとも結婚のためなのか、曖昧な面が見られると指摘する<sup>86</sup>。つまり女性たちは労働を目的に移動した場合でも、ホスト国の男性と結婚するケースも頻繁に起こっており、そのために女性の移住には曖昧な境界線がある、と述べる。さらに홍기혜(紅ギヘ)は、その理由について、結婚による定住が他の定住方法より容易であると指摘する<sup>87</sup>。つまり、単身の移住女性が労働を目的に移住した場合、移住先での定住は労働者としてより、結婚移住が素早く確実に定住し易いためである。

韓国における「国際結婚移住女性」に関する研究は、1970年代の駐留軍の兵士(米軍)と結婚した韓国人女性のアメリカでの生活と、アメリカ文化に適応問題を扱った研究が主であった<sup>88</sup>。1980年代には、韓国人女性が日本の農村の花嫁になる現状について研究が行われた。これらの研究では、移住女性の実態把握及び適応過程に対する問題点を指摘することに焦点が合わされていた。しかし韓国社会は次第に移住女性の送出国から受入国へと変貌した。2000年代からは、開発途上国から国際結婚を通じて移住してくる移住女性の増加により、従来の「単一民族」と言われた韓国社会は、多国籍、多人種で構成される多文化社会へと変貌した。特に移住女性による国際結婚は、「多文化家族」を生み出し、韓国の家族構造を変容させた。このような社会の変化に伴い、移住女性の人権問題を含む様々な問題が浮上し始めた。これらの問題をメディアが取り上げることで、よりいっそう社会的な問題となり、各移住女性支援団体や社会福祉学、社会学の観点から、韓国社会の国際結婚移住に関する実態調査や、事例調査を通じて問題点及び政策提案が行われた。特に農村地域の移住女性を中心とする研究が主流となった<sup>89</sup>。また国際結婚及び移住問題に関する研究は、韓国社会内の移住者現状及び韓国社会で経験する文化的な葛藤を人種、階級的な側面から分析された。2000年代以降の国際結婚移住女性に関する具体的な研究内容は、国際結

<sup>86</sup> Nicola Piper, (2003), pp. 457-469.

<sup>87</sup> 홍기혜 「중국조선족 여성과 한국남성간의 결혼을 통해 본 이주의 성별정치학」 이화여자대학교 여성학과 석사학위 논문, 2000년  
(=紅ギヘ「中国朝鮮族女性と韓国人男性間の結婚を通じてみた移住の性別政治学」梨花女子大学校女性学、修士学位論文、2000年)

<sup>88</sup> 박종삼(朴ジョンサン 1982)、송성자(ソン・ソンザ 1978)

<sup>89</sup> 이금연(李グンヨン 2003)、이윤혜(李ユンヘ 2004)、박경태(朴ギョンテ 2001)、한건수(韓ゴンス 2003)

婚移住女性に関する多様な研究が行われ始めたが、なかでも女性学界、社会学界を中心に、主に国際移住女性の主体性に注目し、国際移住をジェンダー観点から検討する研究が行われた<sup>90</sup>。これらの研究では、「移民の女性化」によってジェンダー化された移住の過程の多様性に注目し、社会的、文化的文脈から、国際結婚を含む移住者に関する分析の必要性が提示され、国際結婚移住女性の実態及び、移住過程、移住先での定着過程のなかで発生する社会文化的な葛藤と協調、韓国社会文化適応関連へと研究が進展し、注目を集めている。

---

<sup>90</sup> 김영란(金ヨンラン 2006)、김은실(金ウンシル 2004)、이수자(李スザ 2004)、홍기혜(紅ギヘ 2000)

## 第1部 受入国、韓国における移住女性とその表象

### 第1章 韓国を中心に受入国の考察

#### 第1節 韓国における移住者現状

韓国は、経済のグローバル化にともない市場主義経済が大きく進展し、特に1997年の通貨危機以降、国外からの圧力の下で新自由化政策が強力に推し進められた。その結果、非正規労働者の増加、社会格差の拡大といった新たな問題が生じるようになる。このような政治・経済構造の変化を受け、韓国社会の基層は大きく揺らいでいる。とりわけ伝統的な家族形態の変容は著しく、90年代以降、急速に未婚率が上昇し晩婚化が進んだ。それと呼応するように出生率は大きく下がり、先進国の中で最低水準にまで落ち込んだ。韓国社会は、少子高齢化という人口構造の急激な変化に直面した。こうした中で、韓国社会が直面しているもっとも大きな問題は、女性が子供を産まなくなったことである。韓国の出生率は、1990年1.59から2005年には1.08へと急激に低下し、同じく社会問題となっている日本よりも下回る水準にまで落ち込んでいる。また平均的な結婚年齢も、日本と同様に、韓国でも30歳以降に結婚する人が増え続けており、2002年の場合、男性の49.6パーセント、女性の27.4パーセントが30歳以降に結婚している。春木は少子化の背景には、女性の晩婚化が進んでいることを指摘し、晩婚化の背景には、韓国社会が急速に高学歴化している点を挙げている。これは、学業を終えた後に働きはじめると、ある程度キャリアを積み、経済的な基盤が確保されるのは20代後半となるため、晩婚化の傾向が高まる。また結婚、出産後も働き続けたいと考える女性が増加しており、自分の人生設計ができないうちは結婚をしない、と考える女性が増えている。春木はこのようなことから現代韓国の家族や女性の意識の変容を述べている<sup>91</sup>。このような事態を受け、韓国政府は高齢少子化社会に備えるための対策として、外国人労働力の受入政策を積極的に検討している。特に、韓国人の配偶者として韓国社会に同化しやすいと思われる国際結婚や、文化的に同質性を保持している韓国系外国人の就業条件を緩和し長期滞在を許可する政策などで、今後の労働力不足に備える必要があるという、いわゆる「活用論」が優勢となっている<sup>92</sup>。

韓国においての外国人労働者の移住は、2003年7月に「外国人労働者雇用等に関する法律」が制定され、同法は翌年8月から実施された。これをきっかけとし、韓国に外国人労働

<sup>91</sup> 春木育美『現代韓国と女性』（新幹社、2006年）。

<sup>92</sup> ヤン・ヘウ「韓国における国際結婚移住者の現状と政策への提言」財団法人 アジア・太平洋人権情報センター、2008年。

働者が移住し始めた。もちろん外国人労働者雇用等に関する法律が施行される前から、多くの外国人労働者が存在していた。しかしその大多数は、非合法移住労働であった。さらに、90年代以降、産業研修制度を政策の柱にして事実上、外国人労働者を受け入れてきた。外国人労働者の移住は、中小零細企業における労働力不足を補完する形で進行した<sup>93</sup>。また、2007年8月24日の法務省の資料によれば、短期滞在の外国人を含めた在留外国人は100万254人にのぼる。この数字は住民登録人口の21パーセントを占めており、2006年7月に比べて151パーセントも増加している。2008年現在、外国人の数は144万人に増加している。長期滞在外国人は、72万4967人で、このうち、産業研修生をふくめた外国人労働者は56パーセントで、国際結婚移住者は11パーセント、外国人留学生が7パーセントとなっている。外国人労働者の93.3パーセントが単純労働の労働者であり、未登録移住労働者（いわゆる不法滞留者外国人）は、22万5273人である。韓国ではこのように移住労働者を含め、年々外国人による移住が増加している。また、外国人の移住は性別によってはっきり分かれていて、男性の大部分は、産業研修生や雇用許可制によって労働者として入国しているのに対して、韓国に移住する外国人女性は移住過程と職業によって三つに分類される。一つ目は、産業研修及び個人的な人脈を通して入ってきて正社員または契約社員として働く移民女性、二つ目は、結婚仲介業者、地方自治団体などを通して入ってくる国際結婚形態の移民女性、三つ目は、エンターティナービザ（E-6）を通して入ってきて性産業で働く移民女性である<sup>94</sup>。特に国際結婚による外国人女性の移住が目立つようになった。現在、韓国人男性は21カ国以上の外国人女性と国際結婚をしている。その多くが韓国で生活しながら住んでいる。前述したように2008年に結婚した韓国人の11パーセントが国際結婚であるが、なかでも、もっとも多いのは農村地域における国際結婚である。2007年には、農村地域の結婚の41パーセントが外国人との結婚が占めている。これは、結婚する農村男性の4組中1組が開発途上国から移住した女性との結婚であることを示している。このような国際結婚を通じて形成された多文化家庭の子供数も年々増加している。その数は、2010年には10万人を越える事が予想されている<sup>95</sup>。このように韓国社会は急速に多元種、多元文化社会に変化している。

韓国における国際結婚による移住女性の増加は、日本と同様に、1990年代からの農村で

<sup>93</sup> 田巻松雄・青木秀男「アジア域内の労働力移動—受入国韓国と送出国フィリピンの最近の動向と現状」『宇都宮大学国際学部研究論集』第22号（2006年）66頁。

<sup>94</sup> 韓国移住女性人権センター調査による。

<sup>95</sup> 韓国統計庁、2007年データ。

の嫁不足の解決策として打ち出された、「韓国農村男性を結婚させよう」という事業から始まる。なかでも、貧困状況にある開発途上国から国際結婚移住女性の移住が顕著となる<sup>96</sup>。開発途上国の女性たちは移住の手段として、国際結婚を選択するケースが増加している。国際結婚の増加は、潜在的な結婚人口の地域的不均衡を解決するために、女性たちを組織的かつ大規模に移動させておいて、その過程で巨額な利潤を創り出すという点で、新しい現象であると認識されている<sup>97</sup>。このように国際結婚は、経済格差のある国境を合法的に越えようとする人々にとって、戦略として重要性を帯びている。国際結婚は人種と国家、民族間の問題以外にも家父長制的な社会で女性がどのように手段化され、私有化されているのかを明らかにしている。N・コンスタブルは、国際結婚移民現象が、階級や国籍、エスニシティ、ジェンダーなどの点で自在な組み合わせを見せているのではなく、既存の、また立ち現れつつある社会、文化的、そして政治、経済的な諸要因に規定されて生じているという意味で、特定のマリッジ・スケープを形成していることを指摘する<sup>98</sup>。そのことは近年東アジアにおける国際結婚状況においても明らかである。例えば、アジアの内の特定地域から、台湾や韓国、日本の農村部などに稼ぐ女性が増加している。しかし、国際結婚を通じた南から北への移動は、決して、豊かな国の成員との上昇婚を遂げようとする個人の意思や戦略によってのみなされるわけではない。そこには、経済的な諸要因のほか、女性に期待される家事や介護を含む再生産労働の国際分野の問題や、双方の社会の内部におけるジェンダーや親族関係の変容、他者への眼差しなどが複雑に交差しあっている。

ここでは、上記の状況を踏まえた上で、韓国の中で生きている国際結婚移住女性を視野に入れ、マイノリティと社会構造の関連を問いたい。さらに、韓国社会における国際結婚移住女性の増加は、「韓国人性」に対する新たな問題を提議する。すなわち、定着と出産を意味する結婚という制度に入る移住女性の存在は、「単一民族」性を重視してきた「韓国人性」に対する深刻な問題を提議するものとして現われる。さらに、韓国における外国人移住者が大きく増え、移民社会に向けて様々な政策が積極的に模索されているのにもかかわらず、韓国社会における移住者は、「単一民族」や国益優先というイデオロギーの影響で、依然として排他的な他者として存在しているとヤンは指摘する<sup>99</sup>。

<sup>96</sup> HyunMee Kim, 2008, "Migrant and Multiculturalism," in *Journal of Contemporary Society and Culture*, pp.57-78.

<sup>97</sup> HyunMee Kim, 2006, "Global Gender Politics of Cross-Border Marriage: With a Focus on Marriages between Korean Men and Vietnamese Women", *Economy and Society*, vol.70, Korean Association of Industrial Sociology, p.11.

<sup>98</sup> Nicole Constable, (ed.), 2005, *Cross-Border Marriages: Gender and Mobility in Transnational Asia*. University of Pennsylvania Press, pp.3-7.

<sup>99</sup> ヤン・ヘウ、前掲書（2008年）

韓国社会で国際結婚移住女性に対する関心が高まり、韓国社会での定着過程で彼女たちが抱えている多様な問題、例えば、言語、経済的な貧困、教育、就職、韓国文化への適応、妊娠や出産、夫の暴力、婚家との葛藤、社会的視線、離婚以後不法滞留問題などを理解し、解決しようとする国家的政策と民間プログラムが多方面で運営され、国際結婚移住女性を含めてその家族の幸福が求められているのは事実である。また、最近になってメディア、政府、市民団体、学界で国際結婚移住女性に対する研究と議論が活発に展開している。しかしこのような活発な学術的、政策的議論にもかかわらず、韓国社会一般では相変わらず移住女性を「低出産と高齢化を解決する英雄」、「お金のために売れてきた後進国のかわいそうな女」または「韓国社会の排除された周辺部男性の性的欲求を解くために人身売買性結婚をした女性」として見るようなまなざしが蔓延している<sup>100</sup>。

韓国社会は家父長制や儒教思想が根強く残っている。同時に韓国社会の所々で、多様な形態のディアスポラ現象を感じるような多文化社会の経験が蓄積されている。しかしながら、実際には社会構成員らの多くは、生活のなかで国際結婚移住者と接触する機会をそれほど有しているわけではない。従って、社会構成員らは多くにとって、移住女性、特に国際結婚移住者に対するイメージは、メディアを通じての、間接的に理解や経験に留まっている<sup>101</sup>。またメディアを通じて、国際結婚移住女性たちに対して、新しい意味を付与しようとする作業が始まっている。それは、結婚を通じて移住した移住女性たちが、制度的な手順を踏むことによって、合法的に韓国国籍を取得することが可能であり、最終的には国家の構成員として、何よりも子供を生むことを通じ、社会の混濁性（*hibridity*）を生産する主体になるという点が強調されている。この点において、他の移住労働者とは異なる視角が必要になっている。テレビ番組制作者らは、「国際結婚移住女性」という新しい素材に注目し、ドラマ、ニュース、ドキュメンタリー、娯楽番組、時事番組などの多様なプログラムを制作し、社会構成員に向けて「国際結婚移住女性」との接し方を伝達しようとする。このようなテレビジョンの活動は、文化的象徴の見慣れない地域、民族、人物などを表象することにより、新しく編入された少数者についてだけでなく、同社会で生きている自分とは誰か、というアイデンティティについて考える機会をも提供している。このような方式で構成される多人種的・多文化的現象に対する意味は、韓国社会が人種的、民族的、単一社会の神話から抜け出して、多元化された社会に徐々に進んでいく過程の大衆文化的な

---

<sup>100</sup> 鄭ヨンテク、前掲書（2009年）

<sup>101</sup> 金ヒョンミ、前掲書（2005年）

実践でもある<sup>102</sup>。

本章では、国際結婚移住女性の存在について韓国メディアが国際結婚移住女性たちをど



図 1 移住女性たちの「生」を反映したテレビ番組：左から KBS の『미녀들의 수다 (美女たちのおしゃべり)、SBS の『일요일이 좋다 - 사돈 처음 뵙겠습니다. (日曜日が良い一姻戚始めました)』、KBS ドラマ『미우나고우나 (可愛いくとも、憎くとも)』でカジヤスタン移住女性労働者の役のエバポビエルの姿。  
出所：世界新聞

<http://www.segye.com/Articles/News/OldArticle.asp?dataid=20071118143600048>

のように表象しているのかを分析する。同時に、家父長制的な家族制度のなかで移住女性に求められるセクシュアリティに関して考察をおこなう。具体的なテキストとしては、ベトナム人女性が韓国人男性と国際結婚し、韓国社会に定着する過程を描いたテレビドラマ『黄金花嫁』を中心に、国際結婚過程における移住女性への眼差し及び、韓国の多文化政策における「多文化家族」がドラマというメディアの中で、どのように表象されているのかを考察する。また、ドラマの制作意図がどのようなものであるのか、を分析する。こ

れは、前章で考察したように、文化権力装置として大衆メディアであるテレビを理解するならば、テレビが表象する移住女性には意図された表象作りがあるためである。それは一体何なのか。これらの問題を解くことが、この章の核心となる。また、コンテキスト分析を加えることで、韓国社会の中で移住女性の現実を理解し、ドラマテキストでの移住女性表象がいかに移住女性への意味生産作用をもたらしているのか、を確認することができる。

## 第2節 韓国テレビ番組における移住女性の表象

韓国で移住者がテレビに登場するようになったのは、2003年に放映された『느낌표! (感嘆符!)』という民営放送局 MBC の娯楽番組である。この番組の中に、『아시아・아시아 (アジア・アジア)』というコーナーが設けられて、韓国に居住するアジア移住労働者らの家族対面、韓国内国際結婚家族の対面などを毎回到感動的に描き出された。以降、2005年には、国営放送局 KBS 時事番組の『러브인아시아(ラブ人アジア love in Asia)』が国際結婚家庭を本格的に取り上げた。この番組は、ディアスポラ、移住女性、混血児童などの問題に関す

<sup>102</sup> 전규찬, 2004년 「자기성찰적, 텔레비전 문화정치적 가능성」 『방송연구』 제 58호, 한국방송학회 (=全ギョチャン「自己省察的、テレビジョンの文化政治的可能性」『放送研究』第58号、韓国放送学会、2004年)

る社会的な関心を触発させた。『러브인아시아(ラブ人アジア love in Asia)』は韓国人男性と結婚した外国女性たちの人生と結婚過程を眺望する番組として、これらが結婚までの過程、また、異国生活の困難、韓国社会での編入過程、そして韓国での結婚生活にかかる期待などを見せている。

2007年には民営放送局 SBS で放送された『사돈 처음뵙겠습니다 (姻戚はじめまして)』は、番組のアンカーが韓国農村に嫁にきたアジア各国の女性を訪ねて、村の人々と国際結婚移住女性の家族らの日常を紹介し、移住女性の故郷を紹介し、両親を韓国に迎えて姻戚同士に挨拶するという内容に展開する。またこの番組は毎回別に異なる国の移住女性を選択し、その移住女性が韓国農村の大家族と地域社会内部で、成功的に定着し、さらに伝統的な家父長的価値観とライフスタイルを積極的に実践して、内面化していく存在として表象される。その代表的な意味生産戦略が国際結婚移住女性たちを韓国の故郷を「代わりに」守っている「英雄的な存在」として提示している。このよう韓国テレビ番組は、脚色されたイメージと郷愁的な韓国的文化を表象することで「孝婦」または「嫁」というイメージを移住女性に付与し、固定化させる。これらの問題は、移住女性が持っている多様な文化的背景は関係なく、彼女たちを「韓国伝統を学んでいる韓国お嫁さん」、「故郷（韓国農村）を守っている人々、顔付きは違っても私たちの隣人です」といった番組のアンカーの台詞からも窺えるように、彼女たちを同質化し、他者化することで、韓国社会の一部として同化しなければならないという意味を持つ、社会的な認識を拡大、再生産している。

特に、KBS 番組『러브인아시아(ラブ人アジア love in Asia)』からは、韓国生活適応における文化葛藤、人種葛藤、労働に対する葛藤などが美化されることで実質的に移住女性たちが置かれている問題を回避する。一方移住女性たちは、美化され、包装された賢明な「妻」として、親孝行の「孝婦」として定形化される。国際結婚をしたアジア女性たちは、かつて、伝統的な家族規範のなかで韓国女性たちが強要された労働の領域である家事、畑労働、出産、育児、介護といった労働を移住女性に強要し、彼女たちはそれを受



図2 KBS 『러브인아시아(love in Asia) : ラブ人アジア』2009年、1月12日放送。この場面は、姑がベトナム人の移住女性ティエンに韓国伝統のキムチ作りを教えながら話す場面。

出所：ソウル経済新聞

<http://economy.hankooki.com/lpage/entv/200901/e2009011218513494250.htm>

け入れている。これらの表象は、韓国人女性たちとは差別化された視線で描かれている。



図 3 出所：KBS 『글로벌 토크쇼 미녀들의 수다 (グローバル・トークショー美女たちのおしゃべり)』公式サイト <http://www.kbs.co.kr/2tv/enter/suda/>

一方、2006年11月から始まって現在まで人気の『글로벌 토크쇼 미녀들의 수다 (グローバル・トークショー・美女たちのおしゃべり)』はシーズンⅡに入った。この番組は、韓国で滞在している世界各国から来た外国人女性たちを他者化することで、彼女たちが韓国社会で生活しながら経験し、感じた韓国文化について述べる場を設けている。この番組に出演する彼女たちは、韓国の大学で学んでいる留学生、韓国企業や駐韓外国企業など働く社員のエリート女性たちで構成される。また、出演した外国人女性は、66パーセントが白人、黄色人種は30パーセント、黒人は3パーセントである<sup>103</sup>。このような出演者の分布は既存のメディア表象と同様に、白人優越主義イデオロギーを踏襲することである。これはまた、韓国の多文化性を標榜するというよりは、人種差別主義的な観点が現れることで多文化性を歪曲する。さらに、放送が進行されるにつれ彼女たちのセクシュアリティが浮かび上がり、彼女たちはこの番組を通じて、放送人やタレントになる場合も少なくない。例えば、図1のイギリス人父と日本人人母の間に生まれたエバポピエルもこの番組出身である。このように登場する移住女性たちへのセクシュアリティの強調は、この番組を通じて移住女性をオーディエンスが眺める視線は「美女」としての移住女性である。これは、移住女性たちを性愛化 (sexualization) された女性主体として制限した表象体系の実践である。この番組は、韓国社会と文化についてトークしながら、多文化性を提示しようとする意図が見られる反面、番組の内容からは、むしろ内国民 (韓国人) と外国人を分離し、そ

<sup>103</sup> 권용혜 「한국 TV 에 표출된 다문화성에 대한 구조 및 의미 분석 :KBS2 『미녀들의 수다』를 중심으로」 성균관 대학교 언론정보대학원 석사 논문, 2008년 42쪽.

(=クォン・ニョンへ「韓国テレビに表出された多文化性に対する構造および意味分析—KBS2『美女たちのおしゃべり』を中心に」成均館大学言論情報大学院、2008年、42頁。)

の過程で民族主義的なイデオロギーが介入することでむしろ多文化性表出が抑制されている<sup>104</sup>。

一方、韓国テレビでの移住者らの登場は、娯楽番組、時事番組だけではなく、韓国テレビドラマにおいて登場し始めた。ドラマのなかでは、外国人や混血人の登場が増え、「韓国人」でない人の出現は珍しいことではない。しかし、現実と同じように韓国テレビでの人種と民族的情景 (ethnospae) は急速に変わりつつある。メディアによる外国人表象には無意識的に、韓国人の人種や民族に対する偏見と無知が現れる。例えば、メディアの中で表象される白人との混血人らの多くは、経済的に安定し、相当な知的水準と文化的資産を持っていることが描かれるが、東南アジア人や黒人に関しては相変わらず貧しく、無知で、か



図 4 出所：SBS ドラマ『ハノイ新婦：하노이 신부』公式サイト  
[http://www.sbs.co.kr/new/tv/hanoi/hanoi\\_sub\\_02\\_01.html](http://www.sbs.co.kr/new/tv/hanoi/hanoi_sub_02_01.html)

わいそうな存在として描かれている<sup>105</sup>。同様に、国際結婚を通じて開発途上国からの移住女性たちの表象もその後者である。

国際結婚による多文化家族が増加したことによって、外国人女性が主人公に登場するドラマも制作され始めた。中でもベトナム終戦 30 周年を記念として制作されたドラマ『하노이 신부 (ハノイ新婦)』は、2005 年 9 月 19 日に秋夕 (韓国の旧盆) 特別番組で、2 部作に放送された。韓国では、ベトナム終戦を素材に制作されたドキュメンタリーなどはあったが、ドラマとしては初めてである。このドラマは、ベトナム女性と韓国人男性のラブストーリーを描いた作品である。内容は、兵役の代わりにベトナムで医療奉仕に従事する主人公の韓国人男性と、ハノイで通訳をしてくれたベトナム人女性が出会い、恋に落ち、母親に反

対されながらも結婚する国際結婚をめぐる物語と、農村地域で 40 歳を越えても結婚できない韓国人男性が母親から開発途上国の女性との結婚を薦められ、地域の支援を受けつつ、

<sup>104</sup> クォン・ニョンへ、前掲書、101 頁。

<sup>105</sup> 김명혜 「황금신부를 통해서 본 민족적 정경」 『프로그램 텍스트』 제 17 호, 2008 년, 한국방송영상진흥원 (=金ミョンヘ 「『黄金花嫁』における韓国の民族的情景」 『プログラム テキスト』代 7 号、韓国放送映像産業振興院、2008 年)

ベトナムでお見合いをする韓国社会における国際結婚を素材とする物語の二つを中心に展開される。このドラマは、一途な恋心を抱くベトナム人女性と様々な葛藤の中で成長していく韓国人男性のラブストーリーを軸に、韓国の農村男性の花嫁探し、新ライタイハン<sup>106</sup>などの社会問題が盛り込まれてある。このドラマに登場する農村男性は、この時代の代表的な農村未婚の男性として象徴される。また、ドラマは医者である息子とベトナム人女性との結婚は反対しながら、農業を営む息子にはベトナム人女性との国際結婚を強要する母親の姿から、現実的に韓国社会における開発途上国の女性との国際結婚において、農村男性には許される国際結婚が、韓国社会でいわゆる上層階級の未婚男性には許されないことが示唆している。また、2006年から2007年にKBSで放送されたドラマ『열아홉 순정 (十九歳の純情)』は、連続ドラマで延辺朝鮮族の女性が主人公である。このドラマは、中国の延辺に住む朝鮮族の女性が両親を早くに亡くし、韓国人と国際結婚をするために韓国にやって来る。しかし結婚相手はひき逃げに遭い、事故死してしまう。その後ヒロインが韓国で生きていく姿に焦点を当てながら朝鮮族女性が韓国社会で生きていくなかで、差別と偏見を勝ち抜き、韓国社会に適應する姿が描かれているラブコメディとなっている。ドラマは、移住女性である主人公に対して明るく、ユーモラスに描いている。



図 5 国際結婚を母親から勧められている農村地域の男性表象出所:SBS ドラマ『ハノイ新婦:하노이 신부』公式サイト [http://www.sbs.co.kr/new/tv/hanoi/hanoi\\_sub\\_02\\_01.html](http://www.sbs.co.kr/new/tv/hanoi/hanoi_sub_02_01.html)

このように、東南アジアや中国から移住した女性たちが韓国人男性と結婚を通じて、韓国社会に顕著な比重を占めるようになってから、韓国メディアは、移住女性と関連したプログラムを制作し、その数は増加しつつある。国際結婚を通じて移住する女性たちの存在は、色々な側面から韓国に移住する、どの民族や人種よりも韓国社会に及ぼす衝撃は大きい。つまり、国際結婚を通じた外国人女性の移住は、移住労働者や韓国駐在企業に従事する外国人の存在とは異なる位置を占めている。また移住労働者や外国人駐在員の場合、韓国へ帰化し、定着するケースが国際結婚による女性の比率より比較的低い。これは他の経

<sup>106</sup> ベトナム戦争に参加した韓国人男性とベトナム人女性の間生まれた混血児を称する「ライタイハン」とは異なる「新ライタイハン」とは、92年韓国とベトナムの正式修交を結んだ後、仕事のためにベトナムに往来した韓国人男性とベトナム人女性の間生まれた混血児を称する。ドラマ『하노이 신부 (ハノイ新婦)』公式サイト [http://www.sbs.co.kr/new/tv/hanoi/hanoi\\_sub\\_02\\_01.html](http://www.sbs.co.kr/new/tv/hanoi/hanoi_sub_02_01.html)

路で国籍を取得することよりも、結婚を通じて韓国国籍を取得するほうがはるかに容易であることを示している。一方、結婚というものの自体が、定着と混血人の出産を意味するというために、国際結婚女性は「単一民族」神話で固着されてきた韓国人性に対して深刻な疑問を提起する存在として議論される。つまり、国際結婚移住女性たちは常に身体と関連づけられている。金ウンシルは、「女性が参加する移住労働は、多くの場合が身体、性による出産などを通じて、国民国家を崩壊させることができる潜在的な危険性を持つ」<sup>107</sup>と主張する。つまり、彼女たちの身体は常に性的結合や出産、身体労働を通して常に国民国家の境界を崩壊させることができる、潜在的危険性を持っている。従って、メディアの中で国際結婚移住女性たちの表象は、彼女たちの経済的な欲望、韓国社会に対する異質性、他者性を強調し、差別的に描写しながら、一方では、移住女性たちが属する多文化家族での出産、家父長制、セクシュアリティにその焦点を合わせる。

特にテレビドラマのように大衆的な人気を集めているジャンルでの移住女性の表象は、ドラマ視聴の楽しみの中で、移住外国人女性に対するイメージが特定の方向で、無批判的に固着されやすい。ここでは、ベトナム人女性が国際結婚を通じて韓国の社会に定着する過程と葛藤をドラマ化し、最終回には30パーセント以上の視聴率を上げた人気のテレビドラマ『黄金花嫁』について考察を行う。

---

<sup>107</sup> 김은실 「지구화, 국민국가 그리고 여성의 섹슈얼리티」 『여성학 논집』 19 집, 2002년, 29~46 쪽.  
(=金ウンシル「グローバル化、国民国家そして、女性のセクシュアリティ」『女性学論集』19集、2002年、29-46頁。)

## 第2章 ドラマ『黄金花嫁』から見る移住女性

### 第1節 ドラマ『黄金花嫁』について

#### 1. 制作背景

ドラマ『黄金花嫁』は、2007年6月23日から2008年2月3日まで放送されたテレビドラマ



図6 出所：SBS ドラマ『황금신부 (黄金花嫁)』  
公式サイト <http://tv.sbs.co.kr/goldbride/>

マである。演出は、SBS放送局のドラマ局長であるウン・クンイルプロデューサー。彼は一年間の企画期間を経て、このドラマを制作した。ウン氏は、『黄金花嫁』について、次のように述べている。

「外国人と国際結婚をする人々が増えている。ライタイハンは韓国だけでなくベトナムでも冷遇されている。人は誰もがハンディキャップは持っている。それを克服する勇気を与えたい。」

ウン氏はこのドラマが評価された結果、2008年「今年のPD（プロデューサー）賞」を受賞した。この『黄金花嫁』は、韓国のドラマ制作会社である総合メディアグループである（株）オリバーナイ

ンのもとで制作された。このオリバーナインが制作に関わるドラマの特徴として、『주몽 (朱蒙)』（2006年）、『황진이 (黄眞伊)』（2006年）、『왕과 나 (王と私)』（2007年）など、韓国の歴史を題材とする時代劇が多いことが特徴である。また、日韓合作ドラマとして、韓国キムチを物語の素材に取り上げた『명가의 후예 (名家の後裔)』（2006年）の制作も手がけている。これらのように同社は、韓国文化や歴史などをドラマ制作上で強調することで、「韓流コンテンツ」の質的な向上を目指している。これは韓流市場の拡大のための戦略であり、特に新しい進出目標として北米、ヨーロッパ圏を念頭におき、韓流市場のさらなる拡大を目指している。また、ここには韓国の旅行会社であるMODETOURによる制作支援が行われている。これは、ドラマを通じた企業マーケティング効果が見込まれてのことである。その一方で、このような資本の介入は、ドラマ『黄金花嫁』の公式サイトを通じて結婚移住女

性たちにエピソードを公募するなど社会問題化作業に積極的に関わることに作用した<sup>108</sup>。さらには、ドラマ『黄金花嫁』が、女性結婚移住者である主人公を「新ライタイハン」<sup>109</sup>として浮上させたことによって国外にあるライタイハン問題にまで社会的な関心を導くことになったのである。



図 7 『황진이 (黃眞伊)』 (2006年)、『왕과나 (王と私)』 (2007年)、『주몽 (朱蒙)』 (2006年)

ドラマ『겨울연가 (冬のソナタ)』から始まった韓流ブームは、韓国ドラマ及び映画制作に大きな変化をもたらした。韓国コンテンツ振興院によれば、世界的な経済危機以後も、韓流テレビ番組のアジアでの販売の成長は勢いを持続している。アジア各地で韓流テレビ番組は、日常的な大衆文化として位置付けられている。韓流コンテンツは常に、国内市場だけではなく、海外市場を狙って制作されるのである。当初小規模作品を中心に構成されていたコンテンツ事業も、今では大企業の参加はもちろん、国内資本だけではなく、常に海外資本が入るようになっている。海外市場を狙うドラマや映画をはじめとする韓流コンテンツは、グローバルな資本が投入されることで、国際的に撮影されるなどブロックバスター<sup>110</sup>化され、商品としての役割を果たすようになっている。また、このように世界に向けて発信される韓国の文化コンテンツは、韓国語、韓国の国家体制、韓国におけるイデオ

<sup>108</sup> SBS ドラマ『황금신부 (黄金花嫁)』公式サイト <http://tv.sbs.co.kr/goldbride/>

<sup>109</sup> ベトナム戦争に参加した韓国人男性とベトナム人女性の間に生まれた混血児を称する「ライタイハン」とは異なる「新ライタイハン」とは、92年韓国とベトナムの正式修交を結んだ後、仕事のためにベトナムに往来した韓国人男性とベトナム人女性の間に生まれた混血児を称する。

<sup>110</sup> 国内資本だけではなく、グローバルな大規模の資本が投資されることで、その規模を拡大すること。

ロギー、韓国の伝統、韓国の消費文化を、外国の視聴者の意識の中に投与し、同化を図っている。韓流ドラマは本質的には、既存の伝統意識体系の「浸透」と、韓国スタイルへの「一体」化を指向する。「韓国的なものがさらに先進的なものへ」という価値体系の変形、韓国的なものに対し、なじむという文化体系の変形を試みることになる。これは韓流スターの言動、素晴らしい映像表現、よく組まれたストーリーを通じて遂行される<sup>111</sup>。また、韓流ドラマの大部分は、「韓国民族性」を強化し、多くの物語は、国家体制、伝統文化、家族、社会的慣習に閉じられている。さらに韓国文化コンテンツは、新文化帝国主義<sup>112</sup>を登場させたといえる。新文化帝国主義とは、文化的支配にも注目するものの、マーケティングなど利潤追求に、より積極的である。韓国文化コンテンツによる新文化帝国主義は、海外市場だけを注目しているわけではない。国内においても同様である。それは、韓国社会がますます多文化社会に変貌しているために、前述したように外国人が登場する韓国ドラマでは、主に「韓国人性」を強調し、韓国文化や伝統、家父長制を強化する意識が多く現れる。しかし、海外で放送される韓国ドラマはその人気冷めることなく、韓流は大衆文化に位置付けられている。特に東南アジアにおいて韓国ドラマは移住女性となる女性たちに少なくない影響力をもってきた。例えば、彼女たちが韓国人との国際結婚を決める際に、ドラマで登場する韓国人男性イメージは大きく影響を与えている。実際に、国際結婚関連のインターネットサイトの掲示板には「韓国人男性は、皆がドラマ中で登場する人物ではない。韓国人と国際結婚をする場合には真剣に考えてほしい」との注意書きが見られるほどである。また、ベトナムで国際結婚斡旋を行っているビタミン氏（ネット上のID名）も、ベトナム人女性に韓国人男性の人気が高い理由として、韓国ドラマのなかでの優しくて、責任感が強く、家庭のために献身的な男性イメージを指摘している。ビタミン氏によると、中国、台湾、シンガポール、日本、フランス等数多くの国の男性がベトナム人女性との結婚を夢見ているにもかかわらず、ベトナム人女性は韓国人男性との結婚を望んでいるということなのだ<sup>113</sup>。

韓国で国際結婚をするベトナム人女性は、中国人（朝鮮族を含む）の次に多い。このような韓国での国際結婚の実情はまた、国際結婚移住女性及び多文化家族を対象とする韓国ドラマの制作にも大きな影響を与えている。韓国で初めて国際結婚をテーマとしたドラマ

<sup>111</sup> 허만섭 「한류드라마와 제국주의」 『신동아』 2009년 10월호 (=ホ・マンソプ「韓流ドラマと文化帝国主義」 『新東亜』 2009年10月号)

<sup>112</sup> ホ・マンソプ、同書 (2009年10月号)

<sup>113</sup> ベトナム国際結婚 GLO <http://blog.daum.net/glo1961/359>

『ハノイ花嫁』も、ベトナムからの移住女性が主人公である。また、次にテキスト分析を行うドラマ『黄金花嫁』も、ベトナム人女性と韓国人男性の国際結婚と、多文化家族をテーマにしたドラマである。ドラマ『黄金花嫁』は、ベトナムにおける韓流ブームを意識して制作されたドラマである<sup>114</sup>。このドラマは、2005年に放送された『하노이신부 (ハノイ花嫁)』が注目を集めたために、韓国における国際結婚移住女性たちに対する理解を深めるため制作された作品である。特に社会問題を扱う特集番組ではなく週末に放映されるドラマとして制作された点に、韓国における移住女性及び多文化家族に対する関心度の高さが窺える。また、ドラマの制作者が明らかにしたように『黄金花嫁』は、韓国における多文化家族に対する理解を企てると同時に移住女性に対する新しい認識を構築するために制作されている。

## 2. あらすじ

ドラマ『黄金花嫁』は、ベトナム人と韓国人の間に生まれた「新ライタイハン」である主人公のジンジュ（イ・ヨンア）が韓国語を勉強している姿から始まる。彼女は、ベトナムにある韓国国際結婚斡旋業社で通訳兼ガイドとして働いている。「ジンジュ（真珠）」という名は、二歳のときに、別れた韓国人の父が付けてくれた名前である。ジンジュの母は



図 8 韓国国差結婚斡旋業社で通訳者として働くジンジュの姿 出所：SBS ドラマ『黄金花嫁 (黄金花嫁)』公式サイト <http://tv.sbs.co.kr/goldbride/>

長年間、自分を捨てた男を想いながら、韓国人牧師の家で家政婦をしながら娘のジンジュを育てる。ジンジュにとっては母だけが唯一の身寄りである。混血児といじめられてもいじけずに明るく育ち、義侠心に厚く、決めたことは最後までやり通す信念の持ち主である。その上、誰にも負けない孝行娘として描かれている。孝行娘のジンジュは母の望みである韓国人の父親を探すために、韓国に移住する方法として国際結婚を決意する。一方、韓国では、ソウル大学を卒業したエリート、カン・ジュンウ（ソン・チャン）が付き合っていた彼女オク・ジョ

<sup>114</sup> 韓国ネット新聞 『inews24』： <http://joynews.inews24.com>

ン(チュ・ヨジン)に裏切られ、金持ちの男に鞍替えされた衝撃で、3年間恐慌性障害(panic disorder)を病んでいる。それを辛い気持ちで見守っていた彼の母ヨン・ハンスク(キム・ミスク)は、自分の息子が韓国人女性とは結婚できないと考えたあげく、ベトナム人女性と結婚させることによって息子を変えようとする。ベトナムに嫁の候補者を探しに行ったカン・ジュンウの母親は、ベトナムで生まれたライタイアの娘、ジンジュと出会い自分の息子を彼女と結婚させる。こういったドラマの冒頭部分の出来事からそれ以降の全体像を簡単にまとめると、ドラマ『黄金花嫁』は、ベトナム人と韓国人の混血児である(ライタイハン)主人公のジンジュが、韓国社会において周辺化された男性との国際結婚をきっかけに韓国へ移住し、多文化家族を形成し、その中で様々な葛藤を抱えながら生きていく姿を描いたものである。

### 3. 登場人物及び葛藤の構造

#### 3-1. 登場人物紹介

	<p>■ヌエン・ジンジュ(女 20代前半)役/イ・ヨンア ベトナム国籍を持つ“ライタイア”。ベトナムの結婚情報会社グローバルウェディングの通訳者。混血児といじめられてもいじけずに明るく育ち、義侠心厚く、決めたことは最後までやり通す信念の持ち主。母の望みをかなえるため韓国行きを決意する。</p>
	<p>■カン・ジュンウ(男 20代後半)役/ソン・チャンウィ 零細食品会社、ソマン食品の一人息子。母の期待が重くのしかかるエリートで猪突猛進型。全女性が望む結婚条件を具備した温厚で理知的男性。過去の失恋の痛みから立ち直れず引きこもりオタクに。母親の策略でジンジュと結婚する羽目になる。</p>

	<p>■チョン・ハンスク (女 50代初め) 役／キム・ミスク</p> <p>ジュンウの母。うだつが上がらない亭主と昔の恋人で実業家のソンイルとを比べては引け目を感じている。頼りは息子ばかりと全力投球するも期待通りには運ばない。ジュンウの事情が事情なだけにそれは秘密にしたまま、仕方なくジンジュを嫁として迎えるが不満。</p>
	<p>■カン・ウナム (男 50代半ば) 役／カン・シニル</p> <p>ジュンウの父、ハンスクの夫。ソマン食品の社長。野暮ったく無口だが思慮深くて家族思い。牛のように黙々と工場で働いてきた。金の苦勞の絶えない妻の愚痴に頭が上がらない。常に義父の味方であり、よき理解者である嫁のジンジュと一緒に「伝統餅」を復活させようとする。</p>
	<p>■キム・ソンイル (男 50代半ば) 役／イム・チュム</p> <p>国内屈指の食品会社、ウェルビーイングフードの社長。ヨンミン、ヨンスの父、オッキョンの夫である。学生時代同じ町で育った女性ハンスクと恋人同士になったが、大学進学のためソウルに上京し、この二人の手紙の配達をしていたオッキョンの策略に掛かり彼女と結婚した。</p>
	<p>■ヤン・オッキョン (女 50代初) 役／キョンミリ</p> <p>ヨンミン、ヨンスの母。ソンイルの妻。ハンスクの高校の後輩で姉のように慕っていたが、ソンイルに片思いして結局横取りしてしまった。生来の美貌に上流階級の品位が備わっている。同窓会で夫の自慢話をしてハンスクを苛立たせるが、子供同士の複雑な関係のせいでますます犬猿の仲になる。</p>

	<p>■キム・ヨンミン（男 20代後半）役／ソン・ジョンホ</p> <p>ソンイルとオッキョン夫婦の長男。大学卒業後アメリカ留学。MBA取得を目指して勉強中。同じ留学生のジョンに一目惚れし電撃結婚。冷徹で理性的、家庭を守りながら企業の継承者、また長男としての役目を果たしてきた。対人関係、仕事に対してつねに完璧主義。しかし度が過ぎて潔癖症とも言われている。</p>
	<p>■オク・ジョン（女 20代後半）役／チェ・ヨジン</p> <p>ヨンミンの妻。ジュンウの元婚約者。上流階級に対する憧れが強い。アルバイトで貯めた資金でシカゴヘアースタイルの勉強に行く。洗練された理知的な性分。上流階級御用達の伝統餅屋である「緑地苑」でジンジュに出会い、ライバルとして対立する。</p>
<p>出所</p>	<p><a href="http://www.kntv.co.jp/prog/dra/p0320.php">http://www.kntv.co.jp/prog/dra/p0320.php</a></p>

### 3-2. 葛藤の構造

<韓国人の夫と結婚移住女性の妻、その間における葛藤構造>

国際結婚をしたジンジュと韓国人夫のジュンウの間の葛藤はドラマの始めの部分から表れる。夫ジュンウはベトナム人女性との結婚について、金を支払い、母の強要で契約のように行われた国際結婚自体を受け入れる事が出来ない。そして、ジンジュにベトナムへ帰るように説得する。しかし、ジンジュはベトナムに帰ることを拒否し、二人は偽夫婦関係を維持することになる。しかし、ジンジュは、病気を抱えている夫を支えようと一生懸命努力する。一方、夫は、そのようなジンジュの行動にむしろ怒りを隠せない。このような葛藤構造は、夫の持つ、結婚という形式的な関係より、「愛」を優先視する若い世代の価値観と、妻の持つ、犠牲によって結婚生活が維持できるという伝統的な価値観との間に生じる衝突から成立する。しかし、このような葛藤は、ドラマでは二人の結婚生活が安定に向かうことによって解決されることになる。つまり、このような葛藤構造は、国際結婚移住女性である妻は、夫が心を許すまで忍耐し、夫の病気を治るよう献身的に支えるなど、幸せな家庭のためには妻は犠牲とならなければならないという、伝統的な家父長制の価値観を移住女性に付与している。

<移住女性嫁と姑の間における葛藤構造>

ベトナムでお金を払い、ジンジュを韓国に連れてきた姑は、アオザイ（ベトナム伝統の服）を着ているジンジュに服を着替えるように要求する。姑は、周りの人にジンジュがベトナム人であることを知らせたくないためである。また、姑は、韓国の一流大学まで卒業した自分の息子が東南アジア出身の女性と結婚することは恥ずかしいことだと考え、ジンジュを在米韓国人だとして周りの人に嘘を付く。この葛藤構造は、東南アジア女性は、恥ずかしくて、在米韓国人はそうではないという姑の価値観から生じる葛藤である。また、家族の間では、ジンジュの存在は田舎臭く、将来的に夫の出世に邪魔になるのではないかという不安の原因として作用する。それは、夫が病気が治り就職のために面接を受けようとする日、ジンジュがベトナムの幸運の色である赤のネクタイを夫にプレゼントする場面で明らかになる。

姑：ジュンウ、ネクタイをこれに換えてね。もじもじしないで、面接は初印象が肝心なのにこんなに目立つものだと自殺行為だからね。

<中略>ジンジュは色々学ばなければならないことが山ほどあるからね。

義理のおば：これからジュンウは、出世の道を走るようになるのにジンジュが着いてこられるか心配ね。

この場面においては、ベトナム文化が韓国の文化より立ち遅れていると考えられていることからジンジュが韓国文化を一日も早く学ばなければならないとされている。また、ベトナム人結婚移住女性がいなところで展開するため、移住女性の反応は見る事ができない。これは、移住女性を「劣等な存在」として見る韓国人の偏見を移住女性に見せたいくないという意図が隠されている。ドラマが進行するとともに、ジンジュが韓国人男性に好まれる姿や韓国文化に「同化」する姿が表されることに従って、家族の間における葛藤は徐々に解決されていく。

< 韓国人女性と移住女性の間における葛藤構造 >

このドラマには、結婚移住女性ジンジュとライバル関係にいる韓国人女性が登場するが、その一人が夫の職場にいるインギョンという人物である。インギョンは、ジュンウを大学時代から片思いしてきた。ジュンウが結婚したという事実を知って一度失望するが、その相手が東南アジアからの国際結婚女性であることを知ってからは、積極的にジュンウに接近することになる。次は、インギョンとジンジュの台詞である。

インギョン：失礼ですが、何歳ですか。

ジンジュ：私、21歳です。

インギョン：あら！大学の在学中に結婚したんですか。

ジンジュ：いいえ、私は大学に入れなかったのです。

< 中略 >

インギョン：では、カン先輩（ジュンウ）とは何処で会いましたか。

ジンジュ：あの...、ベトナムで

インギョン：どこですって。

ジンジュ：ベトナム、ホーチミンです。

インギョン：では、旅行中に会ったんですか。

ジンジュ：いいえ、私、写真を見て...結婚しました。

ジュンウさんと私...似合わないでしょう。

インギョン：ごめんなさい。あまりも以外だったので...カン先輩がそんな結婚をするとは思いませんでした。

この台詞から、学歴や出身国など外的な条件によって配偶者を選択するインギョンの価値観が表れる。インギョンとジンジュの間に葛藤は、インギョンがジンジュを無視し、ジュンウに積極的に接近することによって高まる。さらに、ジンジュは、美人で知的なインギョンの登場と出世の道を走る夫の姿と比較してみずぼらし自分の姿を感じることで落ち込む。このような韓国人女性と結婚移住女性の間には存在する、韓国人女性からの差別主義的な眼差しと結婚移住女性のコンプレックスによる葛藤構造が形成される。しかし、ジンジュが夫の愛を感じることで、韓国伝統の餅を学ぶことによって、自尊心を回復すること

で韓国人対移住女性の葛藤は解決される。

ドラマ『黄金花嫁』から表れる葛藤構造は、個人的なレベルではなく、韓国人対結婚移住女性という対立から形成されている。特に、韓国人と移住女性の間には位階制的な差別構図が見られる。つまり、結婚移住女性が家族や妻として認められるためには、出身国や学歴、経済的能力、外的な条件が優先視される。また、その外的条件は、夫婦関係や社会の力学的な関係まで影響を及ぼしている。ドラマ『黄金花嫁』から表れる葛藤構造分析からは、韓国社会で国際結婚移住女性という条件は、階級・エスニシティ・ジェンダーに基づく「三重の抑圧構造の犠牲者」としては、それを耐えなければならない下位主体 (subaltern) 典型であることが明らかになる。

さらに、このような葛藤構造を解決する方法として、移住女性の忍耐と犠牲、また韓国文化に「同化」すること、韓国文化を学ぶことなどから移住女性が自分の自尊心を回復することによって解決する。これは、国際結婚移住女性のみに一方向的に解決策を要求する韓国社会の中で矛盾する思考がドラマに現れた面である。

#### 4. ドラマ『黄金花嫁』から見る移住女性の表象

##### 4-1. 韓国人女性と対照描写から移住女性の「他者化」



図 9 幼い頃、経済的に困難なジンジュの姿 図 10 恐慌性障害を病んでいるジュンウの姿と夫の看病するジンジュの姿 出所：SBS ドラマ『黄金花嫁』公式サイト <http://tv.sbs.co.kr/goldbride/>

このドラマは、国際結婚の過程で生じる移住女性問題を断片的かつ部分的ではあるが、現実に即して描写している。ベトナム人女性ジンジュと結婚する、韓国人男性のジュンウ

は 3 年間恐慌性障害を病んでおり、韓国人女性からは結婚相手として好まれていない。そのことを隠したままジュンウの母親はベトナム女性ジンジュに 1500 万ウォンを払い、息子と彼女を結婚させようとする。勿論、ジンジュはその事実は知らないまま結婚する。この部分は、開発途上国からの移住女性と国際結婚する韓国人男性は「障害者」「精神異常者」「経済的に困難な状況に置かれている男性」「再婚の男性」であるという一般化されたイメージを映像化し、結婚相手の状況を移住女性には隠したまま国際結婚を進め、やがて国際結婚移住女性の人権問題にまで発展している社会の現実的な一面を認める設定となっている。さらに、移住女性であるジンジュにお金を払い国際結婚を強行しようとする設定は、国際結婚の「売買性」のステレオタイプと言えよう。また、これは、韓国社会で周辺化された男性は、韓国人女性と結婚できないために国際結婚を選択するという、結果として移住女性たちの社会的な位置付けを低く見積もる偏見を無意識的に再生産している。しかし、ドラマではジンジュは、結婚のために韓国にきて結婚相手のジュンウが 3 年間恐慌性障害を病んでいることを知った後も、ベトナムに帰るどころか、ジュンウのために一生懸命に看病するなど、家族のために努力する姿を描く。またこのドラマでは、国際結婚移住女性を説明する際の限界を、幾つか有している。例えば、移住女性ジンジュのキャラクターは、従来の韓国ドラマにおける「シンデレラ型」として表象されている。つまりドラマの始めでは、韓国人の父親を探すために国際結婚を決心したベトナム人女性ジンジュは、経済的に貧しく、混血児であることでいじめられ、生活のために足マッサージ師を務めるなど、苦勞をしながらも明るく、親孝行な優しい女性として描かれている。しかし韓国に来てからは、外国人登録証とクレジットカードも区別できない無邪気で、無知な存在として表象されるのだ。さらに、ドラマの中盤までは歩き方、身なり、行動などから、単純に韓国語が下手な外国人花嫁以上に「劣等な存在」として描写されている。これは、開発途上国からの国際結婚移住女性に対する固定化されたイメージの表象でもある。

しかし、ドラマが進行するにつれ、結婚移住女性であるジンジュが婚家のために韓国伝統餅を学ぶことによって、社会的にも活動を行うようになり、彼女が家事などの私的領域と職場での公的領域の両方を上手に行う姿を描く一方で、韓国人女性が公的領域において男性と同等に競争をするにもかかわらず家事や妊娠といった私的領域を諦める姿を描いている。また、国際結婚をした夫ジュンウは、結婚前は病気に悩み、社会活動や日常生活にも不安定だったが、結婚後には結婚移住女性ジンジュのサポートによって、公的領域においても専門的な職に就き、ポジティブな男性の姿に変化して表れる。これらの通り夫をサポ

ートを前題とした私的領域と公的領域のバランスなど、従来の韓国人女性が果たしてきた伝統的な韓国女性像を、移住女性であるジンジュのキャラクターに対して要求していることが見られる。

ドラマの題目からも分かるが、『黄金花嫁』は、「価値のある」花嫁及びベトナム人良妻賢母を意味する。つまり、韓国人夫の病気を治すために涙を流しながら頑張る女性として描かれるジンジュの姿は、ドラマの中で物質主義、または自分の成功のために金持ちと結婚し、自分の成功のために出産も避ける韓国人女性、オク・ジョンと対照的に描写されることで、韓国社会が国際結婚移住女性に要求する、非物質主義的で犠牲的なものとなっている。また、昔のように従順でも、犠牲的でもなく、結婚や出産を避け、自己実現に積極的な現在の韓国人女性に代わる存在として、ベトナム女性は非現実的に理想化されている。つまり韓国ドラマにおいて、旧来までの家父長制的な欲求は、移住女性へと転移しているのである。しかし、現代のベトナム人女性も韓国人女性のように自己開発のために努力しているにもかかわらず、ドラマの中で彼女を犠牲的な女性として映し出すことは、彼女を「過去」に回帰させることにほかならない。韓国移住女性人権センターの代表であるハンクッヨンは、従順で犠牲的なベトナム人女性像は「1800年代のベトナム物語」<sup>115</sup>であると指摘している。もちろんドラマの中でもジンジュは韓国伝統餅を習うために努力する。これは一見すると自己開発に励む主体的な女性として描かれているように思われがちだが、彼女の行動は自分のためよりも婚家のためであり、夫のためである。このような自己犠牲的なジンジュの姿は、母のために国際結婚を選択した理由からも見ることができる。

結婚移住女性ジンジュの犠牲的で献身的な姿は、他人とは関係なく自分だけの欲望や情熱を追求するオク・ジョンと対比される。ドラマの中で登場する若い世代の韓国人女性と同世代の結婚移住女性とを競争関係において展開するこのドラマでは、韓国人女性は美貌と知性を兼備した、他人より、自我愛が強く、社会的に成功する願望を強く持つものとして描かれる。さらには、社会的に地位が高い男性を求める傾向や成功するためには何でもする人物として、否定的に描かれているといえる。一方、同世代の結婚移住女性の場合は、楽天的で純粋な性格の持ち主として、自分より母国の母や夫、家族のために犠牲を払い、思いやりのある人物として描かれている。前述の通り、これは、純粋で、物質的な欲望のない他者として結婚移住女性の他者化である。このように、韓国人女性と対比されるベトナム人女性の姿は、ジンジュの母親象からも確認できる。つまり、彼女は自分を捨てた韓

---

<sup>115</sup> 『韓国中央日報』2007年10月19日。

国人夫を 20 年間、再婚もしないで待ち続けながら、視力を失う前に一度だけ彼に会いたいと願っている。ドラマではそうした彼女の願いが強調されながら、経済的に困難な状況にありながらも彼に物質主義的な期待をしない純粋な女性として、彼女は描き出されている。ジンジュと彼女の母親の非物質的な性向は、物欲や欲望のために愛する彼氏を捨て、金持ちの男と結婚したオク・ジョンや他人の彼氏を横取りし結婚するヤン・オッキョンとは異なる女性像の提示としてベトナム人女性を他者化し、偶像化することに一役買っている。



図 11 韓国伝統餅を学ぶジンジュと自分の欲望のために恋人を捨てたオク・ジョン、そして二人の対決

井上はメディアの描く女性像について、「メディアはその時代のその社会が期待する、女性の姿形や生き方や、『女性たちしさ』といった、女性についての規範が表現されている。メディアは『あるべき』『あるはずの女性像』を提案するのである」<sup>116</sup>と述べる。では、韓国ドラマ『黄金花嫁』での主人公、国際結婚を通じて韓国社会へ移住し、一つの家庭の中で子孫を産み、家族のケアをしながら自分の仕事も懸命にやる移住女性にメディアは何を求めているのか、ひいては、この社会は移住女性に一体、何を期待しているのか。

それは、前述で考察したように、韓国社会は国際結婚移住女性たちに「黄金花嫁」を期待しているのだ。言葉通り、黄金のように価値のある花嫁である。それでは、黄金のように価値のある花嫁とはどんな花嫁なのか。それはこのドラマのジンジュのように、自分自身よりも夫や家族の為に努力し、子孫を残し、家父長制のなかで従順的で、犠牲を要求され、またその要求に応じられる女性像である。または、そのような女性への期待が表出されているのだ。象徴的なことは、このドラマの最後のシーンにおいて、「黄金花嫁」であるジンジュは韓国人夫や家族に認められ、また彼らに同化することで、幸せをつかんだ移住女性として描かれる。その反面、物質主義的な韓国人女性たちは、家庭を失い、自己反省

<sup>116</sup> 井上輝子『表現とメディア』（岩波書店、2009年）2頁。

する姿が最終的に描かれる。このことから「黄金花嫁」ではない韓国人女性に対するバッシングを読み取ることも可能である。

それにもかかわらずこのドラマで描かれる国際結婚の商業的な売買婚化現象はもちろん、黙認することはできない現実的な問題として浮上している。このドラマでは、「黄金花嫁」の移住女性ジンジュによって、夫が元気になり、子供の泣き声や笑い声があふれる幸せな家庭が作り出される面のみを描いている。しかしながら、また韓国社会で求められる「妻」や「嫁」、「女性」に対する「あるべき」姿を再生産し、それが韓国人女性に代わり、国際結婚移住女性に背負わされているという、現実が無批判的に描き出されている。

結局、ドラマ『黄金花嫁』で表れる結婚移住女性は、国際結婚を選択し、移住を選択したエイジェントとしてホスト国の社会の中で生活しながら自己アイデンティティを確立して行く存在として描かれていないだけではなく、自分自身より家族のために犠牲し、忍耐することが美德という韓国の伝統的な女性像を再生産している。



図 12 夫をサポートするジンジュと幸せな多文化家族表象

## 4-2. 従来の国際結婚移住女性の表象とドラマ『黄金花嫁』から見る移住女性表象の比較

第1章の考察からも明らかになったように、韓国社会の中で開発途上国からの移住女性と国際結婚をする場合には、「周辺化された」韓国人男性が、経済的な理由で押し流された「可哀相な」移住女性との金銭を介した結婚である「売買婚」として認識されることが多い。ドラマ『黄金花嫁』からもこのような要素が見られる。例えば、ジュンウの職場での同僚は、職場の晩餐会に参加したジンジュを見て次のようなことを言う。

職場同僚①：ジュンウさんの妻なの？

職場同僚②：そうですよ。ベトナムから来たんですって。

職場同僚①：何！カン・ジュンウさんがどうしてそんな結婚をした？

職場同僚②：色々あったみたいですよ。

職場同僚①：あの噂が事実だったみたいね。カンさん、精神病だった噂  
...だから、金で新婦ショッピングしたのね...

これは、ハンディキャップを持っている韓国人男性だからこそ開発途上国からの女性と結婚するという国際結婚に対する売買婚表象を認めていることになる。

また、ジンジュが初めて韓国に来て空港から婚家に向かうタクシー内での場面で、ジンジュは、ベトナムでは自転車が多いのに韓国では車が多いと言いながら高いマンションで住みたいと話す。これは、開発途上国より韓国が経済的に上位で、結婚移住女性にとって韓国は羨望の対象国として表れる。しかし、国際結婚移住女性を受け入れた家族らは、移住女性を「田舎臭い」と指摘しながら、韓国での生活に適応するために一日も早く韓国社会に「同化」または「統合」しなければならないと話す。これは、従来の移住女性における「周辺化された韓国人男性と結婚する移住女性」「貧しい国からきた移住女性」「無知な移住女性」「韓国社会に早く同化が必要な移住女性」としての表象と一致する。

一方では、従来の移住女性表象と異なる場面も見られる。例えば、ドラマではジンジュは、結婚し韓国に来て結婚相手のジュンウが病気を病んでいることを知ったにもかかわらず、ベトナムに帰らずに、ジュンウのために一生懸命に看病するなど、家族のために努力する姿を描く。また、次のジンジュと姑の会話からは、ベトナム人移住女性の夫を支える

強い信念が明らかになる。

ジンジュ：始めは、ジュンウさんが格好よくて、ベトナム人男よりずっと優しくて素敵だから良かったのです。でも、ジュンウさんが病気で、大変な様子を見ると、ベトナムに帰りたくなくなりました。早く、ジュンウさんの病気が治るように助けてあげたいです。

<中略>

姑：あなたが途中で諦めると、二人共に傷だけが残るのよ。あなた、本気でジュンウと一緒に生活できるの？

<中略>

ジンジュ：母が言いました。ベトナム人は、いや、ベトナム人女性は、暴風が吹きすさぶ丘にある門をあけたままの家だと。門を開けたままにした家はいくら暴風が強くても倒れないのです。吹きすさぶ暴風はただ通り過ぎるだけです。私は、ベトナム人女性です。いくら大変なことか起こっても私は、倒れません。最後まで...今の思いのままジュンウさんの隣にいたいです。

この台詞からは、結婚生活に適応できなくて「逃げる結婚移住女性」、新しい環境に慣れていないため夫や家族の「助けが必要な結婚移住女性」といった従来のメディアに見られた国際結婚移住女性の表象と異なる、夫や家族に尽くす「献身的な結婚移住女性」表象が新しく作られる。この新しく作られた移住女性表象は、夫と家族のために犠牲を払い、献身的に家族をサポートする存在として「意味化」される。また、そこには良妻賢母主義が内在することやジェンダー役割の固定化、男性中心主義が内在する。これは、ドラマの中で国際結婚移住女性が私的領域での良妻賢母としての役割を忠実に遂行する姿を描くことで、国際結婚移住女性を「完璧な結婚配偶者」として意味化作用を行っていることが明らかになる。

ここまで韓国のテレビドラマ『黄金花嫁』における移住女性について考察を行った。これらから、移住女性に対する表象には、その限界が明らかになる。つまり、この韓国テレ

び番組における移住女性表象は、エイジェントとしての移住女性については議論していない。これは、国際結婚移住女性に対する偏見と要求、例えば、「親孝行の嫁」、「夫を支える犠牲的な妻」、「性的パートナー」、「子孫を残す主体」といった思考の枠組みの中に、移住女性を押し込めるという意図が存在する。移住女性たちは、結婚を通じて「愛」を実践しながら、自立的な経済的主体になろうとする二重的な欲望を持つ「女性」として、アイデンティティを持つことが許されてはいない。このように、移住女性が他者化されることは、移住女性が自らのアイデンティティを再構成する際にもっとも大きい障害物になる。またそのことは、経済的な主体としてその位置が確実な労働移住女性より、経済的に韓国人男性に従属している国際結婚移住女性により直接的に現れる問題である。ドラマの移住女性表象は、国際結婚移住女性を見差す韓国人の差別的な思考を、現実的かつ「正当な」ものとして意味生産する意味合いをもつ。『黄金花嫁』の中でベトナム人花嫁ジンジュを通じて、移住女性の主体性を認めるというより、経済的に貧しい国からやってきた同情の対象として、または、韓国の未来を背負う存在として描写することで、結果的には、同等に尊重されない女性として表象し、そういう表象が現実でも引き続き意味生産され、象徴体系としての機能を果たしている。

ドラマの中で移住女性表象は、韓国人の差別意識から生まれた「劣等な存在」から韓国人のファンタジーとしての「完璧な女性」に生まれ変わった。これは、結婚移住女性に対する韓国社会の二重性の結果物である。

2000年代以降、韓国ドラマのなかで女性表象は、変化する時代像を反映し、家父長制的ジェンダー役割から脱皮したドラマが多く制作された。しかし、移住女性をテーマとしたドラマ『黄金花嫁』では、母性主義、良妻賢母主義が強調され、伝統的なジェンダー役割を固定化することによって、ジェンダー秩序をより強く再生産することが見られた。

次に、ドラマ『黄金花嫁』が、受容者の国際結婚移住女性に対する認識にどのような影響を与えたのかをドラマ『黄金花嫁』の放映と同時に公開された公式サイト視聴者掲示板の書き込みを通じて考察する。

## 5. ドラマ『黄金花嫁』の意味生産—受容者（オーディエンス）認識から

ここでは、国際結婚移住女性及び多文化家族に対する受容の様相とその認識の変化について考察を行うことにする。ドラマ『黄金花嫁』の放映と同時に公式サイトが公開された。

このサイトには、視聴者がドラマに対する感想、質問など書き込みができる掲示板が設置され、2007年6月から2008年6月までに約11,650件の書き込みがあった。筆者は、この書き込みの中でも、第一に、移住女性当事者とその家族が書いた書き込み内容、第二に、このドラマを通じて「多文化家族」に対する認識が変化したという韓国人の感想を中心に取上げ、どのように移住女性及び多文化家族への視聴者の認識が変わっていくのか、さらにドラマ『黄金花嫁』がどのように「移住女性」及び「多文化家族」の意味を生産し、「意味生産の実践」が行われているかについて考察を行う。しかし、ドラマ『黄金花嫁』の受容者認識による「意味生産実践」への考察を行う前に、移住女性に対する韓国人の認識を、国際結婚移住女性についての研究成果を中心に見ることとする。なぜならば、従来の国際結婚移住女性に対する韓国人の認識がドラマ『黄金花嫁』を視聴することでどのように変わったのかを比較分析することで、メディアの「意味生産の実践」がどのように行われるのかが明らかになるからだ。

従来の研究によると、大部分の結婚移住女性は家族以外には親密な関係を持たないことが多く、地域の住民や家族、親戚らは、韓国文化への一方的な同化と家父長制的家族関係を彼女たちに要求してきた。または、貧しい国の女性として「可哀相な存在」として見てきた。しかし、最近の結婚移住女性の増加とともに、関連する政策やサービスが拡大されることに伴い、韓国人との関係にも変化が見られる<sup>117</sup>。地域の住民たちも彼女たちに対し新たな関心と態度を再構築する様子が見られるのだ。例えば、韓国内でより多様な外国人移住者の多い京畿道（キョンギド）安山市（アンサンシ）と、ベトナム、フィリピン人の国際結婚が多い農村地域の典型的な特徴が見られる全羅南道（チョルラナムド）霊岩（ヨンアム）地域では、前述したように、「韓国人男性と結婚し、子供を出産するなど韓国家庭に安定感を持たらした」と、移住女性に対して肯定的な評価が多い<sup>118</sup>。しかし、このような評価は、韓国人夫や姑との関係によって評価されることが多く、反対に家庭のみで充実を得られず就職を願う女性に対しては「家族を抜け出した」として非難する場合もある。結局、結婚移住者に対する地域住民の評価は、家父長制的性別構造の中で規定された女性の役割上にその基準を置く。これは国際結婚移住者を眺める視線と一致している。韓国女性政策院の報告書によると、地域住民からは韓国社会への同化を要求する期待が強く見られ、韓国文化を理解し、遂行しようと努力する国際結婚移住女性に対しては、特に肯定的

<sup>117</sup> 金イソン『多民族・多文化社会への移行のための政策パラダイム構築』（韓国女性政策研究院、2007年105頁）。

<sup>118</sup> 金イソン、同書、109頁。

な評価が目立つ。特に、このような評価は、農村地域住民によく見られる現象である。しかし、国際結婚移住女性に対する地域住民の否定的な態度は、直接的な接触における葛藤ではなく、外国人に対する先入観、または恐れなどに由来する場合が多い。国際移住女性に対する地域住民たちの態度において注目される点は、中国、ベトナム、フィリピンなど東南アジア出身の移住女性たちが地域住民の否定的な態度の対象となる反面、日本出身の国際結婚移住女性に対してはそうした言及や態度が見られないことである。これは、東南アジア出身の移住女性に対しては、結婚を経済的な手段として利用する「純粋ではない」存在という先入観が強く反映しているといえる。では、ここでドラマ『黄金花嫁』を見た視聴者の国際結婚移住への認識がどのように変化していったのかを検討する。以下『黄金花嫁』の公式サイトでの視聴者掲示板に書かれている事例である。

事例 1) <2007.12.16 ID: tgasiaiol>数百年が過ぎれば、韓国人の 70%程度が現在の 20 万の東南アジア女性を先祖に持つことになる。1 千年が過ぎれば、すべての韓国人が現在 20 万の東南アジア女性を先祖に持つことになる。東南アジア女たちによる韓国人の血統征服は完全に完了する。大韓民国の純粋な血統を東南アジア人に拘束され、本当に悔しい。

事例 2) <2008.01.07 ID: easygun>黄金花嫁を注目しなければならない理由は、ベトナム花嫁(あるいは国際結婚新婦)に対して、一般人らが、もう少しなじみ深いと考えることができる土台を作ったことと(ベトナム新婦が遠い国の異邦人でない、なじんだ私たちの隣人であることを見せてくれたという点で)、国際結婚家庭も、お互いを理解して愛しあおうとする努力によって、韓国家庭より、さらに幸せになりえるという暗示を見せた契機になったという点だ。そのような点は、明らかに多くの困難を経験している国際結婚家庭に希望を与えるメッセージとして、作用されるだろう。

事例 3) <2008.01.24 ID: gbldk>たかがドラマではあるが、劇中のジンジュはいかなる状況の中でも、年齢は幼いが、真に忍耐力強くて、いつも愛する人らを配慮する美しい人に間違いありません。 このように美

しい彼女がもう少し私たちのそばに居てくれたら良いだろうが、それは私の欲でしょう。

事例 4) <2008.01.24 ID: whaedra> ドラマ『黄金花嫁』を見てからベトナムに関して関心が生じました。<中略>単純にベトナム女性が韓国に嫁にきて体験する苦難を描写しようと考えたならば、ジンジュの設定をライタイハンにしなければならなかったらどうかと疑問が浮かびます。<中略>もう少し、ベトナム状況に対する理解があったとすれば、もう少し現実性がある設定になっていないかという物足りなさを感じます。

事例 5) <2008.01.24 ID: whaedra> 『黄金花嫁』によって家族の愛に対して考えるようになりました。『黄金花嫁』から多く学びました。黄金花嫁、ジンジュのように、私もベトナム人である私のお義母に親孝行をしたいと思います。

事例 6) <2008.01.28 ID: jkl5537> 国際結婚が多いこの頃、移住女性に対する多くの素材を扱ったドラマを制作してください。ドラマを通じて、間接的ながら移住女性に対する理解と多文化に対して知りたいです。

事例 7) <2008.01.28 ID: shykbn> 『黄金花嫁』ドラマは、ベトナム女性たちの心の温かさを感じさせるドラマでした。ベトナム女性に関する韓国ドラマは、このドラマが初めてではないでしょうか?! 幸福と愛、暖かくて楽しいドラマであったようです。

事例 8) <2008.02.3 ID: rosecrust> 本当に家族愛に対して、もう一度考えることができました。父の情と母の情の描写、子供としての道理、切ることはできない血縁関係、国際結婚と韓国社会のそれに対する認識と偏見などを考えてみることになったドラマでした。

事例 9) <2008.02.4 ID: drsefsdf> 『黄金花嫁』 ドラマを見ながら、得たものは、まさに黄金花嫁はジンジュという移住女性を象徴的に暗示し、その暗示が単純なドラマ上でもでなければそのジンジュというキャラクターにだけ限定されるように見るのではなく、黄金花嫁を視聴した私自身にも、同じように適用させることで、私たちの社会がもう少し、笑いながら暮らせる幸せな、地球村にならないだろうかと考えます。

事例 10) <2008.02.4 ID: je0516> ドラマ『黄金花嫁』は、お父さんがものすごく好きでした。「ジンジュは、可愛くて立派だ」「ジュンウを悲しませてはいけない」といいながら、ものすごく心配しながら観ました。我が国で結婚をしに来られた方々が、そしてその間で生まれた子供たちに対する偏見で、困難を生きていくのをわかりました。また、このドラマを通じて、私たちが解決しなければならない課題が何か分かるようになりました。

事例 11) <2007.08.08 ID: パク>

私は、ベトナムから来た結婚移住女性です。国際結婚して韓国で生きることは大変なことですが、私はよくやっています。今、この書き込みは他の人の助けを借りて書いています。夫は優しくて良い人です。可愛い子供もいます。ところで、結婚して韓国に来て以来、ベトナムには一度も帰っていません。ドラマ『黄金花嫁』は毎週観ています。

事例 12) <2007.08.08 ID: タク・ジョンウン>

私は、ドラマ『黄金花嫁』を観るたびに故郷のことを思い出します。一度、故郷に帰って、家族に会いたいです。

事例 13) <2007.08.10 ID: ミン・スンホ>

私の妻は、ベトナム人です。結婚して 2 年目です。私は、このドラマをあんまり観ないですが、妻は毎回を欠かせずに観ています。観ていない

私にまであらすじを聞かせてくれるんです。たまに、一緒に観る時は私が知らない部分の内容を下手な韓国語で話してくれます。妻が、このドラマが好きな理由は、やはりベトナム新婦が登場するからです。妻は、ドラマ撮影現場を観覧したいと言います。

事例 14) <2007.08.12 ID: オ・ボンジュン>

私の妻の名前は、ウェンティチンです。ドラマ『黄金花嫁』を良く観ます。先日、ドラマの中でジンジュが母を呼びながら泣く場面を見ました。それを観て、私も涙が出そうでした。私も、ベトナム人女性と国際結婚をしました。私は、二度目の結婚でした。前の妻との間に二人の子供もいます。<中略> 仕事の現場で私は事故にあって、仕事も出来なくなって、凄く落ち込んで二人の子供の世話どころか、毎日、お酒にばかり頼っていました。ある日、皿洗いをしている私を見て友達が国際結婚を進めてくれました。当時、私は、家事や子供の世話をしてくれる人かもしれないという利己的な考えで国際結婚を選択しました。

当時、私は、36歳で二人子の父親でした。妻は、20歳の処女でした。妻は、言葉も通じないし、本当に寂しかったと思います。妻は、本当に頑張っています。子供たちの世話と私にもいつも良くやってくれます。私は妻がサポートしてくれたお陰で今は事故からの傷も治り普通の生活に戻りました。本当に妻に感謝します。また、今は「愛しています」と言えます。

事例 15) <2007.08.13 18:27:11 ID: キム・ギョンザ>

私はベトナム新婦です。韓国に結婚移住して、子供を産み幸せです。ドラマ『黄金花嫁』を見ながら色々な事を思いますが、私はドラマの中でジンジュが幸せになってほしいです。

事例 16) <2007.06.24 14:19:01 ID: ノ・ジョンフン>

ドラマ『黄金花嫁』を観て、ライタイハン母子に二重国籍になっても韓国国籍(IDカードを付与する)を与えなければならないと考えています。

そうしないと、ライタイハンに本当に悪いと思います。ドラマ『黄金花嫁』をこれからも続いて観たいですが、ライタイハン問題についてももう一度考えて見るべきだと思います。

事例 17) <2007.06.25 15:33:33 ID: キム・ソンヨン>

ドラマ『黄金花嫁』は面白いドラマだと思います。しかし、ドラマの中で表現する国際結婚については適切ではない表現が多いと思います。例えば、国際結婚斡旋業社の人がお見合い場に集まった韓国人男性らの前で、ベトナム人女性は...浮気さえしなければ認知症にかかっても夫を支える、という表現なんかはベトナム人女性たちが韓国に国際結婚で来ることが多い今、相応しくない表現ではないかと思います。

事例 18) <2007.06.28 11:29:55 ID:イ・ジョンズ>

私の妻は、ベトナム人です。ドラマ『黄金花嫁』を観ながら泣きすぎて大変です。妻は、ベトナムでライタイハンがベトナム人の間に存在する差別やイジメなどで本当に大変だといいます。黄金花嫁を見ながらもう一度彼らのことを考えました。



図 13 幸せな多文化家族像

ドラマ『黄金花嫁』の受容者（オーディエンス）の認識は、上記の事例を分析した結果、移住女性や多文化家族に対してポジティブな面が多く見られる。しかし、（事例 1）に取り上げたように、国際結婚問題を「韓国の純粋な血統」を崩壊させると批判的な面でも視聴者も多数あった。一方、ドラマを通じて、家族愛、夫婦愛、子供としての父母に対する

道理などを見直そうとするケースも見られた。特に、受容者の認識においては、ドラマの中の移住女性であるジンジュというキャラクターへ移住女性の現実が反映され、物語のジンジュに対する愛情、同情が促され、受容者は移住女性に対して肯定的な評価をもったと言える。さらに、ドラマを通じて、視聴者は、従来の移住女性への先入観、固定したイメージに対して反省する様子も見られる。また、ベトナム人視聴者と見られる（事例 11、12、15）からは、ドラマ『黄金花嫁』を観ることで、故郷への思い出や懐かしさを感じる様子が見られた。また、（事例 13、14、18）は、ベトナム人妻に対する思いについて話した韓国人男性の内容である。これらは、ドラマ『黄金花嫁』を観ることで、ベトナム人の妻に対してもう一度考えるようになったことや感謝の言葉が見られた。特に、（事例 14）の場合には、まさにドラマ『黄金花嫁』と同様に、国際結婚移住女性が現実にも「犠牲的な妻であり母親」である要素を十分に話してくれた。また、そのような要素を持っているからこそ「愛しています」という表現をしているように感じた。これは、まさに韓国人男性の移住女性に対する要求や条件、それに応えた移住女性であるからこそ「愛される」という家父長制主義である。従って、（事例 14）の男性は、ドラマ『黄金花嫁』を観て、ドラマの中での移住女性表象と現実の妻を同様に考えたかもしれない。これは、テレビドラマ『黄金花嫁』の中で表現される移住女性の表象と現実の移住女性を同一視し、ドラマが生産する意味を自然に受け入れてしまう可能性があることを明らかにした事例とも言える。一方、（事例 16、18）は、ドラマ『黄金花嫁』を通じて、国外にいるライタイハン問題まで社会的な関心を集めた結果になったことが示された。また、（事例 17）は、ドラマ『黄金花嫁』における国際結婚ベトナム移住女性に対する不適切な内容から意味生産過程における懸念を表わしている。

以上、これらの事例は、メディアが権力装置であることを再確認させる。つまり、ドラマの物語の中で表象される移住女性と多文化家族は、ポジティブに描かれることで、移住女性と多文化家族に対し新たな意味が付与され、「可哀相な」移住女性は「可愛くて、立派な」（事例 10）移住女性として認識された。これは、メディアが行うメッセージ生産の過程のなかで「意味生産の実践（signifying practice）」としての現れである。

映像の中の移住女性表象は、単に映像だけの問題ではない。そこには、現実の社会状況や歴史状況、また政治状況が反映されているのであり、反映の産物である映し出される集合体は、現実の状況とイデオロギーの地図のなかで、更なる複雑な関係性を形成し、一方では、単純な対立的構築が持続されている。また、表象の問題は、ニュースなどの時事報

道の問題だけではない、ドラマや映画のなかでの「表象」とも深く関係している。表象の問題は、メディアにおける制度だけの問題ではなく、もっと幅広い生活のなかでの現実の人々とメディアとのかかわりあいの問題である。1980年代のイギリスにおける黒人映画に関するスチュアート・ホールの考察では、エスニシティは表象の内部で生産されるとされ、彼は文化と表象の外部でアイデンティティを理解することはできないと主張する。ホールは、「文化的アイデンティティ」というフレーズを用いて明記しながら、表象という言葉に多様な意味を持たしている。例えば、本や映画は、「表象」として理解される。つまり表象の「外部にある」現実世界の反映や再生産として考えられる。言い換えれば、現実世界は表象の外部にある。しかし表象を通じてのみ、その現実世界に意味を持たせ、何かを「意味させる」ことができる。さらに表象は単に反映するのではなく、構成的であり、表象には現実の物質的な力がある。従って、メディアにおける移住女性表象は、メディアの制度に則り適用され、「規範化」された支配的な表現の規制によって、これまでは周縁で劣等なものとして表現されてきた。しかし、ドラマ『黄金花嫁』は、むしろ、メディアの制度に則り適用され、「規範化」された支配的な表現の規制によって、「可愛くて、立派な」存在として表象したのである。これは、ホールが「ブラック」というカテゴリーを普遍的な固定された、また本質を保証された人種カテゴリーではなく、それはあくまでも、構築、形成、編成されたものである、と示している<sup>119</sup>ように、ドラマ『黄金花嫁』は、構成される移住女性主体の歴史的、または文化的な経験の多様性や差異、主体位置、社会的経験、文化的アイデンティティの多様性を認めていくことになる。

<sup>119</sup> このホールの「ブラック」表象に関する議論について、伊藤は次のように整理する。「イギリスのブラック映画に関する会議でホールが提出したのは、『表象の諸関係をめぐる闘争』から『表象それ自体の政治学』へと方向付けられる認識の変化である、この変化は、表象概念それ自体を、単なる反映的また表現的なものとみなされていたものから、文化、イデオロギー、表象のシナリオといったものに懐疑を差し挟む政治的また形成的な場と捉えていく方向への変化である。〈中略〉その認識の変化がもたらすのは、「ブラック」というカテゴリーが、普遍的な固定された、また本質を保証された人種カテゴリーではなく、それはあくまでも構築、形成、編成されたものなのだという事である。」

伊藤明己、前掲書（1996年）29頁。

David Morley and Kuan-Hsing Chen, (eds.), 1996, *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies*, London and N.Y: Routledge, p.8.

## 第2節 韓国における国際結婚移住女性の表象

### 1. 韓国社会と増加する国際結婚の移住女性



図 14 ドラマの中で韓国農村男性とベトナム女性がお見合いする場面  
出所：SBS ドラマ『黄金花嫁』公式サイト <http://tv.sbs.co.kr/goldbride/>

1970年代の欧米では、国際結婚の形態として「郵便注文花嫁 (mail-order bride)」という方法が出現した。これは経済的に貧困な状況に置かれている低所得国家の女性たちが、経済的に豊かな外国人男性を求めて移住する手段でもあった。1980年代の日本と台湾の農村地域では、国内の女性と結婚できない男性たちが開発途上国の女性たちと国際結婚をし始めた。韓国における国際結婚は、1993年から2009年までの17年間で366,732件あり、この期間の韓国総結婚件数の6パーセントを示している。2009年を基点にすると10.8パーセントが国際結婚である<sup>120</sup>。韓国では1年間に30万組以上が結婚をするが、そのうち3万組近くが国際結婚となっている訳である。そしてこの大部分は開発途上国からの移住女性との結婚によるものである。韓国社会の中で、国際結婚をめぐる問題が注目されるようになったのは、ごく最近のことである。韓国社会において国際結婚の始まりは、韓国戦争（朝鮮戦争）以降の駐韓米軍基地周辺に形成された基地村における韓国人女性と米軍兵士との結婚が中心

<sup>120</sup> 参考資料1、表1を参照せよ。

であった。従って国際結婚に対するイメージは、否定的なものとして形成された。しかし、1990年の韓中修交をきっかけに、国際結婚は2004年韓国国内の全体結婚率の11.2パーセントを占めている<sup>121</sup>。2005年には、13.5パーセントを占めている。韓国人男性と結婚した外国人女性の数は、30,719名で、国際結婚の72パーセントを超えている<sup>122</sup>。特に農村社会においては、4組中1組が国際結婚となっている。この要因はどこに求められるのか。韓国社会の内部要因として、男女比の不均衡や農村地域を始めとする社会的脆弱な階層の男性の結婚の難しさが挙げられる。外部要因としては、グローバル資本によるアジアでの共同体の崩壊、市場開放による文化や情報への容易なアクセス、未熟練労働者に対する厳しい制限政策などにより労働力の移動手手段として、私的領域に属しているために比較的入国が容易である国際結婚を選択するケースが増加していることが挙げられる。国際結婚を通じた移民女性は、外国人労働者の移住が始まった時期である1990年代初めから増え始める。それに伴い、商業的な目的と資本化の加速により、国際結婚を支援する方法が新たに生まれる。既存の国際結婚の方法は、男性がブローカー費用を出し、女性を連れて来るモデルであった。しかし近年では、逆に女性がブローカー費用を出し、男性は観光をしながら現地女性に会い、女性が結婚を通じて移民するように助けるモデルが中国で行われている<sup>123</sup>。国際結婚を通じて入ってくる移民女性は、統計庁人口動態調査によると、ベトナム出身移民女性の場合2002年に476人であったが、2003年には1,403人に増加している<sup>124</sup>。具体的に、国際結婚移住者の出身国を見ると、女性の場合、中国朝鮮族が37.6パーセント、中国が22.4パーセント、ベトナムが17.8パーセント、日本、フィリピン、モンゴル、タイの順であり、男性の場合、中国朝鮮人が42.1パーセント、中国が17.7%パーセント、アメリカ、日本、バングラデシュ、パキスタンなどの順になっている<sup>125</sup>。特に、中国朝鮮族の場合、円滑なコミュニケーションができること、同じ血統という民族的同質感などを理由に、他国出身の女性に比べて好まれてきた。しかし、社会主義教育の影響から女性としての高いプライドを持ち、家庭内での家父長的韓国人男性との頻繁なトラブルが生じていた。また中国朝鮮族に対する就業

<sup>121</sup> 1990年代初韓中修交以降、「農村男性」と「延辺女性」の結婚から始まった国際結婚は現在、都市男性の国際結婚の増加によって農村という地域的な境界による特殊な事例ではない韓国社会の新しい結婚形態として認識されている。

<sup>122</sup> 参考資料1、表1を参照せよ。

<sup>123</sup> このような特徴が見られる映画としては、2005年公開された映画「나의 결혼 원정기 Wedding Campaign」：私の結婚遠征期」がある。この映画は韓国の農村男性がウズベキスタン女性との結婚のために国際結婚仲介業者を通じてウズベキスタンに行きながら観光しながらウズベキスタン女性に会う過程を描いた作品である。この映画は近年の国際結婚をめぐる問題を描いた作品であるといえる。

<sup>124</sup> 統計庁人口動態調査

<sup>125</sup> ヤン、前掲書（2008年）

機会の拡大に伴い、国際結婚をしなくても韓国に入国することが出来るようになったため、中国朝鮮族との国際結婚は徐々に減りつつある<sup>126</sup>。一方、男性による移住は一般労働を中心に行われるが女性による移住は、国際結婚または性産業関連の労働を中心に行われる場合が多い<sup>127</sup>。近年性売買の規制により、国際結婚を通じた移民は急速に増えてきた。最近では韓国の外国人移住形態は「男性＝労働移住」、「女性＝結婚移住」と図式化されるほど移住の性別の区別が明らかになっている<sup>128</sup>。

一方、統計庁によると、韓国は2018年を境に生産労働人口が大きく減少し、2050年には2005年の総人口に対する生産労働人口71.7パーセントに対し、約18パーセント減の53パーセントに達すると予測されている。これを受けて、韓国政府は少子高齢化社会に備えるための対策として、外国人労働力の受け入れ政策を積極的に検討している<sup>129</sup>。

しかし、国際結婚を通じて韓国に入ってくる移住女性は年々増加しているが、いまだに国際結婚移住女性を眺める視線は、男性中心的<sup>130</sup>であり、「経済的理由で韓国人男性と結婚した貧しい国の女性」という差別的な視線が存在している。一方、開発途上国からの女性と結婚した男性のイメージは、「貧困、高年齢、障害者」という周辺化された男性としてのイメージが強い。さらに、韓国における外国人移住者が大きく増え、移民社会に向けて様々な政策が積極的に模索されているにもかかわらず、韓国社会における移住者は、「単一民族」や国益優先というイデオロギーの影響で、依然として排他的な他者として存在している。これは2006年の女性家族部による、韓国で生活しながら最も辛かった点についての実態調査からも明らかになっている。そこには、孤独感が23.2パーセントを占めて、文化の違いが15パーセント、言語の問題は11.8パーセントなどを挙げている。結婚移住者の女性たちは、国籍を取得し住民登録証さえ受け取れば韓国人になれると思っているが、韓国社会に深く根付いている「単一民族」<sup>131</sup>、「血統主義」は、彼女たち自身を自ら他者化するよう強要している。また結婚移住者の女性に対する偏見、例えば、「いつ逃げるか分からない」、「お金のために結婚した」、「国の家族にお金を送金することだけを考えている」などとい

---

<sup>126</sup> ヤン、前掲書（2008年）

<sup>127</sup> 金イソン、前掲書（2006年）5頁。

<sup>128</sup> 同書、5頁。

<sup>129</sup> ヤン、前掲書（2008年）

<sup>130</sup> 韓国文化と韓国語の習得を一方向的に強要され、移民女性を主体的存在としてより家族関係の役割だけ強調されることで女性という主体性を抑圧される。

<sup>131</sup> 韓国社会は、相互のコミュニケーションがとりやすく、社会的にまとまり、国際的な競争力も持ちうる「単一民族神話」を使用してきたといえよう。

った偏見は、移住女性の人格そのものを否定することにつながる<sup>132</sup>。

新聞報道における韓国国際結婚移住女性の表象について研究を行った李は、韓国新聞報道による国際結婚表象は、差別的に選定された新聞記事に見られるように一連のステレオタイプを生産する効果があると指摘している。さらに新聞記事の多くは、新しい社会的現象として国際結婚問題を俯瞰する意図をもつため、国際結婚現象を都市と農村という二分的な現象として描写する傾向があると指摘する<sup>133</sup>。

このような国際結婚の増加は韓国に限った話ではなく、日本、中国、台湾などのアジア諸国でも、すでに進行している現象である<sup>134</sup>。日本は1980年代からフィリピン、韓国、中国、台湾などから、多くの国際結婚移住者を受け入れている。1970年には2,108人の女性が日本に来たに過ぎなかったが、その数字は1980年代に入って4,386人と急増し、1990年には20,026人を数える。1990年からは、毎年21,000人の女性たちが日本に結婚移住をしていて、2000年には結婚全体の4.5パーセントを国際結婚が占めている<sup>135</sup>。日本の場合と同様、台湾も純粋に結婚を目的にする移住女性の数は、現在まで160,000人であり、2000年には34,291人に達した。台湾も、中国と東南アジアからの結婚移住が1990年代から徐々に増加した。1998年から2001年の間、結婚移住によって構成された世帯数は2倍に、女性移住者の数は12パーセント以上増加した。2000年に結婚全体で女性移住配偶者の割合は9.5パーセントを占めるまでになった<sup>136</sup>。2003年においては台湾における新婚カップルの内、女性が外国籍であった比率は28.36パーセントという高い割合に上がっている。これは、同年の外国籍男性配偶者の3.5パーセントに比べて非常に高い割合である<sup>137</sup>。このように、国際結婚は、国家間の境界を横断する一つの移住手段になっている。従って、アジアでの結婚移住は、国際労働移住と同様、グローバル化された移住の流れの重要な部分を占めている<sup>138</sup>。しかし、国際結婚移住は、国境を越える移住と結婚と結合により、女性労働移住とは異なる形態やジェンダー化された国際労働分業体系のなかで現れるジェンダー化された移住形式という

---

<sup>132</sup> ヤン、前掲書（2008年）

<sup>133</sup> 이경진 「국제결혼이주여성의 미디어 재현과 초국가적 정체성에 관한 연구」 이화여자대학교 대학원 석사논문 2008년 18쪽 (=李キョンジン「国際結婚移住女性のメディア表象と超国家的アイデンティティに関する研究」梨花女子大学校大学院、2008年、18頁。)

<sup>134</sup> Davin(2007)、Suzuki(2003)、Wang and Chang(2002)、Burgess(2004)

<sup>135</sup> Chris Burgess, 2004, "(Re)constructing Identities: International Marriage Migrants as Potential Agents of Social Change in a Globalising Japan", *Asian Studies Review*, vol.28.

<sup>136</sup> Hong-zen Wang and Shu-ming Chang, 2002, "The Commodification of International Marriages: Cross-border Marriage Business in Taiwan and VietNam", *International Migration*, vol.40(6), pp.95-97.

<sup>137</sup> 横田洋子「台湾・国際結婚移住者をめぐる社会人類学研究 台中県勢鎮の事例から」『2007年度 財団法人交流協会日台交流センター 日台研究支援事業報告書』（2008年）2頁。

<sup>138</sup> Hong-zen Wang and Shu-ming Chang, (2002), p.94.

点で、女性移住労働と区別される曖昧な境界が現れる。つまり、性的サービス、感情労働、家事労働などの再生産労働（reproduction）を中心とし、女性たちは国境を越えるという点において結婚移住と労働移住には曖昧な境界が現れるのである<sup>139</sup>。労働移住を通じた開発途上国からの移住女性が、性商品化された再生産労働領域で輸入されるのに対して、結婚移住女性たちは無報酬再生産労働を提供する低所得階層の男性家族の中に編入されているのである。まさに、女性労働力の「主婦化」であるが、韓国社会に移住した開発途上国移住女性たちは言葉通りの「主婦」になるのである。また、女性移住労働者は、労働市場に編入され公的制度を通じて、ある程度の自立権を行使することができるものの、結婚を通じて移住する女性たちは、私的空間である家族へ編入されるがために、男性配偶者とその家族の統制下に置かれる危険性がある<sup>140</sup>。

## 2. 国際結婚から見る階級・民族・ジェンダー

21世紀のグローバリゼーションのなかで、国際移住は著しい現象として表れている。こうした国際移住の原因は、国家間、地域間の不均等な経済発展にあるが、その中には人種、ジェンダー、階級などの関係が複雑に組み合わさっている。特に東南アジア地域では、移住の女性化が特徴として現れている。また歴史的に「単一民族」であったと言われた韓国が、このような変化の中心に位置している。特に韓国において、最も多い国際結婚移住について考察する際に重要な点は、家族を構成する基本的な制度である結婚が、世界経済体制、ジェンダー、民族、国家との関係の中で再構成されているという点にある。韓国社会が国際結婚を、家事、出産、性的パートナー、介護といった再生産労働力を担う手段として活用しようとする意図が存在する。一方でアジア圏の開発途上国の女性たちは、結婚移住を通じて、自分の出身国より裕福な国家の男性と結婚することで、貧困を克服するための一つの戦略としてそれを選択し、国境を越える決心をしていると言えよう。しかしながら、父系家族制度と「単一民族」神話がある韓国社会文化と、国際結婚を選択する移住女性の間には大きな認識の差が存在している。例えば、韓国農村で行われる国際結婚の場合、韓国人男性家族らは、国際結婚移住者に犠牲と同化を要求する。一方で移住女性たちは、

<sup>139</sup> Y.Kojima,2001, "In the business of cultural reproduction: theoretical implications of mail-order bride phenomenon", *Women's Studies International Forum*, Vol.24(2), p.201.

<sup>140</sup> 윤형숙 「지구화, 여성이주, 한국사회의 성적 인종적 위계만들기」 제 21 차 한국여성 학회 춘계 학술대회 발표논문, 2005 년, 1 쪽 (=윤・ヒヨンスク「グローバル化、女性移住、韓国社会の成績人種的位階作り」第 21 次 韓国女性学会 春季学術大会発表論文、2005 年、1 頁。)

韓国人ではない外国からの異なる文化の所有者であることを認めて欲しい、と考えている。また、自分の人生のために多様な選択肢が与えられることや経験が積めることを願っている。このような認識の差異は、世界経済体制の中で形成された国家間の経済的な不平等を反映したものである。韓国における国際結婚移住女性たちは、その多くが東南アジア出身で構成されているが、その女性たちの出身国である開発途上国では、グローバルな経済構造の圧力によって、農業中心の産業体制から商業化と急速な資本主義化へと転換を図るなかで、都市貧民と貧しい農業労働者を量産している。この過程のなかで、貧困から脱却するための方法として女性たちは、取引のための費用が比較的安く、経済的には利益になり、さらに合法である結婚を選択するのである<sup>141</sup>。しかし開発途上国からの国際結婚は、個人的な選択だけで成立するのではなく、結婚募集人、仲介業者、旅行会社、ブローカー、社会团体など、国際結婚移住を取り囲む複雑なゲートキーパー<sup>142</sup>たちによって可能になっているのも事実である。韓国女性政策研究院の報告書によると、一般的に国際結婚が成立する通路として、商業的な仲介業者を介した結婚、宗教団体を介した結婚、国際結婚をしている夫婦や韓国で働いている家族あるいは親戚の紹介による結婚、外国人労働者の韓国滞在が長期化し、日常生活での恋愛で結婚する場合などに分けられる。初期費用や資本の投資をしなくても高所得が上げられる商業的結婚仲介業は、1998年に制度が簡素化して以来、2005年には約2,000社以上に増えている。このような斡旋企業の介在は、その過程において様々な問題点が表出している。例えば、借金を背負って移住する労働者たちの問題があげられる。また国際結婚の場合、韓国人男性がブローカーや斡旋業者へ支払う費用と国際結婚移住女性への支払う費用の負担を上げられる。これらの金銭がやりとりされているという問題を通じて、「売買婚」という表象が作り出された。また、2005年に保健福祉部が実施した結婚移住実態に関する調査結果によれば、金銭を払って買ってきた新婦という認識の下、移住女性に対する、婚家や親戚の傲慢な態度や、夫の情緒不安定からくる家庭内暴力、あるいは不和などが少なくないことが報告されている<sup>143</sup>。またドラマ『黄金花嫁』で表象されたように、移住女性と結婚する韓国人男性は、アルコール中毒や歪んだ性的嗜好、暴力を習慣的に振るったりするような、韓国では周辺化された男性たちが、資本によって国際結婚市場に存在している。更なる問題として、そのような男性たちとその家族は

<sup>141</sup> 金ヒョンミ、前掲書（2006年）

<sup>142</sup> Hong-zen Wang and Shu-ming Chang, (2002), p. 94.

<sup>143</sup> 보건복지부(설동훈)「국제결혼 이주여성 실태조사를 통한 복지지원정책 개발」KDI 경제정보센터, 2005년. (=保健福祉部「国際結婚移住女性実態調査を通じた福祉支援政策開発」KDI 経済情報センター、2005年)

結婚生活を維持するため、外国人女性配偶者を統制することが明らかにされている。国際結婚による移住女性たちを伝統的な韓国家庭の中に編入しながらも実際のところ異邦人として他者化しているのである。

李によると、国際結婚は伝統的な家族内の性別役割分業が国際的な次元で行われるという点から国際性別分業にセクシュアリティが直接的に作用するという具体的な例であると指摘する<sup>144</sup>。主に東南アジア女性の性と家事労働、次世代の再生産が、結婚という形式で韓国農村男性に提供されるが、それは、男性は生計扶養者として、移住女性は専業主婦として、次世代の労働力生産者という役割を果たすという伝統的家父長的な性別分業論理に基づいている。これはグローバル化のなかで、韓国の都市地域と農村地域の間での不均衡が、互いにかみ合いながら作られる時代的現象であると指摘されている<sup>145</sup>。韓国の農村の場合は、その性別役割分業がより伝統的で、家父長制的制度下で行われる。さらに、ジェンダー秩序に包摂された移住女性のセクシュアリティは、家父長的文化の中で従順で、伝統的な女性として再生産され、韓国人女性に比較して、より父系家族を再生産し易い従来の母親像をそこに作り出している。

### 3. 国際結婚と移住女性の商品化

「ベトナムの乙女、費用 780 万ウォン：初婚、再婚、障害者歓迎」、「ベトナムの乙女は絶対に逃げません。」これは、韓国における国際結婚業社の広告文句である。このような、性差別、人種差別的な広告は国際結婚商業化を代弁している。商業化された国際結婚市場では、韓国人男性を国際結婚市場に誘引するために、外国人女性を従順で、若く、性的な魅力を強調して表象している。また国際結婚の消費者として韓国人男性を扱い、開発途上国のアジア人女性たちを韓国の家父長制的な文化へ容易に同化可能な女性として表象することで、彼女たちとの結婚に対するファンタジーを作り出している。

<sup>144</sup> 이수자 「이주여성 디아스포라-국제성별분업, 문화혼종성, 타자화 섹슈얼리티」 『한국사회학 제 38 집 2 호, 189-219 쪽 (＝李スザ「移住女性ディアスポラ—国際性別分業、文化混雑性、他者化とセクシュアリティ）』『韓国社会学』第 38 集 2 号、2004 年、189-219 頁。)

<sup>145</sup> 同書、207 頁。



図 15 左「ベトナムの乙女、費用 780 万ウォン：初婚、再婚、障害者歓迎」と書いてある国際結婚斡旋業社の広告 出所：<http://www.khan.co.kr/> 右：国際結婚仲介業社のサイトからみる商品のように並んでいる移住女性イメージ。

出所：CH国際結婚社 [www.chwedding.net](http://www.chwedding.net)

2006年4月21日、韓国の新聞<朝鮮日報>社会面は「希望の地、コリアへ」というタイトルの記事を大きく紹介している。この記事を見た韓国のベトナム留学生たちは激昂した。記事の内容は、記者がベトナム、ホーチミン市のある国際結婚仲介業社を訪問し、韓国人男性がベトナム人女性たちを「選択」し、ベトナム人女性たちは韓国人男性に「選択される」という、対立した過程を生々しくと紹介している。この記事では、韓国人男性の前におとなしく座っているベトナム人女性 10 余名の顔が、モザイクなしに鮮明に写されている写真も一緒に掲載された。「朝鮮日報」の記事に関する問題は、「韓国人男性（経済的に優位にある国の男性）とベトナム人女性（貧しい国の女性）」という、二項対立的な位階秩序を土台に、国際結婚を眺める一部の韓国人の視線が、両国間の個人的な葛藤のみならず、国家間の問題に広がる可能性があることである。

また、国際結婚仲介業社が運営するインターネットサイトは、国際結婚移住女性を「販売」する道具として活用されている。そこでは、国際結婚移住女性たちを国家別、人種別に、その特徴が紹介され、移住女性の身体は商品化されている<sup>146</sup>。インターネットサイトからみる国際結婚斡旋業者は、移住女性たちの純潔性や教育レベル、経済的能力、再婚か

<sup>146</sup> 김수정 「아시아 여성의 국제결혼에 대한 미디어 담론-한국 미디어의 재현방식을 통해」 『한국언론정보 학보』 2008년, 통권 43호, 386-426쪽 (=金スジョン 「アジア女性の国際結婚に対するメディア談論-韓国メディアの再現方式を通じて」 『韓国言論情報学報』 2008年、通巻 43号、386-426頁。』

初婚か、などを商品化して、アジアの女性たちにおける多様なメディアで表象される他者性を強調すると同時に、お金だけあればいつでも購入できる商品として陳列されている。これは結果的には、家庭での不平等な権力関係を強化することにつながっている<sup>147</sup>。

急増する国際結婚において必ず解決しなければならない問題は、人身売買的な性格と女性の商品化である。国際結婚仲介会社の「後払い制」のような露骨な宣伝文句や、サイトに表れる内容を見れば、この点が明確になるだろう。現地国家に到着後一日で花嫁を選択し、翌日には結婚式をあげる国際結婚の過程も同様の問題を抱えている。売買婚の性格を持った韓国人男性たちと外国人女性たちとの国際結婚は近年、言論、放送など多様なマスコミ報道を通じて広く知られ始めた。結婚が韓国で国際的ビジネスの形態として表れたことについて、金は西欧で先行した「郵便注文花嫁 (mail-order bride)」事業と、その脈絡を共にすると指摘する。「郵便注文花嫁」は、女性の身体を購入することが可能な商品として扱う。男性はインターネットの商品リストから、自分の好みに合う女性を選び、クレジットカードでその対価を支払えば、女性は国境を越えて直ちに「配達」される。この時、女性たちの大部分は、アジアの低賃金国家出身である。Chunの研究によると、アメリカ人男性が、アジア女性を好む理由は、アジア系女性に対する「オリエンタリズム」的な幻想、リベラルでキャリア志向のアメリカ女性に対して、伝統的な古きよき価値観を身につけているからであると指摘し、家父長制維持を希望する男性の意図が見られると述べる<sup>148</sup>。また、ミースも、ドイツ人男性たちがフィリピン人女性を望むのは、ドイツ人女性が家庭よりも仕事やキャリアに関心を持っていることに対し、フィリピン人女性は家庭を何よりも重視し、ドイツ人女性のように物質的ではないからであると指摘する<sup>149</sup>。一方、商品化された女性を注文する男性たちは、西欧の高賃金国家男性だけではなく日本及びその他のアジア各国の男性たちが大部分である<sup>150</sup>。カタログに登場する女性は、男性購買者のために異国的な性サービスを提供する「セックス機械」<sup>151</sup>として表現され、男性に従順であることが強調されて宣伝される。したがってフェミニストたちは「郵便注文花嫁」事業を「異性的愛的結合という結婚制度が人種差別主義と女性の身体の商品化と結合した一つの

<sup>147</sup> 金ヒョンミ、前掲書（2006年）

<sup>148</sup> C.Chun, 1996, *The Mail-Order Bride Industry: The Perpetuation of Transnational Economic Inequities and Streatyoes*, 17 U.P.A.J. International Economy, L, pp.1155-1187.

<sup>149</sup> マリア・ミース著、奥田暁子訳『国際分業と女性化—進行する主婦化』（日本経済評論社、1997年）  
Maria Mies, 1986(1998), "Hoesewifization International: Women and the New International Division of Labour," *Patriarchy and Accumulation an a World Scale*, London: Zed Books, pp.112-144.

<sup>150</sup> 金ヒョンミ、前掲書（2005年）80頁。

<sup>151</sup> 同書、80頁。

例」であると指摘している<sup>152</sup>。さらに、金は「郵便注文花嫁 (mail-order bride)」事業に対して「購買者として西欧男性の自我をけしかけるために、手強くて女性解放意識が強い西欧女性と『従順』で『服従的』で『性的に魅力的』な女性を対比しながら、アジア女性に対する偏頗的なイメージをけしかける」と評する。今日、韓国社会での性売買形式の国際結婚をめぐる女性の商品化はあまり驚くべき新しい事実ではない。こうした国際結婚の仲介業者は、結婚希望者の募集やお見合いでの人身売買的なプロセス、配偶者に対する虚偽・誇張情報の提供、高額の斡旋費用、反人権的な事後管理などの問題が深刻化したために、2007年には国際結婚の仲介業者を管理する法律が制定された<sup>153</sup>。国内結婚の仲介業者については申告制に、国際結婚については登録制に切り替わった。仲介業者が結婚の仲介業務を行う際に、虚偽・誇張の広告や個人情報の流出を禁じているが、商売に走る仲介業者は、結婚移住者の女性は、夫の家族のために犠牲にならなければならないと強調したり、貧困に耐える強い生活力を要求したり、夫に従順に従わなければならないというイメージを植え付けている。これは平等であるべき家族観を歪曲させるだけでなく、結婚と女性を一つの商品として売買の対象として取り扱っている点で変わっていない。しかし、韓国人男性と外国人女性の間の国際結婚を、西欧の「郵便注文花嫁 (mail-order bride)」事業のように人種差別と女性の身体の商品化の結合だけで理解することは限界がある。李スザが述べたように、韓国人男性と低賃金国家、主に東南アジア出身女性の間の国際結婚は多くの場合、男性が生計扶養責任者として、女性が専業主婦であり、同時に次世代の労働力生産者としての役割を担当する伝統的な家父長的性別分業論理によって成り立っているからである<sup>154</sup>。

ここまで韓国に結婚を通じて入ってきた移民女性の生を理解するために、資本が主導するグローバル化の文脈の中で、これら女性の人種とセクシュアリティと家父長的なジェンダー関係を分析してきた。また移民女性の多重的なアイデンティティが、韓国社会で排除と差別の源であると認識されるという、文化的要素についても考察を行った。こうした研究から、移住女性に対する排除と差別は、韓国社会において、移住女性たちが肯定的で主体的な自我の獲得を不可能とし、結果的に移住女性たちが内外で多様な差別に晒される可能性があることが確認できた。しかしながらここまでの分析から、今現在は結婚移住に対しての否定的な側面が強調されるものの、すべての移住家族に問題があると判断するのは早計である。金京姫は、結婚移住家族によって形成された多文化家族が、今日の主流であ

<sup>152</sup> 同書、80頁。

<sup>153</sup> ヤン、前掲書(2008年)

<sup>154</sup> 李スザ『移民女性ディアスポラ』(韓国社会学、2004年)207頁。

る家父長的な家族秩序に亀裂を生じさせる可能性を秘めていると述べる<sup>155</sup>。また、これによって生じる亀裂は、従来の国家による移民政策や結婚移住に関する道具主義的な政策の変化と、多文化の担い手である移住女性たちのエンパワーメントから、無視できない影響を受ける、と指摘する<sup>156</sup>。では次節からは、国際移住女性の編入により構成された韓国多文化家族について考察する。そして、ドラマ『黄金花嫁』から見る多文化家族表象が現実の多文化家族と、どのようなずれを持つのか確認する。同時にメディアによる国際結婚移住女性を含む韓国多文化家族に対する意味生産について分析を行う。

### 第3節 多文化・多文化家族と移住女性

#### 1. 国際結婚の論点、国際結婚移住女性と多文化家族

韓国社会は現在多民族、多国籍社会への急激な変化を経験している。この数年間、韓国社会でもっとも多用されている言葉の一つが「多文化」である。急速なグローバル化とともに女性の国際移動が増大する中で、不法移住女性に対する人権侵害と人身売買問題、移住が送出国と移住国の発展に及ぼす影響、移住女性のエンパワーメントなど多様な社会問題が国際政策の主要議題としても登場している。韓国では労働移住と婚姻移住などを通して移住するアジア女性移住者数が年々増加している。中でも、露骨に商業化された形態の国際結婚は、結婚が成し遂げられて実際移住が成り立つ過程でも多くの問題と危険を内包している。歪曲された配偶者に対する情報、人身売買的要素、結婚仲介業者の横暴などが代表的な危険要素である。移住女性に対する暴力はその過程内での問題でだけで終わるのではない。経済的な問題だけでなく多くの移住女性たちが性的虐待、殴打のような身体的虐待、再生産労働領域においての大きな負担、文化・民族的差異などについての言語・情緒的な虐待を経験している<sup>157</sup>。また、このような極端な状況とは別に、国際結婚の問題は多文化家族に対する認識問題にも関わり、例えば、過去にも問題視された「混血児」の問題とともに国際結婚の増加に伴う子供たちを巻き込んだ問題も浮上する<sup>158</sup>。

<sup>155</sup> 金京姫著、張恵英訳「グローバル化時代における韓国家族の変化と挑戦：トランスナショナルな家族を中心に」『立命館大学人文科学研究紀要』92号、2009年、203-228頁。

<sup>156</sup> 同書、222頁。

<sup>157</sup> 安貞美「韓国における移住女性—映画『she is』を中心に」千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書『身体・文化・政治』2008年、85-96頁。

<sup>158</sup> かつて韓国では、いわゆる国際結婚、あるいは自国民と外国人の内縁的な家族関係は、韓国に展開する米軍基地の軍人と韓国人女性との組み合わせであり、国籍とジェンダーの点で現在とは正反対のパターンが大部分を占めていた。韓国とアメリカの間にある圧倒的な政治経済的格差のもと、さまざまな

現在、移住女性および多文化家族に対する問題は社会的に大きく顕在化している。今まではこのような問題を無視してきたため、その副作用が放置されたままであったが、現状では、問題を解決するために各地で努力がなされている。このような努力は、韓国メディアからも視かれる。しかし、移住女性、多文化家族に対する既存の認識は、問題解決において大きい障害となっている。

多文化家族の増加の急増により、2006年には、盧武鉉（ノ・ムヒョン）前大統領が国政会の席上で「多人種・多文化への進展は逆らうことはできない大勢である。」と話し、多人種・多文化への転換を宣言した<sup>159</sup>。それ以来、韓国では多文化家族のための政策が計画され始めた。その多文化政策の対象は、国際結婚移住女性が含まれている多文化家族への支援が多くあるが、そこには移住女性に対する定形化されたイメージが強く見られる。つまり、移住女性は開発途上国の貧困な女性で、学歴も低くて、韓国語も話せない、受動的で無能力なイメージである。そのイメージの想定の下で、国際結婚移住女性たちが韓国社会のなかで母として、妻として、嫁としての役割を果たすために必要な政策が、温情主義的観点から作られた<sup>160</sup>。しかし、このような観点から作られた政策には、自民族の優越主義が現れる。また現在の移住者家族の日常生活においても、多文化家族というより、移住女性に韓国文化の秩序に従わせることを要求する傾向が支配的である。さらに金は、多文化主義とは何であるかについては十分な議論がなされていないことを指摘しながら、法的な側面と国籍の取得に関する問題点について、次のように述べている。

市民権の領域を拡張して社会の解放的な共同体を確保しようとする努力がある。国籍については、政府が現在すすめている『多文化家族支援』は韓国国民が必ず含まれる家族への支援が中心であるため、多くの移住労働者が排除されるという問題点があり、他方では、結婚を通じて移住する女性は市民の資格と国民の資格を与えられうる者とみなされる。究極的に誰のための支援かといえば『韓国民族の父系血統を守ること』が念頭に置かれているのであると指摘する<sup>161</sup>。

---

状況のもとで米軍軍人と関係を結んだ韓国人女性たち（多くが貧しい階層の出身である）は、民族的な「純血」性を好む韓国社会においてスティグマを負わされ、子供たちは「混血児」というレッテルを貼られ蔑視されていた。徐阿貴（2007年）

<sup>159</sup> 韓国『京郷新聞』2009年6月21日。

<sup>160</sup> 「新しい隣人、多文化家族：金ヒョンミと李スクジンの対談」韓国『京郷新聞』2009年6月21日。

<sup>161</sup> 金ヨンオク「女性の人權の視点から見る国際結婚 韓国の女性の国際結婚移住者と多文化家族」『日韓連続シンポジウム報告書』2007年。

多文化家族のために行われる様々な政策が、国際結婚移住女性の「生」に直接的な影響力を与えるのは事実である。また、韓国における移住女性たちのイメージも、彼女たちに直接関与する政策の計画に影響を与えている。つまり意味生産されたメディア表現は、また現実社会の中で求められている慣習化された女性像を表象することで、意味生産しているのである。従って、メディアに表象される移住女性のイメージが現実とどのように異なり、歪曲されているのかを確認する作業は重要である。

## 2. 韓国における家族構造の変動—農漁村の地域を中心に

韓国には家族と関連した二つの大きな変化が社会問題として提起されている。一つ目は、韓国女性の未婚率の増加と出産率の低下である。2000年には25から29歳の女性未婚率は37%で高い数値を示している<sup>162</sup>。出産率は、1985年にはすでに1.7に低下しており、2004年には1.16に激減した。「韓国女性の出産ボイコット」と呼ばれるこのような現象は、韓国における家族の父系的(patrilial)性格も変化していると金ミンジョンは提示している<sup>163</sup>。端的に、女兒100名にあたり男児の出生比率は1993年115.5から2001年には110に下落するが、3人目の子の性別比率は2004年、131.2であることから、韓国家族の父系的性格が根本的に変化しているとはいいい硬い<sup>164</sup>。

二つ目は、国際結婚の増加である。特に、農漁村の地域で結婚する男性の多くが国際結婚を行い、ベトナム、フィリピン、タイなどの東南アジア国家の女性と結婚している<sup>165</sup>。このように韓国において国際結婚は、韓国の農漁村の地域の男性を中心に行われていると言っても過言ではない。韓国の農漁村の地域の男性は特に、家事や父系大家族を維持してくれる花嫁を求めて国際結婚を選択する。したがって、韓国家族の父系性は国際結婚によって維持されようとしている。しかし、金は、韓国人男性の国際結婚は韓国家族の父系的性格を強化するのか、という指摘に対して、全般的に韓国社会は、家族の関係と道徳を

<sup>162</sup> 韓国女性研究院 女性通計 DB

<sup>163</sup> 김민정 「국제결혼과 한국가족의 부계적 성격」 『이주 시대, 아시아의 여성이주와 가족구조 변동』 이화여자대학 아시아 여성학 센터, 2008년 199-216 쪽. (金ミンジョン 「国際結婚と韓国家族の父系的性格」 『移住時代、アジアの女性移住と家族構造の変動』 梨花女子大学 アジア女性学センター、2008年、199-216頁。

<sup>164</sup> 統計庁、韓国女性研究院 女性通計 DB

<sup>165</sup> 法務部、『出入国管理統計年簿』2006年、461頁。

脱権威的で性平等的な方向で変化している、と反論する。また東南アジア文化圏の親族認識は、父系に従わないような、より性平等的な両側体系 (bilateral system) であるため、妻が父系体系を受け入れるには限界がある、と述べている。

グローバル化の影響は国家別に差別的に現れ、今日の国際移住増加に寄与している。国内においても地方は中央とは違ってグローバル化による否定的な影響をより一層多く受けることになる。特に、地方社会の経済力の下落は、農村共同体の再生産危機を通じてより増幅される。韓国の農家人口はかつて 1975 年からマイナス成長をし始めた。全体農家中営農後継者がいる比率は 1990 年代すでに 16.4% で低い状態だったが 2005 年になると 3.6% でほとんどゼロに近い。したがって、早くも 1990 年度から韓国系の中国人 (朝鮮族) との国際結婚が「農村興し」の一環として推進された。地方と農村での国際結婚を眺める視線は、肯定的だけではなく、時には否定的でありながら、切迫することさえある。地方新聞の論説委員は、「外国人花嫁は、地域で子供の泣き声を聞かせ、農村男性の営農意志を生かし、高齢の舅の介護など農村社会で活躍しながら役割を固くやり遂げている」と移住女性を奉る<sup>166</sup>。

国際結婚においては、移住女性が韓国農村で必要な存在であることが強調されながらも、国際結婚過程において、韓国農村男性を消費者としてみる視線もまたある。

### 3. 移住女性の「生」

韓国ドラマ『黄金花嫁』の主人公ジンジュは、自分が生まれた国では、誰よりも明るく、韓国語が話せて、韓国企業で働く優秀な人材として描かれている。しかし、韓国にきた途端、彼女は、韓国語も下手に話し、外国人登録証とクレジットカードの区別もできないまぬけな存在として描写される。社会的弱者として移住女性個人を尊重するより、個人性を無視する社会からの眼差しによって、自分の存在を卑下し、否定的に認識することで、結果的に劣等感と歪曲された自分のアイデンティティを形成してしまうことになる。移住女性は、国境を越える移住により、生まれ育った本国での個人的な社会的支持や資源から離れることで、個人的かつ社会的、文化的にアイデンティティの混乱を経験する。一方、チェの研究によると、国際結婚移住女性は、韓国社会に完全に適応するより、自分が属している集団からアイデンティティの新しい確認を通じて、分離 (separation) 形態の文化適応

<sup>166</sup> 韓国『カンウォン都民日報』2005年10月11日。

を行っていることが明らかになる<sup>167</sup>。移住女性は、韓国社会と多文化家族における適応過程の中で、挫折したり、新しい経験をしながら、新しいアイデンティティを発見するのである。国際結婚移住女性は韓国人との結婚生活のなかで、疎外されたジェンダーとエスニック世界で生きるより、夫と共に新しい相互互恵的な空間と親密な紐帯を作り出している<sup>168</sup>。親密と葛藤が共存する多文化家庭は、移住女性に対する一次的な支持網を形成しながらも、同時に女性は暴力や抑圧による統制の対象になる。しかし多くの移住女性たちは、自分に内在されている力量と知恵を通じて、権力位階的抑圧と葛藤の家族関係を、共存と共生の家族支持体系に変化させているのである<sup>169</sup>。例えば夫と姑は、外国人妻や嫁の国に関心を示し始め、姑は自分の息子と結婚してくれてありがたいと思いはじめ。また、韓国の靈光 (Yeonggwang) 地域の国際結婚移住女性の家族と社会的支持網についての研究報告書によると、韓国の靈光地域の国際結婚移住女性たちのインタビュー調査では、国際結婚移住の出身国の経済的、文化的背景、女性の地位、国際結婚の前段階と国際選択理由などから、出身国への理解と移住女性たち「生」について向き合う姿勢から行為の主体者として自己アイデンティティが確立されている、と説明する<sup>170</sup>。

実際に、経済的、文化的に周辺化されている社会的少数者である移住女性たちは、グローバル化の進行に伴い、新しいシステムに適応する過程で、移住を選択する積極的な行為者である。

---

<sup>167</sup> 최금혜 「한국남성과 결혼한 중국조선족 여성들의 한국에서 적응기 생활체험에 관한 연구」 『아시아 여성연구』 44 집, 2005년, 329-364 쪽. (=チェ・キンヘ 「韓国南西と結婚した中国朝鮮族女性たちの韓国で適応期生活体験に関する研究」 『アジア女性研究』 44集、2005年、329-364頁。)

<sup>168</sup> 정순희 「국제결혼 이주여성의 삶에 관한 탐색적 연구」 순천향대학교 행정정보 대학원 석사논문 2007년, 9 쪽.  
(=鄭スンヒ 「国際結婚移住女性の人生に関する探索的研究」 順天郷大学校行政情報大学院修士論文 2007年、9頁。)

<sup>169</sup> 김이선 「여성결혼이민자의 문화적 갈등경험과 소통증진을 위한 정책 과제」、한국여성개발원, 2006년 (=金イソン 「女性結婚移民者の文化的葛藤経験と疎通増進のための政策課題」、韓国女性開発院、2006年、131-136頁。)

<sup>170</sup> 이태옥 「국제결혼 이주여성가족과 사회적 지지망 연구-영광지역을 중심으로」 광주대학교 사회복지전문대학원, 2006년 49-68 쪽 (=李テオク 「国際結婚移住女性と社会的支持網研究」 光州大学社会福祉専門大学院、2006年、49-68頁。)

## 第4節 小結

国際結婚を通じて韓国に移住した開発途上国からの移住女性たちは、経済的な理由から韓国人男性と結婚する、という一般的な認識が根強い。メディアを通じて国際結婚移住女性たちの多様な移住の動機のなかで、特に経済的な面が強調される傾向がある。それは、結婚移住女性たちが経済的な同意によって結婚が成立することから、韓国の経済的な富が輸出されてしまうために、好ましくない存在として表象されるか、貧しい被害者として売買婚的な国際結婚へ包摂される受動的な被害者として表象されるかといったものとして現れる。このような固定化した視角から結婚移住女性へ接近することは、多様な結婚移住の「動機」と主体的な「行為」を無視することになり、国際結婚移住女性に対する否定的で固定化されたイメージを生産または再生産することにつながる。また、移住女性を商品化することは、移住女性のセクシュアリティを統制可能なものと見なす、社会的な雰囲気を作り出すことも問題である。特に、韓国のメディアは、移住女性の苦痛についても扱っている。大衆メディアにおいて移民女性は、暴力の被害者である、と語られている。しかし、移住女性が置かれている状況の不当さを指摘し、その問題点を明らかにすることより、ただ彼女たちを可哀相な存在、あるいは劣等な存在としてイメージを固定化している。こうした移住女性のイメージは、彼女たちが被害者であることを当然視するだけでなく、彼女たちに対して説得的ですらある。

フーコーが『性の歴史』で指摘するように、近代社会生活における文明は、「規律する権力」、つまり基礎的な内的欲動を規制することによって達成される。刑務所や収容所のような近代社会施設においてと同じように家庭における規定力は「従順な肉体」を生み出してきた<sup>171</sup>。弱者としての女性の肉体とセクシュアリティは、その規定力の主体である家父長の欲望によって作り出されている。「力は創出する。それはリアリティを創出する。物体の領域と真実の儀式を創出する」<sup>172</sup>とするように、リアリティの一部としてのセクシュアリティは、社会の権力構造を明るみに出すのである。

権力は肉体を生産し、優越し、劣等な「肉体」で身体を序列化する。身体という空間に作動する、人種的、文化的、階層的、性的支配の記号は、自分と他者が属する世界を区分

<sup>171</sup> Michel Foucault, 1977, *History of Sexuality Volume 1: An Introduction*. Trans. Robert Hurley, London: Penguin Books.

<sup>172</sup> Michel Foucault, (1977), p.194.

する。私たちは記号化された身体を通じて私たちのアイデンティティを確認し、他者と区別するのである。したがって、身体は、自分と他者を規定する境界を分ける空間であり、自分と他者があう接点にもなる。白人は、文化的に優越な記号としての身体として認識され、黒人はそうではない。肌色が似ているアジア人は親密に感じられるが、黒い肌色のアジア人に親密性は感じない。また、肌色が同じであっても国家の経済的な位置によってその態度の差は異なる。前述で考察した国際結婚仲介業社のネット上で行われる広告においての女性の身体はより記号化された商品になっている。そのような、女性の商品化は韓国における多文化家族において移住女性を統制する一つの権力要素になっている。また、国際結婚移住女性を性的商品化として、または被害者として規定することは、移住女性たちが行為の主体者であることを過小評価する恐れがある。移住女性には実際に多様な背景と動機、社会文化的に資源を持っている多重的な主体である。移住女性には劣等な存在ではない。彼女たちは、自分の出身国の文化的、社会的アイデンティティと、移住した国家の市民としてのアイデンティティを同時に兼ね備え、それを維持しながら特定の国家に縛られず、トランスナショナルな空間で生活している人々として認識されるべきなのである。すなわち、彼女たちは自分の人生の開拓のために積極的なアクションを起こし、そのひとつの選択として国際結婚を選択したのである。国際結婚を通じて韓国に入った移民女性が、家父長制的な家族と社会により多様な苦痛を受けることは彼女たちが「移住」女性であるからではなく「女性」であるからである。このような認識上の転回が必要ではないだろうか。また多文化家族の検討においては、国際結婚移住女性たちを、階級・エスニシティ・ジェンダーに基づく「三重の抑圧構造の犠牲者」として注目されている。その一方で移住女性たちは、彼女たちの現時的な「生」のなかで、行為の主体者として自己アイデンティティを確立していることから、彼女たちの国境を越える国際移住を単に、経済的な理由だけで解釈することに限界があると確認した。

メディア表象においては、そのような移住女性の主体性や新しいアイデンティティが確立される過程は見られない。テキスト分析を行った韓国ドラマ『黄金花嫁』からは、ストーリーの展開、主人公の移住女性と韓国人女性と二項対立的な構図と採ることで、韓国社会が国際結婚移住女性に要求する「妻」や「嫁」、「女性」に対する「あるべき」姿を再生産することが確認できた。しかし、他方では、ドラマ『黄金花嫁』を視聴した受容者認識調査では、従来の移住女性に対するイメージがネガティブなイメージからポジティブなイメージに変化したことが確認できた。

### 第3章 ドキュメンタリー映画『素敵な彼女たち She is』から見る移住女性

#### 第1節 本章の意図

前章では、テレビドラマ『黄金花嫁』を中心に、韓国メディアが表象する移住女性イメージがどのように意味生産され、あるいは拡大再生産されているのかを考察した。韓国の大衆メディアに見られる移住女性は、暴力の被害者であると語られてきた。しかし、それらのメディアでは根本的に移住女性が置かれている状況の不当さを指摘し、その問題点を明らかにするというよりは、ただ彼女たちが可哀相な存在、あるいは劣等な存在として表象された。こうした移住女性のイメージは、結果として彼女たちが被害者であることを当然視し、納得するような風調を作り出している。さらに、メディアの移住女性に対する意味生産作用は、移住女性を、受け入れたホスト社会からの「期待」に添う形に変えようとしており、移住女性は、ホスト国の女性の不在部分を代わりに埋めさせられている。つまり、移住女性は、大衆メディアによって、低出産と高齢化を解決してくれる「英雄」、母国の経済的な問題からお金で売られてきた可哀相な女性、韓国人男性の性的欲求のため売買婚の犠牲者、として表象される<sup>173</sup>。これらの定型化された移住女性表象は、移住女性たちの「生」に悪影響を与える要因となる。つまり、視聴率を考慮して制作された多くの番組やメディア媒体は、移住女性に対して刺激的な要素を一方向的に放送し伝えることで、結果的に移住女性たちは韓国社会で定型化されてイメージを獲得し、そのイメージによって、ホスト国で「他者」として生きることになるのである。国際結婚移住女性を性の商品として、または被害者としてのみ規定することはエイジェントとしての移住女性を過小評価する恐れがある。このような風潮に対して、移住女性ディアスポラについて研究した李スザは、移住女性の主体性に注目し、「移住女性は『歴史的他者』ではあるが、欲望を持って労働権を行使しようとする主体性を持つ存在として把握しなければならない」と述べ、エイジェントとしての移住女性に注目する必要性について強調する<sup>174</sup>。

ここで、筆者は、エイジェントとしての移住女性に注目しながら独立ドキュメンタリー映画『She is』の考察を試みる。この映画は、「研究対象」においても述べたが、移住女性をテーマに制作された韓国映画の中でも逸早く制作された作品である。韓国社会で社会問題となった移住女性を巡る人権問題が台頭される中で、ジュ監督は、早くも移住女性たち

<sup>173</sup> 韓国『京郷新聞』2007年11月25日。

<sup>174</sup> 李スザ、前掲書、189-219頁。

の本当の「声」を語り、彼女たちの移住を「選択」し「行動」した理由について理解しようとした。筆者は、この映画を通じて、エイジェントとしての移住女性に注目し、そのエイジェントが持つ「物事を変える力」「介入する能力」（人々が）互いに交流しながら影響し合うことで生まれる「エイジェンシー」に注目することを本章の目標とする。

また、本章では、第2章のドラマ『黄金花嫁』では無視されてきた次の視点に注目する。まず、第一に、移住女性たちの移住の動機は多様であること、そして、彼女たちが自分たちの欠如する条件を変えるため、または、自分自身の夢を実現するための戦略として移住を選択する瞬間から、彼女たちは移住の主体になること。第二に、移住を選択し、行動する瞬間からは絶えず改善と努力を行うことで自己実現の側面が見られること、そして移住過程の中で彼女たちは主体性や新しいアイデンティティを構築することである。本章では、これらの視点に注意しながら、移住女性表象の「エンコーディング」「デコーディング」分析を行う。

具体的には、映画の中に登場する5人の移住女性たちの「声」を通じて、移住女性たちの主体やアイデンティティが無視されるホスト国の社会的構造について改めて考察を行う。また、映画における移住女性たちと韓国人女性監督の交流から生まれる「連帯感形成」が彼女たちの新しいアイデンティティ形成にどのような影響を与えたのか、または、韓国人監督は、彼女たちを撮りつけることで何を感じ、どのような影響を受けたのかを考察する。さらに、前述してように、女性による移住には実際に多様な背景と動機あり、社会文化的な資源を持っているエイジェントとしての移住女性であることを念頭に置きながらドキュメンタリー映画『She is』を一つの「コンタクト・ゾーン」として考察する。

## 第2節 文化表象として移住女性とドキュメンタリー映画の女性主義<sup>175</sup>

### 1. 文化表象から見る移住女性

国際結婚移住女性は、日本では「アジア花嫁」であったり、欧米での「アジア女性」との間のメールオーダー・ブライド (mail order bride) <sup>176</sup>であるといった呼称をもつ存在である。

日本における「じゃぱゆきさん」は、性産業及び水商売に従事しているフィリピン人に対する表象であるが、その「じゃぱゆきさん」は職場で、日本人と出会い国際結婚をするケースが多く見られる<sup>177</sup>。これに比べて、シンガポールやアラブの諸国における家事労働者の場合は、自分の家に入ってくる人々というイメージが強い<sup>178</sup>。しかし、オーストラリアの場合は、国や地域によって違うイメージ見られる<sup>179</sup>。韓国においては、開発途上国からの国際結婚移住女性に関する表象は多様でありながら、定型化されているといえる。一般的な国際結婚の移住女性と異なる存在として描かれている。韓国映画やテレビドラマに

<sup>175</sup> 곽삼근 (カク・サンクン) は、1998年『女性と教育』の本のなかで、それまでは「女性解放論」と呼ばれていたフェミニズムの思想を「女性主義」として紹介し、女性主義概念について「女性主義とは、女性が単に女性という理由だけで社会的に不利な立場に置かれている、ということを感じる」と規定した。しかし、10年経った今、カクは韓国「女性主義」について次のように述べている。

「女性主義」概念は、新しい価値として浮上してきている。かつては、「女性主義」という概念は、女性が受ける不利益に関する関心表明であったのに対して、今は、すべての生命現象において起こる他者の排除に関心を抱いている。言い換えれば、絶えず人類の普遍性のために境界を崩す作業が「女性主義」の核心である。女性という一つの集団ではなくて、性別、年齢、階層、人種などの多様な階層で他者排除を克服しようとする動きとして、真の人間学的省察を指向しているという認識である。(下線 引用者)

本章で使う映画における「女性主義」という概念は、韓国における「女性解放論」と呼ばれたフェミニズムとは異なり、映画の一つのあり方として、女性監督によって作られた映画、さらには女性の問題を女性的な見解で表現する傾向を意味する。最近は、カクの言う「女性という一つの集団ではなくて、性別、年齢、階層、人種などの多様な位置において他者の排除を克服しようとする動きとして」、女性が主体となる「女性主義」映画が制作されている。特に、韓国での女性主義映画は、近年のビデオ・アクティビズム (Video activism) の発展により、女性たちが直接に映画制作に参加する機会が増えていることもあって、活発に制作されている。従って、本論文では、韓国における特定の意味として「女性主義」映画の用語として使用する。

곽삼근 저 『여성주의 교육학』 이화여자대학교 출판부 2008년 22-23 쪽. (=カク・サンクン 著『女性主義教育学』梨花女子大学出版社、2008年、22-23頁。)

<sup>176</sup> 第1部、第1章を参照せよ。

<sup>177</sup> 第2部、第1章を参照せよ。

<sup>178</sup> ヴェラ・マッキー、『グローバル化とジェンダー表象』(お茶の水書、2003年) 89頁。

<sup>179</sup> 伊藤るり『『ジャパゆきさん』現象再考—久田恵『フィリピン人を愛した男たち』におけるフィリピンと日本』相沢功編『近代日本の文化史』(6) (岩波書店、255-307頁。)

伊藤るり『『ジャパゆきさん』現象再考 八〇年代日本へのアジア女性流入』伊豫谷登士翁、梶田孝道編『外国人労働者論現状から理論へ』(弘文堂、1992年) 293-332頁。

登場する移住女性表象は、移住女性を韓国文化と家父長的な規範の中に適応させ、同化させるような定形化された姿で表象する。このような表象は、「差異」を認めようとする共存でなく、主流社会の社会統合に対する一方的な期待が反映されているのである。これは、主流社会からの移住女性への「支配するまなざし (metropolitan gaze)」<sup>180</sup>であり、1980年代の多国籍企業は都合の良い労働者としてのイメージを、例えば、「指先が非常に器用で」、「仕事が丁寧な」、「規律には従順な」女性労働者イメージとして作り出してきたように、韓国メディアは都合のよい国際結婚移住女性イメージを作り出している。しかし、一方では、移住女性に関する従来のイメージや偏見を打破しようとする動きも見られる。なかでも、移住女性を対象とした独立ドキュメンタリー映画は、移住女性たちの「声」を直接に聞くことによって、従来の大衆メディアが作り出した定形化された移住女性イメージや偏見を破り、移住女性の有りのままを見せる方式を通して、見る側に移住女性の写実的な人生の姿と国際結婚で台頭される問題点を共有させる。

## 2. 韓国独立ドキュメンタリー映画と女性主義映画

1980年代の光州民主化運動以降、当時社会運動の人的・理念的な根拠地である大学街を中心に映画を現実参与という方式として具体化しようとする動きが見られた。このような運動は、1982年のソウル映画集団を始め、民族映画研究所、労働者ニュース制作団体など映画小集団が生まれた。これらの団体は、共同体文化論を墮落させた資本主義文化に対する対案として共同体性を対立させた。1980年代における韓国の民主化闘争や大規模の大衆運動は、映画運動と結合した。つまり、大衆空間と大衆組織の出現は、大衆的な疎通方式の必要性を台頭させた。この現象は、映像媒体が大衆的な吸引力に対する関心を触発させた。大衆闘争が本格化した1987年以降、映画運動陣営で制作された作品は大衆闘争の現実を記録するという点に注目した<sup>181</sup>。記録作品は、社会運動の大義を説明し、その正当性を

<sup>180</sup> フェミニストたちは、文化作品美術作品映画に登場する女性の描かれ方を問題にし、それを批判してきた。女性イメージを観察する際、ヴェラ・マッキーは、「まなざし」について論じている。特に、「支配するまなざし (metropolitan gaze)」について述べる。「支配的まなざし」は、より抽象的なレベルで様々な力関係を交錯や支配の仕方を表わす。「まなざし」という言葉は、固定的な支配/被支配関係を記述する際有効性を発揮するが、関係性は常に固定的ではなく、時には諸要素が交錯し、矛盾した関係として浮かび上がることもある。「支配的まなざし」を多様でもあるような関係性の中で生じる動態的な力をさすものとして、捉えなおしている。

Makie Vera, 2000, "The Metropolitan Gaze: Travellers, Bodies and Spaces," *Intersections: Gender, History and Culture in the Asian Context*. Issue 4, September 2000 <http://intersections.anu.edu.au/issue4/vera.html>

<sup>181</sup> 作品としては、87年6月の民衆抗争を記録した金ジェホ監督の『민중이 주인이 되는 그날까지 (民衆が主人になるその日まで)』1987年、民族映画研究所の李カンリン監督が制作の『그대 부활 하라. 민족의 꽃으로 (あなた復活しなさい、民族の花として)』という民衆抗争当時亡くなった大学生を追慕した作品などがある。

主張する教育宣伝を目標として制作された。当時、これらの作品は大衆に社会的に反響を得た。これは、社会変革に対する大衆的熱望が噴出した当時の状況と関係が深い。このように教育宣伝のために制作され、配給された作品が韓国の独立ドキュメンタリー映画の出発点であったということは重要な意味を持つ。なぜならば、このような当時のドキュメンタリー映画制作は、現在のドキュメンタリー制作において重要な位置を示しているビデオ・アクティビズム (Video activism)<sup>182</sup>に発展したからである。ビデオ・アクティビズムとは、特定勢力が独占してきたメディア権力を、その権力から疎外されてきた社会的な他者、社会的な弱者に分散し、移動させる運動である<sup>183</sup>。さらに、ビデオ・アクティビズムは、社会的団体または共同体の関係から多様に展開されてきた。その中で、制作者が自ら共同体の一員になって、一緒に生活しながら制作を遂行する場合が見られる。例えば、体表的な女性監督である류미레 (リュミレ) は、職業リハビリ訓練を受ける成人精神障害者を扱った『나는 행복하다 (私は幸せだ)』(2000年)という作品を制作した。この作品は、監督自身が職業で共同体一員として彼らと一緒に生活しながら生々しい場面と状況を記録した。さらに、ビデオ・アクティビズムは、韓国における女性主義映画運動に大きな影響を与えた。韓国の女性主義者らは、女性が単純に商品として消費されるのではなく、女性が主体になる女性映画を制作しようとした。そのために、政治的な進歩派陣営である男性中心の映像技術で女性問題を扱うのではなく、女性映像集団を組織し、ビデオ媒体を通じて女性映像人材を輩出した<sup>184</sup>。そして、女性の性差別的な問題を定義し、女性の日常と文化、傷と治癒、闘争の過程を表現する新しいメディアを創造する活動を行っている。女性によるメディア活動は、価値を追及し、社会変革を模索する社会の主体がメディア運動と出会うことで、両者が疎通し、成長するのである。女性問題を扱っている体表的な映画監督である변영주 (ピョン・ヨンジュ) は、1993年東アジアの国際的な女性売買春の実態を韓国、日本、タイの3カ国を往来しながらドキュメンタリー『아시아에서 여성으로 산다는것』

---

남인영 『한국 다큐멘터리 영화의 배급과 해외 시장 개발을 위한 연구』 커뮤니케이션북스, 2010년. (=南インヨン 『韓国ドキュメンタリー映画の配給と海外市場開発のための研究』 コミュニケーションブックス出版、2010年、54-61頁)

<sup>182</sup> ビデオ・アクティビズム (Video activism) は、社会的正義と環境保護を戦略的な道具としてビデオカメラを利用した。ビデオカメラは政治暴力に対抗する政治的な道具であり、大衆を動かせる手段と目的になった。イメージの力を現実化し、社会的変化のためにその力を利用しようとするビデオ・アクティビスト (Video activist) は、カメラと映像を通じて政治的イシューに対応し、主流メディアが作り出したイメージに対して反対し、校正し、メディアを通じて共同体を形成して政治的闘争と新しい主張でアイデンティティを形成する。

<sup>183</sup> 김종갑 「90년대 이후 한국 독립 영화 연구-비디오 액티비즘과 미디어 액티비즘을 중심으로」 동의대학교 영상정보대학원 영화 영상과 석사논문 2008년 6월 29-54 쪽  
(=金ジョンガ 「90年代以後韓国独立映画研究-ビデオ・アクティビズムとメディア・アクティビズムを中心に」 DONG EUI 大学校映像情報大学院、2008年、29-54頁。)

<sup>184</sup> 映像メディアセンター 「2007年進歩的なメディア運動研究ジャーナル ACT」 201頁。

(アジアで女性として生きること)』を制作し、1995年には韓国と中国にいる従軍慰安婦出身のおばあさんたちと生活を一緒にしながら、第二次世界大戦当時に従軍慰安婦になった女性の人生を通じて戦争が女性の人生に及ぼす影響を告発した。ピョン監督は、このような作品の活動を通じて、今日「女性として生きること」という大きなテーマの中で世界観を拡大し表現することで、ビデオ・アクティビストとして「女性」に接近しながら女性団体と結合し、独立ドキュメンタリー作家として活動している。

1990年代以降、女性主義ビデオ・アクティビズムは、家事労働、未婚母、女性労働などの素材と主題を拡張し、従来には可視化されなかった女性の伝統的な被抑圧の領域を表象する。さらに、近年においては、韓国社会の多元種・多文化の中で韓国に移住する女性が増加し、その過程で生じる諸問題を直接に移住女性と交流をしながら生々しい彼女たちの「声」を伝える作品が多く制作された。例えば、これから分析対象とする独立ドキュメンタリー映画『She is』の주현숙(ジュ・ヒョンスク)監督もまた女性主義ビデオ・アクティビストである。ジュ監督は移住女性たちと2年間、時には韓国語先生と弟子として、時には人生の先輩後輩として交流し様々な経験を共有しながら制作された。このビデオ・アクティビズムによって、メディアから疎外された人々が直接メディアの主体になる機会を得るようになった。例えば、「移住労働者メディア教室」、「移住女性映画制作ワークショップ」などは、移住女性たちにメディア教育と制作機会を与える。移住女性たちはビデオカメラを手にし、直接制作活動を通じて、自らの経験を語る。これらの社会的な参加は、移住女性は韓国文化を受動的に受け入れる対象としてではなく文化を形成していく能動的な主体として変化させる。例えば、2010年4月、ソウル国際女性映画祭では、フィリピン移住女性のレネス エスセニョの34年間の人生が語られた7分間のドキュメンタリー映画

『당신에게는 내가 필요해요(あなたには私が必要だよ)』が上映された。映画の監督は、その当事者であるレネス エスセニョ本人だった。彼女は、映画を通じてフィリピンでの長女として役割と韓国での長女の役割に対して、共通点と差異について語っている。彼女が映画制作を始めたのは、韓国文化芸術教育振興院が2006年から毎年結婚移住女性を対象に進行する映像制作ワークショップに参加したのが契機になった。振興院関係者は「韓国語が下手で腹を割って話す友人がいない移住女性が映像ワークショップを通じて自分の人生と家族生活を映像で表現しながら治癒効果を感じている」と伝えた<sup>185</sup>。

これらの作品は主に映画祭を通じて、上映され、社会的な意味を実践している。1990年代から登場し始めた各種の映画祭は、独立ドキュメンタリー映画を社会的な表象の側面だけではなく、芸術映画、または作家主義の議論と結合し、個人の意味ある表現行為の側面

<sup>185</sup> 韓国『京郷新聞』2010年4月9日。

を受容する道を開いた。

女性運動は、制度と慣習の限界を超え、認識の変化、議論の拡張という包括的な女性運動の実現のために大衆と直接会って疎通することができる文化活動を繰り返し広げた。このような流れの中で大衆と最も親密な媒体である映画を通じて女性問題を議論化し、拡張しようとする試みが現れる。女性映画制作者と観客を中心とする女性映画祭は、ソウル国際映画祭、女性労働映画祭、女性人権映画祭、などがある。これらの映画祭は、社会と家庭の問題的な状況を暴露し、そのような問題を共有することで新たな対案を模索するテキストとして思考する。このような脈絡から、筆者は、ビデオ・アクティビストである주현숙(ジュ・ヒョンスク)監督のドキュメンタリー映画『She is』を、現代の韓国社会の女性主義映画として見なし、考察する。

### 第3節 ドキュメンタリー映画『素敵な彼女たち She is』について

#### 1. 制作背景—ソウル国際女性映画祭(WFFIS)

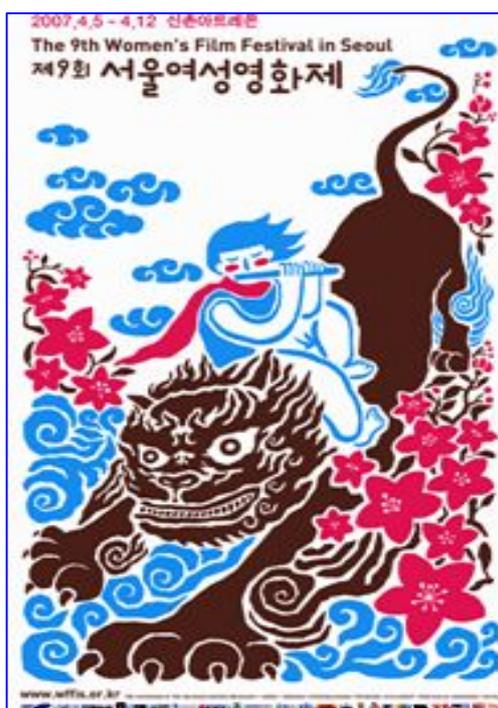


図 16 2007年第9回目の韓国ソウル国際女性映画祭 ポスター  
出所：韓国ソウル国際女性映画祭 公式サイト  
http://www.wffis.or.kr

2007年4月に韓国ソウルでは、第9回目の「ソウル国際女性映画祭(International Women's Film Festival in Seoul, WFFIS)」が開催された。この映画祭は、韓国の唯一の「女性映画祭」として、まず1997年から2001年まで隔年制で開催された。2001年以後は毎年4月に開催することになった。この映画祭は、非営利経営を導入した国際映画祭として、女性の視点における時代的要求と女性映画の需要層の拡大およびアジア女性映画の支援強化を背景に始まった。ひいては、世界女性映画祭の流れを紹介し、アジア地域国際女性映画のネットワークを構築し、文化生産主体として、または、対象として新しい文化を創出する女性主義視野を拡大し、女性運動単体の映像媒体運動の活性化を通じて女性単体と観客間に和合を模索し、最後に韓国国内の女性映画人の連帯を築くことを

目標としている。すなわち、女性の権益増進と疎外階層を代弁し、両性平等文化に寄与しようというものである。女性に関する多様な問題に注目し、文化的多様性の増進に寄与し

ている点から評価されている映画祭である。特に、この映画祭は、女性文化芸術企画、女性映画祭の執行委員会が運営する社団法人の民間主導で行ったため、協賛金と後援支援金だけを土台に第1回2回の映画祭を開催された。しかし、第3回目からは、国庫と地方自治体の支援が始まり、総運営予算が3倍まで増加した<sup>186</sup>。

2007年の第9回目では、「이주여성특별전 : 우리들은 여기에 살고 있다! (移住女性特別展 : 私たちはここで生きている!)」(Women Migrant: Invisible People) というテーマが掲げられ、韓国を含めてシンガポール、スリランカ、フィリピン、台湾、カナダ、アメリカなどで制作された映画10篇が紹介された。ここに集まった映画は世界各地に移住し、生きている女性たちについて描き、なぜ彼女たちは移民を選択したのかあるいは移民生活の現実などを描いている。その中の一つ、韓国の주현숙(ジュ・ヒョンスク)監督<sup>187</sup>の『She is』という作品は、国際結婚を通じて韓国に入ってきた5人の移住女性たちを描いたドキュメンタリー映画である。この映画は、韓国映画振興委員会<sup>188</sup>から支援を受け制作された。映画の始まりは、監督が韓国における移住労働者問題をテーマとしたドキュメンタリー映画の制作過程の中で出会った移住女性に関心を持つことから映画の企画が始まった。映画の撮影の前に、監督は、登場人物ら移住女性に直接に韓国語を教えた。実際に、監督は、監督と登場人物ではなく、彼女たちとの私的な関係を築きたいと話す<sup>189</sup>。映画は、2年間の間に移住女性たちと監督の交流から生まれ様々な経験を元に撮影された。特に、映画には国際結婚からの強制流産、暴力などに苦しめられる女性結婚移住者らの問題が含まれている。さらに、この作品を制作する途中で、自分自身が妊娠したことに気づいた監督は、同じ時

<sup>186</sup> 한국문화관광정책연구원 연구진 『한국영화제 평가및금후 발전방안』 한국문화관광정책연구원, 2004년, 64-68쪽. (= 韓国文化観光政策研究院研究陣 『國際映画國際評価及び今後發展方案』 韓国文化観光政策研究院, 2004年, 64-68頁。)

<sup>187</sup> 주현숙(ジュ・ヒョンスク)監督は、1994年、独立映画協会16mワークショップを修了後、インディペンデント映画監督として活動中である。作品としては、社内夫婦の女性労働者解雇を扱った『83명의 인질 (83人の人質)』(2002)、移住労働者プロジェクト『옴니버스 여정 : 이주 (オムニバス 旅程 : 移住)』(2003)、『계속된다-미등록이주노동자 기록되다 (続く—未登録移住労働者記録される)』(2004)、『신자유주의의 도발들 (新自由主義の挑発ら)』(2005)などがある。ドキュメンタリー作業その他にもメディアから疎外された人々が直接メディア制作主体で活動できる機会を提供するプログラム「移住労働者メディア教室」に講師として参加して移住労働者インタビュープロジェクト『죽거나 혹은 떠나거나 (死んだりあるいは離れたり)』の総演出。移住労働運動においてメディア・アクティビストとして活動している。

<sup>188</sup> 韓国映画振興委員会は、大韓民国政府文化体育観光部から映画に関する支援の役割を委任を受けた汎国家部門(Wider State Sector)の専門機構として、政府から予算は支援されるが政策的専門性と独立性を保證される「分権自立機関」(OECDの用語)であり、学術的には準政府組織(Quango; Quasi-autonomous non-government organization)である。委員会は、政府の管理を受けて、国民の代表機関の国会の監査を受けている。韓国映画進行委員会の公式サイト : [http://www.kofic.or.kr/g\\_cinfoma/g\\_01kinfoma.jsp](http://www.kofic.or.kr/g_cinfoma/g_01kinfoma.jsp)

<sup>189</sup> 2008年、千葉大学大学院人社研実践的公共学応用プログラム派遣事業参加における海外調査「韓国における移住女性研究」過程の中で、주현숙(ジュ・ヒョンスク)監督インタビュー内容から。参考資料2を参照せよ。

期に妊娠をすることになった出演者である移住女性とすでに子供を三人産み育てているフィリピンからの移住女性の出演者と話を交わしながら妊娠と出産について語る。そして、監督は彼女たちを通じて作品制作に対する希望と力を得ることになり、最後まで映画制作を完成させる。この映画は、国際結婚を通じて移住する過程の中に現れる国際結婚仲介業社の横暴や移民女性への偏見を描いている。また、映画は、移住女性とホスト国の女性が政治的・経済的な格差を離れて自分自身の身体の主体として新しく生まれ、互いが出会う可能性を示唆し、移住女性たちの新しいアイデンティティと移住女性たちに影響を受けて監督自身に生まれた新しいアイデンティティを描いている。

## 2. 制作意図

4年間、男性中心の移住労働者に関するドキュメンタリー映画を制作してきた監督は、移住方式の一つである結婚移住を選択した開発途上国からの国際結婚移住女性に関するドキュメンタリー映画『She is』を制作し、移住女性について語り始める。

映画の導入部は、移住労働者の労働力搾取と人権問題といった外国人労働者とホスト社会の間に起こっている深刻な問題を象徴的に表している移住労働者の闘争場面から始まる。



図 17 映画のイントロにおける韓国における移住労働者たちの闘争場面

この場面からは、移住者を受け入れている受入国として浮上した韓国社会の多様な問題を取り上げようとしているのが明らかになる。従って、移住女性問題に注目するのは一方では自然な現象であるとも考えられるが、ここで、これまで、韓国社会に労働者として移住した男性労働者を中

心に作品を制作してきた監督がなぜ開発途上国からの「国際結婚」移住女性に注目したのか、その意味を問わねばならない。

< 制作者側から込められた含意（暗示的意図）は何か？ >

グローバリゼーションの進行なかで、女性による国際移動は「移民の女性化」と呼ばれ

るほど、その数は増加している。特に結婚という移住方法を採用して移住する女性たちは、結婚生活という親密な空間や関係のなかで、ホスト社会におけるジェンダー秩序により大きな影響を与えている。しかし、ホスト社会での移住女性は異邦人として「他者」化される。また、メディアにおいては「ゴシップ」になっている。例えば、映画の始めの方では、2003年12月7日放送の「ベトナム国際結婚・速戦速決5泊6日」(MBC)という番組を映し出される。この番組は、国策結婚斡旋業者の横暴を告発するものであるが監督はこの番組における移住女性の現し方について次のように話している。

「국제결혼은 언제부터가 사회문제가 되었고 나는 그것을 볼때마다 불편하다. 그런 프로그램들은 국제결혼의 문제점에 대해 이야기 하면서도 당사자인 이주여성들의 목소리는 중요하게 생각 하지 않는다. 한국사람이라면 당연히 모자이크처리를 해야할 얼굴을 그대도 드러낸다. 그속에 이주여성은 마치 컨베이어 벨트위에 물건처럼 보인다. 나는 그뒤에 숨겨져 있는 그녀들의 목소리를 듣고 싶다.

<訳>

国際結婚はいつからか社会問題になった。私はそれを見る時ごとに厄介な感じがする。そのような番組は国際結婚の問題点については報道しながらも当事者である移住女性たちの「声」を聞こうとはしない。韓国人ならば当然モザイク処理をしなければならない顔をそのまま報道する。報道番組の中で報道される移住女性はあたかもコンベヤーベルトの上にある商品のように見える。」



図 18 2003年12月7日放送の「ベトナム国際結婚・速戦速決5泊6日」(MBC)という番組に映し出される商品化された移住女性表象

ここで監督は、メディアが作り出す移住女性の表象の問題を指摘している。番組は、「社会問題」として扱っていても当事者である女性の声は聞かないし映像として出す場合にはプライバシーへの配慮なく顔をそのまま映し出す。コンベヤーベルトに載って送られている「商品」のように「他者化」し、「モノ」化した表象が流通している。このように、映画テキストで監督が問題にしたのは、前述したようにメディアにおける「商品化」させる国際結婚移住女性の「表象」である。さらに次のように語り、本映画の制作意図を明らかにする。

「나는 그뒤에 숨어져 있는 그녀들의 목소리를 듣고 싶다. 감춰지고 왜곡되었던 그녀들의 진짜 이야기. 그래서 그목소리를 통해 이 사회의 편견과 만나고 싶다.

<訳>

私は、国際結婚において、隠されて歪曲された移住女性たちの本当の『声』が聞きたかった。そして、その『声』を通じて明らかになる社会の偏見について考えてみたい」

映画の制作意図から、本映画は女性による国際移動、特に国際結婚移住女性を巡る、受け入れ社会からの偏見が問題にされていると考えられる。映画は、5人の移住女性への監督自身のインタビューと監督のナレーションによって進行する。映画に登場する5人の移住女性たちの「声（語り）」からは、国際結婚移住過程における、国際結婚仲介業者の横暴、結婚や移住女性の身体の商品化が訴えられると同時に彼女たちの未来、希望なども語られる。さらに、映画は、移住女性5人と監督自身が映画の中に参加することで、監督が移住女性たちと関係を持ち、互いに交流し合うことによって相互に影響し合う様子を映し出している。

本章では、監督のいう移住女性の「本当の声（語り）」に注目する。その上で、登場人物である移住女性たちの認識と行動、また移住女性たちと韓国人女性監督との関係を考察することで、移住女性のエイジェンシーとしての有り方に焦点を当てる。

### 3. あらすじ



図 19 ドキュメンタリー映画『She is』: Director / Screenplay / Producer / Editor : JOO Hyun-Sook  
ドキュメンタリー、韓国制作、62 分、2007 年 (出所) ソウル国際女性映画祭公式サイト <http://www.wffis.or.kr>

これまで主に男性を中心とする移住労働者に関するドキュメンタリー映画を制作してきた監督は移住方法として国際結婚を選択する移住女性について語り始める。

映像には、移住労働者のデモの様子や国際結婚エージェントの広告の風景が映し出され、さらに 2003 年 12 月 7 日に MBC での放送された「ベトナム国際結婚・速戦速決 5 泊 6 日」という国策結婚斡旋業者の横暴を告発する番組を資料として提示する。監督は「このような番組は、国際結婚の問題点については指摘しながら当事者である移住女性の『声』については重要に考えようとしな。私は、国際結婚において隠されて歪曲された移住女性たちの本当の『声』が聞きたかった。そして、その『声』を通じてこの明らかになる社会の偏見について考えてみたい」と映画の制作意図を明らかにする。

映画は、監督が国際結婚を通じて移住した 5 人の移住女性のインタビューで構成されている。一人目の女性は、19 才の時に斡旋業者を通じて 62 才の韓国人男性と結婚して、常習的な殴打と強制流産に遭った後、母国に帰国し、離婚訴訟のために再び韓国にやってきた

ベトナム出身のティエンである。監督は空港で初めて彼女に会う。カメラは彼女を追いながらインタビューを始める。国際結婚の理由について聞くと、「結婚する気はなかった。ただ、家族を助けたかった。はやく結婚する気もなかったし、国際結婚は考えてもいなかった。働いてお金を稼いで弟たちに勉強させたいと思った。結婚はその次だと思った」と話す。国際結婚のきっかけについては「工場が休みの日に友達と行った所が国際結婚お見合いの場だった。三日後に結婚すると誓約した。しかし、考えた末、結婚をやめようと国際結婚斡旋業者に言うと、今止めると1100万ウォンを報償しなければならないといわれた。私が選択したので仕方がないと思った。」と話す。しかし、結婚後、夫は言葉が通じないという理由で彼女を常習的に殴打し始めた。さらに、妊娠した彼女に中絶手術を強要し、結局、彼女は強制流産にあった。2年前のことであった。

彼女は離婚のための裁判を終え、ベトナムに帰る。空港で監督は「いつかまた会いましょうね。どこで会いましょうか。」とたずねると「ベトナムで」と一瞬の迷いもなく答える。

次に画面は、移住者のためのセンターで生活しているロサの顔のクローズ・アップに移る。

登場人物の二人目のロサは、責任感が強く、真面目で、自分を理解してくれる人と結婚するのが夢だった。ロサも国際結婚斡旋業者を通じて移住したフィリピン人の女性である。夫からセックスを強要され拒否すると暴力を受けた。家を出た後に彼女は妊娠したことを知る。監督の「子供を産む選択ではなくほかの選択もあるのでは？」という質問に対して「今は、私は多くの問題を抱えているが、私は大丈夫、私はラッキーだ、置かれている状況はアンラッキーだが、この子のおかげで私はラッキーだ」と返事する。さらにロサは、「私にとって私が選択した国際結婚という人生の一部分は一種の挑戦だった。独立のための戦いであった。たとえ、このような問題が起きたとしても私には相変わらず夢があつて、その夢をあきらめない」とロサは強く話している。夫の保障がないロサは、今は不法滞留者であるにもかかわらず、妊娠している自分がラッキーだというのだ。監督はロサを通じて多くのことを学んだと語る。

三人目に登場する女性、フィリピン出身のメリンダーは、韓国に到着した初日から新しい環境と生活に適応しようと一人で地図を持って出かけるほど積極的な性格の持ち主である。しかし、彼女も家庭内の問題を抱えている。ある日、監督に電話をかけて、自分の悩みとストレスに耐えられず爪を強く切ってしまったと話す。韓国語教室に集まった移住女性たちは厳しい環境や苦痛などに耐えられず自傷行為をした経験があると話している。

四人目に登場する中国人女性のチンチンは、姑に関して話している。「姑は、私がいつかは逃げ出すと考えている。私を信じない。夫にも私を信じてはいけないと話している。私にも『今日友達と散歩したが友達がある中国人嫁が逃げ出したと話した』という。さらに、中国人嫁はお金を稼ぐために韓国にやってきたと話している。」と姑が持っている中国人嫁に対する悪いイメージに対して話し、不満を語っている。

最後に、フィリピン出身のメロディーが登場する。彼女は3人の子供を育てながら韓国で10年間住んでいる。「フィリピン人の友達と互いに助け合いながら生きてきた」と彼女は10年間を振り返る。自分たちは大変だったが今は国際結婚で韓国にくるフィリピン人女性たちは自分のような長年韓国で住んでいる人がいて助けられるのでラッキーだと話す。彼女は、言葉が通じなかった頃の苦労話をしながら「しかし、生きている」と笑いながら話す。監督が「サバイバルだ」と話すと彼女は頷く。また、メロディーは自分の子供たちに向かっている社会の視線について不満を持ち、子供への教育に戸惑う。彼女自身がフィリピン人である事が子供たちに悪い影響を与えるのではないかと心配している。彼女は韓国に来て10年間住み、今は何の不自由もなく韓国語を話せるが、今も韓国語教室に通っている。はじめは、韓国に慣れるために韓国語を学んだが、今は子供のために韓国語を学んでいる。

映画は、移民女性への偏見の存在を明らかにしながらこの移住女性たちがどのような新しいアイデンティティ獲得するのか描こうとしている。撮影中、彼女たちの置かれた厳しい状況やつらい体験が明らかになるが、むしろ監督は、彼女たちから生き方を学んだとも言える。監督自身の予期しない妊娠のために作品の完成が危ぶまれ出産について悩んだ時期もあったが監督は彼女たちに生命の大切さを学び、明るくて元気に子供たちを育てたメロディーを人生の先輩として受け入れる。同じ時期に妊娠したメリンダーは監督と友情を交わし、出産前の監督の大仕事を皆が温かく見守るようになった。社会的な問題意識で始まったドキュメンタリーがいつのまにか監督の私的な生活に影響を及ぼすことになった。監督は、難しい状況に直面しながらも、独立した精神で生きている彼女たちと出会い、お互いの結婚、妊娠、出産について議論を交わした。結果的に彼女たちは強い連帯感で結ばれる事になる。

#### 4. ドキュメンタリー映画『素敵な彼女たち She is』から見る移住女性表象

##### 4-1. ベトナム人移住女性、ティエン (Ddien)



図 20 (左) 空港でティエンと監督が会う場面 (右) 監督とティエンと一緒に食事をする場面

登場する移住女性の一人目は、ベトナム女性ティエンであり、監督が空港で始めて会う場面から始まる。ティエンは、19才の時に斡旋業者を通じて62才の韓国人男性と結婚して、常習的な殴打と強制流産に遭った後、母国に帰国し、離婚訴訟のために再び韓国にやってきた。場面は、変わって監督とティエンと一緒に食事をする様子を見せる。そして、監督のインタビューが始まる。彼女に国際結婚の経緯について聞くと、彼女は次のように語る。

결혼에 대한 생각은 없었다 그저 가족을 도와줄 생각만 있었다. 빨리결혼할 생각도 없었고 국제결혼은 생각도 안했다. 일해서 돈벌고 동생들 공부시키고 그다음에 결혼할 생각 이었다. 그런데 공장을 다니던 어느 휴일 우연히 친구를 따라 나섰는데 맞선자리였다. 3일 후에 결혼하기로 각서를 썼다. 그런데 생각해보니 그만 두고 싶었다. 그런데 업체에서 지금 그만두면 안된다고 아직 아무것도 진행된것이 없어도 그만 두면 보상해야 된다고 했다.

<감독> 얼마나 보상해야 하나?

1억 오천만동 (한국돈 1100원)

<감독> 서명할때 그각서 내용을 알고 있었나?

업체직원이 가려서 볼수 없었다. 다른 사람은 맞선보고 몇일후에 서명하는데 나는 그날 바로 각서에 서명하게 했다. 그때는 왜 그랬는지

몰랐는데 아마 남편 나이가 많아서 그런 모양이다. 나중에 내 생각이 변할까봐 그렇게 한 모양이다. 남편은 몇일 같이 있다가 한국으로 돌아 왔다.같이 있는동안 남편이 너무 무서웠다.그렇지만 내가 이미선택 했으니 어쩔수 없고 돌이킬수 없다고 생각 했다.

<訳>

結婚する気はなかった。ただ、家族を助けたかった。結婚する気もなかったし、国際結婚は考えてもいなかった。働いてお金を稼いで弟たちに勉強させたいと思った。<中略>工場が休みの日に友達と行ったところが国際結婚お見合いの場だった。三日後に結婚すると誓約した。しかし、考えた末、結婚をやめようと国際結婚斡旋業者に言うと、今止めると1100万ウォンの罰金を払わなければならないと言われた。<中略>私が選択したので仕方がないと思った。

ティエンのインタビューの場面からは、本論文の第一部、第二章で考察した国際結婚移住女性の「商品化」が明らかになる。つまり、国際結婚の増加と共に商業的な仲介業者やブローカーが多く介在するようになり、その過程において移住女性たちに「借金」や「罰金」といった多額の金銭的な負担を負わせている。また、金銭的なやり取りから「売買婚」という表象が作り出されている。また、「ただ、家族を助けたかった」という彼女の「声」からは、女性が移住を選択する多様な理由の中で、「家族思い」が作用していることが明らかになった。

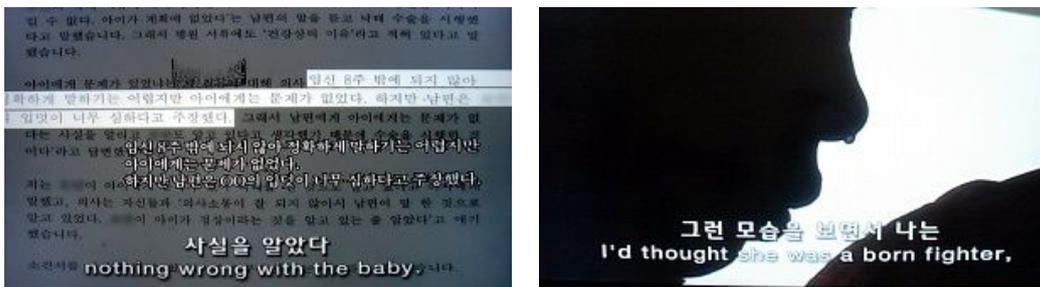


図 21 (左) ティエンが夫に暴力を受け、強制流産に遭った事実が書かれている裁判訴訟書。(右) 裁判を前に泣くティエンの姿。

彼女の結婚生活は長く続かなかった。結婚後、夫は言葉が通じないという理由で彼女を常習的に殴打し始めた。その上、妊娠した彼女に中絶手術を強要し、結局、彼女は強制流

産に遭った。映像は、ティエンが夫に暴力を受け、強制流産に遭った事実が書かれている裁判訴訟書を映し出す。そこには当時の生々しい恐ろしい現実が文字というコードでクローズ・アップの映像表現方法を通じて映し出される。そこには、「商品」としての移住女性の「身体」が表象された。さらに、その表象は中絶手術のために書く病院の同義書の署名欄には自分の署名ないと話し、夫の署名だけで強制流産されたことを回想しながら「彼は所持品のように私を扱っていた。(he was treating me like chattel)」と話す。このティエンの「声」は、「現実」そのものを表している。



図 22 裁判を終えベトナムに帰るティエンの姿

裁判を終えた彼女は工場で働くために急いでベトナムに帰る準備をする。監督は「いつかまた会いましょうね。どこで会いましょうか。」とたずねると「ベトナムで」と一瞬の迷いもなく答える。映像は、再び空港に変わり、ティエンは手を振りながら笑う場面で止まる。

監督は、ティエンと出会うことで、国際結婚の現実とそこに存在する移住女性の経験につ

いて、また、自分の心境の変化について、次のように話す。

나는 띠엔이 국제결혼을 통해 무엇을 경험 했는지 들었다 하지만  
무엇을 느꼈는지는 듣지 못했다  
난 띠엔에게 묻고 싶었다 어떻게 그렇게 해맑게 웃을수 있는냐고  
그힘은 어디서 온거냐고? 그러나 띠엔은 떠나고 이제 그질문은 내게  
남았다

<訳>

私はティエンが国際結婚を通じて何を経験したのかを聞いた。しかし、何を感じたのかは聞くことができなかった。私は、彼女に聞きたかった。どうしてそんなに明るく笑えるのか、その力はどこから出てくるのか?と。しかし、ティエンはいない。その質問は私に残った...

#### 4-2. フィリピン人移住女性、ロサ (Rosa)

映画に登場する二人目の移住女性はフィリピンから来たロサである。映像は、移住女性のために運営される移住女性センターで移住女性ともの作りをしている監督の姿を見せる。監督自身は、映画を制作する過程で、身体的に大きな変化が現れている。すなわち、監督自身が妊娠をするのである。監督は、映像の一部分で、自分が妊娠することへの不安や映画制作という労働への不安について次のように表現する。

나는 신변의 변화가 생겼다. 임신을 했다. 임신은 내게 많은것을 요구한다. 무거운것을 들지 말라고 하고 일을 줄이라고 한다.<중략>나는 이작업을 제대로 할수 있는지 조차 불투명하다. 임신은 기쁜일이지만 솔직히 작업이 걱정된다.

<訳>

私の体に変化が起きた。妊娠した。<中略> 私はこの映画制作を続けられるかさえ不安だ。妊娠は喜ばしいことだが率直に、作業が心配になる。



図 23 ロサのインタビューから監督の心境の変化が現れる場面

ロサもティエンと同様に国際結婚斡旋業社を通じて韓国人男性と結婚した。しかし、結婚生活は、彼女が夢みたものとは違った。夫は、セックスを強要し、拒否すると暴力を振う人だった。ロサは、家を出ることを決心し、移住女性センターで生活している。映像は、結婚に対する夢について話すロサの姿を映し出す。彼女は自分の夢について、「責任感が強く、真面目な人、そして自分を理解してくれる人と結婚するのが夢だった」と話す。さらに、監督が彼女にインタビューする場面が続く。ロサは家を出た後で妊娠したことに気づ

いたのだが、そのことについて、監督は次のように質問をする。

監督：子供を産む選択ではなくほかの選択もあるのでは？

ロサ：今私は多くの問題を抱えているが、私は大丈夫、私はラッキーだ、置かれている状況はアンラッキーだが、この子のおかげで私はラッキーだ

映像は、ロサのお腹をクローズ・アップで見せる。さらに、監督は彼女が国際結婚した理由について聞くが、それに対してロサは次のように答える。

私にとって国際結婚は、私が選択した人生の一部分であり、一種の挑戦だった。独立のための戦いであった。たとえ、このような問題が起きたとしても私には相変わらず夢があって、その夢をあきらめない。

監督は、ロサとのインタビューから次のように話す。

私は、泣いた。夫の保障がないロサは、今は不法滞留者であるにもかかわらず、妊娠している自分がラッキーだというのだ。

私が泣いた本当の理由は、彼女が今置かれている状況はアンラッキーだが、私はお腹の子のお陰で幸せだと言ったからだ。

私は、妊娠したことを知った時、仕事のことを先に考えた。＜中略＞しかし、ロサはラッキーだと言うのだ。私は、恥ずかしい。私は、自分のことしか考えていなかった。ロサは、つらい状況に置かれていながら生命を尊重し、自分を愛している。堂々としたロサ。彼女には力が感じられる。私はロサのお陰で力を得た。私もロサのように生命を尊重し、堂々とした力を得たのだ。

その後、ロサと監督が一緒に泣く場面を見せながら、監督がロサに言う「あなたのお陰で本当に多くのことを学んだ」と。

監督とロサのインタビュー場面で明らかになるのは、国際移動、特に結婚という移住方法を選択する際に「移動する主体としての『自分』」、つまり移住を選択したエージェントとしてのロサの姿である。ロサは、監督のインタビューの中で「私にとって国際結婚は、私が選択した人生の一部であり、一種の挑戦だった。独立のための戦いであった。」と話す。一般的に、国際結婚移住は、送出国での女性の貧困や、家族戦略として移住を決心する大きな要因になっていることや受入国の社会的人口学的な問題、男女が不均等な地域的で配偶者の不足など社会的な構造が要因になっているのは否定できない。しかし本論文で筆者はそれだけが女性が移住を決心する理由ではないことを提示してきた。勿論、ロサの言う「独立のための戦いであった」という部分においては色々なことが想像できる。それは、母国での貧困からの独立、または母国での家父長制からの独立かもしれない。しかし、この映画から明らかになったのは、移住を決定し、ホスト国でエージェントとしての移住女性であるロサの姿である。そのロサの姿には、「自分のために挑戦する」主体的な移住女性の姿と移住の動機が現れた。映像には、主体的な判断によって移住を選択したためその選択に責任感を感じながら、自分の人生の一部として強く受け止めている姿が映り出されている。

さらに、ロサと監督の関係においては、本章で取り上げている国際結婚の内面に含まれている意味についてももう一度考えてみたい。つまり、結婚を通じて女性が移住することは、ホスト国の男性の「妻」また、ホスト国の男性と間に生まれる「子供の母」になることで存在を規定され、安定化される。それが、受入国の国策である。少なくとも韓国で行われる国際結婚移住女性を受け入れる理由はそこにある。言い換えれば、ホスト国は「生殖しうる女性の身体」をジェンダー秩序のもとで海外から受け入れているのである。またこれは、女性の身体を「商品化」することであり、それは女性が自身の身体の所有を奪われることである。現代のグローバリゼーションにおいて生起するのは、グローバル化の中、私的領域または公的領域において様々な形で女性の身体が消去されていることを意味するのである。従って、ホスト国で結婚移住女性が離婚を選択することは、勿論、将来的に不安定になることを意味している。また、ロサのように妊娠したにもかかわらず、離婚を決心することは大きなリスクを伴うことになる。しかし、他方では、離婚後の自分と子供のために行う出産は、消去されていた自分の身体を取り戻すことにもなる。つまり、ロサが離婚を決心し、自立的な判断により行為することは商品としてではない産む身体を取り戻したことにも成りうる。さらに、ロサの主体的な判断に基づいた子供を産むという決心と行

為は、監督に影響を与えることになる。映画は、ロサの姿や「声」によって監督自身の心境が大きく変化していることを表す。それは監督の次のナレーションから明らかになる。

「私は、妊娠したことを知った時、仕事のことを先に考えた。＜中略＞ロサはラッキーだと言うのだ。私は、恥ずかしい。私は、自分のことしか考えていなかった。ロサは、つらい状況に置かれていながら生命を尊重し、自分を愛し、堂々としたロサ、彼女には力が感じられる。私はロサのお陰で力を得た。私もロサのように生命を尊重し、堂々とした存在であるための力を得た。」

監督は、ロサと出会いエンパワーメントされることで、監督自身も労働の場で消去されている女性の性的身体を取り戻すことになるのである。映像の始めに登場したティエンの場合も同様のことが言える。彼女の移住国際結婚は主体的とは言えない業者に騙されたような始まりであったがその後、自ら離婚することを決断し、母国に戻って工場で働く労働者としての「生」を選択した。さらには、今回は夫の不当性を訴えるという積極的な行為者として来韓したのである。彼女もまた自らの身体を取り戻した姿で表象されている。

#### 4-3. フィリピン人移住女性、メリンダー (Melinda)



図 24 メディア教育をしている監督と明るく自分を韓国語で紹介しているメリンダーの姿

映画は、監督が移住女性たちにメディア教育をしているメディア教室を映し出す。メディア教室には韓国に移住して1年から10年目になる国際結婚移住女性たち10人ぐらいが参加している。映画の三人目の登場人物はフィリピン人女性メリンダーである。フィリピ

ン出身の28歳のメリンダーは、韓国に移住して一年にもなっていない。監督は、韓国に到着した初日から新しい環境と生活に適応しようと一人で地図を持って出かけるほど積極的な性格の持ち主である彼女に惹かれた。監督のインタビューにおいてメリンダーは次のように自分の韓国での生活について話す。

나는 운이 좋아요. 한국 다 알아요. 가끔 집에 올때 어딘지 모르면 너무 무서워요. 한국 말을 조금 밖에 모르니깐 시어머니가 남편 일하는데 전화 해요. 며느리 없는데 어디 갔는지 모르겠다고. <중략> 우리 시어머니가 며느리 방보고 며느리 없어요 하고 남편한테 전화해요. 그리고(내가 방에) 들어가면 시어머니가 이렇게 안고 감사 합니다 그래요. 시어머니는 내가 집나간줄 알았어요. 아니예요 난 모험심이 강해서 한국에 대해 더 알고 싶고 한국이 어떤곳인지 알고 싶었어요. 영어로 써 있으면 알아요. <중략> 필리핀에 있는 우리 가족들이 거기에 내가 있던 곳이 아니니까 더 많이 힘내야 한다고 했어요. 그래서 당신이 예전에 나에게 용기 있는 사람이라고 했는데 그래요 나 그랬어요. 만약 내가 용감 하지 않다면 여기서 내가 뭘 할 수있겠어요. 그냥 울거나 그냥 앉아 있으면서 괜찮아 할수 없잖아요. 용기 있는 사람이 좋은건 어떤 문제에 부딪혔을때 그걸 받아 들이고 헤쳐나가는거예요.

<訳>

私は運がいいの。<中略> 韓国に来た始めの一週間は電車で色んなところに行きました。韓国語は分からないので家に帰って来る時間が遅くなると姑は夫の職場に電話します。私がいないと。<中略>私は出かけるのが好きなので、夫はお金と交通カードをくれました。<中略>またある日は、私が部屋にいないと思った姑がまた夫に電話します。私が部屋に入ると姑は私を抱きながら「ありがとう」と言います。私は冒険心が強くて、韓国に関して興味深い、韓国がどんなところなのか知りたいです。<中略>今は、少しは韓国になれました。初め頃は知らないことが多くて困ったりしました。それでも頑張りました。フィリピンの家族も、韓国の生活になれるように頑張らなければいけないと励ましてくれ

ます。あなたは以前私に、勇気のある人だと言ってくれましたね。そうです。もし、私に勇気がなかったらここで私に何ができますか。いつも泣くばかりで何もしないまま生活するわけにはいかないでしょう。勇気ある人とは、何か問題にぶつかった時、受け止めて切り抜けることのできる人だと思います。＜中略＞韓国語も夫と姑が教えてくれているので一生懸命に勉強したいと思います。子供が生まれたら韓国語で話したいです。英語は使いません。

メリンダーのインタビューから明らかになるのは、彼女が「韓国に関して興味がある。韓国がどんなところなのかもっと知りたい」と言い、新しい環境に適応するために積極的に行動する一人の移住女性だということである。彼女のそのような行動は、家族からも支持を得ることになる。姑は、メリンダーが部屋にいないことに不安を持ちながらもメリンダーが居てくれるだけで感謝の言葉を口にする。夫は、出かけるメリンダーにお金や交通カードを与えるなど新しい環境に慣れようとする彼女の積極的な行動を支持している。このように彼女が家族の支持と母国の家族からの支援を受けることで、母国から離れて、他国の慣れない新しい環境の中で、特に国際結婚生活の過程から新しいアイデンティティを確立していく姿が映画には現れている。更に、メリンダーは、「私に勇気がなかったらここで私に何ができますか。いつも泣くばかりで何もしないまま生活するわけにはいかないでしょう。勇気ある人とは、何か問題にぶつかる時、受け止めて切り抜けることができる人だと思います。」と自らを勇気のある人だと言い、自分の社会的位置を積極的に受容しながら受け止めている。そして、「妻」や「嫁」としての社会的位置とともに自分のアイデンティティを確立していくのである。



図 25 (左) 妊娠した監督のお腹を触りながらお腹の子供を感じようとする場面 (右) 監督とメリンダーの間に女性同士の関係が生まれる瞬間

映画は、さらにメリンダーが参加する韓国語教室の風景を映し出す。メリンダーが監督の膨らんだお腹を触りながらお腹の子供を感じようとする場面で、メリンダーと監督が、妊娠という共通点からより親しくなっていく様子を描き出す。映画の場面からは、妊娠した韓国人女性と韓国に移住したフィリピン人女性、監督と出演者、マイノリティとマジョリティー、支配と被支配といったカテゴリーから離れ、国籍を超えて女性同士が出会う瞬間が象徴的に現れている。つまり、この瞬間こそ、移住女性とホスト国の間に存在する政治経済的な格差を離れ、それぞれの労働の場で疎外されていた性的身体を取り戻し、解放される象徴的な場面である。

次に映画の場面は、描いた絵について発表するメリンダーの姿を見せている。絵には王冠を被った監督の姿がある。何故、王冠を被せたのか聞くと「왜냐 하면 언니가 너무



図 26 メリンダーが描いた、王冠を被った監督の姿

좋아서요. 언니는 내게 너무 좋은 사람이에요 (=なぜならば、姉さんが好きだからです。姉さんは私にとってとても良い人です)」と答える。このメリンダーの答えからは、メリンダーにとって監督は、いつの間にか監督ではなく親しい「姉さん」に変化する姿が見出される。映画のなかで監督とメリンダーの関係はより親密な関係に発展

するが、それは特に、メリンダーが家庭内の問題を抱えて監督に電話をかけ、自分の悩みとストレスに耐えられず爪を強く切ってしまったと話す場面から明らかになる。

映画は、再び韓国語教室を映し出す。韓国語教室に参加した移住女性の中には、中国から移住したチンチン (Chin Chin) の姿が映し出される。チンチンの場合は、配偶者とレストランで働く労働者として社会的位置を共有している。

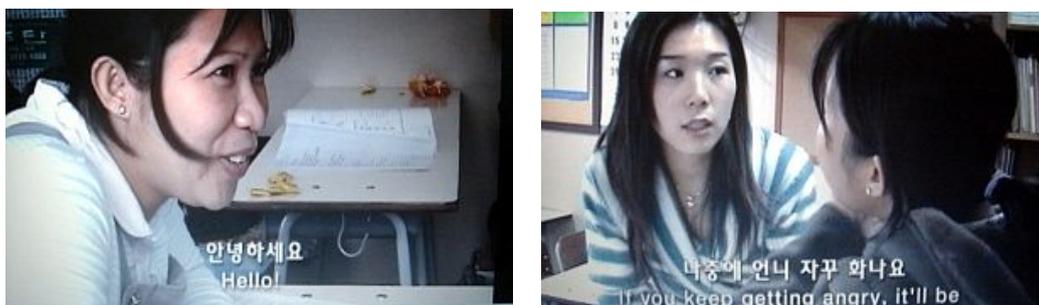


図 27 メリンダーを励ますチンチンの姿

映画は、メリンダーが自分の悩みとストレスに耐えられず爪を強く切ってしまったと話したのをきっかけに、韓国語教室に集まった移住女性たちが厳しい環境や苦痛などに耐えられず自傷行為をした経験があると話し出す場面が続く。特に、この映画の場面はチンチンがメリンダーに、自分も過去に義理の母親に耐えられなくて手首に傷つけたことがあると、自分の過去をメリンダーに話しながら彼女を励ますところをクローズ・アップしている。また、ストレスに耐えられない時には、音楽を聴くなど、おなかの中の子供を思い出して我慢するようにアドバイスも忘れないチンチンの姿を見せる。このように映画の中で韓国語教室の風景は、彼女達が新しい人間関係を形成し、相互に関係し合うことで、社会的欲求を充足させ社会的支持網（Social Support Network）を形成して行く移住女性たちの姿が現れている。監督は、チンチンとメリンダーのお互いを励まし合う姿から「生きる力」について、ナレーションで次のように語っている

어느새 친친과 멜린다는 서로 격려를 하고 있다.

손을 잡는다는것 그것이 살아 가는 힘이된다고 생각 한다.

<訳>

いつの間にか、チンチンとメリンダーは互いに励ましあっている。手を繋ぐということ、それが生きる力になると思う。

#### 4-4. 中国人移住女性、チンチン（Chin Chin）

場面は、四人目の登場人物であるチンチンの部屋に移し変わる。中華料理を作って監督と食事をした後、監督が姑との関係についてチンチンに聞くと、彼女は次のように語り出す。

어머니는 나를 못믿는거 같아요. 자주 우리남편한테 나를 많이 믿지 말라고 예기 해요. 저한테도 직접 말할때도 말해요. 『친구가 그러는데 어느 집 중국며느리가 도망을 갔다고 ,다른 중국 며느리는 돈벌려고 중국에서 왔다』고 제앞에서 그렇게 말해요. 그럼 전 속상해요. 어디나 다 똑같아요 나쁜여자도 있고 좋은 여자도 있고..중국여자가 다 나쁜여자라고 생각 하는지 모르겠어요. 전

생각해요 어머님들이 중국여자 안좋다고 하면서 왜 아들은 중국여자랑 결혼 시켜요?

<訳>

お母さん（義理の母）は、私を信じないです。よく夫にも私のことを全て信じないように注意し、夫にだけではなく、私の前でも、『友達から聞いたけど、誰かさんの中国人嫁が逃げ出した』とか『中国嫁はお金儲けで韓国に国際結婚移住すると聞いた』と言う。そのような話を聞くと私は嫌になります。そのようなことは何処でも同じだと思います。いい女もいれば悪い女もいるし...、なぜ中国の女が全て悪い女だと思うのか分かりません。お母さんたちは、中国女が悪いと思いつながらなぜ自分達の息子らを中国人女性と結婚させるの？って私は思います。

映画は、チンチンの化粧台の鏡に張ってあるメモ紙を映し出す。そのメモには「자기야 사랑해 오빠 우리 꼬 잘먹고 잘살아요 화이팅（=あなた、愛している。私たち、よく食べて良く暮らしましょうね。ファイト）と、夫

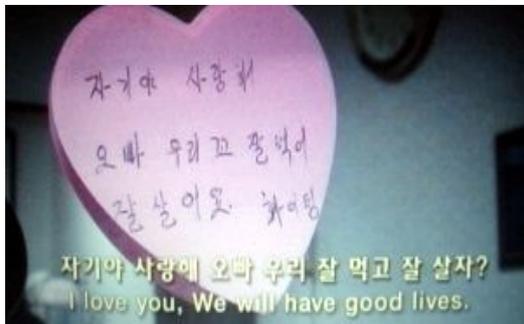


図 28 あなた、愛している。私たち、よく食べて良く暮らしましょうね。ファイト) と、夫へのメッセージ

へのメッセージが、上手くない韓国語と英語で書かれている。またチンチンは、「人の希望って皆、同じでしょう。よく食べて良く暮らすこと！」と笑いながら話す。監督は、チンチンのこの素朴な夢を聞いて社会に存在する移住女性への偏見や歪曲されたイメージについて考えるようになり、監督のナレーションで「移住女性に対して自分も偏見を持っていたのでは

ないか」と語っている。このチンチンの「声」からは、韓国人が持っている国際結婚移住女性への偏見がより明らかになる。つまり、韓国人の義理の母が中国人であるチンチンを信じないことや、夫にも配偶者である彼女を信じないように注意することは、移住女性への不信感そのものと言える。しかし、映画の中でチンチンは、そのような義理の母親に耐えられなくて手首に傷つけたことがあったにもかかわらず、結婚生活を諦めようとしない。彼女は、姑と別居することを選択し、「あなた、愛している。私たち、よく食べて良く暮らしましょうね。ファイト」のような多くのメッセージを夫に送り、まさにファイトしながら

ら夫と結婚生活を営んできたのである。

チンチンの場合は、結婚生活の中で、メリンダーのように姑の支持は得られなかった。しかし、自ら姑との別居を選択するなど結婚生活における問題点を自ら解決しようとする姿勢が見られた。つまり、映画の中では、彼女が自分自身の「生」に主体的に向き合い、自分の結婚生活を守ろうとする配偶者としての新しいアイデンティティを構築していく姿が提示されていた。

#### 4-5. フィリピン人移住女性、メロディー (Melody)



図 29 韓国に 10 年前のことを話しているメロディーと 10 年前に国際結婚した彼女の当時の写真

映画に五人目に登場するメロディーは、三人の子供を育てながら韓国で十年間住んでいるフィリピン出身の移住女性である。監督は、韓国社会で長年住んでいる移住女性の「声」を聞くためにメロディーへのインタビューを始める。映画には、十年前、結婚当時の写真が映し出される。そして、メロディーは、当時のことを「フィリピン人の友達と互いに助け合いながら生きてきた」と語り始めながら十年前の事を次のように振り返る。

メロディー : 음식만들었어 하면 바로 가는거예요. 어머니도 그래  
갔다가 맛있는거 많이 먹고와 하시고, 추웠는데 괜찮아 하면서 옷  
몇겹으로 껴입고, 그집에 가야돼 먹으려고, 그렇게 우린 산거예요  
옛날에 친구들도 그렇게 했어요

<訳>

友達からフィリピンの食べ物を作ったと連絡が来ると、たとえ寒くても  
行きました。義理の母も美味しく食べてきてねって言ってくれました。  
その時、友だち皆がお互いにフィリピン伝統料理を作って一緒に食べた

り話したりしました。

監督：その頃、同じ時期に国際結婚した人たちがいましたか

メロディー：はい、多かったです。皆同じ時期に結婚しました

監督：それはよかったですね。そしてみんな同じ時期に、妊娠したでしょうね

メロディー： 맞아요. 서로 도와주는거예요. 우리도 갑시다 하고, 그럼 괜찮아 놀러와, 그리고 계속 전화하는거예요. 친구들과 전화 하면 그때 행복한 거예요. 왜냐하면 다른 사람 하고는 말 못하잖아요. 그럼 전화로 괜찮아? 그럼 응 그래너도 괜찮아? 잘하고 있어

<訳>

そう、お互いに助けあったの。互いに電話でおしゃべりしました。そしてたら、幸せな気持ちになります。なぜなら、他の人とは話せないから。韓国語も話せなかったから。電話で、「あなた大丈夫？」と聞くと向こうも、「うん。大丈夫よ。あなたは？よくやっている？」と聞いてくれます。

監督：よかったですね。その時、友達がいなかったらとても大変だったかもしれないですね

メロディー： 그래서 지금 처음 오는 필리핀 사람들 결혼하는거 진짜 다행이다. 왜냐하면 우리가 있어서 옛날에는 없었잖아요. 지금은 진짜 축복받은거예요.

<訳>

最近、国際結婚して韓国に来るフィリピン人たちは本当に幸せです。なぜなら私たちがいるから。昔は、先輩たちがいなくて大変でしたから。今、韓国に来るフィリピン人たちは本当に幸運です。

監督：よくなりましたね

メロディー： 그래서 통화나 대화문제 있으면 바로 우리한테 전화하는 거예요 남편 얘기 하는거예요. 근데 옛날에는 우리 스스로 하는거예요. 지금 우린 괜찮아 살아있어

<訳>

そして、何か問題があると私に直ぐに電話してくれるの。そして、自分

たちの悩みを話してくれる。昔は、悩みがあっても自分一人で解決したりしたの。でも、大丈夫。私たちは生き残れたから。

監督：生き残りましたね。サバイバルでしたね。

メロディー：そう、サバイバルでした。

メロディーは、過去のことを思い出しながら、十年前の移住女性たちの状況と現在の状況を比較している。前述したメロディーの「声」からは、他国で生活している移住民でありながら、女性として共感を感じる移住女性たちが、姉妹的な連帯と協力を通じてネットワークを形成していることと、そして、それらを通じて国際結婚移住女性たちが、家庭の生活、特に夫婦関係や姑と嫁の間の葛藤、妊娠、出産、育児などに関するアドバイスや相談の役割を果たしながら、移住女性のエンパワーメントの相互支持をしていることが見られた。また、「最近、国際結婚して韓国に来るフィリピン人は本当に幸せです。なぜなら私たちがいるから。昔は、先輩たちがいなくて大変でしたから。」という彼女の語りからは、長期的な滞留期間によって、市民としての自覚が見られる。つまり、韓国で長年滞在しているメロディーは、先輩として、移住して間もない移住女性が地域社会の情報網を形成する過程で、助言者、または媒介者の役割を果たしている。また、映画では、移住女性たちに対してだけではなく、監督にも先輩として接することで、監督はいつの間にか、メロディーを「お姉さん」と呼び始める。

映画は、移住女性たちが受入国で生活しながら具体的な人間関係と、ホスト社会での規制や諸々の条件の中で確立していくアイデンティティとともに、自分たちの行動と認識が時間と空間の変化とともに変化する移住女性の姿を明らかにするのである。

また、映画の中でメロディーは、自分の子供たちに向う社会の視線について不満を持ち、母親がフィリピン人であることが子供たちに悪い影響を与えていないか気にしている。子供たちは、友達と一緒に遊びたいが、母がフィリピン人なので一人で遊ぶことが多いとメロディーは言う。

私は子供たちに「人がじっと見ることを気にしないで、人は、あなたが可愛いから見るのよ。ほかの子供たちよりずっと可愛いから見るの。ほら他の子たちより二重があって目が綺麗でしょう。だから、じっと見るのよ」って、話してあげるの。子供たちが自信をなくさないように。

移住女性たちは、国際結婚への社会的な眼差しや偏見から解放されていない。従って、彼女たちは、時には自分の出身地や国籍を隠したり、嘘を付いたりして自分のアイデンティティを多重化し、流動的に変化させる場合も見られる。しかし、メロディーの場合は、母親がフィリピン人であることからくる偏見の眼差しを恐れながらも、自分の出身地や国籍を隠したり、嘘を付いたりするのではなく、子供たちに自信を与えるための方法を工夫する姿が見える。更に、メロディーは、韓国に来て十年間住み、今は何の不自由もなく韓国語を話せるが、今も韓国語教室に通っている。はじめは、韓国に慣れるために韓国語を学んだが、今は子供のために韓国語を学んでいる。このようなメロディーの姿に監督は「나는 그런 언니를 보면서 엄마란 무엇인가를 배운다. 아이들에게 울타리가 되기 위해 노력하는 언니 언니는 참 좋은 엄마다 <訳> 私は、お姉さん（メロディー）を見ると、『母とは何か』について考えさせられ、多くのことを学ぶ。子供たちを守ろうと努力するお姉さん、お姉さんは、素晴らしい母だ。」と語る。

最後に、映画は、出産予定日が近づくにつれ、仕事のことと身体の変化に不安を感じながら、力を得るためにメリンダーに会う場面を映し出す。



図 30 移住女性とホスト国の女性が、政治経済的な格差から離れ、生む身体として出会う場面

난 이주여성들의 어려움을 담으려고 영화를 시작했지만 오히려

내가 힘들어 할때마다 그녀들은 내게 손을 내밀어 줬다. 그덕분에 난 일을 계속 할수 있었다.

나는 그녀들에게서 많은것을 배웠다. 그녀들은 나에게 여자로 사는 어려움에 대해 구체적으로 알게해 줬고 그어려움에 당당히 맞서는 법도 가르쳐 줬다.

우리는 또 뱃속아이 이야기를 한다. 우리는 각자의 자시에 서서 산다. 굵이굵이 마주치는 여러 일들이 있지만 하루 하루를 살아 낸다. 그리고 서로의 모습에서 힘을 얻는다.

<訳>

私は、移住女性の辛さや、悩み、そして他国で生きることは何を意味しているのかを知るためにドキュメンタリー映画を制作し始めた。しかし、むしろ私が辛くて、大変な時に彼女達は私に力になってくれた。彼女達の励ましや力のお陰で私は仕事を続けられた。私は、彼女達から多くのことを学んだ、問題にぶつかった時に、その問題を受け止めて、堂々と向き合い、切り抜く方法も教えてもらった。<中略>私たちはまた妊娠について話す。私たちは各々自分の人生を生きている。そして、互いの生きる姿に力を得るのだ。

監督は、この場面を通じて、「私たちは各々自分の人生を生きている。そして、互いの生きる姿に力を得るのだ」と、グローバリゼーションの中での主体性をもった出会いが生み出す力を、メッセージとして社会に送り出している。監督は、各々が生きる方法やその環境は違うことを認めながら、互いに影響し合っているのだ、と言う。また、監督がメリンダーと会うこの場面は、それぞれの状況で出産を決断し、一人の産む身体をもった女性の姿となって出会うことで、政治経済的な格差や作品制作における立場を越えて、命の根源と身体の変化を抱える不安と喜びを分かち合う女性同士として出会う瞬間を、映し出している。



図 31<左>出産したメリンダーと子供 <右>出産した監督と子供

映画は最後に、メリンダーと監督が出産し子供の世話をする場면을映し出す。そして、最後に監督は次のように語って映画は終わる。

지금 나의 바람은 멜린다의 아이와 나의 아이가 자연스럽게  
평등하게 잘사는 것이다.

<訳>

今、私の望みは、メリンダーの子供と私の子供が平等に生きることだ。

子どもたちは、この、グローバル化下の移動の時代の第2世代として生まれた。この場面は、「生」は継承されることを意味する。一つの世代が終わると次の世代が持続される。また、これは、子供は親を選択して生まれるのではない。従って、前世代は後世代に対する責任があることを意味している。監督は、制作期間 2 年という長い間、移住女性たちと出会い、親密な空間に入り込み彼女たちの「生」を映しだそうとしてきた。そして最後に「私の望みは、メリンダーの子供と私の子供が平等に生きることだ」と語る。監督は、制作期間の間、自ら移住女性と出会い、互いに交流を持つことで、移住女性がこのホスト国である韓国社会の中でいかに不平等な状況におかれているのかを実感してきた。だからこそ、今は現実的に不平等だが、次世代の子どもたちこそは「平等に生きる」ことを願うという。ここには監督自身の希望 — 社会の変化への、そして次世代の子どもたちというエイジェントによる変革への — 希望や次世代への責任感を共有したいということがメッセージとして伝えられている。

映画は、移住女性への偏見の存在を明らかにしながらこの彼女たちがどのようにして新

しいアイデンティティを獲得していくのかを描き出した。映画の撮影中、彼女たちの置かれた厳しい状況やつらい体験が明らかになるが、むしろ監督は、彼女たちから生き方を学び、励まされる。映画には、監督自身の予期しない妊娠のために作品の完成が危ぶまれ出産について悩んだ時期もあったが、監督は彼女たちから生命の大切さ、生命のもつ力を受け取り、明るくて元気に子供たちを育てたメロディーを人生の先輩として受け入れる姿が表れている。特に、同じ時期に妊娠したメリンダーは監督と友情を交わし、出産前の監督の大仕事を皆が温かく見守るようになる。社会的な問題意識で始まったドキュメンタリーがいつのまにか監督の私的な生活にも影響を及ぼすことになる。監督は、難しい状況に直面しながらも、独立した精神で生きている彼女たちと出会い、お互いの結婚、妊娠、出産について議論を交わした。結果的に彼女たちは強い連帯感で結ばれる事になる。

映画の考察から、移住女性たちの自己アイデンティティは、移住の過程を通じて形成される公的・私的な空間と役割によって変化することが明らかになった。特に、メロディーのような、ホスト国での状況と条件によって流動的なアイデンティティ形成が見られた。チンチンは、移住女性たちに対する固定化されたネガティブな移住女性の表象に強い拒否感を表わしていた。さらに明らかになるのは、移住女性たちが、移住の定着過程で、ネットワークを構成し、移住女性のパイオニアとして、新しく移住してくる後輩達とホスト社会の間に媒介人としての役割を果たす姿である。

ギデنزが、「個人は、自らの自己アイデンティティの形成を通じて、その行為の文脈がいかに関与し、結果的にはグローバルな社会的影響の一部をなし、それを直接に押し進めるのである」<sup>190</sup>と述べるように、映画の中で移住女性たちは、外的な影響に決定されるだけの受動的な存在ではない、自らもまた自己アイデンティティを形成する主体としてアクティブに行為する。そしてその行為は、ホスト社会へ影響を与えることになるのである。まさに、ここに、エイジェントとしての移住女性たちのあり方が表象されている。ホスト社会への影響は、この映画を制作し、さらには、映画の中の重要なアクターとして登場してくることになる監督自身の変化として、映画の中で現在進行形で起こって来る。監督は、離婚後に妊娠が分かったロサに、「子どもを産む選択ではなくほかの選択もあるのでは？」と問うのだが、それに対するロサの答え「私はラッキーだ、おかれている状況はアンラッキーだが、この子のおかげで私はラッキーだ」という発言に衝撃を受け、泣

---

<sup>190</sup> アンソニー・ギデنز著、秋吉美都、安藤太郎、筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ』（ハーベスト、2005年）2頁。

く。監督自身は、この衝撃の中で、「生命を尊重し、自分を愛している」、「堂々としている」ロサに人間として、女性としての尊厳、さらには命の尊厳を感じ、そこから、「力」を得、自らも、映画制作の場での迷いや不安を脱して子供を産むことを決定し、労働の場で疎外されていた自分自身の性的身体を取り戻していく。ロサの発言とその「堂々とした」尊厳に満ちた姿は、監督の生に決定的な影響を与えたのだ。その後も、監督は、同時期に妊娠していたメリンダーと会い、交流することによってエンパワーメントされていく。この作品は、移住女性の姿を映し出すだけでなく、撮る側と撮られる側、ホスト側と移住してきた側との間に相互的に形成されていくコンタクト・ゾーンそのものを、現在進行形で映しだしていく。そしてこの過程が映画という作品として生産されたことによって、この映画そのものが、それが各地で上映される場において、今度はオーディエンスとの間で新たなコンタクト・ゾーンを作り出していくのである。コンタクト・ゾーンは、韓国各地での上映運動において、韓国国際女性映画祭において、そしてこの論文において、出現している。

## 5. ドキュメンタリー映画『素敵な彼女たち She is』の意味生産

### —監督へのインタビューから

以上の表象分析から、移住女性をありのままの姿で映し出そうとする監督の意図が見られた。監督は、この映画で、女優ではなく、現実の移住女性の姿を見せている。さらに、この作品は、移住女性の姿を映し出すだけでなく、撮る側と撮られる側、ホスト側と移住してきた側との間に相互的に形成されていくコンタクト・ゾーンそのものを、現在進行形で映しだしていく。ただ、この映画については、テレビドラマ『黄金花嫁』と物語映画『ケアギバー』のように、作品を見た観客の感想を分析することが出来なかったために他の二作品と同様の形で「意味作用の実践」の分析は行い得ないが、次の監督自身に行ったインタビューから、観客の反応を知ることができた。

インタビューは、2008年2月から3月まで実施した千葉大学大学院人社研実践的公共学応用プログラム派遣事業参加における海外調査「韓国における移住女性研究」の一部分における結果である。インタビューは、筆者が準備した質問に答える自由形式に沿って行った<sup>191</sup>。ここでは、インタビュー内容の中で、観客の反応を知ることができた内容とメールにて行ったインタビュー内容を中心に考察を行う。

---

<sup>191</sup> 参考資料2を参照せよ。

<監督とのインタビュー内容>

質問4 Q： 登場人物たちとは今も交流がありますか

A： そうですね、皆一緒に集まることが難しくてなかなか会えませんが、メリンダーとメロディーお姉さんにはこの間会いました。そして、たまに電話で話したりしますね。

質問5 Q： 映画に登場した5人の移住女性に、映画に登場したことで何か変化が見られたのでしょうか、そして、皆さん今どうしているのか

A： そうですね、ティエン（ベトナムからの移住女性）は裁判が終わってベトナムに行ったのでなかなか連絡が出来ないですが、ベトナムの靴工場で働いています。ロサは（映画の二人目に登場したフィリピン人女性）子供を産みました。センターの助力を得て今もここで（韓国）で生活しています。あと、メリンダーは相変わらず明るくて、最近子育てで忙しいみたいです。（笑）チンチンは、レストランで働きながら夫と幸せに暮らしています。メロディーお姉さんは、英語の先生になりました。また、相変わらず、移住したばかりの移住女性たちに色々指導しながら社会活動をしています。オンニ（お姉さんを称する韓国語）のことを考えると、いつも凄いなって思います。本当に感心するんだから（笑）...

そうですね～映画に出たことによって何か変わったかは正直に良く分かりません。今は皆、普通に生活しています。ただ、思うに、それが自然だと思います。私たちが、あまりにも彼女たちを「移住女性」と言う枠に入れようとしているのかもしれないね～

質問6 Q： 映画を見てその周辺人である韓国人たちには何か変化がありましたか。

A： 映画は主に、市民団体や小さい施設で上映されているので、一般映画のように多くの人々が見るわけではないのです。また、この間

題に関心があるところで上映される事が多いですから...そうですね、しかし、この間、市民団体から上映依頼と講演の依頼が来て参加したのですが、少なくともそこでは、移住女性たちに対してもう一度考えるようになったと言う人が多くいましたけど。

<メールにて行った監督とのインタビュー内容>

メール送信日：2010年、12月11日

質問内容：ドキュメンタリー映画『she is』を観た観客（移住女性や韓国人）の反応について教えてください。

メール返信日：2010年、12月21日

質問に対する回答：当時（2007年）、映画『she is』は、不特定多数が観る状況ではなかったもので、大衆的な反応は感じる事が出来ませんでした。でも、最近を上映が続いているが、主に地域や団体での自主上映という形で行われることが多くて、その場での観客の反応を読み取ることが出来ます。移住女性たちは、自分たちの経験と重なっているため、感情移入が生じることで、映画を見て自分たちの経験を話しながら泣く場合が多いし、そのときお互いに慰めながら話を続ける事があります。また、韓国人の場合は、移住女性を他者ではなく主体として見せてくれて感謝します、という言葉がおおくあります。これは、今までの大衆メディアでは、移住女性をかわいそうな人、あるいは悪い人として見せることが多いからですね。

監督とのインタビューから、この映画の上映は映画館ではなく、地域や団体での自主上映という形で行われているが、現在まで韓国各地で上映運動が続けられ大きな反響を得ていることが明らかになった。その際に、移住女性の観客は、映画を見て映画の中の移住女性と自分を同一視することで涙を流したり、上映後も自分たちの経験したことを話し合い共有しあうことでさらなる連帯を作り出している。他方、韓国人の観客の反応は、移住女性を他者ではなく私たちと同じようにこの国で生きている主体として見せてくれることに感謝する、という感想がよく聞かれる。即ち、映画を上映する場そのものがコンタク

ト・ゾーンとなっており、移住女性の主体性を等身大で伝えていく「意味作用の実践」を行っていると言える。

#### 第4節 ジェンダー化された移住方式とセクシュアリティ

##### 1. 移住女性のジェンダー化された移住方式

グローバリゼーションの進展の中で、国境を越えた人の移動はその重要な問題の核をなしている。中でも近年、女性の国際移動の増加は「移民の女性化 (feminization of migration)」として移民研究において関心を集めている。「移民の女性化」とは移民者のうち少なからざる部分を女性が占めることになってきたということである。1970年から1986年の間における世界全体の国勢調査の分析によれば、出生国を離れている人びとが約7700万人おり、その48パーセントが女性である。大半の諸国の外国人人口に占める女性の比率は今や45パーセントから50パーセントとなっている。1990年のヨーロッパでは、ドイツ連邦共和国において移民に占める女性の比率が43.7パーセントと低めであったのに対して、イギリスは52.5パーセントと高めであった。アメリカの比率は約50パーセントである<sup>192</sup>。

上杉妙子は『移民の女性化』についての議論は、ただ単に女性移民の量的増加を反映しているのではない。それは移民研究の深化をともなって展開してきたのである。特に注目されるのはこれらの研究が女性移民のエンパワーメントという実践的関心と結びついており、女性移民をマクロな構造に受動的に反応する存在としてではなく主体的な行為者として描こうとしてきたのである。」とのべ、女性移民、とりわけ「家事労働移民」を対象とした先行研究の成果を紹介・検討する<sup>193</sup>。既存の移民研究は、女性従属性を所与の事実と見なし、そのため女性移民の移動の要因、動機、過程、経験等を正しく理解することができなかった。近年ようやく、女性を、主体的に決定を下す行為者とみなす女性観に基づく家事労働移民研究が示され始め、男性移民とは異なるインパクトを移民研究にもたらし始めているという。さらに、上杉によると移民とジェンダー研究において取り上げられるテーマは、家事労働移民、難民キャンプにおける家族、人身売買、セックス・ツーリズム、家事労働移民の組織化などを挙げているが、国際結婚による移民研究については言及されて

<sup>192</sup> ピーター・ストーカー著、大石奈々、石井由香訳『世界の労働力移動 ILO レポート』（築地書館、1998年）117頁。

<sup>193</sup> 上杉妙子、前掲書（2005年）243-256頁。

いない<sup>194</sup>。

小ヶ谷千穂は女性の国際移動をめぐる研究関心は、国際労働移動研究において近年最も関心を集めている分野であり、70年代後半から80年代にかけて急速に関心を集めるようになったと述べる。さらに、欧米の移民研究においては、「移民=男性」であり、女性は「男性に呼び寄せられる家族」という前提があったと指摘している<sup>195</sup>。1990年代に入って日本ではフィリピン人労働者の国際移動に関心が寄せられ研究され始めた<sup>196</sup>。小ヶ谷もその研究者の一人である。小ヶ谷は文献研究にとどまらず自ら現地調査を実施する意欲的な研究を試みた。「世帯戦略が負担となって過酷な労働条件に耐える傾向が強いという通説から見えてこない、世帯戦略的な直面と個人的動機とバランスを巧みにとる女性たちの姿」を説得的に浮き彫りにしている<sup>197</sup>。さらに、小ヶ谷は「移住労働者の女性化」について言及している。「80年代中ごろから特にアジア地域を中心に著しくなったのが、女性の単身での国際労働移動が男性の移動を量的にしのごようになる『移住労働者の女性化』である。」とのべる<sup>198</sup>。アジアにおける「移住労働者の女性化」の特徴については、「移住女性たちの職業が家事労働や生産業など広く再生産労働と位置づけられる領域に集中したことである。典型的には NIEs<sup>199</sup>と呼ばれる国々に、フィリピンやインドネシアから家事労働者や介護労働者として働く女性たちが大量に移住した。」と述べる<sup>200</sup>。このような「移住労働者の女性化」の特徴の中には、国際結婚を通じて移民の主体となる女性たちの存在も含まれているように思われる。

## 2. 韓国に移住する移住者のジェンダー化された移住方式

韓国に移住する外国人の移住方式を性別に分析すると、男性は、就労を目標とし移住する一方、女性の場合は、結婚、生産業のサービス業で従事するセクシュアリティを媒介に

---

<sup>194</sup> 同書、243-256頁。

<sup>195</sup> 小ヶ谷千穂「女性移民(移住女性)」伊豫谷登士翁『思想読本(8) グローバリゼーション』(作品社、2002年) 134頁。

<sup>196</sup> 例えば、藤森英男(1991)、山形辰史(1991)、寺田勇文(1991)、菊地京子(1992, 1994)、佐藤忍(1997)、小ヶ谷千穂(2001)

<sup>197</sup> 小ヶ谷千穂『『移住労働者の女性化』のもう一つの現実—フィリピン農村部送り出し世帯の事例から—』伊豫谷登士翁編者『経済のグローバリゼーションとジェンダー』(明石書店、2001年) 182頁。

<sup>198</sup> 同書、161-186頁。

<sup>199</sup> 新興工業経済地域(Newly Industrializing Economies: NIES or NIEs、アジアニーズ)とは、発展途上国のなかで20世紀後半に急速な経済成長を果たした国・地域の略称。(小ヶ谷の表記引用)

<sup>200</sup> 小ヶ谷千穂、前掲書(2002年) 134頁。

移住する移住が主である<sup>201</sup>。男性がいわゆる 3K 業種に代替労働力として投入される反面、女性たちは国際結婚、または性の商品化が成り立つ性産業に移住する二分化され、性別化された移住方式がみられる。

韓国に移住してくる女性たちの移住形態は、入国の経路により大きく四つの形態に分類される。まず、一つ目には産業研修生で正式労働許可を受けて入国する場合、二番目は芸術興行滞留資格者の資格で E-6 ビザを受けて入国して舞踊家などで芸能活動をする女性たち、いわゆるエンターティナーである。三番目には知り合いへの訪問や観光ビザで入国して不法労働をする場合である。最後の四つ目は韓国人男性との結婚を通じて入国する国際結婚の移住形態である<sup>202</sup>。しかし、移住女性たちの移住形態は境界線が明確ではない。つまり、親戚の訪問や観光ビザで滞在しながら、韓国人男性と結婚し国際結婚の形式で定着する場合と E-6 ビザで性産業で働きながら韓国人男性と出会い結婚するケースも少なくないからである。従って、移住女性を一律的に各範疇から女性を区別することは難しい。さらに、移住女性たちが韓国に移住される形態によって、彼女たちがセクシュアリティと関連した問題をもつことを直接的に、または、間接的に露わにする。例えば、性産業への移住、産業現場でのセクハラと性暴行、韓国人男性との結婚過程の中で行われる人身売買的な結婚など、これらの問題は、セクシュアリティという特殊な条件を媒介し、移住女性を同定化 (identification) している<sup>203</sup>。これは、移住女性が男性と異なった環境と文化に置かれていることを明らかにする。特に、韓国における結婚移住の場合において女性のセクシュアリティは重要な位置を示す。

映画に登場する 5 人の移住女性は、すべてが国際結婚を通じて移住した。ベトナム人、フィリピン人、そして中国からの移住女性である。映画のはじめに登場するベトナム人テイエンは、19 歳の時、62 歳の韓国人男性と国際結婚斡旋業者を通じて半強制的に結婚し、韓国で住み始めたが、夫の暴力から離婚した。ベトナムの場合、1986 年ドイモイ (DoiMoi) 政策<sup>204</sup>以降、改革、開放を進行してきた。1990 年代からの開放以降、アジア地域の新しい

<sup>201</sup> 이수자 「세계화 과정에서 본 이주여성의 성과 문화 적응」 성신여자대학교 한국여성연구소 추계학술대회 발표논문, 2003 년. (=李スザ 「世界化過程でみた移住女性の性と文化適応」 誠信女子大学校韓国女性研究所, 2003 年)

<sup>202</sup> 同書 (2003 年)

<sup>203</sup> 同書 (2003 年)

<sup>204</sup> ドイモイは日本語では「刷新」と訳されている。ドイモイをベトナム語で書くと DoiMoi となるが、ベトナム語にはこの DoiMoi という単語はない。ドイ (Doi) は変化という意味であり、モイ (Moi) は新しいという意味である。この 2 つの単語を並べて新しい作られた新語なのである。1986 年 12 月の第 6 回ベトナム共産党大会で、従来の概念・思考・行動から脱却して新しい変化を決議し、このスローガンとしてドイモイという言葉が作られた。そしてドイモイは、ベトナムの政府・経済の基本概念、基本的戦略を大きく転換させることになった。この大転換とは、従来型の社会主義 (マルクス・レーニン主義) を捨てて、「新しい国づくりの変化の模索」を開始したことである。具体的にいうと、従来の官僚主義や分配経済を捨てて、市場経済の導入や産業政策の変更、そして社会主義路線の見直しなどについて模

労働力送出国として浮上する。その結果、典型的な労働力の輸出国のフィリピン、インドネシア、タイと新しく浮上したベトナムやネパールのような国の間で競争が深化した<sup>205</sup>。さらに、ベトナムの場合は、男性移住者より、女性移住者が急増している。その結果、女性移住者は全体移住者の 52 パーセントを示している<sup>206</sup>。移住女性の大部分は、性産業、家事労働、結婚移住を中心に移住している。特に国際結婚移住には、ベトナム社会のジェンダー不均等、近代化に対する熱望が関係している。1970 年から 80 年代におけるベトナムの女性人口は大きく増加したが、男性の人口は減った。また、戦争による男性の死亡率が高まった。その結果、ベトナム人女性の国内結婚には不均等が見られるようになった。また、1990 年代以降、若い女性たちの結婚観は、ロマンチックラブの結合を理想化し始めた。そして、「モダン」と呼ばれる西欧式結婚式は、都市を中心に流行し始めた。1992 年以後、韓国と修交を結んだベトナムは、韓国の経済、文化に関心が高く、近年においての韓流ブームによって一部の女性たちには韓国が「欲望の空間」になっている<sup>207</sup>。そして、国際結婚を通じた移住は特に「大きな成功 (a big success story)」として憧れの対象となった<sup>208</sup>。この場合、ベトナム人女性にとって、韓国への移住は、母国におけるジェンダー不均等と結婚を通じて「成功神話」を作り出す欲望が動機づけとなっている。

映画に登場するロサとメリンダー、メロディーはフィリピン人である。フィリピンにおいて海外移住はその歴史が長く、国家政策として大規模な移住が世界的に行われている<sup>209</sup>。フィリピン人女性たちは、自分のスキルアップや経済的な独立のため、あるいは、夫の暴力を避けるため、または、シングルマザーが家族に対する罪悪感と経済的困難のため、本国の男性との結婚を避けるためなど、多様な移住の動機を持っている<sup>210</sup>。韓国を選ぶ理由は、韓国の移住斡旋業者が他の国より低費用であることなど他の国より簡単に移住ができるという点とそれによって移住のターミナルとして利用することができるためである<sup>211</sup>。

---

索を開始したことである。1076 年に南北ベトナムが統一されて以来、ベトナムは社会主義体制を構築し、官僚主義的分配経済を進めてきた。社会主義体制の下で 10 年間にわたり新しい国づくりには役に立たず、むしろ大きな障害になるという認識から、86 年に「国づくりのための新しい変化」に求める決議がベトナム共産党の党大会において行われた。この「新しい国づくりのための変化」がドイモイである。

<sup>205</sup> Nicola Piper and Mina Roces, 2004, "Rights of foreign Workers and the Politics of Migration in South East and East Asia," *International Migration*. 42(5), pp. 71-97.

<sup>206</sup> A.D.Nguyen, 2005, "Cross-border Migration and Sexuality in Vietnam," *Family and Women Studies*, 7, pp.34-44.

<sup>207</sup> 김현미 「사랑의 이주? 국제결혼 베트남여성의 결혼이주 과정」 김영옥 외 『국경을 넘는 아시아 여성들- 다문화 사회를 만들다』 이화여자대학교 출판부, 2009 年, 11-43 쪽. (=金ヒョンミ 「愛の移住? : 国際結婚ベトナム女性の結婚移住過程」 金ヨンオクほか 『国境を越えるアジア女性たち多文化社会を作る』 梨花女子大学出版部, 2009 年, 23 頁。』

<sup>208</sup> 同書, 23 頁。

<sup>209</sup> 詳しくは、第 2 部の第 1 章を参照せよ。

<sup>210</sup> 辻本登志子, 前掲書 (2006 年) 93-133 頁。

<sup>211</sup> 同書, 93-133 頁。

この場合、フィリピン人女性にとって移住は人生の戦略として利用されている。しかし、本国の男性との結婚を避けるために移住を決心したケースは、自国の男性への失望感が現れる。筆者が会ったフィリピン人女性の中では、自分の国の男性と結婚したくないため韓国人男性と付き合うなど、国際結婚の願望がある。彼女たちは、韓国人男性にはフィリピン男性には無い責任感や貞操があると信じている。さらに、韓国ドラマに登場する普遍的な格好よくて、優しく親切な男性像を韓国人男性に期待する。彼女たちに、男性の経済力は重要な部分を占めているが、それだけではない。映画の中でロサは、「責任感が強く、真面目な人、そして私を理解してくれる人と結婚するのが夢だった」と語る。彼女にとって結婚は、誰でもが抱きうる「普通の願望」であった。また、ロサは、選択した国際結婚について、「私にとって、私が選択した国際結婚という人生の一部分は、一種の挑戦だった。独立のための戦いであった」と語る。パレーニャスは、「移住は一つの家父長制的な体系から人種と階級の間で規定された別の家父長制的な体系への移動である<sup>212</sup>」と指摘する。さらに、Clarkの研究では、フィリピン人女性たちは、不幸な結婚生活から逃れるためにオーストラリア男性と結婚を決定する事例を紹介し、結婚に大きな意味を持つ性別イデオロギーはさらに、女性の移住と国策結婚を選択させる要因を明らかにする<sup>213</sup>。Tacoliは、フィリピン人の移住の動機は、経済的な理由を含めて、人生の新しい経験または、自分の人生の開拓の手段として移住を決心していると主張する<sup>214</sup>。映画でのロサの事例は、経済力のある韓国人男性と結婚し、独立したいという欲望が、彼女が国際結婚を選択した重要な動機ではあるが、彼女が結婚に期待したのは普通の夫婦関係と「ロマンティックな愛」<sup>215</sup>であった。韓国人男性が移住女性に期待するセクシュアリティがあるように移住女性も韓国人男性に期待するセクシュアリティがある。しかしながら、この韓国人男性と移住女性の双方の願望間には大きな差が現れる。つまり、韓国人男性は、移住女性に韓国人女性よりより一層伝統的で女性たちらしい女性像を求めており、それに対して、移住女性たちは、自分とパートナーとの同等な関係を求めるため、自国の男性より外国人男性を結婚相手として選択するのだ<sup>216</sup>。

<sup>212</sup> R.S.Parreñas, 2001, *Servant of Globalization: Women, Migration, and Domestic Work*. Stanford University Press, p.78.

<sup>213</sup> Juliet Clark, 2004, "Filipino Women in Tasmania: Negotiating Gender Ideologies," in *Asian Pacific Migration Journal*, Quezon City: Scalabrini Migration Center. 13(3), pp. 363-380.

<sup>214</sup> 李テオク、前掲書、658-682頁。

<sup>215</sup> 윤형숙 「외국인 출신 농촌주부들의 갈등과 적응 : 필리핀여성들 중심으로」 『한국여성학회』 2004년 10월, 심포지움 발표논문, 8쪽 (＝ユン・ヒョンスク 「外国人出身農村主婦たちの葛藤と適応 : フィリピン女性を中心に」 『韓国女性学会』 2004年、8頁)

<sup>216</sup> Hyekyung Lee, 2005, "International Marriage Migration in South Korea," Paper presented at the Women World 2005, 9<sup>th</sup> International Interdisciplinary Congress on Women, Ewha Woman's University, Seoul, Korea, June 22, 2005, p. 39.

最後にチンチンは、中国からの国際結婚移住女性である。中国人の場合には、近年における社会的変化が「移住の女性化」に大きく影響を与えたと言えよう。中国の資本主義採用によって資本市場の継続的な不安と雇用の問題が台頭された。中国の急激な経済・社会的な変化は女性の経済的な地位を激変させ、集団生産の崩壊と市場経済の出現は、男性との競争の中で女性の貧困化を生じた。このような社会的状況の中、1980年代から始まった開放・改革政策以降、1992年韓・中修交を契機に中国（朝鮮族を含む）の国際結婚移住女性の数は急激に増えた。한건수（ハンゴンス）によると、中国漢族の場合は、朝鮮族との交流と韓国大衆メディアを通じて韓国の状況を知り、移住の方法として国際結婚を選択すると述べる<sup>217</sup>。

グローバル化の時代のなかで移住する女性の数が増加しつつある。さらに、女性の移住には男性と異なる移住形態が見られ、多様な動機と理由がある。また、女性の移住は、トランスナショナルな家族形成や再生産労働産業の労働力として親密性の構造、セクシュアリティ、ジェンダー関係などに密接に関わっている。したがって、移住する女性に対する考察は、グローバルな次元からジェンダーの観点を含めて考察する必要がある。

### 3. 移住女性から見る国際結婚におけるセクシュアリティ



図 32 映画の始めの場面：左から「国際結婚 100%成婚の広告」、「ベトナム国際結婚、速戦即決 5泊6日」<sup>218</sup>という商品化された国際結婚の告発する時事番組場面、「国際結婚過程を報道する場面」

Hyekyung Lee, 2003, "Gender, Migrant and Civil Activism in South Korea," in *Asian Pacific Migration Journal*. Quezon City: Scalabrini Migration Center. 12(1-2), pp. 99-125.

<sup>217</sup> 한건수, 설동운 「결혼중개업체 실태조사 및 관리 방안 연구」 『보건 복지부 최종보고서』 2006년, 83-94 쪽. (=한·гон스, 솔·돈우온 「結婚仲介業者の実態報告書及び管理方案研究」 『保健福祉部最終報告書』 2006年, 83-94頁)

<sup>218</sup> 国際結婚過程は、お見合い→結婚式→寝室→新婚旅行順になる。地域によって掛かる時間は異なるが、ベトナムのハノイの場合は、午前中（10時）に仁川空港を出発→午後に目的地に到着（午後1時）→到着日の夜にお見合い（午後8時）→結婚相手が決まると直ぐに女性の実家訪問→翌日の午前中（9時）に花嫁になる女性は健康診断を受ける→健康診断が終わると午後に結婚式→結婚式後直ぐに、新婚旅行→結婚式当日にハノイ戻る→次の日に韓国仁川空港到着（国際結婚に掛かる時間は、総3泊4日）

김현미 「사랑의 이주? 국제결혼 베트남여성의 결혼이주 과정」 김영옥의 『국경을 넘는 아시아 여성들- 다문화 사회를 만들다』 이화여자대학교 출판부, 2009년, 11-43 쪽.

(=金ヒョンミ 「愛」の移住? : 国際結婚ベトナム女性の結婚移住過程」金・ヨンオクほか『国境を越

映画の始まりは、この移住女性たちを性商品として扱っているメディア報道を移りだしながら、韓国における移住女性への定型化されたイメージを表象しながら移住女性の定型化されたイメージを指摘し、移住女性の劣悪な暮らしを告発して是正を促そうとする意図が見られる。にもかかわらず、映画に登場するティエンとロサから見る国際結婚移住過程は、韓国における国際結婚を巡る社会的な問題点を明らかにする。つまり、現在、韓国における国際結婚は、グローバルな新自由主義から生まれる「女性の貧困化」、「政府の経済開発政策」女性を安易に「資源化」する性差別の移住体制、そして女性を移動させることで利益を得る人身売買的な仲介業者が行使する一連の権力的な網に置かれている移住女性を巡る社会的な問題である<sup>219</sup>。例えば、ティエンの場合には、国際結婚斡旋業者の横暴により43歳の年上の人と結婚し、暴力を受ける。速戦即決で行われる国際結婚過程は、彼女に深く考える時間も与えず、結婚を取り消そうとしている彼女に母国では考えられないほどの罰金を背負わせ、国際結婚を強行した。また、ロサの場合も同じく国際結婚斡旋業者の紹介で国際結婚をしたが、夫はセックスを拒否すると暴力を振るう人であった。



図 33 左側から：ティエンとロサのインタビュー場面

前章で考察したように、大衆メディアは移住女性を英雄、犠牲者、加害者、生商品などとして定型化している。まず、移住女性は危機に置かれている家父長制的家庭を、自己犠牲を通じて再構成する英雄として表象される。移住女性の一方向的な犠牲を通じて韓国人男

えるアジア女性たち多文化社会を作る) 梨花女子大学出版部、2009年、26頁)

<sup>219</sup> 김현미 「국제결혼 전지구적 젠다정치학 한국인남성과 베트남 여성의 사례를 중심으로」 『경제와 사회』 70호, 2006년, 10-37 쪽.(=金ヒョンミ 「国際結婚のグローバルなジェンダー政治学：韓国人男性とベトナム人女性に事例を中心に」 『経済と社会』 70号、2006年、10-37頁)

性またはその家族は正常的な家族として生まれ変わる姿をメディアは描いている<sup>220</sup>。一方、韓国家父長的秩序とその代行者の韓国人男性からの暴力によって移住女性は被害者として表象された。さらに、国際結婚仲介業社による売買婚の現象は、移住女性たちを性商品として表象される。

行為の能動的主体として国際結婚仲介業を移住産業として実行している国際結婚斡旋業者は、韓国人男性の性的ファンタジーを刺激することで韓国人男性を、移住女性を消費する消費者として動員し、同時により良い将来を期待する開発途上国の女性たちを国際結婚市場に招き入れている。速戦即決の結婚の過程、そして人身売買的な女性管理体制のなかで開発途上国の女性は韓国に移住させられる。この過程は、結婚という親密性の危機としても現れるような結婚生活に繋がる。李ヘキョンは、国際結婚は、経済的に差がある国家間の結合により、夫婦関係がまるで「準階級関係」に変わる傾向があると指摘した<sup>221</sup>。さらに、金は、国際結婚仲介システムによる結婚は婚前と婚後の親密性の関係が急進的に変化する悪条件が構成されやすいと述べる<sup>222</sup>。

国際結婚移住を政治経済的にアプローチする研究者たちは、韓国で国際結婚をした韓国人男性は、既に考察したように韓国社会では周辺人であるアルコール中毒、性的依存症、習慣的に暴力を振るう人といった、結婚及び家庭生活が不可能な人が多いことを挙げ、移住女性たちが彼らに売られた商品として見ることで、移住女性を国際性別分業によって発生した再生産労働力として利用しようとするグローバル的に強制的に移動された商品として見る場合が多い<sup>223</sup>。李も、「移住の女性化」として特徴づけられるディアスポラは、グローバル化と国際性別労働分業により生まれると指摘することで政治経済的なアプローチとその脈絡を同じにする<sup>224</sup>。政治経済的な文脈からの国際結婚による女性の移住方式は、男性とは異なる移住の断面を可視化するのである。特に、アジア地域において移住女性は圧

<sup>220</sup> 2005年から2007年の韓国KBS放送局番組『러브인아시아(love in Asia) : ラブ人アジア』の放送事例から。(第一部、第1章を参照せよ)

<sup>221</sup> 이해경 「혼인 이주와 혼인 이주 가정의 문제와 대응」 『한국인구학』 28-1 호, 73-106 쪽. (=李ヘキョン 「婚姻移住と婚姻移住家庭の問題と対応」 『韓国人口学』 28-1号、73-106頁)

<sup>222</sup> 金は、韓国人男性は低社会的地位からくる劣等感を「国籍」と「受容国」の象徴権力に変化させることで、私的統治を具現しようとする傾向があると指摘する。従って、多くの移住女性にとって結婚とは、韓国人男性のために、家族内無給労働者、性的サービス提供者、家事労働者の多重的役割を遂行させられる権力装置として作用する。

金ヒョンミ、前掲書(2009年)43頁。

<sup>223</sup> 최종렬, 최인영 「국제 결혼 이주여성에 대한 문화 사회학적 접근 방법론적 윤리적 논의를 중심으로」 『문화와 사회』 제4권, 2008년, 147-205 쪽. (=チェ・ジョンリョル、チェ・インニョン 「国際結婚移住女性に関する文化社会的接近：方法論的・倫理的議論を中心に」 『文化と社会』第4巻、2008年、147-205頁)

<sup>224</sup> 李スザ、前掲書、189-219頁。

倒的に性産業や家事労働に従事している。また結婚市場での移住は年々増加している。これらの分野は女性には再生産分野を男性に生産分野を担当させる性別化・差別化されたイデオロギーが作用される。また、移住女性たちは、この性別化・差別化されたイデオロギーの影響を受ける<sup>225</sup>。したがって、貧困だけが女性による移住を決定する唯一の原因ではない。チェは、文化的な側面から国際結婚移住女性を分析し、移住の定着過程の中で、女性のセクシュアリティが文化混濁性と他者化を媒介する確信の要素であるという点を指摘する<sup>226</sup>。チェによると、移住は、開発途上国の女性セクシュアリティを第一世界男性の経済力によって購買することで発生すると言ひ、定着も移住先の男性に植民化されるセクシュアリティを移住女性が持っているからこそ可能であると指摘する。言い換えれば、女性による移住は、移住先の男性の血統を維持できる再生産能力を持っているからこそ定着が可能であることを示している。男性労働者の場合は 経済的な自立後に帰郷することを前提にすることから文化混濁性は大きな問題にならないが、国際結婚移住女性の場合は、結婚による長期滞在、または一生を移住先の国で送る場合が多く、文化混濁性は大きな問題になる。これは、韓国社会の中で移住女性が他者化され、文化的に排除されるケースからも理解した<sup>227</sup>。このような視点からは、マクロ的にはグローバルな次元からミクロ的には個人のセクシュアリティ次元まで多層的に複雑的な構造的・権力的な現象であることを示す。また、このような視角は、結局、移住女性を構造の中で移住女性の人生が決定される「対象化された商品」として表象される限界が見られる<sup>228</sup>。チェは、国際結婚過程での自身売買的な商品性は、継続的に維持できないと述べ、移住女性は商品化された結婚過程から、結婚生活を始める段階に移るとその商品性の持続性は薄れて人間の属性を取り戻すと述べる<sup>229</sup>。映画に登場するメロディーの場合は、韓国人男性と結婚して 10 年間韓国で住みながら 3 人の子どもの母親であり、社会的にも活発な活動している。また、移住女性たちに頼れる移住先輩である。しかし、彼女は移住過程において、人身売買性が強い国際結婚過程を経験し、性のセクシュアリティの商品化の瞬間を経験した。しかし、今はホスト社会の構成員として存在しており、商品としての移住女性ではない。メロディーは、伝統的

<sup>225</sup> Piper は、ジェンダー化された政治経済はグローバルな家父長体系が女性の移住系形態を決定し、特に、産業的な国際結婚と人身売買を発生させると指摘する。

Nicola Piper, "Labor Migration, Trafficking and International Marriage: Female Cross-Border Movements into Japan," in *Asia Journal of Women's Study*. Iwha Women's University Press. 5(2), pp. 69-99.

<sup>226</sup> チェ・ジョンリョル、前掲書（2008 年）160 頁。

<sup>227</sup> 第 1 部、第 2 章、「多文化家族」部分を参照せよ。

<sup>228</sup> チェ・ジョンリョル、前掲書（2008 年）161 頁。

<sup>229</sup> 同書、164 頁。

な意味での配偶者にイメージだけではなく、移住労働者として、市民としての権利も獲得している。メロディーのような韓国に移住する女性たちは、配偶者としての役割だけではなく、未来の労働者と韓国社会の構成員として国際結婚を選択する。

国際結婚移住女性たちはグローバル化・移住・性の現象から複雑な影響を受ける。国際結婚移住者女性は、国境を越える労働者であり、妻であり、嫁であり、母親である。また両国の市民の資格が交差する複雑な位置を占めている。従って、国際結婚移住女性を単純に売買婚的な性による移住であると規定するのは限界がある。むしろ、移住女性たち多様な背景や生の動機のある移住者であること、また家族の統制の中でも制限された条件や内容、家族関係と未来を創造していく積極的なエイジェントであることを認める必要がある。

## 第5節 移住女性の新しいネットワーク

移住女性の主体性の構築に関する研究は、近年において、注目されつつある<sup>230</sup>。日本では、在日フィリピン人女性を対象として研究が蓄積されてきたが、これらの研究は、在日フィリピン人女性が、人種・民族、ジェンダー、階級が絡み合った抑圧構造の中で、抑圧に対抗するためにさまざまな戦略を駆使し交渉する能動的な行為主体であることを明らかにしてきた。小ヶ谷は、アジアにおける移住家事労働移民の組織活動について移住女性の主体性構築について考察し<sup>231</sup>、鈴木は、首都圏在住のフィリピン人女性による母国文化を紹介する活動を事例として、トランスナショナルな「場」の形成を通じた多元的主体の構築過程を分析している<sup>232</sup>。また、邱は、川崎市在住のフィリピン人妻の社会参加を「相対的剥奪」(relative deprivation) 観点から、フィリピン人妻の社会参加意識を検証し主体性構築について考察した<sup>233</sup>。これらの研究は、移住女性が自身のために紡ぎ出す組織とその形成過程が、彼女たちの行為主体性を発揮するうえで重要な役割を果たしているという点とこの新たな主体の構築が、「母」や「妻」といった、家族という私的領域でのジェンダー役割によって強く規定されていることも示してきた。一方、徐は、ナンシー・フレイザー

<sup>230</sup> 小ヶ谷千穂「移住女性研究の展開と課題：アジアにおける移住女性研究のために」お茶の水社会学研究会『Sociology Today』11号、(2000年)98-107頁。

<sup>231</sup> 小ヶ谷千穂「国際労働移動とジェンダー—アジアにおける移住家事労働移民の組織活動をめぐって」梶田孝道編著『国際化とアイデンティティ』(ミネルプァ書房、2001年)121-147頁。

<sup>232</sup> 鈴木伸枝「首都圏在住フィリピン人既婚女性に関する—考察：表象と主体性構築過程の超国民論からの分析」『ジェンダー研究』第1号、(1998年)97-112頁。

<sup>233</sup> Chiou Shwu-wen「川崎市在住フィリピン人妻の社会参加」『応用社会学研究』第45号、(2003年)81-96頁。

の「対抗的公共圏 (Counter Public)」論を援用し、日本における在日朝鮮女性の主体性構築について研究を行った<sup>234</sup>。このような移住女性の主体性構築の研究においては、移住先であるホスト国社会において多くの不利な状況に直面し、その困難な状況を克服する必要性に迫られることから、様々な戦略と行動をとることが注目されるようになっているのである。

韓国における移住女性に関する研究は、2000年以降、女性学界と社会学界を中心に移住の主体者として女性に注目し、ジェンダーの視点から分析が始まった<sup>235</sup>。これらの研究は、「移住の女性化 (feminization of migrant)」によるジェンダー化された移住過程の多様性を認識することと同時にジェンダー社会経済的、文化的脈絡の中で移住女性の位置を分析する必要性を提示し、国際結婚移住女性の実態及び移住過程、移住国の定着過程の中で発生する社会・文化的な葛藤と協商、韓国社会文化の適応過程関連政策とその方向性に関する研究に注力した。例えば、韓国全南地域のフィリピン人移住女性たちにインタビュー調査を行った윤형숙 (ユン・ヒョンスク) は、フィリピンの女性たちは韓国語や文化に適用しようとするが、一方的な統合を拒否し、家父長制家族秩序と「単一民族」の矛盾に抵抗すると指摘する。さらに国家境界線がない今の時代、移住女性によって韓国社会は移住の終着地ではなくてよいという点と韓国と韓国文化に固定された韓国人男性とは異なって、国家の境界線を横断するグローバルな移住女性であることを強調している<sup>236</sup>。さらに、シン・ナンヒは、ウズベキスタンとフィリピン人女性の生涯史を通じて移住女性の主体性に注目

<sup>234</sup> 徐阿貴「在日朝鮮女性による『対抗的な公共圏』の形成と主体構築—大阪における夜間中学独立運動の事例から」『ジェンダー研究』第8号、(2007年) 113-128頁。

<sup>235</sup> 김영란「한국사회의 이주여성의 삶과 사회문화적 적응관련」『아시아 여성연구』45(1), 숙명여대 아시아 여성연구소, 2006년 (=金ヨン란「韓国社会の移住女性の人生と社会文化的適応関連」『アジア女性研究』45(1)、淑明女子大学大アジア女性研究所、2006年)  
김영란「이주여성도동자의 사회문화적 적응에 관한 경험적 연구」『아시아 여성 연구』 숙명여자대학교 아시아여성연구소, 2007년 (=金ヨン란「移住女性労働者の社会文化的適応に関する経験的研究」『アジア女性研究』淑明女子大学大アジア女性研究所 2007年)  
김은실「지구화시대의 성매매 이주여성 국민국가 그리고 시민권」최협편집『한국의 소수자 실태와 전망』한울, 2004년 (=金은실「グローバル時代の性売買移住女性国民国家そして市民権」チェ・ヒョプ編『韓国の少数者実態と展望』ハンウル、2004年)  
이수자「이주여성 디아스포라」『한국사회학』38집 2호 2004년 (=李수자「移住女性ディアスポラ」『韓国社会学』38集2号 2004年)  
홍기에「중국조선족 여성과 한국남성간의 결혼을 통해본 이주의 성별정치학」이화여자대학교 여성학과 석사학위 논문, 2000년 (=ホンキエ「中国朝鮮族女性と韓国人男性間の結婚を通じてみた移住の性別政治学」梨花女子大学校女性学、修士学位論文、2000年)

<sup>236</sup> 윤형숙「국제결혼 배우자의 갈등과 적응」최협편집『한국의 소수자 실태와 전망』한울, 2004년 (=ユン・ヒョンスク「国際結婚配偶者の葛藤と適応」チェ・ヒョプ編『韓国の少数者実態と展望』ハンウル、2004年)

した<sup>237</sup>。鄭スンヒは、国際結婚移住女性は、生の決定権を持つ行為の主体者として、自分の夢を持って積極的に自分の生を開拓するために結婚移住を選択した移住女性であると強調する<sup>238</sup>。

本節では、エイジェントとしての移住女性を、彼女たちが自ら形成するネットワークを中心に考察する。まず、移住女性たちはどのようなネットワークを作り、そのネットワークを通じてどのように新しい社会に向き合いながら生活しているのかを見る。さらに、ホスト社会における彼女たちのネットワークはどのように互いに影響しあうのかを考察することで、多様な文化を持った「バイ・カルチャー」または、「文化資源の二重利用者」としての移住女性たちに注目する。

## 1. 移住女性の新しいネットワークと文化的行為 移住女性同士のネットワーク



図 34 移住女性たちにメディア教育をする監督とメディア教育プログラムに参加した移住女性たち、互いの悩みやストレスについて話し合い、支え合う移住女性たちの姿。(独立ドキュメンタリー映画『She is』の場面から)

人が他人と社会的相互関係を通じて社会的な欲求を充足させ、基本的な欲求充足のための必要な資源を得る過程の中、具体的に提供されると同時に提供することができる相互関係を社会的支持網 (Social Support Network) <sup>239</sup>と表現する。社会的支持網は、個人を巡る社

<sup>237</sup> 신난희 「국제결혼여성 가족, 일 그리고 정체성 우즈베키스탄과 필리핀여성의 생애사 연구」 서울대학교 인류학과 석사학위논문, 2005년 (=신·난희 「国際結婚女性家族、仕事、そしてアイデンティティ：ウズベキスタンとフィリピン女性の生涯史研究」ソウル大学校、2005年)

<sup>238</sup> 정순이 「국제결혼 이주여성의 삶에 관한 탐색적연구」 순천양대학교 행정정보대학원 2007년 (=鄭スンヒ 「国際結婚移住女性の生に対する探索的な研究」順天郷大学大学院、2007年)

<sup>239</sup> 李テオクの総括により。李テオク、前掲書、49-68頁。

また、渡辺晴子によると、ソーシャル・サポート・ネットワークとは、1970年代以降、欧米の精神衛生、保健、社会福祉などの様々な領域において、注目されてきた概念である。一般的に、それは個人を取

会的関係を通じて、身体的、物質的、情緒的欲求を解決するための行為を意味する。移住女性たちへの社会的支持網は、韓国社会で生きるために必要な各種のプログラムに参加することから形成している。例えば、映画の中での韓国語教室の風景は、彼女たちにとって、新しい人間関係を形成し、互いに悩みを訴える場所でもある。映画の中でメリンダーは、国際結婚し、韓国に来たのは幸運だと話す明るいフィリピン人女性である。新しい環境に適応するために誰よりも積極的である。彼女の姿からは、今まで大衆メディアが見せた可哀相な劣等な存在としての移住女性のイメージは感じられない。しかし、彼女は、認知症の義理の父親へのケアに疲れストレスに耐えられなく自分の爪を切りすぎて怪我をする。彼女は、自分の悩みを監督に電話で話したり、韓国語教室に集まった移住女性たちに話す。中国からのチンチンは、自分も過去に義理の母親に耐えられなくて手首に傷つけたことがあると自分の過去をメリンダーに話しながら彼女を励ます。また、ストレスに耐えられないときには、音楽を聴いたり、おなかの中の子供を思い出して我慢するようにアドバイスも忘れない。移住女性たちにとって社会的支持網のもっとも重要な役割を果たしているのは、同じ移住女性である。

メロディーが十年前の移住女性同士の連帯感形成の過程について話したように、移住女性にとって本国の移住女性たち同士に結ばれたネットワークは、社会的支持網として大きな役割を果たすことが分かる。また、宗教団体を通じて韓国に移住した移住女性たちは、一緒に入ってきた宗教団体の友人と一次的な関係を持つ。したがって、他国での宗教活動は、友たちに会って交流する場になる。このような交流は、移住女性たちにとって、重要な社会的資本になる。移住女性たちは同じ境遇にあることで互いに、故郷にいる家族への懐かしさや、孤独などを共有することができる。文化や言語で解消することができるだけでなく、互いに働き口を提供しあうなど、生活に必要な情報を共有する。さらに、映画の監督とメロディーの台詞から検討したように、移住民でありながら女性として同質感を感じる移住女性たちは、姉妹的な連帯と協力を通じてネットワークを形成する。国際結婚移住女性たちは、家庭の生活、特に夫婦関係や姑と嫁の間の葛藤、妊娠、出産、育児などに関してのアドバイスや相談の役割を果たしながら、移住女性のエンパワーメントの相互支持をするのである。メロディーのように、先輩としての移住女性は、移住して間もない移

---

り巻く家族、親族、友人、隣人、その他に定期的な交流を持つ人々などによって構成されるインフォーマルな援助ネットワークを示す概念として用いられてきた。  
渡辺晴子「ソーシャル・サポート・ネットワークのパースペクティブ」『社会問題研究』48(1)、(1998年) 117-138頁。 <http://hdl.handle.net/10466/6782>

住女性が地域社会の情報網を形成する過程で、助言者、または媒介者の役割をする。また、先輩移住女性は、新しく地域に入ってくる国際結婚移住女性たちに地域と移住女性たちの間で仲介者の役割をする。つまり、国際電話カードの購入方法や本国の食料品の購入方法、銀行業務などを教え、婚家と夫の関係においてコミュニケーションが不自由な移住女性のために通訳者として、ハンゲル教育と福祉サービスに対する案内者として、地域社会に適応のためにまたは、社会的弱者としての権利を行使できるように同盟者として、姉妹的連帯を通じた直接的で実質的な助けをあたえている。その関係は、同じ移住女性の間だけでなく、移住女性と地域住民の間に行われる。

次は、移住女性が現実の「生」の中でいかにホスト社会に接しながらエイジェントとして表れるのかをエスニック・メディア活動を通じて考察する。これは、移住女性表象をメディアを通じてのみではなく、現実に移住女性たちがホスト社会で見られる定型化された表象に対して抵抗している様子を見るよい例であると考えられる。

## 2. 移住女性と地域住民の間のネットワーク

### —エスニック・メディアを通じて

移住民、移住女性がホスト社会で生活を始める際には、同じ移住女性たちの間に行われるネットワークは生き残る上で最も重要な意味をもつ。前述したように、慣れた母国を離れて新しい国と地域で生きることは不安を伴う。この際、同エスニック集団のネットワークは、生活に必要な情報や資源を与えてくれるものである。また、こうしたネットワークを通じて移住女性たちは、自らのアイデンティティを保持し、確認し、情緒的に安定し、ホスト国での様々な問題を乗り越えることが出来るのである。このような、ネットワークは、国境を越える文化移動であり、グローバルな文化交流でもある。つまり、人の移動は、単なる身体の移動だけではなく、文化と資源の移動に繋がるのである。移住女性たちは、ホスト国で生活しながら母国の家族や親戚、友達との関係を持続しながら、ホスト国について話し、故郷のニュースを聞きあらゆる情報を提供し、交換する。その際、移住女性たちインターネットや電話を利用する。また、このような情報を交換やネットワークを形成する際に、エスニック・メディアは大きな役割を果たす。白水は、エスニック・メディアの社会的機能について三つに分けている。第一には、集団内的な機能、(ホスト社会への適応を促進する機能としての機能 — ホスト社会の生活に関わる情報提供の機能、娯楽機

能など)二つ目は、集団間敵機能(当エスニック集団とマジョリティー — 日本社会の場合には日本人との間の架け橋としての機能と、他のエスニック集団の架け橋としての機能がある)三つ目は、社会安定機能(常に自分たちの情報を発信することで当エスニック集団と日本社会の双方の情報を与え、双方の社会を余分な困難を招くことなく安定させる機能)の三つの機能を指摘する<sup>240</sup>。



図 35 移住労働者コミュニティ MWTV (<http://www.mwtv.or.kr/>) と移住女性コミュニティ MANGONET (<http://www.mangonet.kr/>) イメージ

例えば、韓国のエスニック・メディアの中でも代表的な MWTV<sup>241</sup>のインターネットニュースチャンネルは、移住労働者らが韓国社会で直接意思疎通し、発言するために、韓国における移住労働者らが自ら主体的に立ち上げ、自分達の国や文化をインターネット上で発信しながらホスト社会に情報を与えているインターネット上のコミュニティである。バングラデシュ、ネパール、ビルマ、モンゴル、中国、インドネシア、フィリピン、ロシア、ベトナムなどの地域から来た移住労働者らと韓国人らが力を合わせて移住労働者の人権問題をホスト社会の韓国社会に知らせるなど移住労働者の権利を守るために多様なプログラムの制作し発信している。移住労働者たちが自ら「声」を発信することで社会的・政治的権利を確保するために設立された。また、移住労働者メディア教育、移住労働者映画祭などの文化芸術活動を通じて多様な文化が一緒に成長するよう努力する。具体的な活動としては、放送制作時事教養プログラム『移住労働者世界』と 10 カ国言で放送されるニュース番組『多国言移住労働者ニュース』を定期的に制作し、放送する。制作されて番組は市民放送 RTV とインターネット上で放送している。また、移住労働メディア教育を行っているが、ここ

<sup>240</sup> 白水繁彦編『エスニック・メディア—多文化社会日本をめざして』(明石書店、1996年)18-28頁。

<sup>241</sup> MWTV (Migrant worker TV) は 移住労働者らが韓国社会で直接疎通して発言してコミュニケーションを図るために主体的に作った団体である。<http://www.mwtv.or.kr/>

では、移住者かメディアを通じて直接に自分の「声」を発信できるように教育する。また、毎年移住労働者映画祭を主催し、映画を通じて移住者自らが自分らの文化を自らホスト社会へ発信することで、エスニック集団とマジョリティーである韓国社会の間の文化の格差と疎外を克服する疎通の場として創造する。また、移住女性を中心にするマンガネット (MANGONET) コミュニティは、韓国女性財団の協力を得て、韓国社会で生活しながら女性として必要な情報やホスト社会での経験などをお互いに話し合い助け合うことを目的に設立した。ここで、注目されるのは、コミュニティ運営において移住女性たちの自らが運営委員になり、直接参加し、活動することで単に情報を得る受動的な立場ではない、移住女性たちと韓国人との間の架け橋としての役割を果たしている。また、移住女性記者団を形成し、その移住女性記者らは韓国社会とより深い関わりをもつようになる。



図 36 マンゴネットでベトナム語のコーディネーターとして活躍しているトイ氏、マンガネットで記者として活動する金ヨンヒ氏 (改名)、MWTV のアンカーウーマンとして活躍しているナラ氏  
出所：移住労働者コミュニティ MWTV (<http://www.mwtv.or.kr/>) と移住女性コミュニティマンガネット (<http://www.mangonet.kr/>)

マンガネット (MANGONET) の委員であるトイ氏は、ベトナムから国際結婚を通じて移住した移住女性である。彼女は、マンガネットの委員としてベトナム語のコーディネーターとしてベトナムからの結婚移住女性たちに必要な情報を提供している。また、金ヨンヒ氏 (改名) は、マンガネットで記者として活動しているベトナム人女性である。ベトナムから移住した移住女性を取材し、問題提起する役割を果たしている。MWTV のアンカーウーマンとして活躍しているナラ氏は、モンゴルから移住労働者として韓国に入ってきたが、韓国人男性と出会い国際結婚した移住女性である。彼女は、外国人支援センターを利用し、韓国語を学ぶなど教育を受けた。今現在、彼女は、MWTV の多国語ニュースでモンゴル語ニュースのアンカーウーマンとして活躍しているだけでなく、地域社会の子供たちに多文化教育やモンゴル文化などを紹介している。彼女は、自ら行っている社会参加の理由について「移住女性である自分だが、移住女性として韓国社会で何か自分ができることがあ

ると考えていた。また、移住女性たちに何か役に立ちたかった」と話す。さらに、「移住女性として移住女性含む移住者についてどう思いますか」という MWTV の記者の質問に対して彼女は、次のように話す<sup>242</sup>。

移住女性、移住者たちは、大きい夢を持って、大きい勇気を持って、大きい決心をする人々です。私は韓国で多様な活動しています。それは、移住女性である私も、社会のために何かができることを世の中に知らせたかったからです。子供にもママは外国の人であるが韓国社会で他の韓国人おばさんたちのように、いや韓国人おばさんたちよりさらに何かができるという事実を見せてあげたかったです。そして何よりも移住労働者や移住者たちに勇気を与えたかったです。

ナラ氏が話すように移住女性たちは、大きい夢を持って、大きい勇気を持って彼女たちは移住を選択するのである。つまり、彼女たちの移住の大きな理由としては、「自分の人生を開拓したい」という強い意思と、それを体現する「コリアン・ドリーム」というものの影響が挙げられる。移住女性たちには、移住を決心し行為する際の戦略的なプロセスと計画があり、その移住というアクションの中で生まれる主体的な行為を無視してはならない。さらに、移住者らはホスト国の人々と同様に、社会的関係のなかで生きる行為体であることも認識する必要がある。

移住女性による社会参加は、「三重の抑圧構造の犠牲者」といった従来の移住女性像を乗り越えて、移住女性の主体としての側面を明らかにする<sup>243</sup>。さらに、このような、エスニック・メディア、そして移住者の直接参加は、ホスト社会で移住民の生活やアイデンティティを安定させ、ホスト国への「適応」を容易にさせるのであると同時にエスニック集団間や地域社会との関係形成にも関わるものであり<sup>244</sup>、ホスト社会での移住者自らが出身国・社会との絆を切ってホスト社会に「同化」することではなく、多様な文化を持った「バ

---

<sup>242</sup> 「이주여성으로서 이주여성을 포함한 이주자에 대해 어떻게 생각 하십니까? (移住女性として移住女性含む移住者についてどう思いますか)」という MWTV の記者の質問に対するナラ氏のインタビュー内容。MWTV (Migrant worker TV) <http://www.mwtv.or.kr/> MWTV Special.

<sup>243</sup> Nicole Constable, 1997, *Maid to Order in Hong kong: Stories of Filipina Workers*. Ithaca : Cornell University Press.

<sup>244</sup> 石井由香「移民の居住と生活—現状と展望」石井由香編『移民の居住と生活—グローバル化する日本と移民問題』(明石書店、2003年) 40-44頁。

イ・カルチャー」または、「文化資源の二重利用」者として<sup>245</sup>、ローカル及びトランスナショナルな移民コミュニティのなかでネットワークを形成しそのネットワークがホスト社会に異文化と共生の新たな影響を与えている。また、石井の言葉を借りると、エスニック・メディア研究は、彼らの生活世界の重層性と動態についての示唆を与える。それは同時に、エスニック・メディアはホスト社会の多様性への認識を問い直すものである<sup>246</sup>。

## 第6節 小結

従来の研究では、移住女性たちの様々な文化的背景や願望について十分に考察されず、すべての移住女性が一元的に社会的マイノリティ・グループに属していると捉えられていることを前提になされている研究が多いことに疑問を持つことから本章では、移住女性たちにとって「移住」という意味を再確認しようとする作業を行った。つまり、女性にとって移住は、個人的な「生」を生きる一連のプロセスであり、多様な意味を含めている。移住女性たちは、人生の過酷な部分生き延び、その経験とそこで付与されたアイデンティティと付き合い、様々な困難を乗り越える独自の方法を創造したのである。サッセンは、女性が大量に参加・可視化されてきた過程として今日のグローバル経済を捉え、その中で個人・集団・ネットワークとして登場する女性が、非国家的アクターとして登場する回路が開かれつつある、と論じている<sup>247</sup>。本章は、韓国ドキュメンタリー映画を一つの「コンタクト・ゾーン」として、同時代に生きている「歴史的他者」である移住女性がどのように空間的・時間的に共存し、いかにして移住女性の主体が相互の関係のなかで構築されているのか分析する試みであった。

映画の中で移住女性たち5人は、国際結婚を通じて韓国に移住した共通点を持ちながら、異なる本国の状況および個人的な理由と経緯が見られた。また、ホスト国での定着過程においても置かれている社会的位置が異なることから、各々にアイデンティティが流動化されることが確認された。しかし、移住女性センターという空間を通じて、お互いに情報を交換し、悩みを打ちあげることで、女性の中に連帯感が生まれた。中でも、韓国に長年住んでいるメロディーの場合は、韓国市民としての側面<sup>248</sup>が現れる。彼女は、国際結婚を通

<sup>245</sup> 青山薫、前掲書、40-41頁。

<sup>246</sup> 石井由香、前掲書、42頁。

<sup>247</sup> S.Sassn,1998,*Globalization and Its Discontents* : The New Press.

<sup>248</sup> Piper は、日本社会のフィリピン移住女性の事例を挙げ、女性の滞留期間が長期化されることで、市民

じて、長年の移住者 (Long-term settler) として、3 人の子供の母親として、永久的な市民権を獲得し、社会参加を通じて韓国市民としての移住女性たちの先輩として、主体性を構築している。さらに、移住女性たちは、母国との関係を維持しようとする部分においては、伝統的な意味でのディアスポラのアイデンティティを維持しつつ、トランスナショナルな空間において新しいアイデンティティを構築している。これらの移住女性たちの新しいアイデンティティは、地域センターのエンパワーメントとネットワークを通じて、市民主体としての土台を形成し、社会的支持網 (Social Support Network) を構築する。ひいては、移住女性たちは、時には、通釈者として、時には生活アドバイザーとして地域住民との関係性を持ち、単なる「他者」ではない「エイジェント」として現れ始めている。これは、エスニック・メディアの考察からも確認された。メディアを通じて、移住女性たちの社会参加は、多様な文化を持った「バイ・カルチャー」または、「文化資源の二重利用」者として、文化エイジェントとして、韓国人との間の架け橋としての役割を果たし、韓国社会での構成員として、役割を果たそうとする移住女性たちの主体的な「声」である。

最後に、本章の考察からもっとも重要なのは、移住女性たちの「声」を、いかに私たちが聞き取ることができるか、それが問題ではないだろうか。

---

としての側面が見られると指摘する。

Nicola Piper, 2003, "Wife or Worker? Worker or Wife? Marriage and Cross-Border Migration," in Contemporary Japan, International Journal of Population Geography 9, pp. 457-469.

## 第2部 送出国、フィリピンにおける移住女性とその表象

### 第1章 フィリピンを中心に送出国の考察

#### 第1節 近年のフィリピン人の海外労働者（OFW）の状況

##### 1. フィリピンの出稼ぎ労働者状況

フィリピン社会は、少数の権力を握るエリートと大多数の農民や都市貧民に分かれる。メアリー・R・ホールンスタイナーは、フィリピン社会を二階層制社会と呼ぶ。二階層制の中にある中産階層は、20世紀に入って登場したが、都市部には少数が存在するに留まっている、と述べる<sup>249</sup>。また、フィリピンの特徴として、定着型社会ではないことがあげられる。過去一世紀にわたり、人々はよりよい生活を求め、都市で新しいチャンスをつかもうと、国内外へと移住した。経済的な豊かさと教育を求め、人口圧から逃れ、成功する夢を抱いて、フィリピン人は母語が通じる住み慣れた故郷の村や家族を去る。人々が移動することによって、社会はある程度、均質化された。とはいえ、出身地、方言、家族関係などの背景の違いは、いまだに社会を大きく分断させる潜在的要素である<sup>250</sup>。フィリピンの国際労働力は非常に高く、世界への労働力供給の先端にある国と言っても過言ではない。

フィリピン政府は1970年代以降、積極的にOFW(Overseas Filipino Worker)を世界に送り出してきた<sup>251</sup>。OFW問題についてはこれまで、契約や仕事、人権、政策など多くの事象が議論されてきた。現在、OFWとして、毎年100万人を労働者として世界各地へ送り出し、統計上800万人以上が海外で就労するか、居住するか決めている。また、統計に含まれない不法就労者の存在を考慮すると、実数は1000万人を超えるとも見積られている。これはフィリピンの総人口の約10%に当たる数字である。特に1999年には、フィリピンの年間出稼ぎ者23万7260人中64%に当たる15万1840人を、女性が占めた。このような出稼ぎにおける女性の割合は80年代半ばから増加し始め、現在も増加傾向にある<sup>252</sup>。フィリピンにお

<sup>249</sup> メアリー・R・ホールンスタイナー編、山本まつよ訳『フィリピンのこころ』（めこん出版、1980年）70-74頁。

<sup>250</sup> デイビット・J・スタインバーグ、前掲書（2000年）78頁。

<sup>251</sup> フィリピン政府は、労働力輸出を採っている。それは、マルコス時代の1974年、労働法典（Labor Cord）の発布に始まる。マルコスは労働政策法典のもと、海外出稼ぎを含むすべての労働政策を統合した。そして、失業・半失業の緩和、高度な技術の獲得、海外送金による財政赤字の緩和を図り、海外出稼ぎを奨励した。

<sup>252</sup> 小ヶ谷千穂「国際労働移動とジェンダー—アジアにおける移住家事労働移民の組織活動をめぐって」梶田孝道編著『国際化とアイデンティティ』（ミネルプア書房、2001年）121-147頁。

ける海外出稼ぎによる送金額は膨大で、2008年には150億ドル（約1兆5000億円）に達している<sup>253</sup>。この背景として失業率が20数パーセントというフィリピン労働市場の状況があげられる。これがOFW増加へとつながっている。OFWによる自国への送金は、フィリピン経済を支える大きな外貨収入になっている。

フィリピン政府は海外出稼ぎを国策として位置づけており、労働雇用省（DOLE）とフィリピン海外オフィス（POLO）、フィリピン海外雇用庁（POEA）の三関係省庁が関係法令や制度を定め、出稼ぎ労働者の支援と保護、雇用者のチェック、技能訓練にまで関与している<sup>254</sup>。菊池はフィリピン人の海外出稼ぎを促進する要因として、識字率が高い、英語が話せる、大家族の相互扶助が強い、といったなどの文化的要因を挙げている<sup>255</sup>。また青木は、フィリピンの労働市場の変容、政府の海外出稼ぎの奨励（労働力輸出政策）、そして、東・東南アジアにおけるOFWの需要、この三つの拡大が出稼ぎ増加の全般的要因として作用していると分析する<sup>256</sup>。

## 2. 海外労働者の女性化

1986年に成立したアキノ政権は、海外労働者を「新しいヒーロー」と名づけ、国家が国内と同様に、海外労働者も完全に保護すると明言した。そして87年には、海外労働者とその家族への社会・福祉サービス提供義務を行う海外労働者福市庁（OWWA）を設立した<sup>257</sup>。

1994年には、新規雇用者の6割以上を女性が占めるようになった。また女性の海外出稼ぎ労働がアジア諸国に集中し始めたのも、アキノ政権の頃からである。

OFWの女性化においては、幾つかの理由がある。その中で最も大きな理由として取り上げられているのが経済的な理由である。またその経済的な理由とは、国内で抱えている貧困や、失業率などに関わる。つまり、経済のグローバル化のもと、雇用の契約化などで、男性の家計維持能力の後退し、他方、東・東南アジアでの出稼ぎ労働力の需要が拡大した結

---

<sup>253</sup> [http://en.wikipedia.org/wiki/Overseas\\_Filipinos](http://en.wikipedia.org/wiki/Overseas_Filipinos)、海外雇用庁 <http://www.poea.gov.ph> 国家統計調整委員会 <http://www.nscb.gov.ph/>

<sup>254</sup> 吉村真子「東南アジアの開発とジェンダー」原伸子編『市場とジェンダー—理論・実証・文化—』（法政大学比較経済研究所、2005年）218頁。

<sup>255</sup> 菊池京子「外国人労働者送出国の社会的メカニズム—フィリピンの場合」伊豫谷登士翁・梶田孝道編『外国人労働者論—現状から理論へ』（弘文堂、1992年）169-201頁。

<sup>256</sup> 田巻松雄・青木秀男「アジア域内の労働力移動—受入国韓国と送出国フィリピンの最近の動向と現状」『宇都宮大学国際学部研究論集』第22号（2006年）65-86頁。

<sup>257</sup> 小ヶ谷千穂「フィリピンの海外雇用政策」小井戸彰宏編『移民政策の国際比較』（明石書店、2003年）328頁。

果である<sup>258</sup>。それは、フィリピン国内での労働力の女性化と強く関連している。また、実際に、家父長制主義文化が強いフィリピンでは<sup>259</sup>、双系制の家族制度のもと、娘や妻に対する家計維持期待、つまり家族のために働くことを当然と捉える意識が強い<sup>260</sup>。これによって、伝統的に夫は生活費を稼いで妻は家事を担当し家計の切り盛りをするという典型的な家族労働分担の方式が、変容している。一方、フィリピン人の人間関係は、恩義または互酬性に基づいている。フィリピン人は他人が自分のためにしてくれた恩を返すことに敏感である。例えば、子供が両親から受ける恩は報いることのできない重さを持つとされ、「父と母を敬え」という聖書の教えは、現代の西洋社会よりもフィリピン社会においてはるかに現実的な意味で重要視される<sup>261</sup>。OFWの女性化は、このようなフィリピン人の伝統的な価値観、「家族思い」による結果でもある。フィリピンは、非常に家族の絆を重んじる社会である。家族のために働くのは、家族への「恩義」であり、必要な時に家族への献身を果たさないことは、「恥」とであるとされている。そのため、家族のためなら国境をも越えるという考え方が一般的に存在している<sup>262</sup>。しかし近年においては、自己開発的な面も見られる。つまり、海外への移住が、自分のスキルアップのためであると考える人も増加している<sup>263</sup>。このような多様な理由から、娘が親や兄弟、妻が家族のために、あるいは自分のために、フィリピンの女性は海外へと出稼ぎに出て行く。しかし、女性による海外出稼ぎ労働は、家政婦や看護師、エンターティナーなどの再生産労働力の職業に集中しているのが現状である。こうした仕事は大体の場合、ホスト社会における職業的ヒエラルキーの低下層にあり、それゆえ受入国の女性から敬遠される職種である。そして多くが、女性の「従順さ」、「愛情深さ」と結びついた「女性向きの」仕事とみなされ、特に移住女性に「適している」とされる<sup>264</sup>。この点に関して小ヶ谷は、1980年代後半から90年代にかけてのフィリピンからの海外出稼ぎの傾向には、就労先にアジアへのシフト、サービス業比率の増加、

<sup>258</sup> 田巻松雄・青木秀男、前掲書（2006年）65-86頁。

<sup>259</sup> フィリピンでは、韓国や日本とは異なる意味、つまり結婚した妻に対して家で家庭を守るよりは、共働きを要求する家父長制主義文化を持っている。

<sup>260</sup> 田巻松雄・青木秀男、前掲書（2006年）80頁。

<sup>261</sup> ディビット・J・スタインバーグ著、堀芳枝、石井正子、辰巳頼子訳『フィリピンの歴史・文化・社会—単一にして多様な国家』（明石書店、2000年）25-26頁。

<sup>262</sup> 菊池京子、前掲書、169-201頁。

<sup>263</sup> 2010年2月13日、EPAと外国人看護師・介護福祉士候補—背景・実態・課題—をテーマとするシンポジウムでの「フィリピンの介護教育と看護・介護学生の日本への就労意識調査」報告書により。

<sup>264</sup> Lin-Lean Lim & Nana Oishi, 1996, "International Labor Migration of Asian Women: Distinctive Characteristics and Policy Concerns," in Graziano Batistella & Anthony Paganoni, (eds.), *Asian women in Migration*, Quezon City: Scalabrini Migration Center, pp. 23-53.

女性比率の増加、という3つの特徴があると指摘する<sup>265</sup>。

このような需要の拡大は、東・東南アジアの新興工業国での「労働の女性化」の結果でもある<sup>266</sup>。すなわち、OFWの女性化は、送出国と受入国における両方における労働の女性化の結果である。その背景に、経済グローバル化という共通の過程がある。

更に、女性のOFWが増加するにつれ、「女性と性」に関わる人権問題（性的虐待、偽装結婚、人身売買、隷属的地位など）やJFC (Japanese-Filipino Children)の問題が登場した<sup>267</sup>。最近では、「コピアン」というKFC(Korean-Filipino Children)の問題が浮上している<sup>268</sup>。

しかし、フィリピン人女性にとって海外移住は劇的な意味を持つ。なぜなら自分の運命を変えられる一つのチャンスでもあるからだ。彼女たちにとって海外移住は、新しい人生を作るための一つの博打でもある<sup>269</sup>。人々は「幸運 (suwert : タガログ)」をつかむために海外に移住し、「勝者 (panalo : タガログ)」になることを夢見る。彼らが話す「幸運」とは、移住した国で良い雇い主に会うこと、または、エンターティナーとして日本に移住し、お客さんにチップをもらうことなど、多様な意味を持っている<sup>270</sup>。さらに、これに出稼ぎ先で国際結婚し、仕事を続ける女性が増える<sup>271</sup>。再生産労働領域に集中している女性労働力移動は、再生産労働を生み出す富の偏在と階層文化が、豊かな国と貧しい国といった空間的配置のもとで行われている。したがって女性労働力移動を、経済的な側面だけを取り上げて論じることは困難である。なぜならば女性の移住には、多様な要因が含まれている

<sup>265</sup> 小ヶ谷千穂「送出国フィリピンの課題—海外雇用政策の推移と『海外労働者の女性化』」梶田孝道編著『人の国際移動と現代国家—移民環境の激変と各国の外国人政策の変化』（一橋大学社会学部、2003年3月）168頁。

<sup>266</sup> Maria Alcestis Abera-Mangahas, 1998, “Violence Against Women Migrant Workers : The Philippine Experience,” in Carino, B.V., ed., *Filipino Workers on the Move : Trends Dilemmas and Policy Options*, Manila: Philippine Migration Research Network of Philippines Social Science Council, pp.45-80.

<sup>267</sup> Ying Chi, 2005, “Labor Migration To Japan: Policy Versus Reality,” (unpublished) given by Manila : Kanlungan Foundation Inc, 2006.

このJFCに関して付属すると、彼らの母親の殆どは、1980年代から日本にエンターティナーとして出稼ぎにやって来たフィリピン人女性である。JFCは、そのフィリピン人女性と日本人男性の間に生まれた子供である。しかし、何故JFCが問題になっているのかというと、母親が出産のために母国に帰国し、子どもが生まれた後に父親が突然音信不通になってしまったり、養育費を含めて、父親としての責任を放棄することや、実の妻が常に存在するなどの問題が見られるからである。従って、実際に、フィリピンの各地には、捨てられたJFCが多くなる。

特定非営利活動法人 JFC ネットワーク <http://www.jca.apc.org/jfcnet/>

<sup>268</sup> この問題については、正確な報告書また文献はない。しかし、報告者が2009年4月から11月まで受入国であるフィリピンに滞在しながら行った現地調査でのヒアリング結果や知見などに基いている。KFCの問題は、JFC問題と少し異なり、韓国人男性がフィリピンにビジネスや語学研修のために滞在しながらフィリピン人女性との間に産まれた子どもであるが、その子どもが産まれた後に父親が韓国へ逃げてしまうことでその子どもへの責任を負わないことから生じる問題である。

<sup>269</sup> 辻本登志子、前掲書、118頁。

<sup>270</sup> Delia D. Aguilar, 2004, “Introduction,” in Delia D. Aguilar and Ann E. Lacsamana, (eds.), *Women and Globalization*, N.Y: Humanity Books, pp.11-23.

<sup>271</sup> 田巻松雄・青木秀男、前掲書（2006年）65-86頁。

からである。例えば、辻本による、韓国に移住したフィリピン人女性に対するインタビュー調査によると、多様な文化を体験するために、夢を実現するために、新しい人生を送るために、海外移住を決心する人が多く観察されている<sup>272</sup>。移住女性が海外移住を決心する理由としては、家族のためでもあるが、同時に個人的な欲求も含まれていることが分かる。

### 3. 海外出稼ぎ労働—看護師・介護士を中心に



図 37 TESDA (Technical Education and Skills Development Authority) で介護士教育プログラムに参加しているフィリピン人女性の姿 (映画『ケアギバー』のサラの姿)

近年のフィリピン国内の動きとしては、看護師や介護士の人気上昇していることがあげられる。家事労働やエンターティナーなど、性的搾取の危険性が高く体力的、精神的プレッシャーのかかる職種に比べ、多くがアメリカやカナダなどで就労する看護師や介護士は、専門性のある職種であり、給料が比較的保証されるためである。アメリカやカナダなどの地域を中心に、英語が通じ、人件費も安く抑えられるフィリピン人看護師及び介護士の需要は、年々高まる傾向にある。フィリピン政府によって認定された国内の介護士専門学校の数、2002年の時点で102校であった。しかしその数は2005年5月時点で841校に達し、わずか3年間で同校は8倍以上に急増した<sup>273</sup>。2004年、日本とのFTA交渉では、日本国内へのフィリピン人看護師の受け入れが認められる方向性が示され、これからますます人気が高まっていくことが予想される。実際に日本の厚生労働省によると、日本フィリピン経済連携協定 (EPA) では、当初2年間で看護師候補者400人、介護福祉士候補者600人を上限として受け入れるとされており、就労コースについては、2009年5月に協定に基づくフィリピン人看護師・介護福祉士候補者の第一陣として283人を受け入れた。介護福祉士候補者のうち、日本語研修を免除された10人は、社団法人国際厚生事業団 (JICWELS) による介護導入研

<sup>272</sup> 辻本登志子、前掲書、92-133頁。

<sup>273</sup> 『まにら新聞』2005年10月3日朝刊。

修を経て、6月から受け入れ、施設で就労・研修を行っており、学校法人新井学園、株式会社エヌ・アイ・エス及び財団法人広島国際センターにおける日本語等研修を修了した178人は、11月11日から受け入れ、90施設で就労・研修を開始したと報告されている<sup>274</sup>。そして2009年11月には、インドネシアからも約370名が来日した<sup>275</sup>。フィリピン人介護士の海外出稼ぎは2009年に、35人が来日した。しかしフィリピンは、介護士を日本だけではなく、台湾、イスラエル、カナダ、英国などの多様な国へ送り出している<sup>276</sup>。今後、各国においてフィリピン人介護士が関わる介護ビジネスが浸透していく可能性も高い。これは先に述べたフィリピン政府によって認定された国内の介護士専門学校の数の増加からも窺える。介護士専門学校は、ここ数年間で8倍以上に急増している<sup>277</sup>。このようにフィリピン国内において、介護士という職業の人気は高まっている。しかしフィリピン国内で医師や弁護士であった人たちが海外向けの看護師や介護士になるケースも多く、フィリピン国内では、専門職の労働者が海外に転出することによる頭脳流出（Brain Drain）の危険性が指摘されている。例えば、看護師の海外出稼ぎ労働により、フィリピン国内の医療に危機をもたらしていることは事実である。過去3年間に、海外出稼ぎによる医師・看護師不足のため、2500のフィリピンの病院の内、その10%までが閉鎖された<sup>278</sup>。しかしこのような状況にあっても世界銀行は、『世界経済見通し2006』で国際的な移民の増加は、移民受入国と送出国双方、および移民とその家族に重要な福利向上をもたらし、移民による国際送金の経済的重要性が高まっていることに言及している<sup>279</sup>。さらにこの報告書では、高所得国は移民から経済的利益を享受することができ、生産コストの削減にもつながることを指摘する。送出国側の国民については、移民の家族、特に子どもにとってのデメリットを指摘するものの、これらのデメリットは移民が彼らの家族にあてる送金によって相殺されるに違いない<sup>280</sup>と述べる。しかし、送出国フィリピンにおいては、医師までが看護師として海外へ流出していくという負の現実が存在している。

このようなフィリピンにおける出稼ぎ事情の中で、2008年に世界各地で上映された映画

<sup>274</sup> 厚生労働省「日フィリピン経済連携協定に基づくフィリピン看護師・介護福祉士候補者の受け入れについて」See <http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/other07/index.html> (accessed on July 30, 2010)

<sup>275</sup> 外国人入権法連結会編『外国人・民族的マイノリティ人権白書 2010』（明石書店、2010年）135頁。

<sup>276</sup> “Fast Facts on Filipino Labor Migration 2007”, Kanlungan Center Foundation, Inc(Center for Migrant Workers), See <http://www.kanlungan.ngo.ph/> (accessed on July 30, 2010)参考資料1の表2を参照せよ。

<sup>277</sup> 『まにら新聞』2005年10月3日朝刊。

<sup>278</sup> Estella Chit, “BY THE WORLD’S BESIDE”Sheila S. Coronel ,i REPORT -NURSING THE WORLD-, the Philippine Center for Investigative Journalism, p.13.

<sup>279</sup> 世界銀行 [http://www.worldbank.or.jp/04data/07press/pdf\\_fy2006/20051116\\_201.pdf](http://www.worldbank.or.jp/04data/07press/pdf_fy2006/20051116_201.pdf)

<sup>280</sup> 世界銀行 [http://wdsbeta.worldbank.org/external/default/WDSContentServer/IW3P/IB/2005/11/14/000112742\\_20051114174928/additional/841401968\\_2005103271101046.pdf](http://wdsbeta.worldbank.org/external/default/WDSContentServer/IW3P/IB/2005/11/14/000112742_20051114174928/additional/841401968_2005103271101046.pdf)

『ケアギバー』は、まさに今のフィリピンにおける介護士による出稼ぎ労働、とりわけ、出稼ぎに出る移住女性が抱えた問題や「生」について、ステレオタイプに基づいて描かれた作品である。本章ではこの映画を通じて、フィリピンにおける出稼ぎ移住女性の状況について、より詳細に検討をおこなう。特に移住女性を送り出しているフィリピンにおいて、彼女たちが何を要求され、何を期待されているのかを、映画に描かれている表象を通じて分析する。また彼女たちを受け入れている韓国のメディアでの、移住女性表象と、どのように異なっているのかを比較することで、受入国と送出国の社会・文化的な側面の差について考察をおこなう。その際、女性移住者を、経済に押し出されていく単なる客体としてではなく、等身大の主体として対象とし、女性たちが新自由主義やジェンダー秩序の中で主体性をもって労働、移住、結婚、離婚を選択している面を、積極的に評価しようとするのが目的である。

## 第2章 映画『ケアギバー』から見る移住女性

### 第1節 フィリピンの映画状況

フィリピンでは、1912年にはじめて映画が制作された。映画館の数も、1924年には全国で214館であったものが、1987年には892館まで増加している。中でもメトロマニラには、199の映画館が営業をおこない、1976年に調べでは、平均約18万人のマニラ市民が毎日映画を見ているという。メトロマニラの当時の人口が約700万人にすると、4人の1人の割りである<sup>281</sup>。また1980年代以前までのフィリピン映画は、年間180本程度が制作され、マニラ首都圏の映画館では、毎週4本のフィリピン映画が封切られていた。フィリピン映画は、ハリウッドとボリウッド<sup>282</sup>に続く、世界第3位の映画産出記録を保持した映画大国の一つであった<sup>283</sup>。しかし、それから15年ほど経過した1990年代半ばには、フィリピン映画は年間53本程度しか制作されなくなり、1980年代と比較して3分の1まで制作本数が激減した。この原因として、国外においてはグローバル資本とハイテク産業に支えられたハリウッド映画の興隆が挙げられる。またフィリピン国内の要因として、課税が原因としてあげられる。フィリピン映画には高い税率がかけられており、財務危機を恒常的に抱えるフィリピン政府は、財源確保に確実な方法として映画への課税がおこなわれている<sup>284</sup>。しかし、このようなフィリピン映画後退のなかで、良質の映画も制作されている。2002年にシンガポールの国際映画祭でグランプリを受賞した映画『Batang West Side (West side Kid)』<sup>285</sup>は、米国へのフィリピン人移民の物語である。また、2003年に上映されたドキュメンタリー映画『イメルダ』<sup>286</sup>は、米国などで観客動員に成功した。この映画は、2009年に日本でも公開された。

フィリピン映画の特徴は、「怪奇」、「家族」、「海外出稼ぎ」、「移民」をテーマとする作品が多いことである。中でも、ほとんどの作品で家族というテーマが強調されている。例えば、海外出稼ぎを題材とした作品であっても、家族との関係が大きな位置を占める。また恋愛を題材とした作品であっても、若い男女が二つの家族の間で悩んだりする内

<sup>281</sup> 寺見元恵編・監訳『フィリピンの大衆文化』（めこん出版、1992年）10-11頁。

<sup>282</sup> ボンベイのハリウッド＝インド映画のことを意味する。

<sup>283</sup> ホセリト・ズルエタ「21世紀フィリピン映画：生存のために闘い」  
[www.jpff.go.jp/j/culture/new/0411/img/ph.pdf](http://www.jpff.go.jp/j/culture/new/0411/img/ph.pdf)

<sup>284</sup> 同書。

<sup>285</sup> Director: Lav Diaz, Writing Credits: Lav Diaz, Cast: Gloria Diaz, Joel Torre, Yul Servo, Arthur Acuna, Ruben Tizon, Languages: English, Tagalog, Country: Philippines, Year released 2002, Runtime: 300 min

<sup>286</sup> Director: ラモーナ・ディアス、Cast: イメルダ・マルコス、<http://www.imelda.jp/>

容が多い。それ以外では、海外出稼ぎ（OFW）が、一つのカテゴリーを形成するほど、大きなテーマとなっている。1976年に制作された映画『Minsa'y Isang Gamu-Gamu』をはじめ、近年のフィリピンでは、出稼ぎ移住労働の経験や人生を基にした作品が多数制作され、CMやテレビドラマ、映画産業において重要なテーマとなっている<sup>287</sup>。中でも『Anak（母と娘）』<sup>288</sup>（2000年）は、フィリピン映画史上最大の興行収入を記録し、国民的映画となった。この作品は2001年に、アジアフォーカス福岡映画祭、および同年の東京国際女性映画祭で招待作品として日本でも上映された。また『Milan（ミラノ）』<sup>289</sup>（2004）、『ドバイ』<sup>290</sup>（2005年）、『ケアギバー』<sup>291</sup>（2008年）、など海外出稼ぎをテーマとした映画が制作されている。



図 38 左から、映画『DUBAI（ドバイ）』、映画『Anak（母と娘）』、映画『Milan（ミラノ）』

これらの作品には主に、主要なカタルシスの展望として、悲嘆、裏切り、喪失などに囲まれながら、海外で3K（汚い、きつい、危険などの仕事）仕事に従事し、家族のために献身的に働く母、娘、子供、または親が描かれている。このような物語は出稼ぎ移住フィリピ

<sup>287</sup> Bona(1980), Merika(1984), The Flor Contemplacion(1995), Bagong Bayani(1995), Anak(2000), Milan(2004), Dubai(2005).

<sup>288</sup> 映画『Anak（母と娘）』は、Director：ロリー・B・キントス、Cast：ヴィルマ・サントス、2000年、内容は、貧しさから海外で出稼ぎをするフィリピン人に影響し、本国で大ヒットを記録した。

<sup>289</sup> 映画『Milan（ミラノ）』は、Director：Olivia Lamasan、Cast：Claudine Barretto 2004年、イタリアでロケしたラヴ・ロマンス劇で、海外就労のフィリピン人たちの実態を描いた作品。

<sup>290</sup> 映画『DUBAI（ドバイ）』は、Director: ロリー・B・キントス、Cast：アガ・ムーラック、2005年、ドバイで働く出稼ぎ労働者の物語。

<sup>291</sup> 映画『ケアギバー（介護士）』の公式サイト <http://www.abs-cbnglobalmovies.com/caregiver/index.html>

ン人の苦勞を描きながらその苦痛に立ち向かい、家族のための必死で頑張る姿を描くことで、出稼ぎ移住者を奮起させるだけでなく、「ヒーロー化」する。これは出稼ぎ移住者を英雄化する風潮と捉えることが可能であろう。

これらの映画はほとんど、ABS - CBN の映画プロダクション会社（スター・シネマ）で制作された。この制作会社はフィリピンの映画産業だけではなく、テレビ、音楽の録音、インターネットや雑誌の出版、CM などフィリピンのメディアを手掛けるメガ・プロダクションである<sup>292</sup>。中でも映画『ケアギバー』は、映画制作会社スター・シネマの 15 年周年を記念して制作され、世界各地で上映されるなど、フィリピンにおいて 2008 年、最も話題になった映画である。日本でも 2009 年 11 月に第 1 回目の移民映画祭にて上映された。移民映画祭は、移民・難民に関係する映画の上映を通じて、日本、ひいては国際社会が直面する国境を越えた「人の移動」にともなう諸問題について、市民の理解を深めることを目的に開催された。昨年の第一回目では、韓国、イギリス、ブラジル、マレーシアなど様々な国の移民をテーマにした映画を上映した<sup>293</sup>。そのなかで映画『ケアギバー』はフィリピンの移民問題を描いた作品として上映された。この映画は、フィリピンの国民的スター、シャーロン・クネタ主演とし、英語教師の職を捨て、イギリスへ介護士として出稼ぎに行ったフィリピン人女性の物語である。この映画は、フィリピン人介護士の心情、女性を出稼ぎに海外へ送り出している国の現状を描いた映画である。

フィリピンでは、映画『ケアギバー』の主人公サラのように、海外で働く多くの女性がいる。彼女たちが海外に出る理由は、個人的な理由や社会構造的な要因などを含み、様々な原因がある。また国境を越えた女性たちの移動には、男性の国際移動とは異なる移動形態、あるいは移動の過程で生じる「女性と性」に関わる人権問題など、特別な移動の特徴が見られる。また彼女たちの移住は、新たな「移住女性像」を作り出しつつある。特に、移住女性を巡る表象は、メディアによって作られる場合が多く、大量に生産され、表象は拡大再生産されていく。

本章においては、フィリピン映画『ケアギバー』を分析対象とし、移住女性の「意味」がどのように「構築」されているのかを移住女性表象の「エンコーディング」「デコーディング」分析の双方を試みる。本章の構成は、第一に映画の中に描かれているフィリピン移民状況と、現実との相互関係について考察する。第二に、映画のなかでの移住女性イ

---

<sup>292</sup> ABS - CBN の映画プロダクション社 公式サイト <http://www.abs-cbn.com/>

<sup>293</sup> 移民映画祭公式サイト <http://mffj.org/>

メージがどのように描かれ、形成されていくのかを、サラという主人公を通して分析をおこなう。特に移住女性である彼女が、一人の女性として経験し、エンパワーメントされ、どのように新しいアイデンティティを獲得したのかを考察する。第三に、映画を一つの社会を超える国際言語として捉えながら、映画を見た観客の反応を分析することで、映画によってどのような社会における支配的な視角が創出され、再生産されるのかを考察する。映画分析に入る前に、映画の理解を得るために、フィリピンにおける移住女性、とりわけ海外出稼ぎ女性労働について概観するところから論を進めたい。

## 第2節 映画『ケアギバー (介護士)』について

### 1. 制作背景

映画『ケアギバー』は、前述したように、フィリピンの大規模映画プロダクションの ABS-CBN (スター・シネマ) の 15 年周年を記念して制作された。監督は、Chito S.Rono、主演は、シャーロン・クネタである。フィリピンでは国民的な監督と俳優が初めて手を組んだ作品であるために、制作段階から話題になった。2008 年に、フィリピン国内と世界各地<sup>294</sup>で同時に上映された。フィリピン本国においては 2008 年に最も話題になった映画である。日本でも 2009 年 11 月に第 1 回目の移民映画祭にて上映された。移民映画祭は、移民・難民に関係する映画の上映を通じて、日本、ひいては国際社会が直面する国境を越えた「人の移動」にともなう諸問題について、市民の理解を深めることを目的に立ち上げられた。昨年の第一回目では、韓国、イギリス、ブラジル、マレーシアなど様々な国の移民をテーマにした映画を上映した<sup>295</sup>。そのなかで映画『ケアギバー』はフィリピンの移民問題を描いた作品として上映された。

この映画は、海外出稼ぎに出ている「ケアギバー」の実体験に基づき制作された。監督は海外移住介護士たちの経験をインタビューし、監督自身の友人である出稼ぎ介護士の話を聞きながら、彼らの経験した現実を映画に盛り込み、フィリピン人介護士の心情、送出国の現状を描いた映画である<sup>296</sup>。

---

<sup>294</sup> Regular screenings outside the Philippines are: Guam, Los Angeles, Las Vegas, San Diego, Hawaii, San Francisco, Macau, Qatar, Bahrain, Milan, Barcelona, Dubai, Abu Dhabi, Oslo Norway, Sharja, Stockholm. See Answers.com : <http://www.answers.com/topic/caregiver-film>

<sup>295</sup> 移民映画祭公式サイト <http://mffj.org/>

<sup>296</sup> <http://www.answers.com/topic/caregiver-film>

## 2. あらすじ

主人公サラ（シャーロン・クネタ）は、夫であるテディーの計画に従って、家族を経済的にサポートするため、自国での小学校の英語教師の職を捨て、自分の息子を母国に置いたままイギリスに向かう。映画は、慣れ親しんで来た世界にサラが別れを告げるところから始まる。骨の折れる介護士コース研修を終えて、彼女は英語を教えていた小学5年生の教室に最後の挨拶をする。彼女は息子のパウロのために冬のコートを買って与える。お金がたまり、彼をロンドンに呼び寄せることができるようになったら、このコートを使うように、と約束をする。典型的なフィリピンファッションに身を包んだ彼女は、空港での家族との別れに涙を流し、英国目指して出発する。



図 39 映画『ケアギバー（介護士）』  
出所：Answers.com  
<http://www.answers.com/topic/caregiver-film>

やっと彼女はロンドンに到着する。小さなアパートで彼女は、夫テディーと熱情的に再会する。ハネムーン気分で、彼は彼女をロンドンの名所見物に連れてゆく。有名なショッピングモールでウィンドウショッピングをしていた時、サラは、チョコレートバーを万引きしようとするフィリピン人少年シーンを捕まえる。その後彼女は、シーンを自分の息子のように接するようになる。東の間のわくわくするような時間が過ぎたあと、彼女は他のフィリピン人介護士と同様に、苛酷な日々を経験する。凍りつくような気候、汚い仕事、気難しい患者たち。テディーもまた、病院で働くなかで、毎日の辛く単調な仕事と戦っていた。ロンドン生活への適応の困難さにもかかわらず、サラは忠実にテディーの支えとなり、生活を支える。彼女はどのような状況にあってもそれを好転させるべく最善に務めた。英語が上手な彼女は、裕福で気難しい老人のモーガンの担当をまかされる。一方、夫のテディーは、自分自身の仕事の問題に没頭し、彼女の状況に関心を失う。サラはモーガン及びその息子ディビッドの信頼に慰めを得る。しかし、ロンドン生活のストレスがサラとテディーの結婚生活に陰りを生じさせ、二人の間に緊張が高まっていく。仕事においても、家庭生活においても摩擦と争いが多くなり、サラは夫テディーに見切りをつけた。夫テディーはサラに、二人でフィリピンに帰ろう、と提案した。しかし、サラにはテディーの決定を受け入れ難く、最終的にサラは、ロンドンでケアギバーの仕事の続けることを決心した。

### 第3節 映画『ケアギバー（介護士）』から見る出稼ぎ移住状況

#### 1. 「国際商品」として表象されるケアギバー（介護士）

この映画は、海外出稼ぎ労働者について、幾つかの通念を打破している。例えば、主人公のサラのように OFW の介護士や看護師は未婚の単身女性とは限らず、かなりの比率で、有配偶で子供を抱えた女性である<sup>297</sup>。また、少なくない割合で短大卒や大卒の人材を含んでいる。サラの職業が小学校の英語教師であったように、事務職や教職といった仕事を投げ打って、異国での介護士や家事労働に就くことを描いている。近年のフィリピン国内の動きとしては、看護師や介護士の人気上昇している。家事労働者やエンターティナーなど、性的搾取の危険性が高く体力的・精神的プレッシャーのかかる職種<sup>298</sup>に比べ、多くがイギリス、アメリカ、カナダなどで就労する看護師や介護士は、専門性のある職種であり、給料が比較的保証されているためである。イギリス、アメリカ、カナダなどの地域を中心に、英語が通じ、人件費も安く抑えられるフィリピン人看護師及び介護士の需要は、年々高まる傾向にある<sup>299</sup>。特に、映画のなかでサラの職業であるケアギバー（介護士）という職種は、近年、POEA（Philippine Overseas Employment Administration） フィリピン労働雇用海外労働庁の海外就労新規採用統計にも新しい職種として登場している<sup>300</sup>。また、伊藤によれば、ケアギバーの養成や派遣に関わる機関や利害当事者の周辺では、「家族思い」で「心優しい」と、自他ともに認識されるフィリピン人は、介護がまさに「天職」であり、フィリピン人には「良質」のケアを提供できる「国民的素質」が備わっているという、言説が広範囲に浸透している<sup>301</sup>。例えば、この映画ではイギリス人であるモーガン家族の下記の台詞から、サラがいかに関護という仕事に向いているのか、まるで、サラにとって「天職」であることが強調される。

<sup>297</sup> ラセル・パレーニャス「家族を想うということ—フィリピン人海外就労の経済的原因におけるジェンダー作用」伊藤るり・足立真理子編『国際移動と連鎖するジェンダー—再生産労働力のグローバル化』（作品社、2008年）154-169頁。

<sup>298</sup> 鈴木伸枝「首都圏在住フィリピン人既婚女性に関する一考察：表象と主体性構築家庭の超国民論から分析」お茶の水大学『ジェンダー研究』（1998年）97-112頁。

<sup>299</sup> フィリピン政府によって認定された国内の介護士専門学校の数は、2002年の時点で102校であった。しかしその数は2005年5月時点で841校に達し、わずか3年間で同校は8倍以上に急増した。『まにら新聞』2005年10月3日朝刊。

<sup>300</sup> その人口は2003年で18,878（97%が女性）となっており、看護師の9,086人に比べると倍の規模である。映画の中でもサラが教育を受けたケアギバー訓練プログラムは2004年、フィリピンで689のケアギバー訓練プログラムが展開しており、670とも780とも言われる数の訓練学校が急増している。

<sup>301</sup> 伊藤るり、小ヶ谷千穂、ブレンダ・テネグラ、稲葉奈々子「いかにして『ケア上手なフィリピン人』はつくられるのか？—ケアギバーと再生産労働の『国際商品』化」伊藤るり・足立真理子編『国際移動と連鎖するジェンダー—再生産労働力のグローバル化』（作品社、2008年）117-138頁。



図 40 「ケア上手なフィリピン人」女性表象

ディビット：サラ、私たちと一緒にすごしてくれて本当に感謝している。僕は君のようにお父さんの世話を出来ない。本当に尊敬している。これは誰でもできることではない。君の天職だと思う。

モーガン：いくら自分が全く期待してなくても時には誰かの人生に入り込んでくることがある、そして孤独も減り一人であることも減る。私にとっては君がその人間だ。君は他人を大事に思う。これまでに彼らが人生で失ったものを与える。尊厳、希望、喜び、そして楽しみさえも、世の中にはそのようなことができる仕事はそうそうない。だから、サラ・コンザレス、君に言う ありがとう そして、よくやってくれた。君にあえてよかった。

この部分では、「ケア上手なフィリピン人」女性表象を構築し、ケアギバーという職業を「国際商品」化する過程が見られる。これは、1960年代以降に開発途上国における工業化過程のなかで若い女性たちがいかに手作業に向いているのかを、『生まれつき』手先が器用で、忍耐力の強い」という女性表象を作り出したことと同様に女性労働力を「国際商品」化する場面である。具体的に述べると、資本主義の浸透をともなう社会的経済的変容のなかで1960年代後半以降、開発途上国の多くの国で工業化が進み、「輸出加工区」などにおける世界市場向けの工場生産が急増すると、未婚の若年女性が大量に雇用されるようになった。その中で13歳から15歳の女性は、世界工場で働く若い女性のうち80パーセントを

占める<sup>302</sup>。マレーシアへの外国企業進出を奨励するための小冊子には、「東洋女性の手先の器用さは世界的に有名です。女性は小さい手をしており、細心の注意を払いつつ手早く仕事をします。天分の遺伝のお陰で、組立て作業の生産ラインに必要な効率に寄与できるという点から、東洋の少女に並ぶものはいません」<sup>303</sup>、という単調で細かく、繰り返しの多い作業に女性が向いているのは、「生まれつき」手先が器用で、忍耐強いからだというレトリックとつながる。またフィリピンでも国民的スターであるシャーロン・クネタを起用することで、フィリピン人女性を代表し、フィリピン人女性がいかに家族思いで強く、やさしい心を持っているのか。そしてこのような性格が遺伝に由来し、ケアに向いているのは生来の性質であるとされる。このために彼女たちにとってケアは天職であり、同時に優れた「商品」となる。

一方で映画では、次のマーガレットの台詞からは、「お金に執着する」フィリピン人出稼ぎ労働者のネガティブな表象が現れる。

マーガレット： 女性が何を考えているのかあなたには分からないでしょう。そろそろ分かるようにならないとね ディビット。彼女が何も魂胆がないって言い切れる？例えば、お父さんと結婚するとかよ。分からないの？フィリピンか家政婦が後先少ないお金持ちの老人と結婚するなんてよくあることよ。

ここからは、イギリスにおけるフィリピン人移住女性の「お金に執着する」イメージのステレオタイプが表現される同時に、ディビットの「彼女は家政婦じゃない！」という反論により、フィリピンのケアギバーという新しい職種のカテゴリーが、先進諸国における再生産労働の顕在的そして潜在的需要を睨み、またフィリピン海外雇用政策が直面する二つの課題—すなわち家事労働市場の競争激化への対応と海外労働者への保護—に応えるものとして、戦略的にケアギバーが技能労働として位置付けられていることを示している<sup>304</sup>。

<sup>302</sup> 中谷文美「働く—性別役割分業の多様性」田中雅一、中谷文美編『ジェンダーで学ぶ文化人類学』（世界思想社、2005年）129頁。

<sup>303</sup> D.Elson and R.Person, 1981, "Nimble Fingers Make Cheap Workers", *Feminist Review* 7, pp.87-107.

<sup>304</sup> 伊藤るり、前掲書（2008年）117-138頁。

## 2. 英語講師から介護士へー矛盾した階級移動



図 41 英語先生から介護士になるサラ

N.ヘイザーらは、アジアにおける出稼ぎ移住女性家事労働者を対象にグローバルな性別分業構造の観点から詳細な考察を行っている<sup>305</sup>。また、モムセンは産業化と都市化が、召使を雇う資力のあるミドル・クラスと、機能先のない女性労働者の余剰とを生み出したと総括する<sup>306</sup>。世界都市においては、高賃金の専門職と、これらに家事労働を含む様々なサービスを提供する低賃金の労働者との労働市場は分節化している<sup>307</sup>。しかし、移民として家事労働に従事する女性は、家庭という私領域である親密な空間に属するために、単に女性として差別されているばかりでなく、世界経済システムのもとでの経済的弱者として、また、民族的、人種的、宗教的等の差異に基づき、多重な差別を受けている。そのなかでフィリピン人女性は、英語が話せ、高学歴であることから世界から好まれた。しかし、小ヶ谷は、移住家事労働者らは、ホスト社会の矛盾したジェンダー関係を表面的に解消する役割を、家庭という社会的に可視化されにくい場で担うことで、様々な制約を背負う、とする。その結果ミドル・クラスの家、ひいてはホスト社会のライフスタイルの現実を下支えする役割を担いながらも、一方では、文化的・社会的脅威として位置付けられるような実態が生じることとなる。このような再生産労働や移住労働が抱える固有の矛盾を体現しつつ移住家事労働者は、ホスト社会全体の物理的・社会的・文化的・イデオロギー的再生産を日々行っているのである<sup>308</sup>、と指摘する。一方で移民女性たちは、受け入れ社会につ

<sup>305</sup> Noeleen Heyzer, (ed.), 1995, *The Trade in Domestic Workers: Causes, Mechanisms and Consequences of International Migration*, Zed Books.

<sup>306</sup> J.H. Momsen, 1999, 'Maids on the Move' in J.H. Momsen, (ed.), *Gender, Migration and Domestic Service*, London: Routledge, pp.1-20.

<sup>307</sup> R.Cox, 1999, "The Role of Ethnicity in Shaping the Domestic Employment Sector in Britain," in J.H. Momsen, (ed.), *Gender, Migration and Domestic Service*, London: Routledge, pp.134-137.

<sup>308</sup> 小ヶ谷千穂、前掲書 (2001年) 121-147 頁。

いてのイメージを再生産している。例えば、スリランカ出身のムスリム女性メイドは、中東の人々はムスリム同胞であるから自分がひどい待遇を受ける事はないと主張して、出稼ぎに出ようとする<sup>309</sup>。送出国においても受入国においても、移民労働者とその関係者には否定的なステレオタイプが付与される傾向がある。家事労働者も例外ではない。例えば米国のメディアでは、米国で働くラティーナ女性を、出産のために米国にやってきた「社会サービスを吸い取る」存在として描いている<sup>310</sup>。フィリピンのメディアも、本国に残る子供の苦しみをセンセーショナルに取り上げ、母の出稼ぎを子の非行と短絡的に結びつける<sup>311</sup>。2009年2月14日のニューヨーク・タイムズでは、ルーマニアから出稼ぎに出る母親たちに対して「国家的な悲劇 (national tragedy)」と語り、出稼ぎに出た母親の不在が、子どもたちの非行や犯罪の原因になると述べている<sup>312</sup>。

家事労働者に対する差別や偏見は、社会に広く浸透している。吉村は、家事労働者らへの「怠惰で怠け者」、「見張っていないと仕事をしない」、「金や物を盗む」、「機会があれば逃げ出す」、「犯罪に加担する」、「ふしだら」、「夫や息子に色目を使う」、「HIV や性感染症にかかりやすい」などの見方は、多くの国で見受けられると指摘する<sup>313</sup>。

家事労働者を巡る問題は、1991年に起きたコンテンプラシオン事件<sup>314</sup>から世界的に注目を集め、フィリピンでは、コンテンプラシオンの無実を訴え、釈放を求める大衆行動が大きく広がった。フィリピン海外労働者の人権侵害の問題が、政権を揺るがす事態に直結するということが如実に示した。この事件は1995年、ジョエル・ラマガン監督によって映画化される。この事件をきっかけに、「1995年の移動労働者および海外フィリピン人法」(Migrant Workers and Overseas Filipinos Act of 1995) が生まれた。この法律の「政策宣言」は次のように謳われた。

---

<sup>309</sup> M.Ismail,1999, “Maids in Space: Gendered Domestic Labour; from Sri Lanka to the Middle east,” in J.H.Momsen , (ed.), *Gender, Migration and Domestic Service*, London: Routledge, pp. 229-241.

<sup>310</sup> G.Chang, 2000, *Disposable Domestics: Immigrant Women in the Global Economy*. Cambridge, MA: South End Press.

<sup>311</sup> R.S.Parreñas, 2002, “The Care Crisis in the Philippines: Children and Transnational Families in the New Global Economy” in B.Ehrenreich & A.R.Hochschild, (eds.), *Global Women: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*, N.Y: Henry Holt and Company, pp.39-54.

<sup>312</sup> Dan Bifelski, “In Romania, Children Left Behind Suffer the Strains of Migration,” New York Times (February 14, 2009).

<sup>313</sup> 吉村真子「東南アジアの開発とジェンダー」原伸子編『市場とジェンダー』(法政大学比較経済研究所、2005年) 203-234頁。

<sup>314</sup> 1995年、シンガポールでフィリピン人家事労働者デリア・マガとその雇用者の子どもが殺され、この人事件の容疑者として起訴されたのが同じフィリピン人の家事労働者でデリア・マガの知人であったフロール・コンテンプラシオンである。フィリピンでは冤罪説がもちあがり、フロール救援の運動が起こったにもかかわらず、フロールは死刑に処された事件。

政府は、フィリピン人移動労働者の外貨送金による国民経済への顕著な貢献を認識しつつも、経済成長を維持し、国家開発を達成するための一つ的手段として海外雇用を促進することはしない。海外雇用政策の存立は、ただひとえに、フィリピン人市民の尊厳、基本的人権および自由がいかなる時にも傷つけられ、あるいは侵害されないという確約に依存する。それゆえ政府は不断に国内の雇用機会を創出し富の公平な分配および開発の利益を促進するべきである。

このような性的搾取の危険性が高く、体力的・精神的プレッシャーのかかる出稼ぎ家事労働者に対して、技術養成・訓練局である TESDA (Technical Education and Skills Development Authority) は、ケアギバーを「技能労働」として定式化し、そのことによってこれまでの家事労働者より、「格上」された海外雇用創出を模索している。しかしながら実際には、看護師や医者などが、ケアギバーの訓練プログラムを受講し、海外での雇用を求めるといった意図せざる現象が起こっている。つまり、ケアギバーが「技能労働」として位置付けられたことで、一部ではむしろ技能を「切り下げる」かたちでの技能労働者の流出に、拍車がかかっているのである。このような現象は、高校教員が家事労働者として就労する事例とも類似している。映画の中でのサラも学校の教員からケアギバーとして就労し、テディーの友人であるジョセプもフィリピンでは医者だったが、イギリスでは看護師として働く。パーレーニャスによると、高校教員が海外就労によって家事労働者に転じ、社会的地位において下降しながら経済的な収入という点で上昇する、というような階級移動の問題を「矛盾した階級移動 (contradictory class mobility)<sup>315</sup>と名づけたが、ケアギバーの問題は、それが個人の選択ではなく、職業教育という制度的な水準で展開していることを示している。一方映画のなかでも、次の英語主任になってほしいという提案を断り海外に行くことを決心したサラに対して、学校の責任者は「自分ことばかり考えていたらこの国はどうなるのよ」という場面がある。実際、フィリピン国内では、専門職による「頭脳流出」が、社会問題化している。

---

<sup>315</sup> R.S.Parreñas, 2000, "Migrant Filipina Domestic Workers and International Division of Reproductive Labor," *Gender and Society*, Vol.14, No.4, pp. 560-581.

#### 第4節 出稼ぎ移住女性と家族変容

「家族」、その言葉から思い起こさせるイメージは、文化的に共有されたものである。家族を守る強い父親、家族の世話をする優しい母親、その愛情に包まれ育てられるその子どもたちといった伝統的な家族像は、文化のすみずみまでに浸透している。雑誌文化も企業宣伝、教育者の提言も、伝統的な家族像を明確に提案している<sup>316</sup>。しかし、グローバル化が進展する中で、国民国家の境界を越える流動が活発になり、新たに越境的なつながりが誕生している。中でも情報化社会への移行によって、家父長制の秩序に基づく伝統的な家族形態に揺らぎが生じ、それに対抗して、個人的なネットワークによって構成された、新しい家族の形態が生まれてくる<sup>317</sup>。言い変えると、これは情報化社会への移行によって、家族形態の多様化がもたらされるということである。これはグローバル化の過程の中で行われる家族変容である。特にトランスナショナルな人の移動は、家族変容の大きな原因にもなっている。既に考察したように、韓国における多文化家族は、開発途上国の移住女性たちの韓国への移住から生まれた家族変容であると言っても過言ではない。グローバル化時代における家族は、その家族のナショナルリティーである一国に限定されず、国家と国家の境界を越えて移動しながら再構成される、非常に柔軟な単位に変わったといえよう。したがって、このような家族のことを、トランスナショナルな家族と呼ぶことが可能なのである。グローバル化時代には市民権、共同体、地域の意味や、移住の意味も再構成される。なぜならば、移民する人々は場所を移動した後、必ずしも新しく移動した場所に定着するのではないためである。彼らは、移民する場所と期間に拘らず、多様な共同体に跨りながら、同時にこれらすべての場所で社会的な関係を維持している<sup>318</sup>。

女性による国際移動は、トランスナショナルな家族形成において主役であり、その役割は国内外において大きな比重を示している。とりわけ、自分の子どもを母国に残したまま海外に出稼ぎ出た多国籍母（transnational mothers）は、母であること（母性motherhood）を再定義し、自分がいない間に子どもたちが無視されたり、虐待されたりしていないかなどを心配したりする<sup>319</sup>。国際籍母は、自分の子ども達のために、送金したり、贈り物をしたり、電話をかけたり、メールをすることで、親子の関係を維持しようと努力している。中

<sup>316</sup> 伊藤淑子『家族の幻影—アメリカ映画・文芸作品にみる家族論』（大正大学出版社、2004年）6頁。

<sup>317</sup> M.Castells, 1997, *The Information Age: Economy, Society and Culture*. vol.I *The Rise of the Network Society*, Oxford: Polity Press.

<sup>318</sup> A.Appadurai, 1997, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minnesota Press.

<sup>319</sup> Hondagneu-Sotelo and Avila, 2003, p.329.

でも、送金は大きな意味を持っている。送金は、「豊かな」世界に移動した「個」の単位が揺れ動き、送り出し社会との関係が再形成される過程を知る手掛かりとなる<sup>320</sup>。出稼ぎに出たフィリピンの既婚女性にとって送金行為は、親族と自分の子供たちとの紐帯を維持していくための重要な意味を持っており、特に子供の生活に直接的に関わっている。さらに、母国への送金行為は、多国籍母の母国における社会的地位を引き上げる象徴的な意味を持っている。

### 1. サラと息子の関係から見る越境家族形成（トランスナショナルな家族）

映画のサラと家族の関係は、次の二点において分析が可能である。一つ目は、サラと息子を中心とするトランスナショナルな家族形成である。サラが息子パウロを国に置いたままイギリスへ行く場面からも伺えるが、実際フィリピンでは、単身で出稼ぎに出る母親が多い。そこからは家族の変容が見られる。つまり、移出した母親と祖国に残る家族の間には国境を越える世帯が形成・維持され、「越境家族」(transnational family) ないし「越境世帯」(transnational household) が出現することになる。映画では、母親であるサラの不在が子供に与える悪い影響についてもパウロの反抗を描くことで語っている。実際フィリピン国内で増加する10代の妊娠などの原因として、出稼ぎに出た母親の不在をあげ、母親不在の家庭に残された子供の保護・監督が行き届かないために、新たな諸問題が引き起こされている、と指摘する研究者もいる。しかしながら、この問題についてパレーニャスとホックシールドは、母親が出稼ぎ労働者として移出することが必ずしも家庭崩壊を招くとは限らない、と主張する。家事労働者たちは、子供たちを愛しているからこそ出稼ぎに行くのだと、子供たちに繰り返し伝え、国境を越え親子の紐帯を維持しようと試みる。映画の中でサラは、自分の子供であるパウロに対して、自分が出稼ぎに行く理由を「あなたのためだよ」と言い聞かせる。さらに、ロンドンでは、生活費を節約しながら息子のために送金しようと努力する姿が描かれている。前述したが、出稼ぎ労働者にとって送金行為は、親族と自分の子供たちとの紐帯を維持するために重要な意味を持っている。さらに、サラはパウロが私立学校での教育を受け続けるために仕送りをする。このように出稼ぎで得ら

<sup>320</sup> RA. Van Dijk, 2002, Religion, Reciprocity and Restructuring Family Responsibility in the Ghanaian. Pentecostal Diaspora. In D. Bryceson and U. Vuorela, (eds.), *The Transnational Family: New European Frontiers and Global Networks*, Oxford: Berg, pp.173-196.

れた外貨は、教育にも投資されている。また母親サラが息子や家族の紐帯を維持するために、国際電話やメールのやり取りをするシーンが多く描かれる。これは国境を越え親子の紐帯を維持しようとするサラの意志が表出される場面と言える。このような行為は残された子供達に、自分自身の人生の中で、越境家族の経験に一定の意味づけを与えようとする。越境家族は、紐帯の再構成を行うことにより家族を維持しようとする関係者の主体的な意志から生み出され、維持されているのである。フィリピン国内での経済的理由に基づく母親の海外就労による女性の不在は、明らかにフィリピンの家族におけるジェンダーをめぐる慣習への挑戦となる<sup>321</sup>。しかし、ラセル・パレーニャスの研究によると、女性の移住労働に関する子供たちの語りには、既存のジェンダー規範を支える基本的な要素が反映されている。彼女が行ったインタビュー調査によると、母親の海外就労がフィリピンにおけるジェンダー分業の伝統を脅かしていることは明らかであるが、一方で父親を「一家の大黒柱」として見なし、母親を「一家の灯り」として見なすことで、フィリピン社会に深く浸透したジェンダーに関わる伝統や境界を完全には排除してはいない。しかし、映画の中でパウロは母親の海外行きについて抵抗し、はじめの頃は、母親の出稼ぎに反対したことから分かるように、子供たちは、ジェンダー分業の境界を超えることには抵抗を示している。

家族を養うために外国に働きに出る男性と、貧困から逃れるために海外に出る女性という、移動の理由に関する語りの構築にみるジェンダー間の差異についてパレーニャスは、稼ぎ主をめぐるジェンダーの境界が、トランスナショナルな家族における世帯間関係のステージを設定していることを示していると、述べる。正確にはこの差異は、世代間の健全な関係構築に向けて、母親と子供たちが直面している大きな挑戦を示している。父親と異なり、母親は家族の集合的な上昇のために移動するとは想定されていない。このことは、女性が経済的な貢献を行っても、子供達が母親に求めているケア役割の期待とはつながらないため、女性はトランスナショナルな家庭において、二重の責任に直面していることを示唆している。別の言い方をすれば、出稼ぎに出る母親は、子どもたちに対して遠く離れて暮らしていても、家族のことを思っていることを示すため出稼ぎ出る父親に比べて、より多くの事柄を達成しなければならない。

---

<sup>321</sup> ラセル・パレーニャス、前掲書（作品社、2008年）154-169頁。



図 42 サラとパウロの電話やメールのシーン

映画の中では、母親であるサラと息子のパウロとの電話のシーンが多く見られるが、父親であるテディーと会話するシーンは描かれない。

出稼ぎのために母親が国際移動を行うことは、母親に対する二重規範、つまり経済的に貢献する妻と、家庭にあるべき母に亀裂を生じさせるものとして、社会的に問題視されやすい<sup>322</sup>。さらに、既婚女性による国際移動は、「母親であること (motherhood)」を再定義し、自ら母親の不在とその不在によって子供たちが経験する矛盾の間に意味を与えるために、彼女たちによる、送金や贈り物、電話かけるなどを通じて維持される。また、定期的なコミュニケーションを通して、「愛の商品化 (Commodification of Love)」と「技術的管理 (technological management)」は、トランスナショナルな「母性」の特徴として現れる<sup>323</sup>。

## 2. サラと祖母の関係から見るグローバルなケア連鎖



図 43 母国の叔母さんをケアするサラの母とロンドンで介護士として働くサラ

二つ目は、サラと実家のおばさんとの関係である。サラがイギリスに行く前に実家に戻

<sup>322</sup> 小ヶ谷千穂「海外就労と女性のライフコース：フィリピン農村部の若年シングル女性と世帯内関係を手がかりに」『ジェンダー研究』、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報第8号(2005年)99-111頁。

<sup>323</sup> R.S.Parreñas, 2001, “Mothering from a distance: emotions, gender, and intergenerational relations in Filipino transnational families”, *Feminist Studies*, 27 (2), pp.361-90.

る場面がある。サラはこれから介護士としてイギリスで老人達を介護しなければならないが、サラの実家にもまったく同じ状況に置かれている実のお婆さんがいる。お婆あさんの介護を、母と妹が担当する場面が見られる。映画ではサラの複雑な心境が表現される。その場面からは、「ケアの連鎖 (care chain)」<sup>324</sup>、または「ケアのグローバル・チェーン化」<sup>325</sup>が想起される。つまり女性の移住労働は、家事・育児・看護・介護のケア労働に集中するが、その女性は故郷でも自分の家庭のケア労働の担い手である。その担い手が家を離れ、残った家族や親類や近隣の女性、農村部や外国から家政婦として雇われた女性たちが介護を担っている。そして異なった国籍や文化・宗教を持ちつつもさらには、ケア労働を負担していく。こうした連鎖が国境を超えたかたちで形成され、「ケアのグローバル・チェーン化」というべき構造が形つくられている。女性だけで繋がっていくこのような連鎖を「グローバルなケアの連鎖 (global care chain)」と A.ホックシールドは名づけている。彼女の研究においては、ヨーロッパのキャリアウーマンのために働く出稼ぎ家事労働者とホスト国の雇用主である女性たちとの関係を、「北」の国々の高学歴女性を動員できる多国籍資本が、この連鎖構造における勝者と称えた<sup>326</sup>。このホックシールドの議論は、新自由主義による構造的なメカニズムを示していると考えられる<sup>327</sup>。青木も、アジア地域の労働力移動の研究において、OFW の女性化とこの需要の拡大について、東・東南アジアの新興工業国での労働の女性化の結果である、と述べている。すなわち、OFW の女性化は、送出国と受入国における 2 つの労働の女性化の結果であり、その背景に、経済グローバル化という共通の過程がある。例えば、子供のケアについて考えてみよう。フィリピンでは、出稼ぎに出た母親の不在により、パウロのように叔母さんと暮らす子供が多い。勿論、父親と暮らす子供も多いものの、多くは叔母さんまたは親戚が子供のケアをし、母親はある程度のお金を送金することが一般的である。海外に出られる出稼ぎのフィリピン人母親は、海外で雇用主の子供のケアをし、自分たちの子供のケアは故郷の親戚または、海外に出られない人を雇用して行われる。まさに、グローバルなケア連鎖である。

<sup>324</sup> Nicola Piper, 2003, "Bridging Gender, Migration and Governance: Theoretical Possibilities in the Asian context," *Asian and Pacific Migration Journal*. Vol. 12 no.1-2, pp. 21-48.

<sup>325</sup> 吉村真子「東南アジアの開発とジェンダー」原伸子編『市場とジェンダー—理論・実証・文化—』(法政大学比較経済研究所、2005年) 218頁。

<sup>326</sup> A.R. Hochschild, 2000, "Global Care Chains and Emotional Surplus Value," will Hutton, Anthony Giddens, (eds.), *on the edge: living with global capitalism*, London: vauntage, pp.130-146.

<sup>327</sup> デヴィッド・ハーブエイ著、渡辺治訳『新自由主義—その歴史的展開と現在』(作品社、2007年)を参照せよ。

## 第5節 映画『ケアギバー（介護士）』から見る移住女性表象

### 1. 固定化されたフィリピン人女性表象

ここでは、映画のテキスト分析方法での移住女性イメージを考察する前に、従来の移住女性イメージはどのように生産され、また再生産されるのかを考察する。

日本においては、80年代から90年代にかけてのフィリピン人移住女性の表象・イメージの特徴は、長年にわたりネガティブなステレオタイプのイメージが、継続的に再生産されてきた<sup>328</sup>。例えば、バレスカスは、日本のフィリピン人パブで接客を行う女性たちをフィリピンと日本の二国を巻き込んだ男たちの遊びと快楽のために、彼女たちの性が商品化されていくメカニズムの中で、「無知な人間」が欲望を刺激されて墜落していく姿として捉えた<sup>329</sup>。さらに日本での、アジア人女性と日本人男性の結婚仲介による「アジア花嫁」や、東南アジア人女性の性風俗産業に働いている女性を「じゃぱゆきさん」と呼ぶことは、ネガティブなステレオタイプを代弁している。「じゃぱゆきさん」表象は、経済格差を背景にした日本人による搾取・暴力の被害者としてのフィリピン人女性像として現れている<sup>330</sup>。しかし、「じゃぱゆきさん」という言葉は80年代以降、差別的意味合いの指摘などによりマス・メディアの見出しなどから消えていき、その代替語として、「フィリッピーナ」という言葉が登場する<sup>331</sup>。笠間は、「じゃぱゆきさん」から「フィリッピーナ」に代わったのは、ただ言葉だけではなく、「被害者」として、「じゃぱゆきさん」は「金銭のためには何でもする」「したたかなアジア人女性」として、表象の内容の転換も見られていると指摘する<sup>332</sup>。韓国においても、移住女性のイメージは日本と同様で、「経済的理由で韓国人男性と結婚した貧しい国の女性」、国際結婚仲介によって作られた「従順」で、「服従的」で、「性的に魅力的」な女性としてイメージ化された<sup>333</sup>。しかし、このようなフィリピン移住女性のイメージは、国際結婚による移住女性の増加によって、韓国社会での新たな構成員となる移住女性たちに家族のために努力する移住女性象を求めた。つまり、これ以上韓国人女性から

<sup>328</sup> 清水展「日本におけるフィリピン人・イメージ考」『比較社会文化』第2号、(1996年) 15-26頁。

<sup>329</sup> M.R.P.Ballescás, 1993, *Filipino Entertainers in Japan: An Introduction, Philippines, Quezon: The Foundation for Nationalist Studies, Inc.* (= 津田守、小森恵、宮脇撰、高畑孝 訳『フィリピン女性のエンターティナーの世界』明石書店、1994年、5頁。)

<sup>330</sup> 山谷哲夫『じゃぱゆきさん—アジアは女だ』(情報センター出版局、1985年)

<sup>331</sup> 笠間千浪「ジェンダーからみた移民マイノリティの現在—ニューカマー外国人女性のカテゴリー化と象徴的支配」宮島喬・梶田孝道編『マイノリティと社会構造』(東京大学出版会、2002年) 121-148頁。

<sup>332</sup> 同書、121-148頁。

<sup>333</sup> 安貞美「韓国における移住女性—映画『멋진 그녀들(She Is)』を中心に」三宅晶子編『身体・文化・政治』研究プロジェクト報告書、第156集(千葉大学大学院人文社会科学部研究科、2008年) 85-96頁。

は期待できなくなった「献身」や「犠牲」を、移住女性たちに強要することにもなる<sup>334</sup>。一方、筆者が昨年4月から11月までフィリピンに滞在しながら行った現地調査でのヒアリング結果や、知見などによると、フィリピンでの移住女性イメージは、三つに分けて考えられる。一つ目は、海外で苦労しながら稼いだお金を送金することで家族を養ったり、家を建てたり土地を買ったりする、一家の「自慢できる娘」あるいは「英雄」として語られるケースがあげられる。経済的に豊かになれること、また自慢できる娘になれるという期待は、多くのフィリピン人女性が海外出稼ぎを決める際に、重要な促進剤の一つとなっている。二つ目は、外国人にお金のために売られている「可哀相な存在」としての表象である。これは主に、政府レベルで行われる国際結婚を示しているが、国際結婚仲介業者による国際結婚移住女性の多くは、田舎の経済的に困窮している社会階層の出身のためである。そして三つ目として、海外で体を売る「娼婦」としてのイメージが見られる。これは、日本でのフィリピン人エンターティナーを念頭して話していることが多かった。筆者が直接話を聞くことが出来た20代のフィリピン人女性によると、次のような実態も見られた。

私の叔母は、興行ビザで日本に行ったの。叔母は、クラブで働きお金を送ってくれた。たまに、私に日本の文房具も送ってくれたの。私とその文房具を持って学校にいくと人気者になったりしていたの(笑)。しかし、お祖母さんとお祖父さんは、叔母の話の家でするのを嫌がっていた。その時は分からなかったけど、後で分かったのは、叔母は日本のクラブでヤクザに会い体を売っていたことが町中に噂になっていた。一緒に日本に行った叔母の友たちが帰ってきて噂にしていたのよ。それから、町では、日本に行くと皆、娼婦になるって言っていた。

ここまでの考察から、韓国や日本、つまり移住女性を受け入れている受入国では、移住女性はホスト国の男性の「性の対象」として、または、「被害者」、「劣等な存在」貧しい国からの「可哀相な存在」としてイメージ化された。一方、送出国のフィリピンにおいては、受入国と同様に「可哀相な存在」としてイメージ化する反面、移住女性を「英雄」として語る現象も見られた。さて、これからは映画のテキスト分析に入るが、ここでは移住女性

---

<sup>334</sup> 安貞美「視覚文化における国際結婚移住女性—韓国ドラマ『黄金花嫁』を中心に」土田知則編『歴史—物語(histoire)における抑圧的言説・表象』研究プロジェクト報告書、第95号(千葉大学大学院人文社会科学部研究科、2009年)43-51頁。

の主体性に関してその焦点を合わせながら移住女性の送出国で制作された映画『ケアギバー』から出稼ぎ移住女性がどのようにイメージ化されているのかを分析する。

## 2. 映画『ケアギバー（介護士）』から見る移住女性表象



図 44 森の中で何かを探しているサラの姿

映画は、森の中で何かを探し回るサラの姿とナレーションから始まる。

人々は予想もしないところにたどり着く、人々は目的地の予想はついている、でも、予想と違うところにたどり着く人もいる、他の人はもうたどり着いたことに気づかない、たどりついて迷う人もいる。心の中で「もっと道を歩け」って声が聞こえてくる、目的地はもうすぐそこ、道を歩く時、足跡は消える。なぜならば、私たちは自分の道をつくっているから。

映画のこのナレーションは、出稼ぎに出る移住女性の状況と心理を表す重要なコードになる。つまり、ナレーションを通じて、女性が国際移住を選択するときに条件付けられた様々な状況とその条件の下で選択する移住の多様性が表れる。特に、国の政策の下で送り出される移住は、「人々は目的地の予想はついている、でも、予想と違うところにたどり着く人もいる」とあるように、心の中に存在する「迷い」を表し、自分らの希望とは違う結果にもなりうることを予想している。しかし、一方で、「心の中で『もっと道を歩け』って声が聞こえてくる、＜中略＞私達は自分の道をつくっているから」という語りからは、付与された条件の下で移住を選択せざるを得ない経済的な状況と資本権力に流されることではなく、自分の意志によって実態を変えようとする姿勢が表れる。つまり、自分の選択を

受け止めて、前進しなければならないと考える移住女性の強い姿勢が示され、自分の人生は、自分でしか作れないことに気づいた女性の自立性を表している語りであると言える。



図 45 ケアギバー教育プログラムに参加するサラの姿

映画の場面は換わって、介護士としてロンドンに行くために介護士育成教育プログラム（TESDA）に参加するサラの姿が映し出される。ここで表される介護士教育プログラムの風景からは、彼女たちの「国際商品」化の過程が明らかになる。このプログラムに参加する人は多くが女性でありながら海外へ出稼ぎに出ることを目標としている。この教育プログラムの実習場面は、そこで徹底的な教育が行われていることを商品価値として見せ、ケアギバー生成過程をまるで CM のように描いたものである。次に、サラがイギリスに行くためのビザを取得する場面では、一緒にプログラムに参加した同僚達も映し出される。彼女たちが法的に認められた海外の労働の現場に向かうためにビザは欠かせない条件になる。その条件をクリアした人だけが海外に出ることが許されるのだ。この場面は、出稼ぎに出ようとする多くの人が女性であることを明らかにする。これは、フィリピン国内における「移民の女性化」が示されている。また、サラの後ろで順番を待っていた一人の女性が、自分が日本に行くことを決めたと話す挿入部は、国際商品としてケアギバーが日本にも「輸出」されていることを伝えようとしている。

## 2-1 ジェンダー秩序に「従順な妻」としての表象されるフィリピン人女性



図 46 (左) 学校の英語担当の主任に昇進する予定だったサラがそれを聞いて嬉しい表情する。(右) 海外に出ることについてサラの意見を聞く母親

映画の始めの部分では、主人公のサラが母国フィリピンを離れ、出稼ぎに出なければならない理由について描かれている。サラは、夫であるテディーとテディーの父親が行っていたビジネスの失敗による借金返済という問題を抱えながらも、夫のプライドのために実家からの援助を受けることなく、夫に言われたとおり家を売り、夫の計画どおり、息子のパウロを義理の母に預けて、英語教師という自分の仕事を投げ打って夫をサポートし、家族のために出稼ぎに行くという「従順な存在」、「犠牲を払う妻」として描かれている。

この部分においては、フィリピンのジェンダー秩序の下で、女性が家父長制に従う形で海外出稼ぎに行くことを決める選択がなされることを表している。このようにサラを描くことによってフィリピン人女性が家父長制の下で、経済的に夫を支えるために出稼ぎに出る普遍的な移住状況を見せている。特に、それはサラと母親の場面から明らかになる。娘が海外に出ることに対して不満に思った母親は娘のサラに向かって次のように話す

サラの母：テディーは、あなたを遠くに行かせるし、マニラで良い仕事をしていたのに、あなたの夫があなたを田舎に連れてって、今度は彼の家族の破産したビジネスを助けるためにあなたを別の国へ行かせるなんて。

サラ：テディーがそうしたいからって

サラの母：あなたはどうかなのよ？

サラ：……

ここでサラは、母の質問に答えられない。このようにサラが、自分の意思より夫であるテディーの意思に従う「従順な妻」として表わされる。



図 47 十字架を持って道を通っていく子供たちとそれを眺める硬い表情のサラとロンドンで教会の場面

次は、サラがロンドンに行く前に、息子パウロを預けるため夫の実家に泊まる場面である。そこには、夜中に寝付けずにいるサラが、窓の外に十字架を持って道を通り過ぎる子供たちを眺める姿が表れる。そのサラの表情は硬い。この場面からは、夫に従って母国を離れるサラとそこに存在する拒否できない家父長制的な組織や統制がカトリックというコードによって表れている。つまり、フィリピン社会はキリスト教カトリックの基盤をもち国教がカトリックであるため、多くのフィリピン人は教会へいく。彼らの宗教は、あらゆる面で彼らの価値観や行動などに大きな影響を与えている。時にはカトリック教会が一つの家父長制的組織として統制することもある。例えば結婚していない女性が子供を産むことは、社会的、宗教的に差別され、または異端視される。この文脈から考えると、彼女が十字架を眺める視線は、彼女のロンドン行きがある種の束縛ないし夫の命令に従うしかないという家父長制下の女性に対する息子への思いや救いの抑圧を対象化した視線として表されていると考えられる。

## 2-2. 家族を思う母、息子のために出稼ぎに出る母、母親の表象



図 48 親が出稼ぎに出ることを不満に思う息子のパウロと心配そうなサラ

フィリピン人社会では、女性が常に特別な地位を占めてきた。スペイン期から女性は、伝統的に家庭内での意思決定者であり、近所付き合いから衣食主に至るまで重要な問題すべてに関与してきた。多くの場合家族の財産を保持、投資、管理し、社会的とりきめを行う際には、家族を代表して参加することもあった。さらに母親として配偶者の選択という非常に大事な問題を含め、子供に関わる決定をほとんど一手に引き受けていた<sup>335</sup>。

フィリピン・メディアの中でのドラマは、下層や中流の下の階層の女性を対象しながら、内容では、善良と苦悩の化身として古い型の母、妻、娘、姉妹、親戚、友人などの役割を通じて、女というものを神聖化している<sup>336</sup>。さらに、メロドラマのなかで母親というのは、聖人のように物分りがよく、勇気を持つものである。父親が家族を養うことができないときには、母親が見代わりとなって、驚くべきエネルギーで仕事と家事の両方をこなす。夫の世話をする一方で、彼の自尊心を傷つけないようにちゃんと気を配らなければならない。母親の仕事は、肉体的な辛さが伴えば伴うほど、悲劇的要素が増す傾向があり、一般的には洗濯女、メイド、市場の物売りりと相場が決まっている。また、自分自身の私的向上をあきらめ、家族の犠牲になる母親というのは決して珍しいことではない。これと対照的に男は、いつも第二義的に扱われ、否定的に描かれている<sup>337</sup>。メロドラマでは基本的に、ふたつの相対するものが作用し合っている。すなわち、女の善は男の悪によって際立てられているということである。

映画『ケアギバー』で表れる母親の表象については、母親であるサラと息子のパウロの関係から考察する。

<sup>335</sup> ディビット・J・スタインバーグ、前掲書（2000年）26頁。

<sup>336</sup> 寺見元恵編・監訳『フィリピンの大衆文化』（めこん出版、1992年）

<sup>337</sup> 同書（1992年）

サラがテディーの計画に従い出稼ぎに出ることを決心することで、息子のパウロは不満を持つようになる。彼が夜中に家出し、公園で飲酒したり、母と口を聞かないなどの反抗はその不満の心境を映し出す。しかし、次に挙げるのは 家出したパウロと母のサラとの会話を一部引用する。

パウロ：僕のせいで行っちゃうの？新しい学校に転校してもいいし...公立学校で勉強してもいいから、それでもいいから...、と泣き出すパウロに対して

サラは：そんなこと言わないで！パパとママは出来るだけ早く迎えに来るから転校なんかしないの！

パウロ：ママ、約束するよ！いつかは家を買戻すから、おじいちゃんの仕事も絶対に買戻してやる。

サラ：私が居ないあいだどうするの？酔ったり、家出したり？

パウロ：家出なんかしてないよ。ただ一人になりたかっただけ。外の空気を吸いたかっただけ。

サラ：あなたは私の元気の元なの。そんなことでしたら...私はどうすればいいのか分からない。と言い、パウロから奪ったビールを飲むサラ。



図 49 サラの母性愛が描かれた場面

次に、サラがイギリスに出る前日にパウロの冬のコートを買う場面からも見られる。

ここではサラが、息子に「いつかは一緒に連れて行くって約束するから迎えに来る時着るのよ。」と言いながら少し大き目のコートを選ぶ様子を描く。さらにサラは息子に「パウロ、置いていくからって気を悪くしないで、大きくなっても置いていたことしつこく文句言わないでね。あなたのためにパパが計画を立てたと覚えといて。彼の夢だから少し我慢

してね」と話す。パウロが「まあ僕のクラスメートの親でも海外に行ってるし...流行ってるんだし」と冗談を言い、サラは「行ったら何回でもいいからメールしてね。電話も何回でもかけていいから」と泣きながら話す。

このサラとパウロの二つの場面では、サラの「母性」が見られる。サラは、パウロに必ず迎えに来ると約束し、自分がいない間の息子の事を心配する。さらに、メールや電話をするように頼みながら親子関係を維持しようとするサラの意志が明らかになる。しかし、それと同時にパウロの「まあ僕のクラスメートの親でも海外に行ってるし...流行ってるんだし」の台詞からは、実際に海外に移住するフィリピン人の多くが親であることが示されている。また、この部分からは、親が海外で就労することで経済的に自立し、母国に残す子供たちを経済的に養い、それと同時に親子が離れて暮らすことでトランスナショナルな家族形態を作り出している事を表わす。これは、フィリピン家族のジェンダー秩序に制度的な亀裂が入っていることを示している。

### 2-3. ホスト国で表れる格差と移住女性表象



図 50 家政婦として出稼ぎに来た女性と話すサラに仲良くしないように注意するテディー  
海外出稼ぎに出る人々の職種の中でも階級が存在を表す場面

サラのロンドンでの生活のなかでも教会が登場する場面がある。はじめて教会に行ったサラは、帰りに聖書の勉強会へと誘う一人の女性と話をする。そこで、サラの夫であるテディーは彼女と話さないようにサラに注意をする。サラが「何で?」と聞くと、「お手伝いさんだから」と返事する。この場面からは、受入国と送出国の間に現れる人種・政治・経済的な格差以外に、彼らの間に新たな差別意識や階級意識が生まれていることが描写される。海外出稼ぎに出る人々の職種の中にも階級が存在し、テディーの台詞から、サラが始めようとするケアギバー（介護士）が、家政婦という職業より「格上」のものであることを示している。一方では「お金に執着する」移住女性表象がホスト国の女性マーガレットとデ

イビットの次の台詞から表れる。



図 51 マーガレットとディビットがサラについて話す場面とそれを聞いたサラがモーガン家から出る姿

マーガレット：女性が何を考えているのかあなたには分からないでしょう。  
そろそろわかるようにならないとね ディビット。彼女が何も魂胆がない  
って言い切れる？

ディビット：例えば？

マーガレット：例えば、お父さんと結婚するとかよ。

ディビット：どうかしてるぞ。お父さんは 75 歳だぞ。

マーガレット：分からないの？フィリピンの家政婦が余生の短いお金持ち  
の老人と結婚するなんてよくあることよ。」

ディビット：「彼女は家政婦じゃない」

マーガレット：「家政婦、介護人、介護士、何でもいいわ」

この二人の台詞からは、イギリスにおける「お金に執着する」フィリピン人移住女性の  
表象がステレオタイプに表現される同時に、ディビットの「彼女は家政婦じゃない！」と  
いう反論により、前述したように、ケアギバー（介護士）が、家政婦という職業より「格  
上」のものであることを再び示している。ここからは、フィリピンのケアギバーという新  
しい職種のカテゴリーが、先進諸国における再生産労働の顕在的そして潜在的需要を睨み、  
またフィリピン海外雇用政策が直面する二つの課題である家事労働市場の競争激化への対  
応と海外労働者への保護に応えるものとして、戦略的にケアギバーが技能労働として位置  
付けられていることが強調される<sup>338</sup>。

この会話を聞いて傷ついたサラはディビットにメッセージを残し、その家から立ち去る  
ことになる。

<sup>338</sup> 伊藤るり、前掲書（2008年）117-138頁。

さらに、ホスト国での差別は、サラが働く労働の現場でも表れる。例えば、サラとイギリス人の介護士の二人がパートナーとなって仕事する場面、あるいはフィリピン人とイギリス人が食事をする場面があるが、前者ではイギリス人介護士はパートナーにもかかわらず手を貸そうとしないし、後者の食事の場面では、イギリス人は座って食事をするがフィリピン人三人は立ったまま食事をしている様子が描かれる。映画におけるこのような「差別」の表象は、フィリピン人介護士によって発せられる「イギリス人だからって自分が特別とも思っているみたい」と言う台詞からより明確になる。



図 52 受入国における移住者に対する差別が表れる場面

一方、受入国における移住者に対する差別は、移住女性のみの問題ではなく、移住者全体が抱えている問題として描かれている。例えば、フィリピンでは医者だったテディーの友人ジョセプが、病院で医者としての職に就けず看護師として働くある日、救急車で運ばれてきた患者に適切な治療ができなかったホスト国の医者に代わり適切な指摘と治療を行った。それにもかかわらず彼に対して病院側は解雇を通告する。納得できないジョセプは病院の管理者に訴えるが、その管理者は次のように話す。

管理者：上司への反抗ってことだ。ブラック先生に恥をかかせただろう。彼の研修生皆の前で。

ジョセプ：でも、先生の判断は間違っていました

管理者：それでも医者が下した判断が大事なんだ。

ジョセプ：でも、自分が止めなければあの患者は助からなかったです」

管理者：そういう問題ではない。君はしょせん看護師なんだ。

ジョセプ：僕は、この病院が訴えられるかも知れない所を救ったんですよ。

管理者：君が医者だったのは知っている。しかし、あえて言うが、君は医者じゃない。この病院ではね。そしてこの国では。

ジョセフ：そんなバカナ。

管理者：（この国で）医者になれないことがどういうことかも分からないくせに。

ここでの台詞からは、ホスト国で受ける移住労働者の不当な差別が明らかにされる。また、ホスト社会の中で移住者は「固定化」された表象から解放されていない。しかし、つ前述の「お金に執着する」フィリピン人移住女性という固定的なイメージに対し、サラはその家を出ることで、異議を申し立てる。結局、サラは雇い主であるモーガン家族から謝罪を受けることになるのだ。一方、移住者の労働の現場で横行する、ホスト国民からの差別や格差がここで明らかにされると言えるだろう。さらに、ホスト国民の代わりに3Kの仕事に従事し、いつでも解雇されうる可能性にさらされながら働く移住者の姿が明らかになる。

#### 2-4 夫婦関係から見られる移住女性の「善良な母親」表象

サラのイギリスでの生活を映し出す場面からは、特にサラとテディーの関係の変化が大きく浮上する。つまり、母親のサラの場合は、外では看護師として一生懸命に働き、家庭では生活と息子への送金のために夫に節約を勧める、「善良な母親」として表象される。一方で父親のテディーは、仕事もせずに高い買い物をしたり、ゲームをしたり、お酒を飲んだりする場面が描かれ、まったく無気力な存在として描かれている。



図 53 看護師として頑張るサラと実家にお金を送ってくれることをさらにな飲みながらテレビを見ているテディーの二項対立的な場面

フィリピンでは、ジェンダー分業に沿って父親は、「一家の大黒柱」、女性たちは「一家

の灯り」と捉えられている<sup>339</sup>。パレーニャスによれば、このようなジェンダー編成は、男性を「柱」と捉えることで、稼ぎ手として父親の主な責任を、家族のために家を建てることとして固定化する。「柱」として家を成り立たせるのは父親であり男性であることを示す。一方、母親たちは、家に輝きをもたらすべきとされている。換言すれば、彼女たちは家族をケアしなければならないのである。母親を「一家の灯り」と捉えることは、彼女たちを家庭内領域へと強く結びつける。このことによって女性は、労働力参加に関する社会からの許容度が低く見積られるのだ。ほとんどのフィリピン人家庭は、共働き夫婦によって構成されている。女性たちは社会的な労働に参加しているが、育児やそのほかの家庭内の責任から開放されたわけではない。父親たちは、女性の労働参加の増大によって生じた分の穴埋めをしようとはしない。彼らはいまだ多くの時間を休んだり、リラックスして過ごし、家庭の仕事には手を貸そうとしない<sup>340</sup>。



図 54 食べるものがないと台所で物を投げながら大声で騒ぐテディーの姿

映画の中で、帰宅した夫テディーが、食べるものがないと台所で物を投げながら大声で騒ぐ場面は、まるで家族の調和を乱す悪者として、描かれている。

サラがロンドンについて間もない頃、テディーは、サラが仕事に就くことを進んで色々協力すると言い出す。しかしサラが仕事場で認められ、給料も増額したのに対し、テディーは仕事場でも希望する職に付けず、ヘルスケアアシスタントとして働く姿をサラに見られることでプライドが傷つけられて以降、ますますやる気をなくし、サラとの関係に大きな亀裂が生じる。

<sup>339</sup> ラセル・パレーニャス、前掲書（2008年）154-169頁。

<sup>340</sup> Belen T.G. Medina, 2001, *The Filipino Family*, second edition. Quezon City: University of the Philippines Press, p.151.



図 55 ヘルスケアアシスタントとして働く姿と落ちこぼれるテディーの姿

テディーは毎日酒に浸り、家事を手伝うどころか、食べるものがないと怒り、サラと口争いをする。このような場面からを、パレーニャスの言葉を借りて述べると、「サラの労働市場へ参加活動とは、テディーの男性としてのアイデンティティを脅かす」ことなのである。その結果、男性たちは、家庭内の仕事をも完全に拒絶するようになるのである<sup>341</sup>。

また、夫のテディーは自分自身の仕事の問題だけに没頭し、彼女のことは念頭に無い。サラはモーガン氏及びその息子ディビッドの親愛に慰めを得ることになるのである。ロンドン生活のストレスがサラとテディーの結婚生活に陰りを生じさせ、二人の間に緊張が高まってくる。仕事においても家庭生活においても摩擦と争いが多くなり、夫テディーは見切りをつける。彼はサラに、二人でフィリピンに帰ることを告げるが、彼女には、その決定はすでに受け入れ難いものになっているのである。

## 2-5. 自己発見するサラ

サラは介護士として働き、辛い経験をする。始めて介護士として担当したりりとの関係では、りりの尻部を拭く場面やりりの死亡に衝撃を受けるサラの姿が描かれる。ここでは介護士という職業が肉体的、精神的にも耐え辛い経験である場合の場面を映し出す。サラはその大変さを夫に伝え介護士という仕事を辞めたいと言い出す。

<sup>341</sup> ラセル・パレーニャス、前掲書（2008年）154-169頁。



図 56 介護士として初めて担当されたリリとサラの場面

自らがロンドンでの生活に適応することに苦勞しているにもかかわらず、サラは忠実にテディーの支えとなって援護しようとする。彼女はどのような状況にあってもそれを好転させるように最善の働きをなそうとし、英語が上手な彼女の能力が認められ気難しいモーガンの担当に任命されるなどロンドンの生活に慣れ始める。「従順で服従的」な妻であるサラがロンドンで介護士として仕事をしながら、雇用主との関係からプライドを傷つけられる。特に、サラがモーガンに食事を勧めた時にモーガンはご飯プレートをひっくり返してしまう。驚いたサラは、その時次のように言う。



図 57 頑固なモーガンがご飯プレートをひっくり返す場面と自分の仕事がいくら大事かを語るサラ

恐縮ながらモーガンさん、私のことが嫌いでしたらいつでも代えていいです。＜中略＞でも、私が無能力な介護人と思われないようにしてください。この仕事が私にとってどんなに大事な事か！ この仕事のために何を犠牲してきたのわかりますか？＜中略＞息子を母国に置いて来なければならなかったですよ。＜中略＞この仕事は大事なんです。あなたのことも大事です。自分にこんな風に扱われるなんて誰だって嫌ですわ。

映画には、このような経験から自己発見し、エンパワーメントされることで変わっていく彼女の姿が表れる。また、モーガンもサラによって変化する様子が描かれる。例えば、

無愛想で寛厚な彼の表情にいつの間にか微笑みが浮かぶようになる。さらにサラは、サラはモーガンとその息子ディビッドの親愛に慰めを得ることになる。



図 58 モーガンもサラによって変化する様子と親愛に慰めを得る場面

ディビッド: サラ、私たちと一緒にすごしてくれて本当に感謝している。僕は君のようにお父さんの世話を出来ない。本当に尊敬している。これは誰でもできることではない。君の天職だと思う。

モーガン: いくら自分が全く期待してなくても時には誰かの人生に入り込んでくることがある、そして孤独も減り一人であることも減る。私にとっては君がその人間だ。君は他人を大事に思う。これまでに彼らが人生で失ったものを与える。尊厳、希望、喜び、そして楽しみさえも、世の中にはそのようなことができる仕事はそうそうない。だから、サラ・コンザレス、君に言う ありがとう そして、よくやってくれた。君にあえてよかった。

モーガンとサラの間に信頼が生まれる場面は、次のようなものである。モーガンが寝ている間にサラが一冊の本を手にして読んでいた。その時、モーガンがサラに「手袋をしている？」と聞く。サラは驚きながら、本を元に戻そうとするが、モーガンは引き出しから手袋出して使い、選択した本を持って自分に近づくように言う。サラが選択した本を見て「トーマス・ハーディの『テス』か」と言い、「面白い選択だ」と言う。さらにモーガンは「君が持っている本は初版だよ。その本の価値がわかるかね」とさらに聞く。そして、突然「私を死なせてくれたら良かったのに」とサラに向かって言う。サラは「私の監視下では無理です」と返事する。モーガンは微笑みながら「その可哀相な『テス』の本を読んでくれ、君によってその本が特別な意味のあるものか見てみようじゃないか」とサラに頼む。

そして、サラが本を読む前にモーガンは始めてサラの名前を聞く。この場面は、モーガンが初版である『テス』をサラに渡し読ませることやサラの名前を聞くことで始めてサラの存在を認めてくれる場面である。



図 59 『テス』を読むサラ

しかし、映画で道具として使われた『テス』は、19世紀末のイングランドの田舎を背景に女性の波乱万丈な人生を描いたトーマス・ハーディの小説である。『テス』が出版されたのは1891年である。なぜモーガンは、『テス』を選択したサラに「面白い選択だ」と言ったのだろうか。『テス』のあらすじについて簡略に述べると、貧しい家庭で生まれテスは、父親から親戚に援助を頼みに行かせる。そして、その親戚の農場の奉公になる。しかし、テスは親戚である女主人の息子（アレック）に犯され情婦にされてしまう。そして、テスは子供を生むことになるが、その子供は直ぐ死んでしまう。テスは、故郷を離れある農場の奉公になり愛する人に出会うが、結局は結ばれることなく、テスは家庭の事情により再びアレックの情婦にされてしまう。しかし、テスがアレックを刺すことで最後には死刑になる。小説は悲劇に終わってしまう。

テスとサラからはいくつかの共通点がある。つまり、家の貧しい経済力と出稼ぎに出るところでは、経済的な要因が一致し、テスは父親の命令で親戚のところで奉公するが、サラは夫の計画を従う形でイギリスに出稼ぎに来ている。両女性は、家父長制的ジェンダー秩序の下での犠牲者として一致する。また、定着することなく流離いながら労働し苦勞する姿が表れる。このような理由をモーガンはテスとサラを重ねて見たのである。

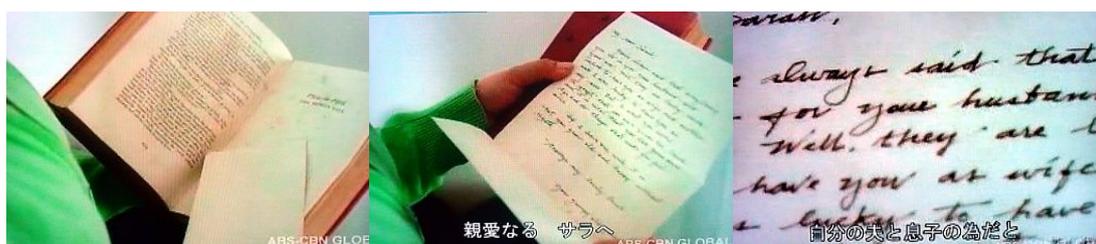


図 60 モーガンからの遺品『テス』中にあった手紙を読むサラ

さらに、モーガンは死んだ後、『テス』をサラに遺品として残す。本の中には、サラへの手紙が残されている。そして、友人としてサラが自分のために後悔なく、生きることを願う。その手紙には次のように述べられている。

親愛するサラへ 君はいつも今している事は自分の夫と息子のためだと言う。君が彼らの妻と母親としてとてもラッキーだ。そして、私も君が僕の老人介護士で幸運に思っている。でも君に忘れてほしくない。君も人間なんだよサラ。そして、自分の人生を生きるってことは大事なことだ。生きてると実感できることをしなさい。私の願いは、君に後悔なく、生きてもらうことだ。さよならサラよ。君の友人である無愛想な老人 ウィリアム・モーガンより。



図 61 フィリピンのピープル・パワー革命を大きく報道した古紙とモーガンと名前が載せてある古紙

サラは、モーガンとの関係が影響を受け大きく変化することになるが、映画はそのようなサラの変化を暗示していく。例えば、モーガンと出かけた町の骨董品店の入り口でサラの目を引いたのはフィリピンの1986年のピープル・パワー革命が大きく採り上げられた古い新聞であった。サラは、モーガンに新聞を見せながら驚きを隠せないが、彼は、「その記事を一面に採り上げたのは我々だけだった」とさらに言い、二面に自分の名前が載せられてあるとサラに言う。ここで映画の道具としてフィリピンのピープル・パワー革命を採り上げた古紙が表れる。フィリピンのピープル・パワー革命は、1986年2月、マルコス独裁政権から非武装の市民が民主化を求めて行った革命である。その革命は、マニラの中心部へ、デモや集会・座り込みを行い、マルコス大統領を支持する国軍の存在を無力化し、平

和の「改革」を可能にしたと言われている。映画で提示するこのフィリピンのピープル・パワー革命を採り上げた古紙の本来の意図は、独裁政権に黙って従わないフィリピン人の意志から行った革命をコード化することで、サラが付与された条件の下で移住を選択せざるを得ない経済的な状況と資本権力に流されることなく、自分の意思によって実態を変えようとする力があることを映画は暗示している。さらに、映画の始まりに森で何かを探すサラの姿は、モーガンの家に行ってモーガンとその息子ディビットと一緒に凧上げをする場面から明らかになる。森の中でサラが探していたのは空を飛ぶ凧だったことが明らかになり、最終的にサラは、「テス」のようにどこかに定着することなく流離いながら夫や息子の家族のために労働し苦勞するが、一方では「フィリピンのピープル・パワー革命」のように自分の意思によって実態を変えようとする力を育てて、「凧」が空を飛ぶように自分の人生を生きることを暗示するのである。このサラの心理的な変化は最後の場面に明らかになる。



図 62 サラの人生を多弁している小道具

最後にサラは空港で夫テディーに次のように言い、イギリスに残ることを決心する。

ここだって帰っても夫がいない感じがする。貴方は私のことを気にしてないから、テディー、もうあなたの面倒を見るのがいやなの、私は人の面倒を見るけど誰が私の面倒を見てくれるの？計画を立てて夢を見るだけじゃだめなの、頑張らないといけないでしょ？辛くても、ここでもう何かをみつけた。前から見つかった。何で気づいてないの？この仕事は大事なの。あなたの妻を辞める。



図 63 テディーに「あなたの妻を辞める」と言い、イギリスに残ること決心するサラ

そして、ロンドンに戻るタクシーが暗いトンネルから光が見えるところに出る時に次のことをこう語る。

私たちはなぜ当てにならないところへ飛び込むのをこわがってるの？暗闇に入ってみなければ先になにが待ってるかわからない。一步踏みださなければどう前に進めるの？モーガンが正解だった。怖がっていて、人生どう戦って行けるの？



図 64 暗いトンネルを抜け通るタクシーと息子をイギリスに呼び起こしたサラの最後の場面

と流れる彼女のナレーションから、彼女の自身が自分の人生を向かって一步踏み出す強い意志が伝わる。そして、母国から息子呼び起こす。

この映画の最後の場面は、ジェンダー秩序から離れるサラを描く。サラはイギリスに残ることを決心するのである。夫を支える「犠牲を払う妻」や「従順で服従的な存在」であった移住女性がホスト国での出会い、経験によってエンパワーメントされ、新しいアイデンティティを構築することで、既存のジェンダー秩序から離脱するのである。そして、既存のジェンダー秩序に揺さぶりをかけていることも明らかになる。サラが母国から自分の息子呼び寄せることが描かれることで、本来の移民国策映画としての意図と離れることになる。つまり、送り出しの移民政策は、海外から送られた送金から成り立つ国内経済効

果を狙っている。すなわち、出稼ぎ移住女性が出稼ぎに出る大きな動機の中の一つがトランス家族への送金により、母国での家族を支えることによってフィリピン経済に影響を与え、結果的にはフィリピン国内の経済を支えることに繋がるが、映画の最後の場面においては、サラが自分の息子をイギリスに呼び起こすことで国内に送る送金は切れることとなる。これは、本来のフィリピン移民政策の意図とは異なることとなる。その意味で、映画の最後の場面は、このような意図を超えていることを明らかにするのである。

### 3. 映画『ケアギバー』の意味生産—受容者（オーディエンス）認識から

筆者は、映画『ケアギバー』が人々に与えた影響について分析を行うために日本移民映画祭でこの映画を見た101人に自由記述形式で行ったアンケート<sup>342</sup>と、フィリピン国内のインターネット映画サイト<sup>343</sup>の18人が書き込んだ映画感想を中心に分析をおこなった。日本移民映画祭でのアンケートには101人中8人が英語で書いた。おそらく日本語を母国語として使っていない人達だと考えられる。またネット上の18人すべては、英語で書いており、内容から判断してフィリピン人が多数を占めると考えられる。残念ながらアンケート書いた人々の個人情報保護の関係で、性別、年齢、職業などについては報告することができないため、純粋に内容だけで分析を行った。

さて、ネット上の18人の内容の分析からは、(事例1)のように映画がフィリピン海外労働者(OFW)についていかに現実的に表現しているのかを語りながら、主人公のサラ役を果たしたシャーロン・クネタに対する感謝の言葉やほめ言葉が多かった。また、(事例2)のように、映画と同一化し自分、または自分の家族の経験と重ねて書いている内容も見られた。さらに、文化の違いについて言及し受入国での文化的違いを映画のなかから読み取ることがフィリピン人にとって重要であることを示している人もいた。

<sup>342</sup> このアンケート調査は、2009年11月7日(土曜日)と8日(日曜日)の二日間行われた第1回目の日本移民映画祭で上映された映画を見た観客から観た映画について感想を自由記述形式で書いてもらったものである。本論文では、その中で映画『ケアギバー』観た観客の感想だけを取り出した考察を行った。

アンケート調査の質問は次の通りである

<質問内容>

1. ご覧になった映画を描いてください。
2. 映画の内容について感想を教えてください。
3. 今回の移民映画祭で良かった点と改善すべき点を教えてください。
4. 次回の移民映画祭(日時場所未定)で観たい映画があれば教えてください。

<sup>343</sup> 映画サイト FANDAGO [http://www.fandago.com/caregiver\\_116993/readuserreviews](http://www.fandago.com/caregiver_116993/readuserreviews)

(事例 1)

映画のものごころは、事実です。これらは、海外の労働者に本当に起こっています。寂しさ、つらさ、など多くの感覚を感じます。私は、メッセージを配達する時に俳優がよい仕事をしたと思います。

(事例 2)

フィリピン人ではありませんが、私はタガログ人の大部分を理解していました。私は本当に映画を楽しんでいました。Miss Cuneta は素晴らしい女優です。そして、この映画は、彼女が女優として非常に高い能力を持っていると感じさせました。私が今の私の妻に出会ったとき、彼女は、フィリピンに彼女の子供を置き去りにした OFW でした。そして、妻は映画の物語が自分の経験に似ていると言いました。シャロン（主人公サラ）は、実際に映画の中でリリの尻部を拭き取る場面では、実際にそれをするのにうんざりしていました！また、フィリピン人が映画に示されていた文化の相違を見て、わかるのも、非常に重要です。外国人があなたの文化を尊重すると予想するように、それらを本当であり、尊敬しなければなりません。

一方、日本で開催された移民映画祭でのアンケートの内容では、以下の三つの内容に分析できた。その一つが、映画を見て移住・移民に関する現実を知ることができる（事例 3 を参照）。二つ目は、映画の中での様々の問題が自分自身の問題として考えさせられたことである（事例 4 を参照）。三つ目が、自分自身の問題として考えさせられたことで自分自身に変化が見られたことである（事例 5 を参照）。

(事例 3)

移動することによる登場人物の気持ちや他の人達との関わりなどが細かく描写されていて感動しました。

世界的な貧困の増加に伴う移民の人間性に対する社会的な支配権力のあ

り方を問うている問題点をアピールした内容と思う。経済力のない国からの出稼ぎ労働者の権利擁護を人間性、愛、社会的な問題の面からとらえたのだと思う。

(事例4)

日本に来ている移民の方々にも、まったく同じ様な悪い状況の中で頑張っている人たちの事が頭に浮かんできました。いつも自分にとってこのような状況を改善するために何ができるのか？考え込んでしまいます。

介護士の仕事の大切さがよくわかった。日本もこれからはこの仕事が重要になってくる。介護士の仕事を通して、「生きる」意味の大切さがよくわかる。素晴らしかった。

こんなによい映画でびっくりしました。女性、移民、労働、介護、現代の様々な問題をとっても考えさせられました。主人公のサラがロンドンではなく日本に来ていたら、なども想像してしまいました。

介護という今必要な職業を通して自分の人生を見直すというとても意味のある映画であったと思う。人とのかかわり方、自分の人生の見つめ方、人がいかにお互い助けあっているかを考えさせるような映画であった。また、移民、別の国で働くということも考えさせられた。

(事例5)

苦労や努力をリアルに描き出していて、今までは論文や本などで学んでいたことが現実ではどのようにになっているのかを知った。今までは“知識”としてしかなかった移民に関して、“感情”を持てた。すごく泣きました。

ケアギバー介護士、最後の展開は意外でした。話の展開が論理的で分かりやすかったです。今まで自分の知らなかった世界が見え、見聞がすこ

し広まりました。移民問題は複雑で一筋縄ではいかない問題であると思います。

経済危機のあおりを受け、福祉や介護の現場は手不足の状況、海外でも日本でも外国だからではなく、人間としての“きずな”“つながり”を大切にしていきたいものです。

ここまで抽出した感想から、映画を見る立場によって、それぞれ異なる感想が述べられていることがわかるつまり、フィリピンネット映画サイトから抽出した感想では、よりケアギバーという映画に親密感を感じていることがわかる。まるで自分たちの物語のように、映画と同一化したコメントが多く、映画のリアリティ性が強調されている。一方移民映画祭のアンケート調査からは、より客観的に移民や海外労働者について考えながらも、自分自身の問題として捉える傾向が強い。特に重要な点は、映画を見た後に、感想を述べている本人たちに、何らかの変化が見られることにある。例えば、日本国内にいる移住者に対する見方が変わったり、自分たちの家族に対する思いが変わったり、また、これから自分が何をすべきかなどを考えはじめている。例えば、

これから自分は何をするか、何ができるか。日本でも、世界でも、隣人でも“分かち合える”絆をもてるようになりたいです。

というコメントのように、映画を通じて他者との関わりあいについて考えはじめているケースが見られる。さらに、映画のなかでの主人公サラの人生に共感したり、彼女の強さを感じる人もいた。

一方、映画は、異なった社会の間のコミュニケーションとして強力な手段でもある<sup>344</sup>。つまり映画は、芸術のジャンルを超え、新しいコミュニケーションの手段でありながら新しい社会の言語として、情報員の役割を果たす、とても重要な媒体である。したがって時に映画は、政治的な手段として利用される。岩淵は、グローバル化の中で資本、メディアイメージの越境流動が激しくなるなか、国を越える関係性、ネットワーク、そして想像力がより日常的になる一方で、国という枠組みへの帰属と愛着が市場との協働によって、越

<sup>344</sup> 浅沼圭司・岡田晋・佐藤忠男他編『新映画事典』（美術出版社、1980年）53頁。

境対話の可能性を国益という狭い視座のなかで閉じ込めてしまう、と指摘する<sup>345</sup>。ケアギバー（介護士）を、フィリピンの政治的・経済的な国益増進のために「国際商品」化を目指しているならば、フィリピン人女性の表象や国家イメージの戦略として映画『ケアギバー』はその役割を果たした、といえよう。なぜならば、世界各地で映画『ケアギバー』を見た観客は、フィリピンの出稼ぎ移住労働者に対して理解を深め、主人公のサラのような「ケア上手なフィリピン人女性」の介護士が自分の国に来てほしいと考えているからだ。

このように、映画が作品として生産されることで、観客は作品を観る行為を過程で、登場人物と自己を同一化し、様々な感情などをそこに投影するところで映画を消費し、再生産する。その過程で、オーディエンスとの間で新たなコンタクト・ゾーンを作り出していくのである。コンタクト・ゾーンは、フィリピン各地での上映運動において、日本の移民映画祭において、出現し、例えば、映画『ケアギバー』を観た観客（オーディエンス）が、映画を見て移住・移民に関する現実を知ることができたとか、映画の中での様々の問題が自分自身の問題として考えるようになるなど、オーディエンスの認識を変えるのである。つまり、オーディエンス（受容者）として映画の中で表れる物事をそのまま受け入れるばかりではなく、映画を自分なりに消化する能力を持っている。つまり、我々の内面では、映画と相互に作用しあっていることになる。また、オーディエンスによるこのような再生産、もしくは現実の表象ではなく映画の「表象」ともいえる働きが行われる時こそ、人間ではない映画「表象」自体が、「(ものごと) 変える能力(transformative capacity)」を持った「エイジェント」として、「エイジェンジー」を行う瞬間なのである。

## 第6節 小結

女性の国際移動は、経済的動機に支えられている場合が多い。特にフィリピンの場合は、移住労働が国の政策によることは知られている。このように、女性の移動を促がす要因としては、マクロの構造的要因の重要性については否定できない。しかし、それだけで、移住女性の国際移動が十分に説明できたとは言えない。なぜなら、私が7年前に出会った20代後半の彼女には、韓国で英語講師になりたいというはっきりした夢があった。その夢は

---

<sup>345</sup> 岩淵功一『文化の対話力—ソフト・パワーとナショナリズムを越えて』(日本経済新聞出版社、2007年) 247頁。

彼女が移住を決心する最も大きな理由である。またサラがそうであったように、個人は必ずしも大局的な状況を認識した上で、合理的な判断に基づいて行動を選択・決定するわけではないからだ。むしろ出稼ぎに出る人の6割以上が女性であるフィリピンにおいては、経済的な動機から、または抑圧的な状況から逃れるために出稼ぎに出る人が多い一方で、自分のスキルアップのために移動する人もいる<sup>346</sup>。従って、多くの再生産労働移民を送り出すフィリピン社会においては、出稼ぎに出ることが、女性の正常なライフ・コースの一部として位置付けられるかもしれない。このように社会の中で位置付けられるにもかかわらず、移住女性、特にフィリピン人女性を取り巻く社会的状況は長年にわたり、ネガティブなステレオタイプのイメージが、継続的に生産され、再生産された。

文化的傾向の反映としての映画における特定のイメージを分析することは、新しいものではない。長年に渡って、文化的加工品や文化の鏡として、観客の希望、夢、恐れ、価値、期待や映画制作者の社会的環境として研究されてきた<sup>347</sup>。映画の中でイメージは、現実のものではない。それよりもこのイメージは、文化的な信条に応じて現れるものである<sup>348</sup>。筆者は、グローバリゼーションの過程において女性の労働がどのように編成され、その中でどのような新しいアイデンティティが生まれるのかを、女性の側のエイジェンシーに注意を払いながら、ジェンダー格差と経済的格差といったグローバルな女性の移動について、イメージ分析を通じて考察を行ってきた。分析方法としては、視覚文化の中で「移住女性」が登場する、特にテレビドラマや映画を対象とし、「移住女性」がテキストの中でどのような役割をはたして、イメージ化されるのか。それが観客にどのように受け止められたのか、その表象と言説を考察することで、「移住女性」に求めてきた役割やまなざしを明らかにすることを試みた。本稿では、その研究の一環として、フィリピン映画『ケアギバー』を、テキスト・コンテクスト的に考察をおこなった。その結果として、次のことが言えよう。

映画『ケアギバー』は、労働力の送出国の状況を詳細に見せながら、主人公サラの姿を通じて、海外出稼ぎ移住女性の経験と自己発見のもとに「主体性」を構築していく一人の移住女性像を描いた。例えば彼女が、自分の意志ではなく、家父長制の下で夫の計画によ

<sup>346</sup> 2010年2月13日、EPAと外国人看護師・介護福祉士候補—背景・実態・課題—をテーマとするシンポジウムでの「フィリピンの介護教育と看護・介護学生の日本への就労意識調査」報告書により。

<sup>347</sup> 『カリガリからヒトラへ』(1947年)においてジークフリート・クラカウアーは、映画を通じてワイマール期のドイツを検証した。『我々は金持ち』(1971)において、アンドリュウ・バーグマンは、同様の方法で、大恐慌期のアメリカを検証した。  
キャシー・マーロック・ジャクソン著、牛渡淳訳『アメリカ映画における子どもイメージ』(東信堂、2002年)7-10頁。

<sup>348</sup> 同書、10頁。

って移住を決心したにせよ、結果的に移住先で定着するかどうかを自分の意志で決定している。多くのフィリピン人女性の出稼ぎ移住においては、移住するかどうかの決定には、程度の差はあるにせよ、移住者の主体的な意志が関わっている。また受入国への移動・定着の過程において、移住女性は概ね不利な状況に置かれているが、多くの移住女性はただ単にそれに耐える存在ではなく、何らかのアクションを起こしている。

映画の中でサラは、フィリピンからやってきた「尊厳、希望、喜びなど、人が人生で失ったものを与える存在」として描写される。これらは、従来の移住女性をテーマにした映画やドラマにはない、新たな移住女性に対する肯定的なイメージ表現ではないだろうか。しかしながらその一方では、フィリピン人女性がいかにケアギバー（介護士）という仕事に適しているのかが強調されている。それは、主人公サラの雇用主であるモーガン氏とその息子ディビットの台詞から、介護士の職業がフィリピン人女性には「天職」であり「ケア上手なフィリピン人」としてイメージ化される。これはかつて、「伝統」という言葉が「アジア花嫁」を語る上で頻繁に使われた<sup>349</sup>ことを想起させる。

さらにこの部分においては、アロヨ政府が年間 OFWs の 100 万人輸出を目標としていることから、ある意味その数値目標の達成を支援するために制作されたようにも感じられる。これはこの映画が内包する政治性といえよう。しかし、映画と観客の関係における考察では、今日、数多くの国が映画を制作され、交換されることで、各々異なる歴史と伝統を持つ社会が国境を越えた文化交流をはたしていることがわかった。特に映画のように多数の観客に同時に伝えられる媒体であればあるほど、政治的に文化的に、社会へと与える影響力が大きい。その意味で映画『ケアギバー』が、観客に与えた影響力は強い。観客は、映画を見ることで、この映画で提示される問題を自分自身の問題として引き受けたり、教訓を得たり、それに対して何らかのアクションを起こそうとする。ひいては移民女性に対するイメージそのものが変容している。これは、映画がソフト・パワー<sup>350</sup>として生まれ変わる瞬間である。映画というメディアを通じた国のイメージや、出稼ぎフィリピン人のイメージ向上が、政治的・経済的に重要であることが広く認識されて、実践されたのである。

<sup>349</sup> 鈴木伸枝、前掲書、(1998年) 97-110頁。

<sup>350</sup> ソフト・パワーとは、自国が望む結果を他国も望むようにする力であり、他国を無理やり従わせるのではなく、見方につける力である。  
ジョセフ・S・ナイ著、山岡洋一訳『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』（日本経済新聞社、2006年）26頁。

## 結論

本論文は、結婚やケアという生の再生産領域の商品化・グローバル化という重要な局面を対象に、移住女性を「エイジェント」として捉えると同時に、移住女性の社会的「意味」を構築していく重要な要素としての「表象」を分析し、表象もまた、移住女性を表象＝representation＝代表しつつオーディエンスとの「コンタクト・ゾーン」を形成し、意味作用の実践を行っていく過程を考察した。

研究対象としては、受入国の韓国で制作されたテレビドラマ『黄金花嫁』(2007)、ドキュメンタリー映画『She is』(2007)と、送出国のフィリピンで制作された劇場映画『ケアギバー』(2008)の三つの映像作品を考察し、受け入れ社会、送り出し社会双方のジェンダー秩序に関わりながら移住女性自身の移住のプロセスの中で、移住女性の「意味」がどのように「構築」されているかを、移住女性「表象」の「エンコーディング」「デコーディング」分析によって明らかにし、移住女性と受入国(の人びと)とが会う「コンタクト・ゾーン(接触領域)」の場を考察した。

本論文では、グローバル化の中で国境を越えて移動していく移住女性を、社会的な「エイジェント(行為体)」として考察した。それは、加速度的に進行するトランスナショナルな労働力の移動、とくに「移民の女性化」「再生産労働の国際分業」「グローバルなケアの連鎖」の状況の中で、彼女たちの意識と行動は、経済的・文化的・社会的に幾重にも条件づけられているということ、しかしそれと同時に、彼女たちが単に押し流されていく「客体」ではなく、その都度の状況の中で希望や勇気や覚悟をもって決断し、行動する「主体」であること、トランスナショナルなアイデンティティが形成されつつあること、そしてそのような彼女たちのあり方が他者や事態を「変える力(transformative capacity)」をもっていることに注目しようとしたからである。また、彼女たちがミクロなレベルで行う「選択」または「行動」によって、遠く離れた送出国・受入国それぞれの社会での家族形態、文化、ジェンダー秩序が変化しつつある状況を考察するためにも、彼女たちの「エイジェンシー(行為作用)」に注目する視点が重要であると考えた。本論文での考察の結果、今日、各国社会のジェンダー秩序は、単独では存在しえないことも具体的に明らかになった。このような趣旨の基で、本研究は行われ次のような成果を得たのである。

グローバリゼーションの進行に伴う人のトランスナショナルな移動は、現代の一つの特徴として指摘することができるが、とりわけ女性による国際移動は量的に増加している。これ

はすなわち、「移民の女性化」とも言い表される状況である。しかし、なぜ、国際的に移動する女性が増え続けているのだろうか。そのことには、グローバルな資本や情報の流通を背景とした人の移動が行われるプロセスの中に、外国間送金における経済的な効果が見込まれて、国家の移民政策やあるいは斡旋業社の介入が存在し、それらが絡み合う中で、移住女性を巡るグローバルなマーケットが既に形成されていることが大きく関与している。このような状況の中で、韓国社会において、結婚を通じて移住する国際結婚移住女性がさらに増加しているといえる。計らずも韓国社会で少数者の位置に置かれている開発途上国からの国際結婚移住女性は、韓国社会で「多文化家族」を形成し、既存のジェンダー秩序を変化させつつある。しかし、それにもかかわらず、韓国メディアの中での移住女性表象は彼女たちを既存のジェンダー秩序に再度「固定化」し、存在として「他者化」しているといえるだろう。

本研究は、女性が国境を越え「移住」するプロセスに注目し、同時代の女性移住者を単に経済的な状況に巻き込まれる客体として見るのではなく、現実世界の状況の下で主体として道を切り拓く、等身大の移住女性の有り方に注目することであった。しかしながら、各国社会のジェンダー秩序は単独で存在しているわけではない。個々の移住女性の移住の「選択」または「合意」は、さらに大きな力となって社会的レベルで家族形態、文化、ジェンダー秩序を変化させつつあるともいえる。また、グローバルな移動の最先端には「パイオニア」として移動している女性たちが存在している。彼女たちの姿が示すように移住女性たちは、受入国と送出国の状況や条件に関わって労働者から配偶者、母、市民という社会的位置を変化させ、その変化によってアイデンティティをも変化させている。

まず、本研究の考察から得た成果概要を各章に沿って述べる。

第1部、第1章の「韓国社会へ移住する移住者の状況」、特に国際結婚増加の背景の考察から次のようなことが言えよう。かつては移住女性の送出国であった韓国が、1997年の通貨危機以降、韓国政府主導の下で農漁村における嫁不足の解決策として、開発途上国から「嫁」として女性たちを「輸入」し始めた。そのプロセスのなかに国際結婚仲介業者が介入し国際結婚の「商品化」が行われてきたと言える。近年この問題が大きくメディアに現れ始めたことを背景に、国際結婚移住女性は貧しい国からお金で買われた「可哀相な存在」として表象されると同時に、国際結婚移住女性を韓国の故郷を「代わりに」守っている「英雄的な存在」としても提示された。韓国メディアは、脚色されたイメージである郷愁的な韓国的文化を彼女たちの表象に加えることで「孝婦」または「嫁」というイメージを付与

することで移住女性を固定化し、他者化することで、韓国社会の一部として「同化」しなければならないという社会的な認識を拡大、再生産しているのである。

第2章では、テレビドラマ『黄金花嫁』を通じて、韓国社会の中で国際結婚移住女性の存在が成り立たせる「多文化家族」形成が持つ多面的な意味について考察した。また、近隣途上国の女性の身体を「輸入」することで維持される家族や韓国社会が、結婚移住女性に対して要求するものについての検討を行った。その結果ここでは、移住女性の表象には新たに構成された新たな移住女性イメージが付与され、従来のメディアには存在しない積極的な移住女性像の「構築」が明らかになった。つまり、このドラマの中での「黄金花嫁」は、現実でも「黄金 (Gold)」花嫁として価値が付与され、「意味作用の実践」として現れるものであった。さらにここで構成論的接近により、移住女性がホスト国の女性と二項対立構図に置かれることで、移住女性は、ホスト国の女性に代わり、韓国社会の中で求められている慣習化された女性像、「従順な妻」や「良い嫁」、「女性」に対する「あるべき」姿といった、家父長的なジェンダー役割を担うものとして強調された。またホスト国の女性との二項対立構図に置かれることでむしろホスト国の女性との「差異」を示し、移住女性を「他者化」していることが明らかになった。また、構成論的な移住女性表象は、逆にホスト国の女性の不在へのバッシングとして作用しており家父長制維持を希望するホスト社会の意図がここで明らかになった。つまり、ドラマの中で「黄金花嫁」が最後の場面で男の子を出産し、二人目の子供を妊娠することで、まさに移住女性の身体を、生殖しうる「国際商品」化し「輸入」した本来のホスト社会の意図が明らかになった。

第3章では、女性の国際移動への参加、特に韓国社会の中で、移住女性たちが経済的に押し流された「可哀相な被害者」としてではなく、いかに、エイジェントとして成立しうるのかということ、独立ドキュメンタリー映画『She is』に登場する5人の移住女性たちと韓国人女性監督との関係を通じて考察を行った。まず、表象分析の結果としては、監督である韓国人女性が移住女性5人と出会う場、つまり、映画自体を「コンタクト・ゾーン」として解釈することで、エイジェントとしての移住女性が明らかになった。これは、映画の中でロサと監督のインタビューの場面からは、移住女性であるロサが離婚したにもかかわらず子供を生むことを自ら決断するが、それは国際市場の中での生殖が目的とされた「国際商品」から自分の身体を自分自身が取り戻す行為である。また、彼女の存在はホスト国の女性である監督にも影響を与え、監督はロサと出会うことで自分も子供を生むことを決心する。この場面からは、移住女性のあり方が他者や事態を「変える力 (transformative capacity)」

をもっているエイジェントとしての移住女性を明らかにした。また、移住女性たちの自己アイデンティティは、移住の過程を通じて形成される公的・私的な空間と役割によって変化することが明らかになる。移住女性たちが、移住の定着過程で、ネットワークを構成し、その「パイオニア」として新しく移住してくる後輩たちとホスト社会の間に「媒介人」としての役割を果たす姿が表れることから彼女たちが「エイジェント」として立ち現れ、そこでエイジェントとしての移住女性の行為が相互的に作用を及ぼすことでは「エイジェンシー」が表わされた。一方、移住女性たちは、移住によって母国と関係を切り去るのではなく、その連帯は継続的に維持される。移住女性たちの新しいアイデンティティは、さらに、地域センターのエンパワーメントとネットワークを通じて、市民主体としての土台を形成し、「社会的支持網」を構築しているのである。また第3章で行った、エスニック・メディアの考察からは、現実の社会のなかでエスニック・メディアを管理運営している移住女性たちの事例から、移住女性たちは自らエンパワーメントし、自立性をより拡大することで「エイジェント」、「バイ・カルチャー」、「文化資源の二重利用者」として表れる。

第2部、「送出国フィリピンにおける移住女性とその表象」、第1章の考察からは、送出国の移民状況は、受入国の状況とは異なる状況が現れた。特に、開発途上国が採用した新自由主義は、女性の国際移動に直接に関連していることが、より鮮明に明らかになった。フィリピンでは、出稼ぎ移住の歴史が長く、娘が親や兄弟、妻が家族のために、あるいは自分のためなど多様な理由から、ライフスタイルの一つの選択として、移住女性たちの海外への出稼ぎがある様子も見られた。しかし多くのフィリピン人女性による海外出稼ぎ労働は、受入国の職業的ヒエラルキーの低下層にあり、ホスト国の女性から敬遠される職種である家政婦や看護師、介護士、エンターティナーなどの再生産労働力の職業に集中しているのが現状である。またこれらの仕事はホスト社会において、「従順さ」、「愛情深さ」と結びつき、「女性向きの」仕事とみなされ、特に移住女性に「適している」とされていた。また海外出稼ぎ労働は、国内の家族変容や頭脳輸出、矛盾した階級移動といった様々な現状が現われていた。特に出稼ぎ海外移住により「トランスナショナルな家族」と呼ばれる家族形態の変容が現れている

第2章の映像作品『ケアギバー』の考察からは、この映画が労働力の送出国の状況をステレオタイプに見せながらも、主人公の姿を通じて、海外出稼ぎ移住女性の経験と自己発見のもとで、新しいアイデンティティを形成していく一人の移住女性像を明らかにした。つまり「従順で服従的」だった妻が、介護士として仕事しながら、自己発見し、エンパワ

一メントされることで、「主体的な存在」として描写される。映画の中で移住女性は、フィリピンからやってきた「尊厳、希望、喜びなど、人が人生で失ったものを与える存在」として描写される。しかし、これは、フィリピン女性は「ケア上手なフィリピン人女性」としての「意味を生産」し、ケアギバーが「国際商品」として生産されることで「意味作用の実践」を行っていた。しかし、映画の最後の場面で、ジェンダー秩序から離れるサラを描くことで、かつて夫を支える「犠牲を払う妻」や「従順で服従的な存在」であった移住女性がホスト国での新たな出会い、経験によってエンパワーメントされ、新しいアイデンティティを獲得することで、既存のジェンダー秩序から離脱する姿が表されたのである。それは、既存のジェンダー秩序に揺さぶりをかけたものだといえよう。また、サラが母国から自分の息子と呼び寄せることが描かれることで、本来の移民国策映画としての意図から離れることになる。つまり、送出国の移民政策は、海外から送られた送金から成り立つ国内経済効果を狙っている。すなわち、出稼ぎ移住女性が出稼ぎに出る大きな動機の一つがトランス家族への送金によって、母国での家族を支え、さらにはフィリピン経済に影響を与え結果的にはフィリピン国内の経済を支えることに繋がるが、この映画の最後の場面で、サラが自分の息子をイギリスに呼ぶことは国内への送金が切れることを意味する。これは、本来のフィリピン移民政策の意図とは異なることとなる。その意味で、映画の最後の場面は、主体的な個人が国家的意図を超えていくことを明らかにするのである。

以上の考察結果から、本論文を通じて次の二つの成果が得られた。その一つ目は、国際移動の最先端で行われる女性による移動は、単なる移動を意味するのではないということだ。そこには、商品やサービスを生産する生産労働と区別された生命の再生産活動が市場化し、資本蓄積が新しい局面を迎えていることと、トランスナショナルな主体としての移住女性の行為は、新たな家族形態を形成し、受入国においては移住女性による「多文化家族」の形成が行われていることが指摘できる。送出国においては、国内女性が海外に移住することで「トランスナショナルな家族」が形成されること、その親密な関係の中で、ジェンダー秩序が揺さぶられていることが指摘される。また、本研究から移住のプロセスの中で流動的な存在であることが明らかになった。つまり、女性が主体的に移住を決心し、行為したとしても犠牲者になり得る。言い換えれば、女性の戦略としての移住がいつも積極的な結果をもたらすのではない。グローバルな経済構造の中で、女性移住は消費され、犠牲者にならない限りがあることも事実である。しかし、移住女性の位置自体が、労働者と

配偶者、そして、犠牲者と主体の間に流動的に存在する。移住女性はいつも主体として存在することでもなく、犠牲者として存在することでもない。犠牲者であった移住女性は主体になるため抵抗を試み、自分自身の将来や夢に向かって行為し、努力するエイジェントとしての移住女性が存在するのである。

二つ目は、三つの映像作品の表象分析から、「エイジェント」としての移住女性「表象」分析ができた点である。本論文の大きな特徴は、上記のような移住女性の問題を、移住女性の「意味」を社会的に「構築」していく「表象」分析によってこそ、明らかにしようとしている点である。

まず、映像作品の考察から明らかになったのは、移住女性「表象」の背景に存在するネオリベラリズムと伝統的ジェンダー秩序の作用であった。例えば、受入国で作られたテレビドラマ『黄金花嫁』では、従来、貧しい国からお金のために嫁いできた可哀そうな女性、というネガティブなイメージが強かった移住花嫁に、端的に「黄金」という言葉を付け加えてタイトルとし、けなげで家族思いの移住花嫁が韓国の家族を幸せにする物語を描くことによって、移住女性の表象に「国際結婚移住女性＝黄金(Gold)花嫁」という新しい意味をエンコードした。こうして、受け入れ社会が求めている「国際結婚移住女性＝価値のある移住女性」という新しい「表象」が「構築」され、連続ドラマとして放送されて人気を博し、その後も再放送された。そしてこの表象は、実際の「意味作用の実践(signifying practice)」においても、新しい意味を生み出していることが、オーディエンスの感想に関する考察から明らかになった。つまり、オーディエンスの認識の考察を通じて、ドラマ『黄金花嫁』は、従来の国際結婚移住者に関する社会的な認識がネガティブな認識からポジティブな認識に変わり、韓国社会に受け入れられる移住女性表象を作り出したという面では重要な役割を果たしたことが明らかになった。その部分からは、ドラマ『黄金花嫁』の意味作用実践によって、ホスト国のオーディエンスと出会うことで、コンタクト・ゾーンを生成し、「表象」自体がエイジェントとなっていることが明らかになった。

他方、『黄金花嫁』は、ベトナムからの移住女性が懸命に韓国の家族にとけこもうとする姿に、けなげで自己犠牲的な良妻賢母イメージを与え、その結果としての女性と家族の幸福を描き、自立と社会的成功を求める韓国の現代女性に自己愛の強いネガティブなイメージを与えることによって、揺らぎつつある伝統的ジェンダー秩序を再構築し、強化しようとする傾向が見られた。これは、移住女性たちが新しい社会での「生」に向き合って新たな自己アイデンティティが確立し、多文化社会を描き出すことより、むしろ、再生産労働

領域でいかに素晴らしい「妻」、「嫁」、「母」になるのかが強調され、移住女性たちを韓国の家父長制社会のなかでの「固定化」や「他者化」を再構築している。

他方、同時代に制作されたドキュメンタリー映画『She is』の分析からは、移住女性が自分自身で判断し決断する場面や、移住女性との出会いがホスト国の女性をも変えていく場面が描かれ、ギデンズのいう「物事を変える能力」を有するエイジェントとしての移住女性の表象が見られた。映画の中で移住女性たちは、外的な影響に決定される受動的な存在ではない、自ら自己アイデンティティ形成するエイジェントとして行為する。更にそれは、監督が、移住女性たちに出会うことで新たなコンタクト・ゾーンを作り出すことにつながった。ホスト国の女性である監督自身が、そこでエンパワーメントされることによって変化が見られたのである。監督自身が子供を生む決心をすることで、労働の場で疎外されていた自分自身の性的身体を取り戻すことになったのである。また、その部分を作品の中で明らかにし、監督自身、自らが映画の登場人物になることでメッセージを作り出したのである。

受け入れ社会で制作されたこの二つの作品のうち『黄金花嫁』は、テレビドラマという媒体を使って政策的に韓国社会に受け入れられやすい移住女性表象を作り出している。一方、ドキュメンタリー映画『She is』では、移住女性をありのままの姿で映し出そうとする監督の意図が見られた。ジュ監督は、この映画で、女優ではなく、現実の移住女性の姿を見せている。監督は2年間にわたって彼女たちとの人間関係を作り、彼女たちに寄り添いながら作品を作っている。彼女たちにインタビューをすることによって、彼女たちの声と姿を伝える。さらに、この作品は、移住女性の姿を映し出すだけでなく、撮る側と撮られる側、ホスト側と移住してきた側との間に相互的に形成されていくコンタクト・ゾーンそのものを、現在進行形で映しだしていく。ただ、この映画については、テレビドラマ『黄金花嫁』と物語映画『ケアギバー』のように、作品を見た観客の感想を分析することが出来なかったために他の二作品と同様の形で「意味作用の実践」の分析は行い得なかった。しかし、監督自身に行ったインタビューから、観客の反応を知ることができた。この映画の上映は映画館ではなく、地域や団体での自主上映という形で行われているが、現在まで韓国各地で上映運動が続けられ大きな反響を得ている。その際に、移住女性の観客は、映画を見て映画の中の移住女性と自分を同一視することで涙を流したり、上映後も自分たちの経験したことを話し合い共有しあうことでさらなる連帯を作り出している。他方、韓国人の観客の反応は、移住女性を他者ではなく私たちと同じようにこの国で生きている主体

として見せてくれていることに感謝する、という感想がよく聞かれる。即ち、映画を上映する場そのものがコンタクト・ゾーンとなっており、移住女性の主体性を等身大で伝えていく意味作用の実践を行っていると言える。

一方、送出国で制作された映画『ケアギバー』では、韓国テレビドラマ『黄金花嫁』と同様に移住女性「表象」の背景に存在する資本主義論理と家父長制主義の作用が見られた。つまり、「フィリピン人女性＝ケア上手なフィリピン人女性」という図式を創造し、フィリピン人女性に新たな価値を付与することでケアギバーの「国際商品」化の「意味生産」戦略が見られた。しかしながら一方では、かつて夫を支える「犠牲を払う妻」や「従順で服従的な存在」として表象された移住女性がホスト国での出会い、経験によってエンパワーメントされ、新しいアイデンティティを構築することで、既存のジェンダー秩序から離脱することになった。そして、既存のジェンダー秩序と送金システムに揺さぶりをかけていることも明らかになった。また、映画『ケアギバー』はフィリピン国内のみではなく、海外で上映されることで、グローバルなオーディエンスと出会い新しいコンタクト・ゾーンを作り出した。表象もまた、移住女性を表象＝representation＝代表しつつオーディエンスとのコンタクト・ゾーンを形成し、意味作用の実践を行っているのである。

それは、まさに、人間ではない映画「表象」が、「(ものごとを変える) 変成力(transformative capacity)」を持った「エイジェント」として、エイジェンジーを行う瞬間である。

ギデンズは、「すべてのエイジェントが人間であるとは限らない」と述べていた。

人間であることは、エイジェントであるということであり — 全てのエイジェントが人間であるとは限らないが (下線 引用者) — エイジェントであることはパワーを持つことである。このきわめて一般化された意味での「パワー」は、「(ものごとを変える) 変成力(transformative capacity)」、つまり、所与の一連の出来事に、何らかの形でそれを変えるために介入できる能力 (capability) を意味している<sup>351</sup>。

つまり、メディアにおける、移住女性表象は、メディア媒体によって商品として作り出され、それを我々は消費することで、新たなメッセージを作り出している。これは、表象がメッセージ生産の過程の「意味作用の実践 (signifying practice)」を行うことで映像と現実

---

<sup>351</sup> Anthony Giddens, 1985, *The nation-state and violence: A contemporary Critique of Historical Materialism*, Cambridge: Polity Press, p.7.

的な社会とを媒介する場になるのである。その際、「表象 (Representation)」自体が、「エイジェント」として「エイジェンシー」を行う。

そして、本論文冒頭の「研究目的」において考察したように、メアリー・ルイズ・プラットは、植民地の最先端に対して従来使われていた拡張主義的な語「フロンティア」に変えて、「コンタクト・ゾーン」という概念を用いることによって「Transculturation(文化の移入)」の状況を考察したが、その際、「コンタクト (接触)」ということばを使うことの意味について、以下のように重要な視点を提示していた。

「コンタクト (接触)」という視点は、いかに主体が相互の関係の中で、それによって構築されているのかということ強調している。それは、植民者と被植民者、旅行者と旅行の対象とされる者との間の関係を、分断やアパルトヘイト (隔離) という用語ではなく、共存在や相互行為、理解と実践の連結、といった用語において取り扱うのだ。ただ、それは、多くの場合、根源的に非対称の権力関係のなかでなされているのだが。<sup>352</sup>

同様に、移住女性と受入国の人びとの間においても、社会構造的には「非対称な権力関係」においてではあるが、その出会いを「コンタクト・ゾーン」と捉えることで、「いかに主体が相互の関係の中で、それによって構築されているのかということ」を認識し、ここで関係を「共存在や相互行為、理解と実践の連結、といった用語において取り扱う」ことが可能であり、そのことがまさに必要であろう。その「コンタクト・ゾーン」を実践しようとする人びとや映像作品、受容者を、本論文は取り扱った。そして本論文もまた、実際に出会った移住女性、表象として出会った移住女性とのコンタクト・ゾーンだと言い得る。さらには、韓国出身の筆者にとって、日本において日本語で書き進めてきた本論文は、韓国と日本とのコンタクト・ゾーンでもある。そして、本研究は、筆者自身にとって、グローバル化の中での移動と接触に身を置き、その中で主体を形成していくエイジェントとしての実践であった。

ギデンズは、個人の自己アイデンティティの形成とグローバルな場との関係を、次のように述べている。

---

<sup>352</sup> Mary Louise Pratt, 1992, *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*, N.Y: Routledge, p.7.

自己は外的な影響に決定される受動的な存在ではない。個人は、自らの自己アイデンティティの形成を通じて、その行為の文脈がいかに関係的であろうと、結果的にはグローバルな社会的影響の一部をなし、それを直接に推し進めるのである<sup>353</sup>。

筆者は、グローバル化の中に身を置くエイジェントとしての研究主体を、本論文において形成してきた、と考える。この研究主体をもって、今後も研究をすすめていきたい。

コンタクト・ゾーンとしての本拙論を読者に委ね、さらにコンタクトが展開していくことを願って、本論考を終える。

---

<sup>353</sup> Anthony Giddens, 1991, *Modernity and Self-Identity*, Stanford: Stanford University Press, p.2.

参考資料 1.

表 1 韓国における国際結婚増減率 1993 年—2009 年

韓国における国際結婚増減率 1993 年—2009 年							単位：名、%	
年度	総結婚数	国際結婚数	比率/%	外国人妻		外国人夫		
				婚姻数	比率	婚姻数	比率	
1993	402,593	6,545	1.6	3,109	47.5	3,436	52.5	
1994	393,121	6,616	1.7	3,072	46.4	3,544	53.6	
1995	398,484	13,494	3.4	10,365	76.8	3,129	23.2	
1996	434,911	15,946	3.7	12,647	79.3	3,229	20.2	
1997	388,591	12,448	3.2	9,266	74.4	3,182	25.6	
1998	375,616	12,188	3.2	8,054	66.1	4,134	33.9	
1999	362,673	10,570	2.9	5,775	54.6	4,795	45.4	
2000	332,090	11,605	3.5	6,945	59.8	4,660	40.2	
2001	318,407	14,523	4.6	9,684	66.7	4,839	33.3	
2002	304,877	15,202	5.0	10,698	70.4	4,504	29.6	
2003	302,503	24,776	8.2	18,751	75.7	6,025	24.3	
2004	308,598	34,640	11.2	25,105	72.5	9,535	27.5	
2005	314,304	42,356	13.5	30,719	72.5	11,637	27.5	
2006	330,634	38,759	11.7	29,665	76.5	9,094	23.5	
2007	343,559	37,560	10.9	28,580	76.1	8,980	23.9	
2008	327,715	36,204	11.0	28,163	77.8	8,041	22.2	
2009	309,759	33,300	10.8	25,142	75.5	8,158	24.5	

資料出所：韓国統計庁人口動態調査 <http://kosis.kr>

表 2

**Deployment of Caregivers by Selected Destinations (New Hires) 2003-2007**

Destination	2003	2004	2005	2006	2007
Taiwan	14,716	13,928	11,604	8,410	6,346
Israel	1,737	3,217	2,535	2,512	2,993
Canada	1,811	2,527	753	1,992	4,170
United Kingdom	481	656	732	1,214	521
Kuwait	3	2	47	74	170
Spain	2	7	1	78	49
USA	1	2	9	33	9
Cyprus	1	3	6	42	54
United Arab Emirates	-	2	26	26	6
Saudi Arabia	-	2	413	3	27
Other Destination	126	48	20	28	54
GRAND TOTAL	18,878	20,394	16,146	14,412	14,399

## 参考資料 2.

独立ドキュメンタリー映画『She is』のジュ・ヒョンスク (Joo Hyun Sook) 監督とのインタビュー内容<sup>354</sup>

インタビュー実施日：2008年3月3日、午後2時頃

場所：韓国ソウル、監督の事務所 (Daebangdong, Jugong 209-1402, Dongjack-Gu, Seoul)

監督について：

주현숙 (ジュ・ヒョンスク) 監督は、1994年、独立映画協会 16m ワークショップを修了後、インディペンデント映画監督として活動中である。

作品としては、社内結婚の夫婦の女性労働者解雇を扱った『83 人の人質』(2002)、移住労働者プロジェクト『オムニバス旅程：移住』(2003)、『続く—未登録移住労働者記録される』(2004)、『新自由主義の挑発』(2005)などがある。ドキュメンタリー・ワークショップなどでも活躍し、メディアから疎外された人々が自らメディア制作を行う主体として活動できる機会を提供するプログラム「移住労働者メディア教室」に講師で参加したり、移住労働者インタビュープロジェクト『死んだりあるいは離れたり』の総演出などを行っている。移住労働運動においてメディア・アクティビストとして活動している。

インタビュー内容

質問 1. Q： 国際結婚移住女性をテーマとした理由について教えてください。

A： 私は、長い間移住労働者問題を制作していました。今韓国社会は移住者を巡る社会問題が多くあり、その中で移住労働雇用の問題、強制追放などの問題があり、移住労働者達が韓国社会へ「声」を出し始めたのです。その過程をドキュメンタリーに撮り始めたのですが、その時は、多くの人が男性だったのです。しかし、時間の経過とともに、移住労働者の闘争が激しくなり、闘争する労働者を援助する市民団体と移住女性たちの姿が表れ始めました。その時初めて移住女性たちに話を聞くことが出来ました。それから、移住女性

<sup>354</sup> 本インタビューは、2008年2月から3月まで実施した千葉大学大学院人社研実践的公共学応用プログラム派遣事業参加における海外調査「韓国における移住女性研究」の一部分における結果である。

問題についてドキュメンタリー映画を制作しようと思いました。これが、映画『she is』の始まりとも言えますね。

国際結婚移住女性をテーマにした理由は、同時期にテレビニュースでは、ベトナム人移住女性が夫婦喧嘩の後、自殺したというニュースが大きく報道され始めましたが、市民団体は他殺の可能性があると主張し、それが話題になったのです。それから、日々テレビでは、結婚移住女性へのDVや人身売買など今まで歪視され黙認されていたとも言える問題が一気に現れ始めたのです。しかし、映画の冒頭でも述べてるのですが、その国際結婚移住女性たちの報道の仕方に問題があると思い始めたのです。

**Q：**具体的に話してくれますか？

**A：**そうですね。例えば、ニュースや時事番組では、いつも移住女性の人権問題を大きく取り上げ、いかに韓国人男性から殴られたか、斡旋業者から人身売買されたかなどを報道していて、知り合いにこの問題について話したとき、驚いたことにその知り合いが「国際結婚移住女性たちは皆じゃないの？ 韓国人夫から殴られるのは…」と話したのです。その話には驚きましたね。まるで、国際結婚して韓国に来ると夫に殴られるのは当然なことだと言うのです。言葉が、出ませんでした。それで、決めたのです。国際結婚移住女性の話しよう。

**質問 2. Q：**映画が完成するまでどのぐらい掛かりましたか

また、制作支援はどこから受けたのですか

**A：** 実際制作期間は1年くらいですが、撮影する前に皆さんの事も知りたいし、少し韓国語も気になったので韓国語を教えたり、会って色々話したり...その準備の期間も含めると大体2年くらいですね。その間に子供も産みましたので...この映画の撮影中には多事多難でしたよ（笑）

2005年から始めて2007年に上映したので、そうですね、2年間です。

制作支援は、当時、映画進行委員会から約700万ウォン支援して貰いました。そこには、監督の人件費は含まないです。しかし、今は（2008年）は、

国内制作は 3500 万ウォン、海外制作の場合は、7500 万ウォンまで支援を受けられるようになったそうです。

**質問 3 Q:** 登場人物の 5 人とはどのように知り合ったのでしょうか

**A:** 国際結婚移住女性センターから紹介してもらいました。

**質問 4 Q:** 登場人物たちとは今も交流がありますか

**A:** そうですね、皆一緒に集まるのが難しくてなかなか会えませんが、メリンダーとメロディーお姉さんにはこの間会いました。そして、たまに電話で話したりしますね。

**質問 5 Q:** 映画に登場した 5 人の移住女性に、映画に登場したことで何か変化が見られたのでしょうか、そして、皆さん今どうしているのか

**A:** そうですね、ティエン（ベトナムからの移住女性）は裁判が終わってベトナムに行ったのでなかなか連絡が出来ないですが、ベトナムの靴工場で働いています。ロサは（映画の二人目に登場したフィリピン人女性）子供を産みました。センターの助力を得て今もここで（韓国）で生活しています。あと、メリンダーは相変わらず明るくて、最近子育てで忙しいみたいです。（笑）チンチンは、レストランで働きながら夫と幸せに暮らしています。メロディーお姉さんは、英語の先生になりました。また、相変わらず、移住したばかりの移住女性たちに色々指導しながら社会活動をしています。オンニ（お姉さんを称する韓国語）のことを考えると、いつも凄いなって思います。本当に感心するんだから（笑）...

そうですね～映画に出たことによって何か変わったかは正直に良く分かりません。今は皆、普通に生活しています。ただ、思うに、それが自然だと思えます。私たちが、あまりにも彼女たちを「移住女性」と言う枠に入れようとしているのかもしれないね～

**質問 6 Q:** 映画を見てその周辺人である韓国人たちには何か変化がありましたか。

**A:** 映画は主に、市民団体や小さい施設で上映されているので、一般映画のよう

に多くの人々が見るわけではないのです。また、この問題に関心があるところで上映される事が多いですから...そうですね、しかし、この間、市民団体から上映依頼と講演の依頼が来て参加したのですが、少なくともそこでは、移住女性たちに対してもう一度考えるようになったと言う人が多くいましたけど。

**質問7 Q:** 試写会には皆さんと一緒に参加したのですか、その様子はどうでしたか

**A:** はい。本当に緊張しました。あ！ティエンとロサは参加してないです。メリンダーとチンチン、メロディーお姉さんとその家族たちと関係者、約20人ぐらいだったと思います。韓国語がまだ聞き取れない彼女たちのために母国語で説明したり、笑ったりしている様子を見て少し安心した覚えがあります。チンチンが、姑の話をした時の場面が映し出された時、彼女は笑っていました。

ま〜試写会では、皆、楽しかったですよ。

**質問8 Q:** 監督自身、映画は意図された結果になったと思いますか

**A:** そうですね〜、確かに、映画の始めの意図とは違うって言ったほうが正直な答えでしょうね。映画を企画した当初は、社会問題を映画化しようと思いました。しかし、撮影中に妊娠し、それをきっかけに、社会問題が自分自身の問題に変わり始めたんです。映画は、移住女性たちの話であると同時に自分の話でもあったのです。

**質問9 Q:** 映画を制作するために準備段階で多くの移住女性と会ったと思いますが、監督自身は正直にどう思いましたか。

**A:** 質問の意図がよく分かりませんが...

**Q:** メディアにおける移住女性に関する報道は、実際に起こっている事ですし、彼女たちを韓国人女性と同じだとは言えませんね。それは、立場や置かれている条件が違うと思いますし、移住女性たちがホスト国で生きる為には耐えなければならないことがずっと多いじゃないですか。しかし、監督の『she is』から、私は主観的ではありますが、監督自身は「国際結婚移住女

性たちと自分が同じだ」と強調している印象を受けました。多分、監督とメリンダーが同じ時期に妊娠し、映画の場面に二人の姿が映し出されたからかもしれませんが...

- A:** (笑)、そうですね～確かに、私は意識していました。そして、観客も映画を通じて安さん(質問者)のように移住女性も同じ女性だと言うことを気付いてほしかったのです。勿論、移住女性たちは韓国社会の中で韓国人女性とは異なる条件や数多くの問題を抱えているでしょう。しかし、私が移住女性に会えば会うほど、男性中心社会の中で女性が耐えなければならない全ての役割の極みだと思います。男性中心社会では、結婚は移住女性にとってだけではなく、売買だと思います。愛という名前と呼ばれるかどうかの問題であって、結局結婚は売買です。しかし、一般的にそのように言うことは容易ではないです。しかし、国際結婚のシステムは簡単に結婚を売買だと言います。離婚した前妻の産んだ子供を育てる人がなくて、畑仕事をする人がなくて、老母を介護する人がなくて、その露骨な理由から国際結婚をすることになった夫たちの欲求はあまりにも露骨なのでむしろ純粹だと言いたいぐらいです。ところで、これが移住女性に限った問題でしょうか。資本主義社会に生きる、男性中心主義社会で生きる全ての女性の問題だと私は思います。

#### 質問 10

- Q:** 最後に、映画について一言、お願いします。
- A:** 私は、映画を通じて閉じ込められた偏見から解放され、主人公達が観客と自由に出会ったら良いなと思います。

<メールにて行った監督とのインタビュー内容>

メール送信日：2010年、12月11日

質問内容：ドキュメンタリー映画『she is』を観た観客（移住女性や韓国人）の反応について教えてください。

メール返信日：2010年、12月21日

質問に対する回答：当時（2007年）、映画『she is』は、不特定多数が観る状況ではなかったため、大衆的な反応は感じる事が出来ませんでした。でも、最近を上映が続いているが、主に地域や団体での自主上映という形で行われることが多くて、その場での観客の反応を読み取ることが出来ます。移住女性たちは、自分たちの経験と重なっているため、感情移入が生じることで、映画を見て自分たちの経験を話しながら泣く場合が多いし、そのときお互いに慰めながら話を続ける事があります。また、韓国人の場合は、移住女性を他者ではなく主体として見せてくれて感謝します、という言葉がおおくあります。これは、今までの大衆メディアでは、移住女性をかわいそうな人、あるいは悪い人として見せることが多いからですね。

## 参考文献

### 日本語文献

- 青山薫『セックスワーカーとは誰か—移住・性労働・人身取引の構造と経験』大月書店、2007年。
- 浅沼圭司・岡田晋・佐藤忠男他編『新映画事典』美術出版社、1980年。
- 足立真理子・木村涼子・熊安貴美江・伊田久美子編『フェミニスト・ポリティクスの新展開—労働・ケア・グローバリゼーション』明石書店、2007年。
- 栗谷庄司「表象と文化的アイデンティティ」『同志社会学研究』6号、2002年、27-41頁。
- 安貞美「日本における大衆文化受容—『冬のソナタ』を中心に」『千葉大学人文社会研究』第16号、2008年、196-210頁。
- 安貞美「韓国における移住女性—映画『멋진 그녀들(She is)』を中心に」三宅晶子編『身体・文化・政治』研究プロジェクト報告書第156集、千葉大学大学院人文社会科学研究所、2008年、85-96頁。
- 安貞美「視覚文化における国際結婚移住女性—韓国ドラマ『黄金花嫁』を中心に」土田知則編『歴史—物語 (histoire) における抑圧的言説・表象』研究プロジェクト報告書第95号、千葉大学大学院人文社会科学研究所、2009年、43-51頁。
- 石井由香「移民の居住と生活—現状と展望」石井由香編『移民の居住と生活—グローバル化する日本と移民問題』明石書店、2003年。
- 伊藤明己「スチュアート・ホールのイデオロギーとアーティキュレーションの理論」中央大学大学院文学研究科社会情報学専攻修士論文、1996年。
- 伊藤淑子『家族の幻影—アメリカ映画・文芸作品にみる家族論』大正大学出版社、2004年。
- 伊藤るり「『ジャパゆきさん』現象再考 八〇年代日本へのアジア女性流入」伊豫谷登士翁、梶田孝道編『外国人労働者論現状から理論へ』弘文堂、1992年、293-332頁。
- 伊藤るり、小ヶ谷千穂、ブレンダ・テネグラ、稲葉奈々子「いかにして『ケア上手なフィリピン人』はつくれるのか?—ケアギバーと再生産労働の『国際商品』化」伊藤るり・足立真理子編『国際移動と連鎖するジェンダー—再生産労働力のグローバル化』作品社、2008年、117-138頁。
- 伊藤るり・足立真理子編『国際移動と連鎖するジェンダー—再生産労働力のグローバル化』

- 作品社、2008年。
- 井上輝子『表現とメディア』岩波書店、2009年。
- 伊豫谷登士翁『経済グローバリゼーションとジェンダー』明石書店、1999年。
- 伊豫谷登志翁『グローバリゼーションとは何か』平凡社、2002年。
- 伊豫谷登士翁『グローバリゼーションと移民』有信堂高文社、2005年。
- 岩淵功一『文化の対話力—ソフト・パワーとナショナリズムを越えて』日本経済新聞出版社、2007年。
- 上杉妙子「家事労働移民研究の現在—女性移民の主体性をめぐって」原ひろ子監修『ジェンダー研究が拓く地平』文化書房博文社、2005年、243-256頁。
- 小ヶ谷千穂「移住女性研究の展開と課題：アジアにおける移住女性研究のために」お茶の水社会学研究会『Sociology Today』11号、2000年、98-107頁。
- 小ヶ谷千穂「送出国フィリピンの課題—海外雇用政策の推移と『海外労働者の女性化』」法務省入国管理局委託研究報告書『人の国際移動と現代国家-移民環境の激変と各国の外国人政策』2000年、149-169頁。
- 小ヶ谷千穂『「移住労働者の女性化」のもう一つの現実—フィリピン農村部送り出し世帯の事例から—』伊豫谷登士翁編『経済のグローバリゼーションとジェンダー』明石書店、2001年、163-186頁。
- 小ヶ谷千穂「国際労働移動とジェンダー—アジアにおける移住家事労働移民の組織活動をめぐって」梶田孝道編著『国際化とアイデンティティ』ミネルヴァ書房、2001年、121-147頁。
- 小ヶ谷千穂「女性移民（移住女性）」伊豫谷登士翁編『思想読本（8）グローバリゼーション』作品社、2002年、134頁。
- 小ヶ谷千穂「フィリピンの海外雇用政策」小井戸彰宏編『移民政策の国際比較』明石書店、2003年、328頁。
- 小ヶ谷千穂「海外就労と女性のライフコース：フィリピン農村部の若年シングル女性と世帯内関係を手がかりに」『ジェンダー研究』お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報第8号、2005年、99-111頁。
- 外国人権法連合編『外国人・民族的マイノリティ人権白書2010』明石書店、2010年。
- 梶田孝道編著『人の国際移動と現代国家—移民環境の激変と各国の外国人政策の変化』一橋大学社会学部、2003年。

- 笠間千浪「ジェンダーからみた移民マイノリティの現在—ニューカマー外国人女性のカテゴリー化と象徴的支配」宮島喬・梶田孝道編『マイノリティと社会構造』東京大学出版会、2002年、121-148頁。
- 嘉本伊都子『国際結婚の誕生<文明国日本>への道』新曜社、2001年。
- 菊池京子「外国人労働者送出国の社会的メカニズム—フィリピンの場合」伊豫谷登士翁・梶田孝道編『外国人労働者論—現状から理論へ』弘文堂、1992年、169-201頁。
- 菊池京子「日本の労働市場におけるアジア女性労働者問題」『日本における外国人労働者問題』社会政策学会年報第38集、1994年、67-85頁。
- 金京姫、張 惠英訳「グローバル化時代における韓国家族の変化と挑戦：トランスナショナルな家族を中心に」『立命館大学人文科学研究紀要』92号、2009年、203-228頁。
- 金ヨンオク「女性の人権の視点から見る国際結婚、韓国の女性の国際結婚移住者と多文化家族」『日韓連続シンポジウム報告書』2007年。
- ギデンズ、アンソニー著、秋吉美都、安藤太郎、筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト、2005年、2頁。
- クリフォード、ジェイムズ著、毛利嘉孝ほか訳『ルーツ』月曜社、2002年。
- 小林康夫、松浦寿輝編『表象—構造と出来事』東京大学出版会、2000年。
- 小林康夫、松浦寿輝編『メディア—表象のポリティクス』東京大学出版会、2000年。
- 佐藤忍「フィリピンの労働力輸出」『大原社会問題研究所雑誌』463号、1997年、40-63頁。
- サッセン、サスキア著、森田桐郎訳『労働と資本の国際移動—世界都市と移民労働者』岩波書店、1992年。
- サッセン、サスキア著、大井由紀、高橋華生子訳『グローバル・シティー』筑摩書房、2008年。
- 柴山恵美子、藤井治枝、守屋貴司編著『世界の女性労働』ミネルヴァ書房、2005年。
- 白水繁彦編『エスニック・メディア—多文化社会日本をめざして』明石書店、1996年。
- 清水展「日本におけるフィリピン人・イメージ考」『比較社会文化』第2号、1996年、15-26頁。
- ジャクソン、キャシー・マーロック著、牛渡淳訳『アメリカ映画における子どもイメージ』東信堂、2002年。
- 徐阿貴「在日朝鮮女性による『対抗的な公共権』の形成と主体構築—大阪における夜間中

- 学独立運動の事例から」『ジェンダー研究』第8号、2007年、113-128頁。
- ストーカー、ピーター著、大石奈々・石井由香訳『世界の労働力移動 ILO レポート』築地書館、1998年。
- 鈴木伸枝「首都圏在住フィリピン人既婚女性に関する—考察：表象と主体性構築過程の超国民論からの分析」『ジェンダー研究』第1号、1998年、97-112頁。
- 鈴木伸枝「フィリピン人の移動・ケア労働・アイデンティティ—移動労働政策、ジェンダー、自己実現のはざままで—」『立命館言語文化研究』第20巻4号、1999年、3-17頁。
- スタインバーグ、ディビット・J著、堀芳枝・石井正子・辰巳頼子訳『フィリピンの歴史・文化・社会—単一にして多様な国家』明石書店、2000年、25-26頁。
- 菅谷実編『東アジアのメディア・コンテンツ流通』慶應塾大学出版会、2005年。
- 田巻松雄・青木秀男「アジア域内の労働力移動—受入国韓国と送出国フィリピンの最近の動向と現状」『宇都宮大学国際学部研究論集』第22号、2006年、65-86頁。
- 戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』明石書店、1994年。
- Chiou Shwu-wen「川崎市在住フィリピン人妻の社会参加」『応用社会学研究』第45号、2003年、81-96頁。
- チャールズ・テイラー『マルチカルチュラルリズム』岩波書店、1996年。
- 寺見元恵編・監訳『フィリピンの大衆文化』めこん出版、1992年。
- トムリンソン、ジョン著、片岡信訳『グローバリゼーション—文化帝国主義を超えて』青土社、2000年。
- ドブレ、レジス著、嶋崎正樹訳『メディアオロジー入門』NTT出版、2000年。
- ナイ、ジョセフ・S著、山岡洋一訳『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』日本経済新聞社、2006年。
- 中谷文美「働く—性別役割分業の多様性」田中雅一、中谷文美編『ジェンダーで学ぶ文化人類学』世界思想社、2005年。
- 波平恵美子編「健康・医療・身体・生殖に関する医療人類学の応用的研究」『国立民族学博物館調査報告』85、2009年、11-34頁。
- ハーヴェイ、ディビッド著、渡辺治訳『新自由主義—その歴史的展開と現在』作品社、2007年。
- ハーヴェイ、ディビッド著、本橋哲也訳『ネオリベラリズムとは何か』青土社、2007年。
- 春木育美『現代韓国と女性』新幹社、2006年。

- 萩原滋・国広陽子編『テレビと外国イメージ—メディア・ステレオタイプ研究』勁草書房、2004年。
- パレーニャス、ラセル「家族を想うということ—フィリピン人海外就労の経済的原因におけるジェンダー作用」伊藤るり・足立真理子編『国際移動と連鎖するジェンダー—再生産労働力のグローバル化』作品社、2008年、154-169頁。
- バレスカス、M.R.P 著、津田守・小森恵・宮脇撰・高畑孝訳『フィリピン人女性のエンターティナーの世界』明石書店、1994年。
- バトラー、ジュディス著、竹村和子訳『触発する言葉—言語・権力・行為体』岩波書店、2004年、131頁。
- バルト、ロラン著、諸田和治訳『ロラン・バルト映画論集』ちくま学芸文庫、1998年。
- フーコー、ミシェル著、渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社、1986年。
- フーコー、ミシェル著、田村俣訳『性の歴史Ⅱ 快楽の活用』新潮社、1986年。
- フーコー、ミシェル著、田村俣訳『性の歴史Ⅲ 自己への配慮』新潮社、1987年。
- 藤井光男編『東アジアの国際分業と女性労働』ミネルヴァ書房、1997年。
- 藤森英男「国際労働移動と国内経済へのインパクト—フィリピンの事例を中心として—」『富士経済論集』第36号、9-32頁。
- フィスク、ジョン、ハートレー、ジョン著、池村六郎訳『テレビを<読む>』身来社、1991年。
- ブルッカー、ピーター著、有元健・本橋哲也訳『文化理論用語集 カルチュラル・スタディーズ+』新曜社、2003年、72頁。
- プロクター、ジェームス著、小笠原博毅訳『スチュアート・ホール』青土社、2006年、97-121頁。
- ベック、ウルリッヒ著、木前利秋・中村健吾監訳『グローバル化の社会学：グローバリズムの誤謬—グローバル化への応答』国文社、2005年。
- ホール、スチュアート・ギルロイ、ポール著、水島一憲訳「人種と映画」『現代思想』Vol.24-3 青土社、1996年。
- ホールンスタイナー、メアリー・R編、山本まつよ訳『フィリピンのこころ』めこん出版、1980年。
- マクルーハン、H.M 著、栗原裕・河本仲聖訳『メディア論』みすず書房、1987年。
- マッキー、ヴェラ『グローバル化とジェンダー表象』御茶の水書房、2003年。

松田美佐「ジェンダーの観点からメディア研究を再考」『マス・コミュニケーション研究』  
48号、1996年、190-203頁。

ミース、マリア著、奥田暁子訳『国際分業と女性化—進行する主婦化』日本経済評論社、  
1997年。

宮島喬・梶田孝道編『マイノリティと社会構造』東京大学出版会、2002年。

森達也『ドキュメンタリーは嘘をつく』草思社、2005年、74頁。

山谷哲夫『じゃぱゆきさん—アジアは女だ』情報センター出版局、1985年。

ヤンヘウ「韓国における国際結婚移住者の現状と政策への提言」財団法人 アジア・太平  
洋人権情報センター報告、2008年。

梁仁實「戦後日本映画における『在日』女性像」『立命館産業社会論集』39巻2号、立命館  
大学産業社会学会、2003年、35-56頁。

横田洋子「台湾・国際結婚移住者をめぐる社会人類学研究 台中県勢鎮の事例から」『2007  
年度財団法人交流協会日台交流センター日台研究支援事業報告書』2008年。

吉村真子「東南アジアの開発とジェンダー」原伸子編『市場とジェンダー—理論・実証・  
文化—』法政大学比較経済研究所、2005年、203-234頁。

ローサ、ポール著、厚木たか訳『ドキュメンタリー映画』未来社、1995年、14頁。

渡辺晴子「ソーシャル・サポート・ネットワークのパーспекティブ」『社会問題研究』  
48(1)、1998年、117-138頁。

## インターネット上の情報

特定非営利活動法人 JFC ネットワーク <http://www.jca.apc.org/jfcnet/>

『まにら新聞』2005年10月3日朝刊

世界銀行 [http://www.worldbank.or.jp/04data/07press/pdf\\_fy2006/20051116\\_201.pdf](http://www.worldbank.or.jp/04data/07press/pdf_fy2006/20051116_201.pdf)

世界銀行

[http://wdsbeta.worldbank.org/external/default/WDSContentServer/IW3P/IB/2005/11/14/000112742\\_20051114174928/additional/841401968\\_2005103271101046.pdf](http://wdsbeta.worldbank.org/external/default/WDSContentServer/IW3P/IB/2005/11/14/000112742_20051114174928/additional/841401968_2005103271101046.pdf)

移民映画祭公式サイト <http://mffj.org/>

<http://www.answers.com/topic/caregiver-film>

フロールが死刑に処された事件。 <http://pubs.socialistreviewindex.org.uk/sr189/bakan.htm>

「フィリピンの介護教育と看護・介護学生の日本への就労意識調査」報告書

2010年2月13日、EPAと外国人看護師・介護福祉士候補—背景・実態・課題—をテーマとするシンポジウム

ホセリト・ズルエタ「21世紀フィリピン映画：生存のための闘い」

[www.jpfi.go.jp/culture/new/0411/img/ph.pdf](http://www.jpfi.go.jp/culture/new/0411/img/ph.pdf)

映画『メリダ』公式サイト <http://www.imelda.jp/>

映画『ケアギバー』の公式サイト <http://www.abs-cbnglobalmovies.com/caregiver/index.html>

ABS - CBNの映画プロダクション社 公式サイト <http://www.abs-cbn.com/>

移民映画祭公式サイト <http://mffj.org/>

[http://en.wikipedia.org/wiki/Overseas\\_Filipinos](http://en.wikipedia.org/wiki/Overseas_Filipinos)、

海外雇用庁 <http://www.poea.gov.ph>

国家統計調整委員会 <http://www.nscb.gov.ph/>

『まにら新聞』2005年10月3日。

## 英語文献

Aguilar, Delia D, 2004, "Introduction," in Delia D. Aguilar and Ann E. Lacsamana, (eds.), *Women and Globalization*, N.Y: Humanity Books, pp. 11-23.

Appadurai, A, 1997, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, Minneapolis: University of Minnesota Press.

Ballescás, M.R.P, 1993, *Filipino Entertainers in Japan: An Introduction, Philippines*, Quezon : The Foundation for Nationalist Studies, Inc.

Burgess, Chris, 2004, "(Re)constructing Identities: International Marriage Migrants as Potential Agents of Social Change in a Globalising Japan", *Asian Studies Review*, vol. 28.

Cahill, Desmond, 1990, *International Marriage in International Contexts: A Study of Filipina Women Married to Australian, Japanese and Swiss Men*, Quezon: Scalabrini Migration Center.

Castells, M, 1997, *The Information Age: Economy, Society and Culture vol. I, The Rise of the Network Society*, Oxford: Polity Press.

Castles, Stephen and Miller, Mark J, 2003, *The age of Migration: International population*

- movement in the modern world*, 3<sup>rd</sup> edition, N.Y: Palgrave Macmillan.
- Chi, Ying, 2005, "Labor Migration To Japan: Policy Versus Reality," (unpublished) given by Manila: Kanlungan Foundation Inc, 2006.
- Chit, Estella, "BY THE WORLD'S BESIDE" Sheila S. Coronel, *REPORT -NURSING THE WORLD-*, the Philippine Center for Investigative Journalism
- Chun, C, 1996, *The Mail-Order Bride Industry: The Perpetuation of Transnational Economic Inequities and Streotyoos*, 17 U.P.A.J. International Economy.
- Clark, Juliet, 2004, "Filipino Women in Tasmania: Negotiating Gender Ideologies," in *Asian Pacific Migration Journal*, Quezon: Scalabrini Migration Center. 13(3)
- Constable, Nicole, 1997, *Maid to Order in Hong kong: Stories of Filipina Workers*, Ithaca : Cornell University Press.
- Constable, Nicole, 2003, *Romance on a Global Stage*, University of California Press.
- Constable, Nicole, (ed.), 2005, *Cross-Border Marriages: Gender and Mobility in Transnational Asia*, University of Pennsylvania Press
- Cox, R, 1999, "The Role of Ethnicity in Shaping the Domestic Employment Sector in Britain," in J.H.Momsen, (ed.) *Gender, Migration and Domestic Service*, London: Routledge, pp.134-137.
- Chang, G, 2000, *Disposable Domestics: Immigrant Women in the Global Economy*, Cambridge, MA: South End Press.
- Dan Bifelski, "In Romania, Children Left Behind Suffer the Strains of Migration," *New York Times* (February 14, 2009) <http://www.nytimes.com/2009/02/15/world/europe/15romaina.html>
- Dang Nguyen Anh, 2005, "Cross-border Migration and Sexuality in Vietnam," *Family and Women Studies*, 7.
- Ehrenreich, B. & Hochschild, A.R, (eds.), 2002, *Global Women: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*, N.Y: Henry Holt and Company.
- Elson, Diane and Pearson, Ruth, 1981, "Nimble Fingers Make Cheap Workers", *Feminist Review* 7, pp. 87-107. See <http://www.palgrave-journals.com/fr/journal/v7/n1/pdf/fr19816a.pdf> (accessed on July 30, 2010)
- Foucault, Michel, 1977, *History of Sexuality Volume 1: An Introduction*, Trans. Robert Hurley, London: Penguin Books.

- Giddens, Anthony, 1984/2001, *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Polity Press, Cambridge.
- Giddens, Anthony, 1985, *A contemporary Critique of Historical Materialism*, Cambridge: Polity Press, p.7.
- Giddens, Anthony, 1985, *The Nation-State and Violence*, Polity Press, p.7.
- Giddens, Anthony, 1987, *Social Theory and Modern Sociology*, Cambridge: Polity Press, p.98.
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity*, Cambridge: Polity Press, pp.211-215.
- Hall, Stuart, (ed.), 1997, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage/ Open University Press.
- Hall, Stuart, 1992(first published 1980), "Encoding/Decoding", Hall, Stuart et.al, (eds.), *Culture, Media, Language*, N.Y: Routledge, pp.128-138.
- Heyzer, Noeleen (ed.), 1995, *The Trade in Domestic Workers: Causes, Mechanisms and Consequences of International Migration*, Zed Books.
- Hochschild, A. R., Hutton, W., & Giddens, A, 2000, "Global Care Chains and Emotional Surplus Value," in W., & Giddens, A, (eds.), *Global Care Chains and Emotional Surplus Value*, Publishers and Authors: Join our Search Inside The Book Program, pp.130-146.
- Hochschild, A. R, (eds.), 2002, *Global Woman*, N.Y: Metropolitan Books.
- Hutton, Anthony Giddens, (eds.), *On the edge: living with global capitalism*, London:vauntage.
- Ismail, M, 1999, "Maids in Space: Gendered Domestic Labour: from Sri Lanka to the Middle east," in J. H. Momsen, (ed.), *Gender, Migration and Domestic Service*, London: Routledge, pp. 229-241.
- Kim, HyunMee, 2008, "Migrant and Multiculturalism" in *Journal of Contemporary Society and Culture*, Seoul, pp. 57-78.
- Kim, HyunMee, 2006, "Global Gender Politics of Cross-Border Marriage: With a Focus on Marriages between Korean Men and Vietnamese Women", *Economy and Society*, vol. 70(summer), Korean Association of Industrial Sociology, p.11.
- Kojima, Yu, 2001, "In the business of cultural reproduction: theoretical implications of mail-order bride phenomenon", *Women's Studies International Forum*, Vol.24(2), p.201.
- Kofman, E., et. al., 2001, *Gender and International Migration in Europe: Employment, Welfare, and Politics*, London and N.Y: Routledge.

- Lean, Lim, Lin & Oishi, Nana 1996, "International Labor Migration of Asian Women: Distinctive Characteristics and Policy Concerns" in Graziano Batistella & Anthony Paganoni, (eds.), *Asian women in Migration*, Quezon: Scalabrini Migration Center.
- Lee, Hyekyung, 2003, "Gender, Migrant and Civil Activism in South Korea," in *Asian Pacific Migration Journal*, Quezon City: Scalabrini Migration Center, 12(1-2), pp. 99-125.
- Lee, Hyekyung, 2005, "International Marriage Migration in South Korea," Paper presented at the Women World 2005, 9<sup>th</sup> International Interdisciplinary Congress on Women, Ewha Woman's University, Seoul, Korea, June 22, 2005.
- Maria Alcestis, Abera-Mangahas, 1998, "Violence Against Women Migrant Workers: The Philippine Experience," in Carino, B.V., ed., *Filipino Workers on the Move: Trends Dilemmas and Policy Options*, Manila: Philippine Migration Research Network of Philippines Social Science Council, pp. 45-80.
- Makie, Vera, 2000, "The Metropolitan Gaze: Travellers, Bodies and Spaces" *Intersections: Gender, History and Culture in the Asian Context*, Issue 4, September 2000.  
<http://intersections.anu.edu.au/issue4/vera.html>
- Morley, David and Kuan-Hsing Chen, (eds.), 1996, *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies*, London and N.Y: Routledge, p.8.
- Medina, Belen T. G., 2001(Second edition.), *The Filipino Family*, Quezon: University of the Philippines Press, p.151.
- Mies Maria, 1986 (1998), "Housewifization International: Women and the New International Division of Labour," *Patriarchy and Accumulation on a World Scale*, London: Zed Books.
- Momsen, J. H., 1999, "Maids on the Move" in J. H. Momsen, (ed.), *Gender, Migration and Domestic Service*, London: Routledge, pp. 1-20.
- Nash, M, "Rethinking Media Representations of Immigrant Women" *IEMed*, November 16, 2006.  
<http://www.iemed.org/publicacions/quaderns/7/aindex.php> (accessed July 23, 2010)
- Oishi, Nana, 2005, *Women in Motion: Globalization, State Policies, and Labor Migration in Asia*, Stanford University Press.
- Pratt, Mary Louise, 1992, *Imperial eyes: Travel writing and transculturation*, N.Y: Routledge, pp.6-7.
- Parreñas, R. S, 2000, "Migrant Filipina Domestic Workers and International Division of

- Reproductive Labor,” *Gender and Society*, Vol. 14, No. 4, pp. 560-581.
- Parreñas, R. S, 2001, *Servants of Globalization: Women migration and domestic work*, Palo Alto: Stanford University, p.78.
- Parreñas, R. S, 2001, “Mothering from a distance: emotions, gender, and intergenerational relations in Filipino transnational families”, *Feminist Studies*, 27 (2), pp. 361-390.
- Parreñas, R. S, 2002, “The Care Crisis in the Philippines: Children and Transnational Families in the New Global Economy” in B. Ehrenreich & A. R. Hochschild, (eds.), *Global Women: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*, N.Y: Henry Holt and Company, pp. 39-54.
- Parreñas, R. S, 2005, *Children of Global Migration*, Stanford University.
- Piper, N, 1999, “Labor Migration, Trafficking and International Marriage: Female Cross-Border Movements into Japan,” in *Asia Journal of Women’s Study*, 5(2), pp. 69-99.
- Piper, N, 2003, “Wife or Worker? Worker or Wife? Marriage and Cross-Border Migration,” in *Contemporary Japan, International Journal of Population Geography* 9, pp. 457-469.
- Piper, N, 2003, “Bridging Gender, Migration and Governance: Theoretical Possibilities in the Asian context” in *Asian and Pacific Migration Journal*, Vol. 12 no. 1-2, pp. 21-48.
- Piper, N and Roces,M, 2004, “Rights of foreign Workers and the Politics of Migration in South East and East Asia,” *International Migration*, 42 (5), pp. 71-97.  
<http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/j.0020-7985.2004.00302.x/pdf>
- Suzuki, Nobue, 2000, “ Between Two Shores: Transnational Projects and Filipina Wives in/from Japan,” *Women’s Studies International Forum* 23(4), pp.431-444.  
[http://academia.edu.documents.s3.amazonaws.com/1395973/Bet\\_2\\_shores.pdf](http://academia.edu.documents.s3.amazonaws.com/1395973/Bet_2_shores.pdf)
- Suzuki, Nobue, 2003, “Transgressing ‘Victims’: Reading Narratives of ‘Filipina Brides’ in Japan,” *Critical Asian Studies* 35(3), pp. 399-420.  
<http://academia.edu.documents.s3.amazonaws.com/1396035/Transgressing.pdf>
- Suzuki, Nobue, 2004, “Inside the Home: Power and Negotiation in Filipina-Japanese Marriages,” *Women’s Studies: An Interdisciplinary Journal* 33(4), pp.481-506.  
[http://s3.amazonaws.com/academia.edu.documents/1395974/Inside\\_PDF.pdf](http://s3.amazonaws.com/academia.edu.documents/1395974/Inside_PDF.pdf)
- Suzuki, Nobue, 2008, “Carework and Migration: Japanese Perspectives on the Japan-Philippines Economic Partnership Agreement.” *Asia and Pacific Migration Journal* 16(3), pp.357-381.

[http://academia.edu.documents.s3.amazonaws.com/1789862/Carework\\_Migration.pdf](http://academia.edu.documents.s3.amazonaws.com/1789862/Carework_Migration.pdf)

- Sassen, S, 1988, *The mobility of Labor and capital: A Study in International Investment and Labor*, N.Y: Cambridge University Press.
- Sassen, S, 1998, *Globalization and Its Discontents*, N.Y: The New Press.
- Sassen, S, 2003, "Global Cities and Survival Circuits" in Barbara Ehrenreich and Arlie Russell Hochschild (eds.), *Global Woman: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*, N.Y: Metropolitan Books.
- Spivak, Gayatri Chakravorty, 1988, "Can the Subaltern Speak?" in Cary Nelson & Lawrence Grossberg, (eds.), *Marxism and the Interpretation of Culture*, Urbana: University of Illinois Press, pp.271-373.
- Spivak, Gayatri Chakravorty, 1999, *A critique of postcolonial reason: toward a history of the vanishing present*, Cambridge MA: Harvard University Press.
- Tolentino, Rolando B, (ed.), 2000, *Geopolitics of the visible : essays on Philippine film cultures*, Quezon City : Ateneo de Manila University Press.
- Tolentino, Rolando B, 2001, *National/Transnational*, Quezon City : Ateneo de Manila University Press.
- Tacoli, Cecilia, 1999, "International Migration and the Restructuring of Gender Asymmetries: Continuity and change Among Filipino Labor Migrant in Rome," in the *International Migration Review*, 33(3).
- Van Dijk, Rijk, 2002, "Religion, Reciprocity and Restructuring Family Responsibility in the Ghanaian. Pentecostal Diaspora", in D. Brycson and U. Vuorela, (eds.), *The Transnational Family: New European Frontiers and Global Networks*, Oxford: Berg, pp. 173-196.
- Wang, Hong-zen and Chang, Shu-ming, 2002, "The Commodification of International Marriages: Cross-border Marriage Business in Taiwan and Viet Nam", *International Migration*, vol. 40 (6), p. 94.
- Wang, Hong-zen and Hsin-Huang Michael Hsiao, (eds.), 2009, *Cross-Border Marriage with Asian Characteristics*, Taiwan: Center for Asia-Pacific Area Studies, RCHSS, Academia Sinica.
- "Fast Facts on Filipino Labor Migration 2007", Kanlungan Center Foundation, Inc (Center for Migrant Workers), See <http://www.kanlungan.ngo.ph/> (accessed on July 30, 2010)

## 韓国語文献

그래엄 터너저, 김연중번역 『문화 연구 입문』 한나래, 1999년 (=Graeme Turner 著、金ヨン준訳『文化研究入門』ハンナレ出版、1999年。)

김현미 『글로벌시대의 문화번역』 도서출판, 2005년 (=金ヒョン미 『グローバル時代の文化翻訳』図書出版、2005年。)

김현미 「국제결혼 전지구적 젠더정치학 한국인남성과 베트남 여성의 사례를 중심으로」 『경제와 사회』 70호, 2006년 (=金ヒョン미 「国際結婚のグローバルなジェンダー政治学：韓国人男性とベトナム人女性に事例を中心に」 『経済と社会』 70号、2006年。)

김현미 「이주자와 다문화주의」 『현대사회와문화』 연세대학사회발전 연구소, 2008년 (=金ヒョン미 「移住者と多文化主義」 『現代社会 文化』 26号、YONSE 大学社会発展研究所、2008年。)

김현미 「사랑의 이주? 국제결혼 베트남여성의 결혼이주 과정」 김영옥외 『국경을 넘는 아시아 여성들- 다문화 사회를 만들다』 이화여자대학교 출판부, 2009년 (=金ヒョン미 「愛の移住? : 国際結婚ベトナム女性の結婚移住過程」 金ヨン옥ほか『国境を越えるアジア女性たち多文化社会を作る』梨花女子大学出版部、2009年。)

김은실 「지구화, 국민국가 그리고 여성의 섹슈얼리티」 『여성학 논집』 19집, 2002년 (=金ウンシル 「グローバル化、国民国家、そして女性のセクシュアリティ」 『여성학論集』 19集、2002年。)

김은실 「지구화시대의 성매매 이주여성 국민국가 그리고 시민권」 최협편집 『한국의 소수자 실태와 전망』 한울, 2004년 (=金ウンシル 「글로벌時代の性売買・移住女性・国民国家、そして市民権」 চেხოპ編 『韓国の少数者実態と展望』 한울출판、2004年。)

김영옥외 『국경을 넘는 아시아 여성들- 다문화 사회를 만들다』 이화여자대학교 출판부, 2009년 (=金ヨン옥編 『国境を越えるアジア女性たち多文化社会を作る』梨花女子大学出版部、2009年。)

김영란 「한국사회의 이주여성의 삶과 사회문화적 적응관련」 『아시아 여성연구』 45 (1), 숙명여대 아시아 여성연구소, 2006년

- (=金ヨン란 「韓国社会の移住女性の人生と社会文化的適応関連」『アジア女性研究』 45(1)、淑明女子大学大アジア女性研究所、2006年。)
- 김영란 「이주여성 도동자의 사회문화적 적응에 관한 경험적 연구」 『아시아 여성 연구』 숙명여자 대학교 아시아여성연구소, 2007년  
(=金ヨン란 「移住女性労働者の社会文化的適応に関する経験的研究」『アジア女性研究』淑明女子大学大アジア女性研究所 2007年。)
- 김영미 「한국영화에 나타난 모성성 연구」 동국대학교 연극영화과 석사학위 논문, 1998년  
(=金ヨン미 「韓国映画で描かれた母性性の研究」東国大学大学院、1998年。)
- 김이정민 「국제결혼 이주여성들과 폭력」 『여성주의 저널 일다』 2003년 6월 6일  
(=金李ジョン민 「國際結婚移住女性たちと暴力」『女性主義ジャーナル・イルダ』 2003年。)
- 김명혜 「황금신부를 통해서 본 민족적 정경」 『프로그램/텍스트』 제 17호 , 한국방송영상 진흥원, 2008년 (=金ミョンヘ 「『黄金花嫁』における韓国の民族的情景」 『プログラム/テキスト』 第17号、韓国放送映像産業振興院、2008年。)
- 김민정 「국제결혼과 한국가족의 부계적 성격」 『이주 시대, 아시아의 여성이주와 가족구조 변동』 이화여자대학 아시아 여성학 센터, 2008년 199-216쪽. (金ミンジョン 「國際結婚と韓国家族の父系的性格」 『移住時代、アジアの女性移住と家族構造の変動』梨花女子大学 アジア女性学センター、2008年、199-216頁。)
- 김수정 「아시아여성의 국제결혼에 대한 미디어 담론-한국 미디어의 재현방식을 통해」 『한국언론 정보 학보』 통권 43호, 2008년  
(=金스ジョン 「アジア女性の國際結婚に対するメディアディスコース-韓国メディアの再現方式を通じて」『韓国言論情報学報』通卷43号、2008年。)
- 강현주 「국제결혼 이국여성의 모국문화 표출 유지욕구와 정체성에 관한연구」 2008년 (=カン・ヒョン주 「國際結婚移住女性母国文化表出・維持欲求とアイデンティティに関する研究」 2008年。)
- 김이선 『여성결혼이민자의 문화적 갈등경험과 소통증진을 위한 정책 과제』, 한국여성개발원, 2006(=金이선 『女性結婚移民者の文化的葛藤経験と疎通増進のための政策課題』韓国女性開発院、2006年。)
- 김종갑 「90년대이후 한국독립영화연구-비디오액티비즘과 미디어액티비즘을 중심으로」

- 동의대학교 영상정보대학원 영화 영상과 석사논문 2008년 (=金ジョンガ 「90年代以後韓国独立映画研究-ビデオ・アクティビズムとメディア・アクティビズムを中心に」 DONG EUI 大学校映像情報大学院、2008年。)
- 곽삼근저 『여성주의 교육학』 이화여자대학교 출판부 2008년 22-23쪽. (=カク・サンクン著『女性主義教育学』梨花女子大学出版部、2008年、22-23頁。)
- 권용혜 「한국 TV에 표출된 다문화성에 대한 구조 및 의미 분석 :KBS2 『미녀들의 수다』를 중심으로」 성균관 대학교 언론정보대학원 석사 논문, 2008년 (=クオン・ニョンへ 「韓国テレビに表出された多文化性に対する構造および意味分析—KBS2 『美女たちのおしゃべり』を中心に」 成均館大学言論情報大学院、2008年。)
- 남인영 『한국 다큐멘터리 영화의 배급과 해외 시장 개발을 위한 연구』 커뮤니케이션북스 2010년 (=南インヨン 『韓国ドキュメンタリー映画の配給と海外市場開発のための研究』 コミュニケーションブックス、2010年。)
- 로버트 에덤스저, 최명민번역 『임파워먼트와 사회복지 실천』 나남, 2007년 (=Robert Adams 著、チェ・ミョン민訳 『エンパワーメントと社会福祉実践』 ナナム出版、2007年。)
- 보건복지부(설동훈) 「국제결혼 이주여성 실태조사를 통한 복지지원정책 개발」 KDI 경제정보센터, 2005년 (=保健福祉部 「国際結婚移住女性実態調査を通じた福祉支援政策開発」 KDI 経済情報センター、2005年。)
- 스튜어트 홀, 임영호번역 『스튜어트 홀의 문화이론』 한나래, 1996년 (=스튜어트・홀著、임・영호編訳 『스튜어트・홀의文化理論』 한나래出版、1996年。)
- 신난희 「국제결혼여성 가족, 일 그리고 정체성 우즈베키스탄과 필리핀여성의 생애사 연구」 서울대학교 인류학과 석사학위논문, 2005년 (=シン・난희 「国際結婚女性家族、仕事、そしてアイデンティティ：ウズベキスタンとフィリピン人女性の生涯史研究」 ソウル大学校、2005年。)
- 신광영 『한국의 계급과 불평등』 을유문화사, 2004년 (=シン・칸ヨン 『韓国の階級と不平等』 乙酉文化社、2004年。)
- 아네트군 (Annette Kuhn) 저, 이형식번역 『이미지의 힘』 동문선, 2001년 (=Annette Kuhn 著、李ヒョンシク訳 『イメージの力』 東文選、2001年。)

- 이수자 「세계화 과정에서 본 이주여성의 성과 문화 적응」 성신여자대학교  
한국여성연구소 추계학술대회, 2003 년 (=李スザ「グローバル化過程でみた  
移住女性の性と文化適応」誠信女子大学校韓国女性研究所、2003 年。)
- 이수자 「이주여성 디아스포라-국제성별분업 , 문화혼종성, 타자화  
섹슈얼리티」 『 한국사회학』 제 38 집 2 호,2004 년  
(=李スザ「移住女性ディアスポラ—国際性別分業、文化混濁性、他者化とセクシ  
ュアリティ」『韓国社会学』第 38 集 2 号、2004 年。)
- 이경진 「국제결혼이주여성의 미디어 재현과 초국가적 정체성에 관한 연구」  
이화여자대학교 대학원 석사논문 2008 년  
(=李キョンジン「国際結婚移住女性のメディア再現と超国家的アイデンティテ  
ィに関する研究」梨花女子大学校大学院、2008 年。)
- 울리히 벡 저, 조만영역 『지구화의 길』 거름,2007 년 (=ウルリッヒ・ベック (Ulrich Beck)  
著、ジョマ・ンヨン訳『グローバリゼーションとは何か (Was ist Globalisierung?)』  
2007 年。)
- 이태옥 「국제결혼 이주여성가족과 사회적 지지망 연구-영광지역을  
중심으로」 광주대학교 사회복지전문대학원,2006 년  
(=李テ옥「国際結婚移住女性と社会的支持網研究」光州大学社会福祉専門大学  
院、2006 年。)
- 이혜경 「혼인 이주와 혼인 이주 가정의 문제와대응」 『한국인구학』 28-1 호, 2005 년  
(=李ヘキョン「婚姻移住と婚姻移住家庭の問題と対応」『韓国人口学』28-1 号、2005  
年。)
- 윤형숙 「국제결혼 배우자의 갈등과 적응」 최협편집 『한국의 소수자 실태와 전망』 한울,  
2004 년 (=윤·ヒョン숙「国際結婚配偶者の葛藤と適応」チェ·ヒョプ  
編『韓国の少数者実態と展望』ハンウル出版、2004 年。)
- 윤형숙 「외국인 출신 농촌주부들의 갈등과 적응 : 필리핀여성을  
중심으로」 『한국여성학회』 2004 년 (=윤·ヒョン숙「外国人出身農村主婦  
たちの葛藤と適応：フィリピン人女性を中心に」『韓国女性学会』、2004 年。)
- 윤형숙 「지구화,여성이주,한국사회의 성적 인종적 위계만들기」 제 21 차 한국여성 학회  
춘계 학술대회 발표논문,2005 년  
(=윤·ヒョン숙「グローバル化、女性移住、韓国社会の成績人種的位階作り」

- 『第 21 次韓国女性学会』 2005 年。)
- 양정혜 「소수민족여성에 대한 뉴스보도 분석」 『한국여성커뮤니케이션 학회』 2007 년.53 쪽 (=얀·ジョンへ 「少数民族移住女性に対するニュース報道分析」 『韓国女性コミュニケーション学会』 第 7 号、2007 年。)
- 전규찬 「자기성찰적, 텔레비전 문화정치적 가능성」 『방송연구』 제 58 호, 한국방송학회, 2004 년  
(=全ギュチャン 「自己省察的、テレビジョンの文化政治的可能性」 『放送研究』 第 58 号、韓国放送学会、2004 年。)
- 정순이 「국제결혼 이주여성의 삶에 관한 탐색적연구」 순천향대학교 행정정보대학원 2007 년 (=鄭스니ヒ 「国際結婚移住女性の生に対する探索的な研究」 2007 年)
- 정용택 「국제결혼이주여성에 관한 미디어재현체계와 시민사회의분류체계」 비평루트, 2009 년 (=鄭ヨン테크 「国際結婚移住女性に関するメディアの再現体系と市民社会の分類体系」 批評 ROOT、2009 年。)
- 조명래 『한국사회의 신빈곤』 한울 아카데미 2006 년 (=ゾ・ミョン레이 『韓国社会の新貧困』 ハンウルアカデミ出版、2006 年。)
- 조지 L.모스저, 서강여성 문학연구회 번역 『내셔널리즘과 섹슈얼리티』 소명출판사, 2004 년 (=George L. Mosse 著、ソカン女性文学研究会訳 『ナショナリズムとセクシュアリティ』 ソミョン出版社、2004 年。)
- 쯔지모토 도시코 「디아스포라로서의 주체형성을 위한 이주여성의 저항과 전략」 상공회대학교 일반대학원, 2006 년 (=辻本登志子 「ディアスポラの主体形成のための移住女性の抵抗と戦略—韓国に移住したフィリピン人女性の経験を中心に—」 韓国聖公會大学校一般大学院、2006 年。)
- 하종원 「텔레비전 일일 연속극에 나타난 권력관계에 관한 연구」 『한국방송 학보』 17 권 2 호, 2003 년 (=ハ·ジョン우온 「テレビ日々連続ドラマに現れた権力関係に関する研究」 『韓国放送学報』 17 冊 2 号、2003 年。)
- 홍기에 「중국조선족 여성과 한국남성간의 결혼을 통해본 이주의 성별정치학」 이화여자대학교 여성학과 석사학위 논문, 2000 년  
(=紅キエ 「中国朝鮮族女性と韓国人男性間の結婚を通じてみた移住の性別政治学」 梨花女子大学校女性学、2000 年。)
- 한건수, 설동운 「결혼중계업체 실태조사및 관리 방안연구」 『보건 복지부최종보고서』

- 2006 년 (=한· Гон스, 솔· 돈우온 「結婚仲介業者の実態報告書及び  
管理方案研究」 『保健福祉部最終報告書』 2006 年。)
- 허만섭 「한류드라마와 제국주의」 『신동아』 2009 년 10 월호 (=호· 만즈프 「韓流ド  
ラマと文化帝国主義」 『新東亜』 2009 年 10 月号。)
- 현택수 『 문화와 권력 부르디외사회학의 이해』 나남 1998 년 (=히ョン· 텍스 『文化と  
権力ブルデューほか社会学の理解 (利害)』 ナナム出版、1998 年。)
- 최종렬, 최인영 「국제 결혼 이주여성에 대한 문화 사회학적 접근 방법론적 윤리적  
논의를 중심으로」 『문화와 사회』 제 4 권, 2008 년 (=첸· 죠리올, 첸  
· 인니ョン 「国際結婚移住女性に関する文化社会的接近：方法論的・  
倫理的議論を中心に」 『文化と社会』 第 4 卷、2008 年。)
- 최금해 「한국남성과 결혼한 중국조선족 여성들의 한국에서 적응기 생활체험에 관한  
연구」 『아시아 여성연구』 44 집, 2005 년 (=첸· 킨헨 「韓国南西と結婚し  
た中国朝鮮族女性たちの韓国で適応期生活体験に関する研究」 『アジア  
女性研究』 44 集、2005 年。)
- 크리스 젠크스 (Chris Jenks) 저, 이호준번역 『시각문화』 예영커뮤니케이션, 2004 년  
(=Chris Jenks 著, 李ジュンホ訳 『視覚文化』 イェヨンコミュニケーション、2004  
年。)
- 영상미디어 연구센터 「2007 년 진보적인미디어운동 연구저널 ACT」 (=映像メディア  
センター 「2007 年進歩的なメディア運動研究ジャーナル ACT」)
- 한국문화관광정책연구원 연구진 『한국영화제 평가및금후 발전방안』 한국문화관광  
정책연구원, 2004 년, 64-68 쪽. (=韓國文化觀光政策研究院研究陣 『国際映画祭評  
価及び今後発展方案』 韓國文化觀光政策研究院、2004 年、64-68 頁。)

## 인터넷上的情報

드라마 『黄金花嫁』 공식홈페이지 : <http://tv.sbs.co.kr/goldbride/>

드라마 『하노이 신부 (하노이新婦)』 공식사이트

[http://www.sbs.co.kr/new/tv/hanoi/hanoi\\_sub\\_02\\_01.html](http://www.sbs.co.kr/new/tv/hanoi/hanoi_sub_02_01.html)

時事番組 『그것이 알고 싶다 (それが知りたい)』 공식사이트 <http://tv.sbs.co.kr/docu/>

時事番組 『PD 수첩 (PD 手帳)』 공식사이트 <http://www.imbc.com/broad/tv/culture/pd/>

娯楽番組 『느낌표-아시아!아시아 (!感嘆符-アジア! アジア!) 』公式サイト

<http://www.kba.or.kr/prizedb2003/list.asp?codename=work5tv>

娯楽番組 『러브人아시아(love in Asia) (ラブ人アジア) 』

<http://www.kbs.co.kr/section/adTest.html>

娯楽番組 『글로벌 토크쇼 미녀들의 수다 (グローバル・トークショー美女たちのおしゃべり) 』公式サイト <http://www.kbs.co.kr/2tv/enter/suda/>

国際結婚仲介社「ベトナム LGO」: <http://blog.daum.net/glo1961/359>

CH国際結婚社: <http://www.chwedding.net/>

韓国ポータルサイト NAVER : [www.naver.com](http://www.naver.com)

韓国統計庁: <http://kostat.go.kr/portal/korea/index.action>

韓国統計庁人口動態調査: <http://kosis.kr>

韓国映画進行委員会の公式サイト: [http://www.kofic.or.kr/g\\_cinfoma/g\\_01kinfoma.jsp](http://www.kofic.or.kr/g_cinfoma/g_01kinfoma.jsp)

韓国移住女性人権センター: <http://www.wmigrant.org/>

MWTV(Migrant Worker TV) 公式サイト: <http://www.mwttv.or.kr/>

MANGONET : <http://www.mangonet.kr/>

ohmynews : <http://www.ohmynews.com>

inews24 : <http://joynews.inews24.com>

『한국일보』 2003년 6월 14일 (= 『韓国日報』 6月14日。)

『중앙일보』 2007년 10월 19일 (= 『中央日報』 2007年10月19日。)

『경향신문』 2009년 7월 25일 (= 『京郷新聞』 2007年11月25日。)

『경향신문』 2009년 6월 21일 (= 『京郷新聞』 2009年6月21日。)

『경향신문』 2010년 4월 9일 (= 『京郷新聞』 2010年4月9日。)

『한겨레신문』 (= 『ハンギョレ新聞』)

『신동아 일보』 2006년 10월 1일 통권 565호 (= 『新東亞  
日報』 2006年10月1日、通卷565号。)

『강원 도민일보』 2005년 10월 11일 (= 『カンウォン都民日報』 2005年10月11日。)